
その後のその子とその娘たち

中西矢塚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その後のその子とその娘たち

【Nコード】

N0707W

【作者名】

中西矢塚

【あらすじ】

織斑一夏は地球人である　いや、「あつた」。

夏休みが終わって、二学期が始まる。

今の彼と、そして彼女達のありふれた日常。ありふれた騒動の日々。

九十一話（前書き）

例の同人誌の影響で突発的に自分の中にビッグウェーブが訪れま
したので、開始。

原作七巻に該当する内容を、短期でサラッとまとめる感じになる
と思います。

このSS内のローカルルール俺設定に関しては、酷い話ですが九十話以
前のものを参照と言つことで、何卒お願い申し上げます。

九十一話

その後のその子とその娘たち

高級リゾートホテル テレシア。

併設の会員制屋内プール。

天井全面ガラス張り、芝生と観葉植物で彩られ、そして人口の砂浜が造成された、華やかで広々とした作りである。

ガラス窓の向こうに伺える本物の砂浜と違わぬ光景の中には、しかし本物砂浜と違って、人口密度的な意味でかなりのゆとりがあった。

芋洗い、とすら評される日本の砂浜で繰り広げられる人と人とのひしめき合う光景は、ここにはない。

海外の避暑地のプライベートビーチ宜しく、優雅に、ゆったりと浜辺の空気を楽しむハイソサエティな空間がそこには確かに存在していた。

そもそも入場できるのが、会員証を有する一握りのV・I・Pのみななのだから、当然といえば当然なのかもしれないが。

当然だが、間違っても大衆食堂の一人娘の中学生が踏み込める領域ではない。

五反田蘭は、自身の知り得るプールという施設にあるべき光景とまったく違う現実、目の前の光景に眩暈を覚え、足を纏れさせってしまった。

「おっと」

「ひゃう！」

水着姿のむき出しの肩を、背後から抱きとめる暖かな感触。

レースエプロンタイプのビキニは、正面はへそ上まで隠れていたが、背に周って見ればほぼ裸身を晒してしまう格好である。

明らかに人肌に直接触れ合ってしまった事に気づいて、蘭の胸は高鳴った。

「あわ、あうああああ……っ！」

元々高鳴りすぎていたものが更に高鳴ってしまった訳だから、割と心拍数がレッドゾーンに突入していたが。

「ええつと、顔真つ赤だけど……大丈夫？」

「ひゃ、ひゃいいいっ！」

耳元直ぐそばを声に混じった吐息がくすぐり、そして、肩越しに覗き込まれる、顔の近さと言ったら！

「ら、らいひよふうふえふう……」

「……この場合、座って休ませるべきなのか、プールに放り込んで冷ますべきなのか……」

頭から蒸気を噴出しそうな調子の蘭に、背後で体を支えていた少年は苦笑を浮かべる。

初々しくて可愛いなあと、明後日の方向にいる誰か達を思い浮かべていたりもした。

「まあ、あせる事なんて何もなし、とりあえずその辺座ってのんびりする？」

場所柄ゆえ、施設の利用者の年齢層が故にプールではしゃいで遊びまわっているという光景の方が少なかったから、特におかしくはない。

「ふあい……」

自然な動作で腰を抱いて近くのビーチチェアに誘う男の言葉に、
蘭は夢見心地な声で頷いた。

「ありがとうございませ、一夏いちかひゃあん」

ああ、幸せ。もう死んでもいいかもしれない。

夏の終わり　夏休みの、最後の日。

五反田蘭は、人生の幸せを噛み締めていた。

「それじゃ、ナターシャさんはアメリカに帰っちゃったんですか？」
「うん、ちょうど先週の今日ね」

織斑おりむら一夏　世界で唯一の男性IS操縦者の少年は、後輩の少女の言葉に笑み混じりに頷く。

今日彼は、五反田蘭と朝から待ち合わせて遊びに出ている。

夏の始まりのころに潰してしまった彼女の一日をリカバリするためにと、そんな名目で。

周到に策を弄して周囲の目を欺き　何しろ彼の周りには、スーパーハッカーも斯くやと言わねば天才プログラマーもいれば、潜入破壊工作の訓練を積んだプロフェッショナルな軍人まで居るのだ。バレ無いように個人的な用事の下準備をするのも一苦労である

海辺のリゾート街で待ち合わせの段取りを取り付ける。

そして、めかし込んでいた蘭と合流して、（年上の親しい女に）貰ったけど一度も使った事のないホテルの会員証を利用して、この無駄に金のかかった作りのプールへと、啞然とする蘭の肩を押しつつ足を運んだのだ。

既に朝の一幕から、一泳ぎ　一休み　一泳ぎ　一休みという二順

目のループに突入しており、窓越しに見える太陽は真上の位置に移動していた。

全身運動後の心地よい疲労を、瀟洒なグラスに注がれたトロピカルフルーツジュースが癒す。

喉をすり抜けるひんやりとした感触を吐息一つ分の時間堪能し終えたあとで、一夏は改めて、目をまん丸と見開いている蘭に告げた。「ターシャもほら、あれで一応アメリカの看板って言うかトップエースって言うかね。いつまでものんびり夏休みって訳にはいかないんだよ」

「あ、そうですね。モンド・グロツソのための練習とかも必要でしょうし」

「モンド・ロツソ……そうか、そういうのもあったっけ」

「はい？」

「いや。本人は残るってゴネてたけど、嘉手納まで来てたイースさんに拳骨一つと一緒に引つ張ってかれちゃった」

もれてしまった眩きに対する「違うんですか」という疑問には答えず、笑い話のような返事を返す。

ナターシャ・ファイルス。

米国IS操縦者。

初夏に発生した事件で責任問題を問われ、一時米軍から離脱し、その籍をIS学園へと移していた。

だが、その事件　米軍八ワイ基地壊滅　という現実が、『存在しない』事実として終息を見ることがなったため、当然その事件での責任を問われていたナターシャに対する問責も、解消されることとなる。

で、あるならば、一流IS操縦者であるナターシャを学園講師などという立場で遊ばせていられるほど米軍は温い組織である筈もなく　彼女が直ぐにでも原隊へと復帰するように命令されるのは当然だった。

学園を訪れた米国IS操縦者イーリス・コーリングによってその旨を告げられたナターシャは。

彼女が取った、行動は。

例えるならそう、百年の恋も冷めるとか、そんな。

改めてその時のことを思い出して、一夏の顔には引きつった笑みが浮かんでいた。

初恋の いや、現在でも勿論好きなままの女性の、それまでの理想の女性を体現していたイメージを粉碎するような駄々っ子のような態度。

ナターシャ・ファイルスが遂に見せた、何重にも被った猫の被り物の向こうに存在していた真実の姿。

思いつ度に、冷や汗が止まらない。

「まあ、それだけ……」

そんな醜態を晒すほどに愛されている、と思えばまだ喜びの方が増す場面だったのが救いだ。

むしろ、女性ばかりの職場で長い間働いていた身分だというのに、その辺りの一欠けらも気づくことがなかった自分の間抜けを笑うべき場面だろう。

事実、実姉たる織斑千冬には罵倒交じりの笑みを向けられた。

『覚えておくと良い。』

この世の中には、女の理想とする男 は確かに存在するが、男の理想とする女 なんて夢見たいないキモノは何処にもいないんだよ。』

世の女性の理想とする強く美しい女を体現する大姉上の言葉は、今も一夏の胸にブスブスと突き刺さっている。

ついでに、 女の理想とする男 って言うイキモノも、天然モノ

は存在しないんじゃないのかな、という疑問は今も尽きない。

「一夏さん？」

「ああ、ごめん。せっかくのデート中に連れ合い以外の異性の名前なんて出すべきじゃなかったね」

「でっ……!？」

誤魔化す為に発せられたあざと過ぎる言葉に、蘭は一夏が望んだとおりの反応を示す。

顔を赤くして、言葉を詰まらせるというそれを。

「そうさ。随分と先延ばしにしていたけど、今日はいつかの埋め合わせを兼ねた、蘭ちゃんのためだけに用意した一日なんだから。二人で一日遊びまわるって、これがデートじゃなくてなんだってのさ」
ある程度相手の心情を理解した上での、実に性質の悪い言葉だと言っている本人すら理解していた。

いたいけで、まだまだこの先幾らでも可能性のある年下の少女を弄ぶような酷い言葉を口にしていているという自覚もある。

同時に、あの環境で毎日常生活していれば、そこを生き抜くために存分に性格が悪くもなるだろう、という言い訳染みだ　　真実言
い訳だが　　思いもあつた。

日ごろ散々振り回されているのだから、勝てる場面であらう、勝つておきたい。

自分自身が楽しんで今を生きるために。

色々な、わが身を真剣に省みるような出来事があった初夏を乗り越えた、それが今の織斑一夏の真実本気で思っている事だった。

明日ばかりを心配して、或いは、昨日ばかりに後ろめたさを覚えていては、今日向き合っべき相手たちにも失礼だろう。

そう思うようになって以来、一夏は今に思ったことを重要視するようになった。

後先を考えない、その場その場の最善と思う選択肢を選ぶことを。

当然だが、結果は推して知るべし、である。
足の踏み場に注意してばかりの日常にはなかった
それに勝る、騒動の毎日。

昨日は誰が、今日は誰、朝は夜は、昼に夕に。
夏も終わりに近づけば、神経も数段図太くなるうと言つものである。

息抜きに年下の無垢な少女と戯れて心を癒そうとか、平気で思えてしまえるようになっていた。

因みに、その結果出来上がったイキモノが、かつてとうかつい先日まで自分が思い描いていた理想の異性像を体現していた誰かと同種のイキモノであると、一夏は気づいていない。

「愛想つかされないのが不思議だねっと……」

「一夏さん？」

「いや。 お腹も透いたし、そろそろ場所を移さない？」

軽く首を横に振って、未だ頬が赤いままの蘭に提案する。

「このレストランは美味しいから、食べていくのも良いし
いや、駅前に出ちゃう？」

「い、一夏さんに、お、おまかせしましゅー！」

「お任せされました。 エスコートしますよ、お嬢様」

「お嬢っ……！？」

手を差し出す。

差し出された手に、手を載せる。

その後で、はにかんだ笑みと余裕のある笑みを、互いに交わす。

一日はまだ長いことから、色々なところで色々なことを楽しむのが、良いだろう。

一夏は楽しみたいと思っっているし、そして蘭にとっても、それは望むべく事だろうから。

家に戻れば再び騒動の渦中に立たされることは間違いない。だから今しばらく、穏やかな休日をも。

夕方の映画館。

売店でパンフレットを買い終えて、二人はロビーの辺りに移動した。

丁度上映中のホールが重なっていたため、人気が少ない。

「面白かったですね、一夏さん！」

「面白い……いや、うん。面白いは面白かったけどね」

視聴し終えた映画の内容にご満悦の蘭とは対照的に、一夏は何とも言いがたい、と言う顔をしていた。

「あ、やっぱりその、一夏さんだと内容にいろいろ考えちゃいますか？ 別のにしてあげば……よかった、ですかね？」

「いやいや、どーせフィクションだからね。そりゃ、蘭ちゃんの言うとおり仕事柄設定に突っ込みを入れたい場面は多かったけど、内容は楽しめたのは確かさ」

少し顔を曇らせた蘭に、笑って一夏は言う。

映画の内容を簡単に書けば、こうだ。

対立する二つの国に所属する、二人のIS操縦者。

方や少年。偶然にISを動かしてしまい、国家に拘束されざるを得なかった。

方や少女。片目を覆い隠す眼帯も痛々しい、戦うために生み出されたデザインベビー。

二人は戦地で出会い、争い、恋をして、そして大団円を迎え、結ばれる。

内容から現代版のロミオとジュリエットの結末を迎えるのがセオリーだろうと思わせておいて、どこのラブコメディだとばかりにベタベタなハッピーエンドを迎える意外性が売りのデートムービーである。

因みに、ドイツ軍が撮影に全面協力したバリバリのドイツ映画である。

「スタッフフロールに随分見覚えのある名前を見かけたけど、気にしたら負けだよな、うん。どうせフィクションだし。うん、フィクションフィクション」

特撮協力じゃなくて脚本協力ってなんだよと内心で突っ込みながら、一夏は自分に言い聞かせるように言う。

近くの映画館でやっているイギリス貴族令嬢と日本人少年のラブロマンス映画よりなんぼかマシな内容だったと、全力で思い込んでいた。近日上映開始のフランス映画など、絶対に見ないと心に誓ったりもする。

「そういえば一夏さん、今日は、その……あの、旅行鞆を持ってきて無いんですね」

躊躇いがちの、蘭の質問。

「ああ」

恐る恐るとした口調に、しかし一夏は何てことも無い風に頷いた。そういう映画を見た直ぐ後だったので、疑問に覚えるのも当然だと考えている。

そういえばくたびれた旅行鞆が主役の少年のトレードマークだったなと、明後日の方向を見ながら思い出しつつ、一夏は蘭の疑問に応じた。

一夏の旅行鞆。

それは、彼が専用するインフィニット・ストラトスの待機状態を示した姿である。

ISの待機状態は、身に着ける装飾品サイズの小ささとなる。形状はISごとに様々。

操縦者とIS本体は待機状態のデバイスを通して量子的に連結しており、操縦者の思考入力によってあらゆる環境下に於いて実態を形成し、戦闘行動を開始することが可能だ。

最強の現代兵器と言われる所以だろう。

無論、待機状態のデバイスを使用しなくても、専用にプリセットされたISは操縦者の意思に応じて遠隔召喚することは可能だが、その場合は座標設定のための消費エネルギーが大なるものとなるため、やはり待機状態のデバイスを常に身につけておくことが望ましいとされる。

一夏のISの待機状態は、くたびれた旅行鞆の形状をしていた
初夏に起きた事件の時までは。

その時にあった諸々を乗り越えて、彼のISは新生を果たした。
小さな二枚の、鎖で繋がった望遠レンズへと。

だから、旅行鞆を持っていなくてもおかしくはないのだ。

新たな形となったISを、一夏がその手に有していた、なら
らば。

「……あれね、取り上げられちゃったんだ」

「はへ？」

目を丸くする蘭。言っている意味が理解できなかったらしい。

一夏は言葉を重ねた。よりわかり易く。

「フォーチュナー」

「星詠み……ああ、僕の専用ISだけど。アレね、偉い人たちに回収されちゃったんだ。……危ないからって」

だから今はある意味では。

専用機を取り上げられた今は。

織斑一夏は世界で唯一の男性インフィニット・ストラトス操縦者ではないのだ。

「……うそ」

「残念、ホントだ」

参っちゃうよねと、一夏は呆然とする蘭を尻目に、気楽な調子で苦笑を浮かべた。

九十一話（後書き）

で、オリの方なんです。

書き始めた上で出てきた部分を洗い出してプロットを再設定してみたんですが、これが酷いつつーか手に余るつつーか。

設定語りだけで物語にもならずひたすらテキストを浪費しそうなモンスターができてしまったので、ちよつと塩漬け状態。

素材は悪くないなと今でも信じてるんだけど、最初の段階で躓いちゃってたのがなあ。

何とも情けない限りです。

そんな訳で、気晴らしも含めて前書きで書いたとおりの勢いそのままにテキストを書きなぐってみた次第。

あ、因みに五反田蘭さんは今回でクランクアップだと思います。
お疲れ様でした！

九十二話

IS学園正面ゲート前。

晩夏の日差しもとうに消えうせ、夜の闇が覆い始めている、そんな時間。

再会は、偶然だった。偶然だったと言うことに、しておこう。学園敷地を区切る長い柵に沿ってはしる歩道を歩んでいる間、ずっとその存在に気づいていたけど。

主に、バスに乗っていたときにわき道に停車してたの覚えてましたけどね的な意味で。

「一夏様！」

白塗りの外車が歩道を歩く一夏の真横に停車し、後部座席のドアが開く。

艶やかな声とともに金色の影が勢いよく飛び出してくる。

車道と歩道を隔てる花壇の植木を飛び越えて。

「うわっ……っつと」

抱きとめるその瞬間、かかるべき重量が消えうせたことに気づく。ISの慣性中和機構が働いたに違いなかった。

何というオーバーテクノロジーの無駄遣い、なんて言葉はこの満面の笑みを前には言わぬが花なんだろうなと言う程度には、一夏も既に達観していた。

「ああ一夏様！一週間ぶりです！会いたかったですわ！」

夜道を照らす街灯の下、金糸が揺れて薔薇の香りが鼻を擽る。

甘い香り、拵えの良い洋装で包まれた女性的な曲線美を有した肢体が絡む感触は、率直に言って心地が良すぎた。

身長もそう変わらないのだ。

抱き合えば顔の位置はほぼ平行で、霞がかつた瞳も、桜色に染まる頬も、塗れた唇も間近で視界に収める事が出来てしまう訳で

とは言え、勢いに任せてすぎるのも、流石に。

「うん……ああ、え〜っと、うん。僕もだよ、セリア」

肩を抱く仕草でさり気なく身を離しながら、一夏はセシリア・オルコットの帰還を歓迎した。

期待を外されたことであからさまに不機嫌そうに唇を尖らせていることについては、絶対に突っ込みを入れないことを誓う。

「……もおっ」

連れない事、と颯々するような吐息を吐く姿にすら優雅さが伺えるのは、その出自故だろうか。

セシリア・オルコット クラスメイトであり、英国IS操縦者の代表候補でもある少女は、また同時にイギリス名門貴族のお嬢様でもある。

会話中に出たとおり、一週間前から学園を離れ、本国に帰還して実家の業務に勤しんでいた。

「こっちに戻ってくるの、二学期にずれ込むかもしれないって（昨日の晩）聞いてたけど、間に合って良かったね」

「ええ。一夏様に早く会いたくて、急いで用事を終わらせてきましたわ。喜んでくださいますかしら」

「……そりゃ、もう」

とびきりね、と。

しかし視線をずらして額を寄せてくるセシリアの顔を避けている態度からは、あまり説得力が感じられなかった。

「本当に喜んでくださってますの？」

そんな顔を背けてと、いつの間にか頬に触れる距離にまで唇が

寄せられていた。ついでに、離れたはずの体が、再び密着している。「本当に。うん。セリアが居てくれて嬉しいよ、うん、本当に……」
こういうときに限って誰も横切つて来ないんだよなあと、半ば敗北を意識しつつも足掻き続ける男の情けなさがそこにはあった。

視線を合わせたら敗北確定。

薔薇の香りを纏った淑女の蟲惑的な眼差しに、逆らえるはずもないから。

「でしたら」

ぐい。

負けた。

女性の腕力に男がかなう筈がないのだ。

両頬に手を添えられた段階で、あっさりとも無駄な足掻きを放棄する。

金糸を救い上げつつ頭を支える自身の仕草に、我ながら慣れてきてるなと笑えない事実には笑う。

既にセリアの瞳は閉じられていた。伏せられた長いまつげが艶やかに光を弾いている。

唇は、蕾の形に。

「お帰り、セリア」

返事は無かった。

出来るはずも、無いのだけど。

夕餉の時刻。

明日の二学期の始業を控えた生徒たちで賑わう食堂を素通りして、一夏とセシリアは、こうして二人きりでテーブルを囲んでいた。

「どうぞ」

「ありがとうございますチエルシーさん」

ティーカップを受け取り礼を言うと、ニコリと慈愛のこもった笑みを向けられた。

慈愛以上の意味が感じられないことに安堵しているあたり、いよいよ駄目な人間になったなと内心でひとりごちる。

二人一部屋が基本のES学園学生寮の規則をどういった事情かぶつちぎって一人で占有しているセシリアの私室。

本来モダンな様式の内装は、英国貴族令嬢が使用するに相応しいクラシカルな装いに装飾しなおされており、『職業メイド』と言う物語の中の生き物が生息していることに、まったく不自然さを感じさせなかった。

そう、このチエルシーと言う名の年上の女性は、セシリアの専属のメイドを勤め、公私共にサポートしている女性なのである。

「直接お会いするのは……結構、久しぶりでしたっけ？」

「そうですね。一夏さんとは……一年振り、と言ったところになりましょうか」

主に取次ぐために、ここ一週間は電話越しに毎日言葉を交わしていたけど、年上ならではの稚戯を混ぜてチエルシーは頷く。

「のんびりしてるっばいですけど、ひよっとしてしばらくこっちに居たりするんですか？」

「いいえ、残念ながら。お嬢様の代理として、本国で事業の運営をしなければなりませんし」

明日に仕事の関係で立ち寄る場所があるので、今日はたまたま、と言うことらしい。

「そりゃ残念。……時間があるなら、色々相談したいこともあったんですけど」

「あらあら。いけませんよ一夏さん。悩み事があるなら、ちゃんとお二人で解決しませんと」

そういう問題なのだから、安易に周囲に助けを求めてはいけません。

そんな一言を最後に、チエルシーは一つ礼をして私たちの団欒の邪魔にならない位置にまで下がった。

カチャリ。

静かな部屋に、カップとソーサーが擦れる音が、妙に響く。

一夏とチエルシーの会話を、楚々とした態度で聞くに徹していたセシリアが、ゆったりとした仕草で顔を上げる。

まっすぐに、向かい合う一夏と視線を合わせて、微笑み、口を開いた。

「それで、如何だったのでしょうか。本日のデートは」
「ブツ……ツツ!？」

思い切り咽た。口の中身を噴出さなかった自分をほめてあげたい勢いで、咽た。

震える手でカップをソーサーに戻し、口を押さえたまま、恨めしげな視線をセシリアに向ける。

セシリアは、優雅に、微笑んで、いた。

「……あの、どっから？」

微笑んでいるだけで何も言ってくれないので、苦渋の決断の上で一夏は自分から尋ねた。

彼女は、一週間ほど海外に居た筈である。

今日の一夏の予定など、知っている筈もない 毎夜の電話越しにも、一夏は特にそれを口にした記憶はなかった。

いやしかし、そういえば明らかに凶ったタイミングで再会したよ
うな。

この学園には確かにユダシ密告者か居ないが、一応彼女らにも悟られぬ

ように動いたつもりだったのだけだ。

「オーキッドの香り」

「は？」

ふとした咳きに、目を丸くする。

セシリアは白魚のような指で自らの鼻先を撫でて見せた。

「二の腕の辺りに、染み付いてましてよ。随分と仲が宜しいこと」
腕なんて組んで。

「……ああ」

思わず、袖口に手をやってしまう。引きつった顔をしているなどという自覚があった。

「この学園の方には記憶に無い香りですし、外の女性でしょうか？」

「いや、まあ……うん。友達の妹さんで、ね」

誤魔化した方が恐いことになる気配がしたので、思わず正直に答えてしまう。

なるほど、と実に鷹揚な態度でセシリアは頷いた。

「校外の方ですと余りお会いする機会も無いでしょう。」

お楽

しみ頂けたのですか？」

「そりゃ、楽しかった、けど……」

異様な後ろめたさを感じながら答える一夏に、しかしセシリアは『そうではない』と首を横に振る。

「お相手の方がちゃんと楽しめたのかと、お尋ねしているのですわ」

「……」

返事に詰まった。

それは、解答が解らなかつたからという訳では、無い。

期待されている解答に、意表を突かれたからだ。

「あの、さ」

「はい」

セシリアは、古き良き貴族の末裔らしい上品な仕草で小首を傾げ

る。

一夏は皺のよった眉間に手を寄せて、呻く。

「……何ていうか、こう。引っ叩かれたりねちっこく追求されたり
つてなるのが妥当な場面だと思っただけ」

明らかに自分から藪に手を突っ込んでいる自覚があったが、尋ね
ずには居られなかった。

セシリアは口元に手を当てて笑う。

「ひよつとして一夏様。わたくしの気持ちをお疑いで？」

「ええつとお……」

あんな質問の後にさも『心外ですわ』なんて目を向けられても、
まともな答えなど返せるはずも無い。

思わず、部屋の隅で待機しているメイドさんに助けを求める目を
向けてしまうのも止むを得ないだろう。

当然、黙殺されたが。

仕方なしに天井に視線を逃がした。シャンデリアが見えた。窓に
目を向ける。カーテンは閉じられている。

扉に視線を移さなかったのは、ある彼の意味成長の証かも、しれ
ない。褒められた話ではないが。

それで、結局。

「僕はセリアのことが、好きだよ」

「はい」

セシリアは一夏の言葉に満足そうに頷いた。

その後で、とてもとても美しい笑みを浮かべて、言う。

「わたくしは、大好きな貴方が、貴方が大切にしているすべての人
を幸せにしてくださいと信じていますわ」

「何て事を、言われたんだ」

寝室。

空調の利いた、明かりの落ちた部屋。

「意外とやるわねクロワツサン……って言うか、あのさ」

モゾリと、ブランケットから顔を出した鳳鈴音は呆れを隠さない視線を、一夏に向ける。

「何かな、鈴ちゃん」

一夏は枕にした腕で器用に彼女の髪を撫で付けながら、応じた。セシリアとの会話の顛末を語って聞かせていた時と変わらない、気だるげな口調。

反省する部分などまるでございませんとする態度が、実に鈴音の癢に障った。

「な、ん、で、このタイミングでこのあたしにその話を聞かせるの、よ！」

胸に爪を立ててやりながら、言い聞かせる。

「痛っ、痛いつて……ちよ、皮膚が剥けるってば！ ただでさえ背中が……痛い痛い痛い！ ゴメン、僕が悪かった！」

「品の無い発言をする男は嫌いよ、あたしは」

五指全ての爪を首筋に突きたてながら、鈴音はドスの効いた声で男に言った。

「……肝に銘じます」

頬を引きつらせながら一夏は頷く。

一つの毛布被っている状況で、今更そんな事を言われてもなあと、流石に口に来る場面ではなかった。

彼だって命が惜しい。

「で？」

「でつて……ああ、そっか」

顎をクイ、と持ち上げながら先を促す鈴音に、一瞬目を瞬かせた後で、一夏は当初の彼女の質問を思い出した。無造作に下ろされた彼女の髪を撫で付ける手を止めぬまま、再び天井に目をやって口を開く。

「まあ、相談相手は鈴ちゃんかなあつてのが、僕の中のイメージに……… 凄い便利に使われてる気がするわ、その言い方だと」
呆れを隠さぬ鈴音に、一夏は焦って言葉を重ねる。

「え〜つと、ほら、姉ちゃんとか篝ちゃんに話したら説教確定な話題だし、シャルとかのほほんさん辺りに相談すると……… うん、想像するに恐ろしい。ラウラとまーちゃんは……… お察してください」
「なぜかとっても共感できるけど、でも消去法で選ばれた感じがして逆に屈辱的だわ」

「いや、本当に信頼してるよ？」

「解ってるわよ、バカ。どーせアンタ、そーいう男だもん」

ピン、と胸を指で弾きながら、鈴音は不貞腐れた声で言った。

そしてその後で、弾いた場所を撫でる仕草を見せる。

そのまま、少しの間。

晩夏の夜を涼しくする空調の音だけが、薄っすらと響いていた。

「好きよ、一夏」

「……… うん」

「あたしのこと、好き？」

「うん」

即答だった。

じゃあ、と鈴音は続ける。

「じゃ、あたしだけを好きで居てくれる？」

たった一人を、たった一人のために、好きを傾ける。

男女の関係であればきつと、それは当然過ぎて悩む必要も無い問いかけだろう。

寝室。

空調の利いた、明かりの落ちた部屋。

そんな場所で、二人きりのときに尋ねられたのならば、特に。

「……………」

だが一夏は、返す言葉を見つけれなかった。

否。見つかっていて、しかしその言葉を言うことが出来なかった。

「そーいうことなの、ばーか」

髑るような言葉が、胸に痛い。甘んじて受けるより、他無いことが尙さららに。

「セシリア 本人がそれで良いって言ってるんだから、好きにさせておけば良いのよ。肝心なのは、一夏。アンタがその気持ちにどう応じるか」

「……………そう、だね。本当にそうだよ」

気だるげに、やっとの口調で一夏は鈴音の言葉に同意を示す。

鈴音は、もそもそと体の位置をずらして、改めて一夏にぴたりと身を寄せる。

裸身と裸身が、絡み合う。

「勿論、アンタが誰か一人を好きで居たいなら、そうするべきだと思う。そうしてくれたなら……………うん、本当はあたしはそうして欲しいと思ってる。そう思ってるのはきつと、あたしだけじゃないと思っ」

「……………うん」

頷く。

だけど、と心の中でつぶやきながら。

きつとその事に気づいていたから、鈴音は更に言葉を続けた。

「だから一夏、あんたは精一杯努力しなさいよ、全力で、必死に。あたしたちがあんたを好きでいることに疲れちゃわないように、あたしたちがあんたを好きで居られるように　　頑張りなさい」

それはまさしく、『惚れた弱み』から発せられた甘い言葉に違いない。

男にとって余りにも都合の良い、そして、男にとってもっとも困難な道を進むことを由としてくれる言葉。

一夏は万感たる感謝を込めて鈴音を抱き寄せた。

手を背に、腰に回し。暗い中で確りと視線を絡ませて、言った。

「ありがとう。やっぱり鈴ちゃんに相談して正解だった」

「……バカ。　　って、やん、ちょっと、また……っ？」

寝室。

空調の利いた、明かりの落ちた部屋。

晩夏の夜が、じつくりと更けてゆく。

九十二話（後書き）

今更 自重なんて しない。

あ、やっとチエルシーさん出せました。

黒ウサギさんたちも何とか出したいんだけどなあ……って、七巻の話のはずなのに、そういえば肝心の人がまだ……。

九十三話

目覚めは快適に過ぎたし、ましてや悪夢など見る筈もなかった。

吸い込む息に混じる香りは、花の蜜より甘く濃厚な、それでいてどうしようもなく清純なもので。

今しばらく、抱きしめたその暖かさに縋り付いたまま、まどろみを楽しんでいたと。

「ん……」

回した腕に籠めた力が強すぎたせいか、至高の抱き枕から、声が漏れる。声が。

開け放たれたカーテンから降り注ぐ日差しとベランダで鳴く雀達には、こちらの状況はお察しくださいのひとことで済ませてやりたい状態であるが、自分の多幸福感を満たすためだけに、迷惑を掛けるのも些か本意ではない。

ましてや、今日から新学期なのだ。

それを抜きにしても、この時間を堪能し続けていると言うのは不味い、経験則的な意味で。

目覚めなければ。

専用ISを失ってから御用達しとなっていた置時計に目を移して、時間を確認する。

六時少し前。とすると、睡眠時間は四時間と少しと言ったところか。

前のときよりは長く寝れてるか　　などと、朝から阿呆なことを考えている場合ではない。

「鈴ちゃん、もう朝だよ」

決まって起こされる側の立場としては、こうして毛布に包まっているもう一人を起こす行為だけでも楽しさを覚えたりする。

「んゆ……」

少女を包む薄絹ごしに、甘ったるい声が聞こえた。

つて、え？　薄絹？

いやいや待て待て。だつてほら、昨晚眠りに落ちたときはタオルで汗とその他諸々を拭っただけで、寝巻きを羽織った記憶なんて……。

ガバリと跳ね起きる。

揺れるカーテン。秋の始まりをを告げる、少しだけひんやりとした空気が上着を着てない背中を掠めた。

うん、服を着てませんね、僕。昨晚のことは夢ではありません。

じゃあ、さて。

「……あのさ、鈴ちゃん（仮）」
「なあにいろ？」

ノーカウントで返事があった。

起きてるな、この娘。

剥ぎ取ったブランケットの向こうに丸まっていたフードつきの寝巻き姿の少女の存在に、僕は額を抑えて呻いた。

「鈴ちゃん（仮）は、一体いつから野生の電気ねずみに進化したのかな……？」

「ちゅ〜」

鳴き声は可愛いんだけど、そういう問題じゃないんだ。
と言うか、いつも気になってるんだけど、その耳はどうやって動
かしているんでしょうねー！

むくり、と上半身を起こす仕草にあわせてピコピコと揺れてるん
ですけど。

あ、視線合った。

「おはようございます」

「おはようございます」

ふわふわゆらゆらしながら、だぼだぼの袖で隠れた手をこちらに
差し出してくる。

なんとなくその手を受け取って、頭を下げてしまった。
ぺたんと崩れた座り方をしていたから、寝巻きの裾からまろびで
ている太ももが朝っぱらから実に目に毒だったりします。

この子、着ぐるみっぱい寝巻きの下を履かなくなったのっ
て何時からだっけなあ？

「えろ〜」

「それはせめて、裾をそろえた後で言ってよ……」
マジで、隠そうぜ見えるから。いや、そこまで捲れてて見えない
事が返って疑問なんだけど。

ちゃんと履いてるんだよな？

「みたいの？」

「見ないから！」

自分から裾を持ち上げそうだったので、あわてて引っ掴んでひざ
上まで引っ張り下ろす。

朝から非常に、疲れることこの上ない状況だった。

因みに。

今更説明なんて必要ないでしょうが、最近ガードがゆるい事で有
名な布のほこけ本音ほんねさんです。

前からだっけ？

「ちゅ〜」

「いや、もう良いから」

「よくない〜。ちゅ〜」

「いや、あの」

ベッドの上で膝をつき合わせている状況で
近寄ってきてませんか？

お嬢さん、心持

「ちゅ〜〜」

「.....」

眠たげに細まった眼。ぼわぼわとしたお日様のような笑み。

上向いた顎。

うん、畏だ。畏以外の何物でもないよね、コレ。

と言っわけで。

「.....ちゅっ?」

「ちゅ〜」

ちゅっ。

一学期の開始。

と、即日同時に授業開始。

この辺りは入学即授業だった一学期と何も変わらない。

むしろ、『お前らもうウチのルールに慣れただろ?』とばかりに、座学ではなくいきなり実習が始まっている辺りパワーアップしているかもしれない。

ともかくそんな感じで、我が一年一組は、始業式もそこそこに、早速アリーナでISの実機を用いた実習です。

毎度のことだけど、若い女の子が水着もかくやという格好で広い屋外型のアリーナで屯している光景は、目に毒と言うか逆にシュールと言うか。

ともかく、男一人と言う状況は中々居心地が悪い。

これが一学期の時だったら、自分の専用ISを調整しているフリでもして時間を潰していれば良かったんだけど……。

「おりむーは、今日はどっちを使うの? ラファール? それとも打鉄?」
うちがね

「ラファールかな……って、今日は数が少ないのか」

たゆん、とISスーツに包まれた胸を揺らしながらたずねて来るのほほんさんに、頭を掻きながら返す。

「二年生のクラスで射撃訓練やってるから、殆ど隣のアリーナに持ってつちやつてるみたい」

「今日、近接格闘の訓練だもんなあ。……苦手なんだよなあ、殴り合い」

ISの近接用武装を用いた格闘戦の訓練。

ならば、射撃能力に優れたラファール・リヴァイブよりも、接近戦に優れた打鉄うちがねの方がやりやすいだろう。

もつとも、両機共に学園で使用される訓練機に相応しく、ほぼ万能に全環境に適応しているが。実際はそれほど差は無いのだ。

「大体、適正Dに過ぎない僕が近接戦とか、笑い話にもならないし」
モビータイク
「白鯨の時は、全然近づかなかったもんねー」

「……もう二度と会えないかもなあ、白鯨……いや、星詠みには」
フォーチュナー
ふう、と苦笑交じりのため息を空に吐く。

フォーチュナー
星詠みは、今はもう僕の手元には無い。

量子テレポート ワンオフ・アビリティ と言う尋常ではない単一仕様能力を得てしまった僕の専用ISは、その危険性を国際IS委員会から憂慮されて、封印の憂き目に会っている。

量子ゲート越しにあらゆる場所からあらゆる場所へ一方的に回避不可能な攻撃を行える星詠みの能力は実際恐ろしいものに違いなかったから、最強の兵器たるISですら防ぐことの出来ない攻撃力を個人に持たせておくことなど危険極まりないと言う委員会 と 言うか国際社会の言い分も理解できないことは無い。

正直なところ平時に持たされていても手に余るのも事実だし、委員会の管理下で厳重に管理したいと言う意見に頷くのも、吝かではなかった。

まあ、勿論。

お前ら、本当にちゃんと封印してるんだろ？ と突っ込みたい気分もバリバリに存在しているが。

「本当に危険だっただけならコアを初期化フォーマットするよね、普通」

「オトナってうそつきだよね〜」

「本音言われても笑えないから、良いんだけど」

本音ちゃんの言葉に、苦笑して返す。

脂ぎった目を欲丸出してギラつかせたオッサンどもの本音など、実際聞きたくも無いのだ。

「ま、手に負えない部分には深入りしないで、手が届く範囲で地道に頑張るさ、僕は」

「……それで、結局？」

小首を傾げるのほんさんに、肩を竦めて応じる。

視線が集まっている事には、勿論気づいていたけど。

「 先ずは、訓練パートナー選びから、かなあ」

ザワリ。

空気が揺れた　揺れたと、感じる間もなく。

「一夏！ 私と組んでく……」

見慣れた黒髪ポニーテールの大和撫子が一步踏み出して、

「織斑君！ 私と組むよ！」

更に横から、別の少女が飛び出してきた。

快活なショートカットが印象的な、ハンドボール部所属の相川清香さんである。

両手を胸の前で握り締めて、気合も十分。目の奥に炎がメラメラと燃えているようにみえた。

あ、台詞を遮られた篝ちゃんが凄じい啞然としてる。

でもとりあえず、目の前五センチの位置に顔を寄せている相川さんの相手をしないとなあ。

「……組んで、じゃなくて組むよ、なんだね？」

いつもと微妙に違う台詞に、先ずは疑問を感じてみる。

「だってホラ、二度あることは三度あるってなったら嫌だし！ それにホラ、織斑君はもう専用機持って無いでしょ？ じゃあ今日は一般生徒同士で組むべきじゃん！ 代表候補生なんてお呼びじゃないよー！」

一息で一気に言い切ったよ。

後ろの方でドイツさんが目を金色に輝かせてるの、気づいてないんだろうか。

「さすがきよつち、免許皆伝は伊達じゃないね」

「いや、意味解らんから」

隣でのほほんさんが何か言っているが、気にしたら負けだろう。

さて、どうするか　なんて、別に深く悩む必要もあるまい。

事実として僕は専用機を所有しておらず、専用機の独創性あふれる武装に太刀打ちできるほどの格闘戦のセンスも無い。

ISに乗り始めたばかりの一年生女子相手でもないと、碌に訓練にならないのだから。

という訳で。

「ふえ？」

相川さんの燃える瞳が、何度も何度も瞬いた。

何時ぞや彼女にされた時のように差し出した僕の手を、不思議そうに見下ろしている。

うん、中々可愛い。

隣に居る人がお尻を抓ってくるのとか、遠くで金色の瞳がキュピーンと揺れてたり青い非固定稼動部位がふわふわ浮いているのが見えたりするのは、頑張っアンロック・ユニットて見ない気にしないことにしよう。

僕は一度肩を竦めた後で、口を開く。

「それじゃあ、宜しく」

「あ、いーくん……じゃなかった、織斑くん！ 封印した専用機の代替機が丁度さつき搬入されましたから、マッチングのために第四格納庫に向かってくださーい」

「……」
「……」

専用機の、代替機。

つまりは新しい専用機、である。

この僕、織斑一夏の。

静寂が、アリーナを包む 次の瞬間。

「うわあああん！ やっぱりもう、フラグが再生することなんてないんだあああああ！！」

ずだだだだだーっと、相川さんは砂埃を巻き上げてどこか遠くへと走り去っていった。

アリーナに居るみんなが、啞然として見送る。

「ほえ？」

入り口付近で手を振っていた山田まいちゃんの不思議そうな顔が、いつそ虚しさを助長していた。

アリーナに隣接した第四格納庫には、大勢の作業服姿の人間が行きかっていた。

その中にただ一人、キリっとしたスーツ姿のオトナの女性の後姿がある。

「姉ちゃん」

我が愛しの姉上、織斑千冬だ。

姉ちゃんは僕の呼び声に、顔だけ振り返った。

「一夏、来たのか」

そして再び、視線を正面に戻す。

正面にある、ハンガーデッキに固定された一機のISへと。

「……これが、そうなの？」

「ああ」

見慣れぬ概観のそれを見上げて尋ねる僕に、姉ちゃんは頼もしい仕草で頷いた。

「日本製次期主力IS試作機

うちがねにしき ひのと
打鉄式・丁 だ」

九十三話（後書き）

みんな大好きのほんさんとか、HOUKIさんマジKUKIとか、後ついでに三度目の正直ならずのモブの人とか、なんつーか我ながらノンブレーキで突っ走ってます。

あ、で。

いつそのことオリジナル白式でも出そうかなーとかも考えたんですけど、ダイナマイトセブンとかガオファイガー的な路線を狙ってこうなりました。

こう、マスプロダクツ的で、新デザインなのに性能的に本編より微妙とか言う続編OVA特有の路線で。

いや、エクスカリバーは性能悪いって訳じゃないけど。

そんな訳で例によって、

白式は犠牲になったのだ……。

九十四話

「打鉄うちがね式しき……か」

機動性を重視した独立性ウイングスカート。

格闘戦における運動性を重視したスマートなラインをした腕部装

甲。

肩部大型ウイングスラスタ。

一見して、如何にも現代のIS と言った雰囲気おんきゆうきの無個性な概観。

試作型の第三世代機に良く見られる特徴的な武装など一つも存在しない、傑作汎用機である打鉄うちがねの後継機らしい堅実な作りだった。

「丁度三年前……僕がISに乗り始めた辺りから開発してたって話は聞いてたけど、カタチになってたんだね。確か白鯨モビールディック……じゃなくて、白式びやくしきか。アレがこの機体を開発するためのデータ収集用の機体とか言う話だったけど」

「ああ、その通りだ。もっともその白式びやくしきは東ねが好き勝手に手を加えた拳句こぶせに後の装備開発は米国任せと言う、まったく微塵も開発の役にも立たないものになってしまったが」

うん、姉ちゃんの言うとおり。

三年前に機体を受領した時は、直ぐに初期化して東ねさん送りにしました。

東さんのことだからきつと、進化ダイアグラムとかの開発に役立つデータとかは全部暗号化して見えなくしてたんだろなあ。

提供してくれた日本はコアの保有権を取られ損でしたね。

「……まあ、若さゆえの過ちと言うことで」

「おまえなあ。東ねが白式のデータを全部ブラックボックス化してしまったお陰で、こいつの開発はゼロからやり直しになったんだぞ？」

苦勞に苦勞を重ねて、最近漸く運用試験段階まで持ってこれた、とのことである。

そういえばさっき試作機って言ってたっけ。

「にしても、丁ひのりってことはさ、ひよっとして丙ひのえってバージョンもあつたりするの？」

「ああ、あるぞ。中・遠距離対応型の丙と、中・近距離対応型の丁。二種類の装備パターンによる連携運用を前提に打鉄うちがね式は開発されている」

「へえ。最近の全領域対応思想から外れてるのは、ちょっと面白いね……って、姉ちゃんちょっと待った」

中・近距離対応型の丁？

IS本体の固定されているハンガーの脇には、兵装ラックが備えられていた。

そこにあつたのは、斬撃武装　つまり、刀。射程の短そうな短銃。腕部ユニットとの接続ラッチが備わっている稼動防壁、と言うか盾。

どうみても殴り合い前提の武装です。ありがとございました。

「いやいやいやいや、ちょっと待とうよ姉ちゃん。自分の弟の運動性能の低さくらい解ってるよね!？」

「見かけの割りに持久力はある方だろう。夜遅くまで運動した拳句目の下に隈も作らずに登校できる程度には」

「姉弟が外で出す話題じゃないよそれ!　いや兎も角、明らかに配備する機体間違っていないかな!？」

あと、自分で言っただけで頬赤くするくらいなら、言わないで欲しい。姉ちゃんそういうキャラじゃないんだから。

口に出したら恐いから言わないけど。

「丙の方と、間違っただけ？」

モレディック 白鯨の武装を思い出せば明らかだけど、僕の戦闘スタイルは完全なアウトレンジからの砲撃戦だ。

近くで殴りあうなんて発想は微塵も無い。

しかし、姉ちゃんは無情にも僕の言葉に首を横に振ってくれた。

「いや、間違っただけ。お前にはしばらくの間　何時までかは、正直私にも解らんが　この打鉄式うちがね・丁を専用機として運用してもらおう。無論、武装その他に関しては開発元である倉持が開発した物のみを使用することとする。くれぐれも……くれぐれも量子変換して独自に作成しようとするなよ？」

これは決定事項だからな、絶対だからなと、姉ちゃんは言い聞かせるように二度言った。

「……なんでまた」

モレディック 白鯨……いや、星詠みと同じ轍を踏まれては、困るんだろ

うさ

「あんなの束さんの魔改造が無いと出てこないと思うけど……」

「だが委員会の意見は別らしい。世界唯一の男性IS操縦者

ワンオフ・アビリティ 例の単一仕様能力の発現には、この要素ファクターが重要な関わりを有しているのではないかと考えている。男性特有の思考体系が通常有り得ぬ方向へコアの成長を促し、結果としてあいつたISと言う兵器力テグリーからはみ出した異端の存在を生み出すのではないか、そう懸念している。故に、この打鉄式うちがねは異常進化の可能性を危険視して、コアの自己進化機能にリミッターが施されていることを頭に入れておけ」

無駄なことを、と言いたげな口調で姉ちゃんは言った。

僕も同意である。

束さんが作ったものに後から別の誰かが制限機能を付加させよう

なんて、どう考えても無駄な努力としか思えない。

「だいたい、全てのISコアは人間からは確認できない場所でハイパーネットワーク越しに常に情報を共有しているのだ。」

「全ての情報を、余すことなく。」

「そう。つまりは、フォーチュナー星詠みの機体情報すらも。」

「だからその気になれば、このお仕着せの鎧の被せられた新しいISも、僕の意味を汲み取って。」

「……絶対にやるなよ。言い逃れ出来なくなる」

「ぞつとするほどに愛にあふれた声を、背後から被せられた。」

「機体に触れていた手を離して、肩を竦める。」

「姉ちゃんに迷惑をかける真似はしないって」

「馬鹿者。そこは一言『やりません』とだけ言えば良いんだ」

「額を押さえて大きなため息を吐く姉ちゃん。不甲斐ない弟だなあと、実感する場面だった。」

「兎も角、だ。さつき言ったとおりこいつは自己進化機能にリミッターが被せられており、当然、操縦者との同調システムに関しても通常の専用機程の利便性は期待できない。小まめにマニュアルで調整を加えるように心がけておけ」

「ああ、まあその辺はモビータック白鯨で慣れてるから」

「姉ちゃんの言葉に、頷いて返す。」

「モビータック白鯨はそのシステム上、コアと装備が完全に独立していたから、コアによる自動調整機能を反映させるためには一々マニュアルで装備側に打ち込んでやらなければならなかったのだ。」

「それを更に拡大したものと考えれば、話は早い。」

「そういえば面倒くさい仕様だったな、アレも……」

「専属チームの皆には迷惑かけたよねえ」

「フォーチュナー星詠みが封印されちゃったせいで、皆アメリカに帰っちゃったけ
じ。」

そういえば、結局開発中だった武装で使わなかったやつとかあったなあ。アレ、どうするんだらう。

「申し訳ありません教官、遅くなりました」

そんな事を考えていたら、背後から小気味良く床を打ち鳴らすブーツの音と共に、聞きなれた声があった。

「あれ、ラウラ?」

ドイツ軍所属のれっきとした軍人少女である、ラウラ・ボーデヴィツヒ 旧通称ドイツさんが起立している。

「ああ、来たか。専用機の調整は完了しているな」

「はっ。シユヴァルツェア・レーゲンは万全の状態です」

姉ちゃんが尋ねると、ラウラは敬礼と共にきはきとした返事を返した。

「そうか、では……」

ラウラの返事に姉ちゃんは満足そうに頷いて あ、こっち見た。凄い嫌な予感がするわ。

「併設の第五アリーナを貸切にしてある。このヘタレに、ISを使用した高機動近接格闘戦のイロハを仕込んでやれ。専用機持ちとして、少しは見栄えがするようにな」

「げ」

「了解しました教官。何処に出しても恥ずかしくない夫になるよう、確りと教練に当たります」

「……夫?」

ギロリと姉ちゃんの目が細まる。

ラウラは気をつけの姿勢を崩さぬまま、答えを改めた。

「訂正します。私の夫、です」

……ゴメン、それ何も変化してない。むしろ悪化してるから。姉ちゃん額を押さえてるし。

この娘も相変わらずマイペースだよなあ。

「……まあ良い。アリーナは午前中一杯は貸切で使えるから、午後までに一次形態移行を終える段階まで持つて行く様に。先に説明したとおり、設定の反映はマニュアル入力が必要になっているから、その辺りも留意しておけ」

「あのさ姉ちゃん。それ、マニュアル調整のみでオートファーストの一次形態移行と同様の水準に持つて行けつて事じゃないんでしょうか。どれだけデータ収集が必要になると思つて……」

「心配するな一夏。最後まで私が確りと面倒を見てやる。内助の功というヤツだ。大船に乗つた気で居るが良い」

「言葉の使いどころ間違えてるし、ついでにそれ、キミと何度も模擬戦しないといけないつてことだし……つて、姉ちゃん何処行くのさー！」

「授業に決まつているだろう？ 真耶だけで生徒たちを抑えるのは、荷が勝ちすぎるからな。 ボーデヴィツヒ、後は任せる」

「はっ！」

「あ、ちよっ……」

ラウラに頼むのも早い。

姉ちゃんは足早に格納庫を後にしていった。

「……そういえば、セリア達がこつちに着てないのが不思議だったんだよなあ」

「山田教諭が無理やり模擬戦闘の順番を先に回したからな」

「後で茶菓子の差し入れでもしにいこうかな……」

きつと涙目だろつし、まーちゃん。

そんな風に考えていたら、ラウラに肩をばん、と叩かれた。

ニコリと微笑んでいる。とても楽しそうである うん、この

娘何気に、新兵を甚振るのに定評のある特殊部隊の隊長さんですものね。

そんな訳で、おりむらいちかのたたかいははじまつたばかりらしい。

「という訳でシャル。僕はもう、駄目だ……後のことはお前に任せ
た……」

「うん……、何時ものことだけど、何か僕って都合の良いときは
かり頼りにされているような……」

苦笑を浮かべているのは金髪の貴公子　ではなく、美少女。
白い制服、丈の短いミニスカートから流れるような生足のラインも
美しい、シャルロット・デュノアさんである。

結局昼食時になっても調整が完了しなかったので、助っ人として
お呼びしました。

「いや、マジで頼りにしてる、本気で……」

「ああもう、良いからそのままへバっておきなつて。調整は僕がや
つておくから」

「お世話になります、ホント……」
「言葉じゃなくて態度で示してよね、たまには」

言葉尻が楽しそうなのが、割と本気で救いだ。

因みに現在位置はアリーナ備え付けの簡易調整デッキ。

展開状態のままのISを固定した僕は、そのまま一個の襪襦雑巾
となつて長椅子に転がっていた。

結論から先に言うとうさぎさんにフルボッコにされました
と。

無理無理無理。

ポン刀持たされたところでラウラに格闘戦で勝てる訳無いわ。

背中から叩き落とされたり横からぶっ飛ばされたり正面から蹴り飛

ばされたり、何だかもう散々でした。

因みにラウラは頬をツヤツヤさせて実に満足げです。

現在はダウンしている僕の枕を勤めていてくれたりもしますけど、お陰でシャルル君の目が少し恐い。僕が頼んだ訳じゃないっての！

「後で酷いからねー。」
それにしても、機動制御の方は白鯨モレールディックの時に取っておいたデータを打ち込んでおくけどさ……武装関連はさっぱりだよ？」

唇を尖らせつつも、頼んだことはきちんとしてくれる辺り、シャルは実に良い子である。

モレールディック「白鯨に近接用の武装なんて、飾りの話しかないからねえ」

「武装が偏りすぎだろう、流石に……」

うん、ラウラの言うことは最もだ。

「でも生憎、適正Dの駄目人間だからなあ、僕は……」

「有体に言って、酷いものだったなさつきは」

「空を飛ぶって段階から苦手だもんね、一夏」

シャルの言うとおり。

昔よりは苦手意識はなくなったけど、どうも根本的に、三次元空間で自由になる感覚に慣れません。

「やっぱり肩部背面脚部一体型の大型スラスタユニットは必要だと思っただよな……。後、肩にロケットランチャーと、腰のウエポンラックにレールガン。武装は大口径の連装砲で……」

モレールディック「それ、白鯨モレールディックって言わない？」

「打鉄うちがねのうの字も残っていないぞ……」

「元々日本機の一撃必殺思考って好きじゃないんだよ。何さ、バリアエネルギーを攻撃に転化して相手のバリアを無効化するって。それでこっちのバリアエネルギーが尽きたら笑い話にもならないじゃない」

「だが、上手く使えば有効だろう。現にそれで、ブリュンヒルデを採った方もいらっしやる」

ええ、僕の実の姉の人ですけどね。

「どうして一夏は織斑先生と姉弟なのに、そんなに接近戦が苦手なのかなあ」

「姉ちゃんと違って、僕は剣術道場になんて通ったことないからねえ」

「箒ちゃんに付き合っただ道場に足を運んでたときも、見学していただけだし。」

むしろ、ネット関連の雑談をしに東さんの部屋へ遊びに行っていた記憶の方が多く残ってるくらいだ。

「基礎体力自体はそれなりにあるのにな」

「そうだよねえ。夜中に激しい運動した後、朝からISで戦闘できるくらいには体力あるのに、なんで格闘センスだけ無いかなあ」

「……ごめんシャル。後生だからその話題は今日はもうやめにしてください」

さつき姉ちゃんにもやられましたし。

「……いい加減、私としてはその辺りの話を一度じっくりと聞いてみたいのだから？ おまえ自身の口から」

逆光で、ラウラの瞳が、超恐い。

体勢的に、リアルに命の危機です。この娘っ子、何気に寝てる男の喉元挟るくらいなら簡単に出来る子だしね！

とはいえ、命の危機を解消しようにも。

「言い訳しなきゃいけないようなことは、別に何もしてないけど」

何て答えしか、出せない訳で。

「むう」

「……一夏だね」

「……あれ？ 呆れられる場面なの、こじ」

ぶん殴られても仕方ないと思うんだけど、シャルもラウラも不機嫌そうだったため息を吐いてたりと、怒気は見当たらない。

「縛り付けたら投げ出して逃げるタイプでしょ、一夏って」

「同感だ。 が、まあ適度に尻を叩いてやらんと状況に胡坐を掻いたりもするからな、お前は」

特に最近の織斑一夏ならなんて、二人は知った風に言う。そして案外、それが事実過ぎて否定することも出来なかった。

肝に銘じますと答えて、嘘つけ、と返されて。

二学期もまた、何時ものように続くのかななんて、思った。

九十四話（後書き）

説明会、というか説明回。

それにしてもキャラが多くて処理に困る。

メインヒロイン（予定）の新キャラさんは一体何時出せることやらねー。

九十五話

「何か、デジャブを感じるんだよなあ」

『何かおっしやいまして?』

射出ゲートに機体を固定したまま呟いていたら、通信越しに気品溢れる声が届いた。

同時に、空間投影式バイザーの片隅に、通信ウィンドウが立ち上がる。

セリアだ。特徴的なクリアブルーのヘッドセットをつけて、戦闘準備は完璧、という具合である。

「いやね、セリアと授業時間外に戦うのも久しぶりかなーと」

『そういえば……一対一だと、そうですね。わたくしの蒼い雲とブルー・ティアーズ

一夏様の白鯨だと武装の相性上、どうしても戦闘状況が画一的になりすぎてしまいますから』

今回は違いますけどと、その言葉尻は笑みに緩んでいた。

「絶対に僕の負けだわ、今回は」

腰部ラッチに固定された近接戦闘用大型エネルギーブレードに視線を落として、ため息を吐く。

打鉄うちがね式しき・ひのこ丁てい。その主武装となる 雪片ゆきひら・改かへ。

この機体の戦法は、基本的に接近してこのシールドブレイカーを叩きつけることに全てがかかっている。

実際その威力だけを見ればたいしたもの、上手く斬り込めば一撃で相手機体のシールドバリアを破壊して絶対防御を強制発動させ

ることも可能なほどだ。

もつとも、中らなければ何の役にも立たない邪魔くさい取り回しの悪いデカ物だが。

何しる掌部エネルギー供給口とは別に、背部ユニットからエネルギーを供給するための専用のシールドエネルギー供給用ケーブルが引かれているようなゲテモノである。

振り回そうとするたびに装甲とケーブルが干渉して、取り回しが悪過ぎることこの上ない。

正直なところ、この新たな専用機の運用思想に僕は全く馴染めていなかった。

『一次形態移行は終えられたのでしょうか？』
ファースト・シフト

「出力系のデータにシャルが持つた白鯨のデータを移植しただけだけだね。でもこの機体と白鯨だと出力重量比が全然違うから、何処まで行かせることやら」

オートアジャスト機能が働かないオーバーテクノロジー兵器が、こんなに扱いづらいとは思わなかったと言うのが本音である。

少しでも数値が狂うと慣性制御機能と反発しあって真っ直ぐ飛んでくれないとか、とんでもない欠陥兵器だ。

「午後の授業までサボって何とかまともに戦闘機動が取れる程度には機動制御システムは安定したけど、武装方面はさっぱり手をつけられないからなあ」

『その調整のための、わたくしとの模擬戦、でしょうか？』

「この学園の『習うより慣れる』って思想はどうにかならないかな、マジで」

いや、ISと言う兵器と言う性質上それが正しいってのは解るんだけど。

でも今の僕の機体、ISの学習機能働いてないからあんまり意味無いんだよね！

『ご安心くださいな一夏様。近接戦闘のデータ収集と言うことで、近接戦闘用実体 わたくしも今回はBT兵器は使用しません。インターセプタ

剣

「のみに使つて英国式剣術でお相手します」

「お手柔らかに」

専用機持ちで一番近接戦闘が苦手な人じゃないと、正直データ収集もままならないだろう、ということでは今回はセリアに相手をしてもらうことになっていたりする。

……それでも勝てる気がしないんだよなあ。

『そんな貴方に、チャンスをぶれぜんとお』

耳の裏側に届く、声。管制室に居るのほほんさんに違いないだろう。

デジャブつてる意味で、嫌な予感しかなかった。

『どおかした?』

「いや、うん、ゴメン。私語はこのくらいにして、時間が勿体無いからさっさと模擬戦を……」

『そんな貴方に、チャンスをぶれぜんとお』

「……はい、なんですか」

どうやら強制イベントだったらしい。管制室、今誰が居たっけ?

『投げやりに答えてない?』

「いやまさか。そんな恐……いや、うん。本音ちゃんとお話するときに、そんな恐い……あれ?」

言い直したけど結局同じじゃね?

『貸しひとおつう』

「はい、ごめんなさい」

もう首が回らないくらい貸りが溜まつてる気がするんだけどなあ。一向に取立てが来ない件について、悩むべきか、スルーするべきか。

『たまには口だけじゃなくて行動に移してね』

「善処します、ハイ。で、チャンスつて何?」

この胃が痛くなる状況をとつと終わらせようと僕は先を促す。

何しろ、通信ウィンドウに表示されているセリアの表情も微妙に恐

かった。

『えっとね、今日おりむーが勝ったら、篝ちゃんにちゅーさせてあげる』

……あれ？

「ゴメン、一ヶ月くらい前に似たような台詞を聞いたような気がするんだけど、でも微妙に何か間違ってるない？」

主に単語の並びの順番的な意味で。

因みに以前その台詞を聞いた十分後くらいに、腹に風穴が開いた記憶が。

『ん〜ん〜。そんなことないよお。ホラ、おりむーが全然かまってあげないから、しののんがもう朝かられっどぞおんでけんらんぶとーって感じで……あ、しののんちよつとまっつて、あ、あああ〜〜』

緊迫感があるような、無い様な。

と言うか通信機越しにどんがらがっしやんばたんぎやーぐわーって感じで、凄い音がしてるんですけど大丈夫ですか、機材。

『……では、わたくしが勝利したら今度の帰郷の折には、一夏様もご一緒していただくと言うことで』

『ちよつとクワツサン！ どさくさに紛れて何勝手なこと言ってるのよ！』

あ、鈴ちゃんが通信ウィンドウ開いて怒鳴り込んできた。

そういえば最近の鈴ちゃん、髪下ろしていること多いよなあ。いや、大人っぽくて良いと思うけど。

『おだまりなさい！ 最近色気づいてきた中華娘には関係ないことですわ！ これは、わたくしと一夏様の勝負なのですから！』

『何が勝負よ！ ただの模擬戦でしょ！ しかもすっごい一夏が不利なルールの！』

『ですから、買ったわたくしが一夏様を癒しの旅にご招待しよう』

しているんじゃないありませんか!」

『嘘付け! どうせ両親のお墓とかにも一緒に行つて、既成事実にもしようとしてるくせに!』

この二人、何気に仲良いんだよなあ。

『なぐに他人のフリしてるのさ』

「あ、シャル。管制室の機材は無事?」

『うん、平気。ちゃんと請求書は一夏に回すように手配しておいたから』

それ平気って言わないから。

通信ウィンドウのシャルは、笑顔のまま表情が固まっているようにするに、一番恐い状態である。

「あのさ、シャル」

『大丈夫だよ一夏』

「は?」

とりあえずと何かを言おうとした瞬間、言葉を被せられた。

シャルは相変わらず えがお を浮かべている。ぶっちゃけ無表情以上に表情が読めなかった。

『大丈夫だよ、一夏』

「……大丈夫って、何、が?」

通信音声の隙間に鳴り響く騒音がさらに不安を助長させるが、尋ねないことを許される空気ではなかった。

因みに助けなんて無い。セリアと鈴ちゃんは相変わらず仲良く喧嘩していてこっちのことなど目に入っていないし。

シャルはにつこりと微笑んで、僕に言った。

『スケジュールはちゃんと空けて置くから』

イギリス旅行に行ける様に。

スケジュールは空けて置く。イコール、僕のスケジュールをシャルが空けて置く。

イコール、僕のスケジュールは、シャルが管理している。

いや、まあね。

そりゃ半年前までマネージャー宜しく公私諸々シャルにお世話になっただけですが。

なんかこう、信頼感を覚えるより先に気付けば足に鎖が巻き付いてるような不安感を覚えるのはなんでだろうね！。

って言うか、僕が負けること前提で自分もついてくるって事ですよ、その発言。

シャルとセリアの金髪コンビって、何ていうか少女らしからぬ女性的な圧力が恐かったりするから、全力で勝ちに行く場面なのかな、コレは。

あ、でも勝つと。

『勝つんだ、一夏』

「篝ちゃん」

音声のみの通信には、息が荒い事に関しては、突っ込むのが野暮って感じの空気があった。

『勝て、一夏。勝負に挑むに中ってそれ以外のことを気にする必要は無い。だから、勝て一夏』

実に単純な、叱咤激励。前後にある色々なことには、一切触れない。

「篝ちゃんのそういう真っ直ぐなところ、素敵だなんて思うよ」

『馬鹿っ』

言葉を詰まらせて、たぶん顔を真っ赤にしているんだろうな。

「じゃ、頑張ってみるよ。ご褒美は後で応相談って事で」

『だからそういう事は ああもう！ 全力を出さなかったら、後で酷いからな！』

「りよーかい」

とつくの昔にグリーンランプが点灯していたカタパルトに機体を接続して、発進体勢へ移行する。

『勝つのは、わたくしですわ』

頬を膨らませたセリアの顔が、幼げな感じで中々可愛らしかった。

「じゃあ、勝てるように努力してみよう」

いつかとは少しだけ違う言葉を返して、機体をアリーナへと飛翔させた。

シールドエネルギー残量ゼロ。

つまりそれで、決着だった。

「……努力した結果が、これかあ」

「そこで残念そうにされると、わたくしとしても立つ瀬が無いのですが」

「いや、主武装封印した相手に機体の得意分野で勝負を挑んで引き分けとか、もう、ね……」

自分の才能の無さに泣きたくなった。

状況。

機体同士をもつれ合わせたままアリーナ地表に墜落。

最後の特攻の段階でぎりぎり 雪片・改ゆきかた を突き立てることが出来たので、引き分けに持ち込みました。

と言うか、途中まで普通に負けてたからね。

いやー、代表候補生パネエ。近づこうとしてもヒラヒラ逃げられるでやんの。

「最後の動きは、ひよっとして有線式自在稼動話の……?」クイークエグ

突然動きが良くなりましたかと、セリアは首を傾げる。僕は苦笑交じりに頷いた。

「やっぱり解る? そ、セリアの考えている通り有線式自在稼動話クイークエグの誘導プログラムを機体動作に反映させてみた」

つまりは、IS本体そのものを自立誘導兵器に見立てて動かしてみた訳で。

「現状、コレが一番上手く敵に攻撃を当てる方法ってのが、なんていうかもう、ホント……」

「そのまま特攻、ですものね」

至近距離で そりゃ、もつれ合った状態なのだから当然だ

顔を見合わせて苦笑を交わしあう。

セリアがBT兵器を封印してなければ、普通に撃墜されている場面でもあるし。

「子機を飛ばすってなら問題なく出来るのに、どうもやっぱり自分が飛ぶってイメージが上手く行かないんだよなあ」

「ですが、武装が近接戦闘用長刀のみと言う状況ですし、やはり地道にスキルアップを目指すしかないのでは?」

「だよ、ねえ。やっぱり遠・中距離戦用の丙装備に今からでも交換してもらいたいんだけど……と、それは後でじっくりミーティングって事で、あのさ、セリア」

「なんですの?」

小首を傾げるセリア。畜生、可愛いとってしまった。美人は特だね、どんな仕草も様になって。

「そろそろこの体勢をとくべきかと思うんだよね。客席その他の視線が厳しいな意味で」

因みに円形のアリーナの外周には透過性の防壁で守られた客席が備わっている。

放課後の間であれば自主訓練でアリーナを使用している生徒も多いから、それを客席で見学するのも自由なのだ。

ついでに、僕はこう言っただけだがこの学園内に居る唯一の男性IS操縦者と言うことで客寄せパンダ的なポジションに置かれていたりもする。

ようするに、周囲四方からの視線が厳しいです。

もっと厳しいのは、高い位置から張り出している管制室の窓越しに感じるすさまじいプレッシャーですけど。

「一夏様が上なのですから、一夏様がお離れになれば宜しいのですわ」

「……そう言う割りに、肩に手を回しているのは何故かな」

「お解かりになりませんか？」

「キミがいつの間にかISを解除しているのと同じくらい、訳がわからないよ」

色々ややわらかいことは理解できますが。

「そういえば勝負は引き分けですし、間を取ってわたくしが代わりに一夏様にご褒美を、と言うことで……」

「顔近づけるの止そうよ！ そろそろ砲弾が飛んでくる感じがするし！」

あわてて体を引き起こす。

展開したままのISによるパワーアシストが働いていたため、何とか引き寄せる力より離れる力が勝ってくれた　　というかしまった、力を込めすぎた。

「つと、うわっ！」

「あん」

何で嬉しそうかなあ、とか体勢を百八十度反転させる最中に考えてみたりもする。そういえばエネルギー切れだったっけ、と言うことも。

放課後の青空が見えた。青空を覆い隠す金色の滝の方が良く見えませんでしたけど。

「誘われているのでしょうか、わたくし」

「なわけ、ないでしょうが……」

ゆったりとした動作で体を密着させてくるセリアから、後で言い訳に使うために視線だけでもずらしておく。

客席が、目に入った。

まばらに座って観戦していたらしい女生徒達のワクワクと状況を楽しんで見守っている視線が、胸に痛い。

白い目で見られるよりは、なんぼかマシ……でもないよね、うん。

？

一つだけ、あった。

白けた眼差しが。

今時珍しい視力矯正用のメガネ越しに、白けきった眼が、真っ直ぐに僕を見て いる？

いやに目に付く、見覚えの無い顔 いや、どこかで見た、記

憶が……。

「余所見は、いけませんわよ」

ぐい。

昨夜と変わらぬやり方で、顔の向きごと視線を直された。

見えるのは、僕の腹の上でマウントを取ったセリアの美貌と。

「そつだな、余所見は良くない」

「同感だ」

「そつよねえ、話は顔を見てやら無いと」

「いい加減少しは自重しようねー」夏

「流石にフォローできないし〜」

いや、のほほんさん。貴女フォローをする気なんて無いでしょう。
なんて、言っている暇も残されて無くて。

その後は、客席の視線なんて気にも留めていられないほどの、
厳しい視線の雨を、耐えねばならなかった。

九十五話（後書き）

かんざしさんがログインしました。

台詞があるのが何時になるか正直読めんけどな！

九十六話

「ふうっ……」

二時間後、ようやく女性陣から解放された僕は、自費で購入して部屋に持ち込んだリクライニングチェアに身を委ねた。

いかにも懐古趣味 特に好みなのは二十一世紀初頭のデザインラインである 僕が購入したものらしい、この寮の作り置きのモダンな内装からは聊か趣が外れたクラシカルなデザイン。

ぶつちやけた話、座り心地よりも見た目を優先していたりするから、部屋に遊びに来る女性陣には不評だったりもする。

同居人が居なくて良い事の一つに、自室を好きなようにレイアウト出来る事だなと思う瞬間である。

もつとも、この部屋を使えるのも後二年半程度なんだろうけど。

「卒業したら、どうなるのかね……?」

右腕を持ち上げる。

かつての僕の主観から見れば、明らかに近未来風の白い金属製の腕輪ガントレットが嵌っていた。

サイズも僕の細腕にぴったりで ぴったり過ぎて、多分外れないね、コレ。

無事に一次形態移行 ファースト・シフト 搭乗者登録を完了し、打鉄うちがね式・丁が完全に僕の専用機となった事を示す、これがISの待機状態の形状だった。

モレディック 白鯨の頃のような待機状態というカテゴリから外れかかっていた感のある旅行鞆とも、大いに僕の趣味が反映していた星詠みフォーチュナーの二

枚組みの望遠レンズとも違う、打鉄式うちがねのそれは実にシンプルな待機状態である。

「お前とも長い付き合いになるのかねえ？」

所有して一日と経っていないせいなのか、未だにコイツが自分の専用機である感じがしない。

馴染まないというべきか。

勿論、三年かけて育て上げた星詠みフォーチュナーと比べれば、馴染むはずが無いのも当然だろうとは理解しているが。

この学園を卒業したら、コイツを育て上げるために、また旅から旅への日々へとなるのだろうか？

或いは、その能力を危険視されて封印されてしまった星詠みフォーチュナーのように、僕自身もまた。

「南国の孤島辺りで、死ぬまで一人で生き続けるとか、ぞっとしないよな……」

「な〜に独りで恐いこといつてるのさ」

視界が唐突に、黒に染まった。

暖かな感触が、瞼を覆っていることに気付く。

因みに視界が黒くなるまで、足音や、ましてや扉が開く音など一片も耳に届かなかった。

今、IS装備してるんだけどなあ、僕。どうやって常駐センサーをごまかしたんだか。

「だ〜れだ」

背後から聞こえてきたのは、定番の質問だった。

答えに躓くと酷いことになるのも、定番だったりする。

と、言う訳で。

「虚先輩はつひですよね？」

「あら？」

「ありゃ？」

声は予想通り二つあった。

そつと臉を覆っていた手を避けて、背後を振り返る。

女性にしてはやや背の高い布のほとけ仏ぶつ虚うつはさんの肩の上に、別の女性の頭が一つ乗っけられていた。

やんちゃそうな声の印象に反して無駄にプロポーション抜群な、

IS学園生徒会長、たっちゃんさんなまじきたてなしこと更識まじ楯たて無なさんその人である。

つまり、声をかけたのがたっちゃんさん。僕の目を覆っていたのが、虚うつは先輩ということだ。

「何で解つたの？」

僕と視線が会つと、たっちゃんさんは軽やかな仕草で虚うつは先輩の肩から顔をどかして、自然な態度で二歩三歩後ろに下がった。

僕との視線の軸線上に、虚うつは先輩の体を挟む位置で、立ち止まる。

< ruby > < rb >

虚 < / rb > < rp > (< / rp > < rt > つつほ < / rt > < rp >) < / rp > < / ruby > 先輩は主の会話の邪魔にならないようにあっさり横に退いた。

その瞬間、若干たっちゃんさんの顔色が変わったことには、気付かないフリをしてやるのが礼儀というものだろう。

僕は苦笑交じりに彼女に返す。

「案外匂いって誤魔化せないらしいですよ　ああ、勿論変な意味じゃなくて」

「変な話じゃなくて経験談だもんねー」

黙秘します、と答えた瞬間に虚うつは先輩が大きなため息を吐いた気がするが、気にしなかったことにしよう。

余りこの話題に深入りすると藪で蛇な話になるので、こちらから話を進めることにする。

「で、何のようですか？ たっちゃんさんが部屋に来るのって、割と久しぶりの気がしますが」

「あれ？ そうだったけ？」

後ろ手を組んで上半身を突き出す仕草で、更に一步、たっちゃん

さんは後ろに下がる。

ちら、と虚先輩（虚先輩）に視線を送ると、共感を得られる苦笑を頂けた。

「ええ、一月ぶり位だと思えますよ」

「正確に言つと、夏休み初日以来となりますから、三十八日振りです
すね」

この部屋以外では結構な頻度で遭遇していましたがと、虚先輩（虚先輩）が
さらりと付け足した。

たっちゃんさんの視線が、本人は気付かれていないと思っている
のだろうが、慌てたように揺れる。

この辺りが引き際だろうか。

「あ、あはははは、一夏君たら、お姉さんと会えなくて寂しかった
つてことかな？」

……どうやら延長戦をお望みらしい。

もう一度虚先輩（虚先輩）に視線を送ると、彼女はいつの間にかキッチンの
方へと姿を消していた。

どうやら久しぶりに玉露が味わえるようだ では、準備が出
来るまでは、遠慮なく。

「寂しかったです」

「ほへ？」

「ですから、たっちゃんさんが部屋に来てくれなくて寂しかったで
す、と申し上げている次第」

「へ、へ、へえ〜……あう」

残念、それ以上後ろには下がれない。そこから先は壁だ。

右を見ても左を見ても、逃げ場なんてありはしないのです。

「それで、たっちゃんさん」

「な、なにかな？」

「たっちゃんさんは寂しがっている僕に、一体何をしてくれるんで
しょうか？」

「ふえ！？」

擬音をつけると、『あわあわあわあわ』って五十回くらい繰り返さなきゃいけない慌てっぷりだった。

この人、普段お姉さんぶってる割に一度自分のペースが崩れるととたんに小動物系のよわつちいキャラに変わるよなあ。面白くて好きだけど。

「な、な、何って、それは、ほら、それは、その……えっと……なにすれば、良い、かな？」

「え？ 僕が決めて良いの？」

「何をするつもりなの！？」

いや、そんな襲われる手前の女の子ばりに悲鳴上げんでも。

この人本当に、風呂場やベッドに勝手に入り込んできた人と同一人物なんだろうか。

「些か以上に貴方に責任があると思いますよ、お嬢様がこのようになっちゃったのは」

「相変わらず手際良いですね、虚さん……」

勝手知ったる他人の家ってなノリで、虚さんがお盆に人数分の力ツプを載せてキッチンから出てきた。

目ざとく気付いたたっちゃんさんが飛びつく。

「助けて虚ちゃん！ 一夏君に襲われる！」

「……双方同意の上に見えましたか？」

うつほせんぱいの すごい きらーばす ！

僕ら二人を見る、虫けらに向けるような冷たい目が、恐ろしかった。

「虚ちゃんの意地悪……」

「そこで顔を赤くするから失敗なんだと思うんですけど」

「させているのは貴女でしょうに、何を他人事のように言っているんですか」

「すいませんホント、自重します……」

「別にかまいませんけどね」

虚先輩は格別気にしていない風な態度で、最後にさらりと付け加える。

責任を取ってもらえるのなら。

「……」

「……」

カチャカチャと、お茶の支度を整えていく音だけが、響く。

さしあたって心の平穩のために聞こえなかったことにしておこうかなと、顔を真っ赤にして口をパクつかせているたっちゃんさんを見ながら、僕は思った。

「どう、打鉄式式は？」

仕切りなおしとばかりにお茶の席を囲み、一息ついた後でたっちゃんさんは尋ねてきた。

微妙に視線が泳いでいる件には、突っ込んでやらないのが礼儀だろう。また虚先輩を呆れさせるのもなんだし。

僕は右腕に巻かれた腕輪に視線を落としながら、言葉を返す。

「良い機体なんじゃないですか？ パワーもスピードもあるし追従性だって悪くない。センサーも最新の高性能なヤツ乗っけてますしね。まあ、問題があるとするれば」

「 やっぱり、武装？」

「どうやらと言うかこの人なら当然と言うか、たっちゃんさんは打鉄式の性能について良く理解しているらしい。」

僕の操る丁タイプの武装 近接格闘戦を想定したそれらについて、知っていたのだろう。

おそらく、僕がそれを使いあぐねているだろうことも。

だが、僕は首を横に振った。

「いえ、中身の問題じゃないかと」

「中身って……」

「僕だって別に、考えなしに第二世代機の白鯨モビーディックを使っていたわけじゃないんですよって事です」

「……まさか、機体の反応速度についていけないのですか？」

目を丸くする虚うつろさんに、僕は苦笑して頷いた。

「新型の伝達系だと反応が敏感すぎるんですよ、僕にとって。ついでにフィードバックの情報を処理し切れませんし。IS操縦適正『D』の限界ってヤツです」

本当に。

打鉄うちがね式は悪い機体ではないのだ。

武装が好みじゃないことはさておいて　　マニュアルでのフィッティングが大変なもの、さておいて　　マニュアルでのフィッ

傑作機であるラファール・リヴァイブを参考に、傑作機たる打鉄うちがねの設計を下敷きに作られた打鉄うちがね式は、他国の第三世代機のように突飛特徴的な部分は目立たないが、その分堅実極まりない性能に落ち着いている。

おそらく、ISに慣れた操縦者が装着したのなら、大抵の場合は『使いやすい』と答えるであろう良いバランスをしていた。が、しかし。

ISに対する相性は最低の部類に位置する僕にとつては、『性能が良すぎてついていけない』という笑えない状況が発生してしまう。だから本当に、あんまり繊細な動きをしないで良い後衛仕様の丙タイプを要求したいんですけど」

しみじみとした僕の言葉に、たっちゃんさんは頬を引きつらせた。

「ああ、我がまま言ってるだけかと思ってたなら、案外深刻なんだ」

「ええ。ですからこのさい生徒会長権限でVTシステムでも支給しなくてもいいか？」

「無茶言わないで」

駄目か。まあ駄目だろうけど。

「にしても実際、なんで僕に近接戦の機体なんて渡してくるんですか？」

「ん……それはホラ、実験と言うか何というか。バリバリ後衛仕様の白鯨モビータイクがあなつたから、じゃあ前衛仕様の機体を与えて

って言うか一夏君、明らかに私とその辺の事情を知っていること前提に尋ねてるよね？」

「え？ だってそのあたりの説明に来てくれたんですよね？」

最近のこの人、理由が無ければ僕の前に姿を見せなくなつたし。

「……むう。なんかそついう、『この女は俺のために動くに違いないぜー』って思い込み、良くないと思うな」 たっちゃんさんは頬を膨らませてご立腹である。だが、そこで虚先輩うつほがそつと言い添えた。

「お嬢様の言葉を意識しますと、『どうせそこまで解ってるなら、一夏君から尋ねてきて欲しかったな』となります」

「ならないよ！ って言うかなんで今日の虚ちゃんうつほは私のことをいじめるの！？」

「一夏さんと同様の、お嬢様への愛です」

「一夏君のえつち！」

「何でそこで自分から僕に振るんだよアンタは！」

この人、アレだよな。

自分で自分のために罫を仕掛けて、嬉々として自分で飛び込んでいくタイプ。

言葉の端々に苛めてオーラが漂っているのが、実に面白いや、可愛らしくて良いと思う。

「……えつち」

「脈絡無く酷い言い様だなあ」

半泣きで顔赤くして。前はもうちょっと感情のコントロールが出来てたっばい人だった筈なだけだなあ。

どうしてこんな風になってしまったやら　　なんて、とぼける
必要も無いほど明白か。

なにしろ、虚先輩うつほが完全に白けた目を向けてきてるし。姉ちゃん
と同じ』この色惚けどもが』って目。

呆れならまだしも、本気で怒らせると怖いタイプの人なので、話
を進めることにしよう。

「まあ、兎も角。打鉄うちがねの方は何とか小細工してみますのでご心配な
く　　というか、何かあったらお願いしに行きますのでご安心く
ださいって事で。他にひょっとして、何かありますか？」

例えば、犯罪結社とか無人ISとか、あと学園へのテロ計画とか。

「……身も蓋も無いなあ」

「一学期中散々に被害にあってますしねえ。学園の対外向けのイベ
ントとかも、二学期からが本番じゃないですか」

「そーなんだよねー。お姉さんも学園の警備で忙しくってさー」

「お疲れなら、肩でも揉みましょうか？」

「やだよ、えっち」

それは残念、とあかんべーに肩を竦めて返して、気分を改める。

たっちゃんさんは少し姿勢を正した。僕もそれに応じて、背筋を
伸ばす。

「実は一夏君にお知らせしなければならぬことがあります」

「はい」

余計な言葉は言わずに、僕は頷く。たっちゃんさんは一つ頷き返
した後で続けた。

「今年度は例年に比して外部勢力による学園への襲撃事件が多発し
ています。それを踏まえて、学園の防衛能力の強化向上を目指すと
言う名目で、九月第三週頃を予定して全学年合同で専用機保有生徒

による、タッグマッチ戦を開催することが決定しました」

ああ、毎年襲撃事件は発生しているんだ。

巷ではちつともニュースにならない辺り、流石超法規的な国際機関が運営してるだけあるな。

なんて、くだらないことを考えている間にも、たっちゃんさんの説明は続く。

「当然一夏君も打鉄式うちがね式で参加してもらいます。それで、なんだけど

「どつやらここからが本題らしい。

たっちゃんさんが言いづらそうに一度眼を伏せる。

そして彼女は徐に、テーブルに手を突いて頭を下げた。

「その……お願い！ 妹をお願いします！」

「……はい？」

九十六話（後書き）

更識さん登場回　　ただし姉の方、的な。
誘い受けっぱいキャラしてるよね、この人。

そんなこんなで漸く原作の二十六ページくらい？

単純計算で十五倍すれば確実に終わる計算だけど……まあ、流石
にそこまで長くはならんか。
一ヶ月くらいで終わるんでないかな。

九十七話

「妹……さんって、確か、僕と同年の人ですよな？」

「あれ？一夏君ってば簪ちゃんかんざしと、もう面識めんしきってあったっけ？」

僕の返事に、たっちゃんさんは目を丸くして驚いている。

「いえ、対面したことは無いですけど、本音……あゝ、のほほんさんが、そんな人が居るみたいな話を」

「本音、とお呼びになつて構くいませんよ？」

私は気にしませんと、済すました顔でお茶を啜すする虚先輩うつぽ。すいません、僕が気にするんです。勘弁して下ください。

「まあ、兎も角。のほほんさんの話だと、人見知りするようなタイプだから、紹介出来ないとかなんとか」

「人見知りって言うか……単純に、暗いのよね」
うわ、ぶっちゃんやがったよこの人。

何かを思い出して困り笑顔を浮かべている様子は、そのままのほほんさんが件の少女の話をしていたときと同じ顔に見えた。

つまり本当に、その更識簪かんざしさんとやらは、こう、人見知りと言うか非社交的ひしやうてきと言うか……暗い、のдарう。

「あ、因みにコレが写真。可愛いでしょ？」

「たっちゃんさんには負けますよ」

「なんだとお!？」

いや、とりあえず言ってみただけの台詞にそんなに過剰に反応されると困るのですが。

一瞥いちべつすらくれない虚うつぽさんに習なつてオーバーリアクションのたっち

やんさんは放ったまま、僕は彼女が取り出した携帯端末のディスプレイに表示された写真に目を落とす。

斜め横、背後に近い位置から撮影された　多分、勝手に撮ったのだろう。

IS学園の制服を着た少女。

メリハリのあるたっちゃんさんのボディから多少凹凸をへらして、セミロングに整えられたたっちゃんさんの髪の毛を少し長めに

というか単純に、ボサボサに伸ばして感じの髪型。電子情報端末にアクセスする役割もあるのだろう、左右に付けた大型の髪飾りが目を引いた。

俯き地面に視線を落とした顔は、前髪で隠れがちであり、僅かに覗く視線は、どこか隠棲的な空気を纏っている。

遠目に見れば、たっちゃんさんに良く似ている　が、個々のパーツを確りと判別できる位置に近づけば。

「可愛いでしょ？」

改めてたっちゃんさんに、僕は肩を竦めて応じる。

「たっちゃんさんには負け……ああ、失礼。僕はたっちゃんさんの方が好みですよ」

主観を相対的な風に聞こえるように語るのは不味いかと、言い直す。

何か向かい合わせの席の女性が目を見開いていたりその隣に座っている女性が額を抑えていたりするけど、そこは気にしない方向で。お二方とも何故か、何故か無言のままなので、自分から話を進める。

「　で、こちらの可愛らしい女性を、僕にどうしろと？　いや、話の展開から何となくは予想がつくんですけど」

僕、人見知りするタイプなんですよね、何て付け加えたらゴミを見るような視線が二つ帰ってきた。

「人選ミスったかな」

「自分から話を振っておいてその言い草はどうよ？」

「誰のせいだよ、エロ助」

エロい視線を向けた覚えは無いんだけどなあ。

いや、夏休み前後で少し気が抜けちゃった部分があるから、自分では良くわからないけど実際はそういう部分もあるのかもしれないけど。

「……以前に比べれば、よほど素直に感情を面に出すようになりましたが」

「さいですか。……というか、何で僕の考えていることが解ったんです？」

「日ごろ内心を隠しがちな人に御仕えていますから
表情を読むのは得意なんです、と虚^{うつほ}さんは言う。

なるほどね、と頷きあつた後、全く他意は無く二人でそろつてた
つちゃんさんを見た。

「……なにさ、その目はなにさ！」

大げさにうるたえるたつちゃんさん。僕と虚^{うつほ}さんは、再び顔を見
合わせて頷いた。

「一夏さんが居るとお嬢様のお気持ちも察しやすくて助かっていま
す」

「僕にとっては昔からわかり易い人なんですけどねえ」

「だからなに！ 二人してなんなのその生暖かい目！ って言うか
今は簪ちゃんのお話をする場面だよ？ ね！？」

あ、やべ、そろそろ本気で泣きが入ってきたよ、この人。

本当に感情が面に出やすくなってるよなあ って、あれ？

それは僕の話だっけ？

視線の力、という物がある。

無形の、第六感に働きかけるようなそれは、例え自身に向けられたものでなくても、相応の圧力を伴って、空間に存在する事を自然と理解させる。

と言うか、だ。

「最後に、今月第三週目を目処に予定されている全学年合同タッグマッチ戦に関する報告なんです……け、どお……」

まーちゃんの言葉に、ザワリと、人の気配が薄くなった筈の教室の空気の密度が増す。

現在、一年一組の教室には担任、副担任を含めても、七人の人間しか居ない。

生徒の五名は、僕を含めて何れも専用機保有者である。不定期に存在する、専用機保有者への放課後ミーティングの時間だから、当然といえば当然なのだが。

平時であれば、報告される内容は専用機の運用定期報告に関する内容や、もしくは優先的に使用できるアリーナに関する情報などと有り触れたもので、そういった時の場合は、特に盛り上がりも訪れず、まーちゃんの語る言葉を聞いた後で姉ちゃんの締め挨拶を聞くだけ、と完結するのが常だ。

別に僕らは二人のことが嫌いと言うわけではないが、学生の身分にしてみれば放課後に居残りで教師の話を聞くなどという時間は煩わしいと思ってしまうのが当然であり、ならば、私語は挟まずにその時間がひと時でも早く過ぎるのを待つ、というのが当然の態度だろう。

だが、極まれに。

「えっと、えっとです、ね？ いいですか皆さん。まだ、まだ先生が報告している途中ですし、そんなに、ほら、ね、そんなに、その……」

早く先に進めろよ、と。

まーちゃんが震えて固まるほどに空気の密度が増していく。

皆してそんな態度を取っていればまーちゃんが怯えてしまつて、余計に話が進まなくなるのだが　まあ、言わぬが華なのかもしれない。

「ひう……」

「山田先生、そこから先は変わります」

「しえんぱあい」

「せめて織斑先生と呼べ、真耶……」

すがりつくまーちゃんを鬱陶しそうに払いのけて、姉ちゃんこと織斑先生はこめかみを押さえながら教壇に立った。

ざっと、教室内を見渡す。

僕、篝ちゃん、セリア、シャル、ラウラ。

他のクラスに比べて明らかに配置比率が間違っているだろう、五名の専用機持ちの生徒を。

この視線の圧力に一人で拮抗できるあたり、本当に流石姉ちゃんだよなあ。むしろ勝つてない？

「そこで他人事みたいな顔をしている愚弟は後で追加の補習を行うとして　だ」

「ちよつと待つて姉ちゃん！　僕、今何かした？」

「何もしていないのが問題なんだよお前の場合！　いや、何かしたまま放置しているのが問題と言うべきか……ともかく！」

大げさに頭を振った後で、姉ちゃんは空気をぶった切るように一息で言った。

「正式な期日は未定だが開催だけは確定している。今のうちから各自話をあわせてタッグパートナーを見つけおけ。タッグの選定に関しては、生徒たちに一任する……が」

が。

この一言で、姉ちゃんに押され気味だった場の圧力が、再び高まった。

まーちゃんが教室の隅でガタガタ震えている。だが、姉ちゃんはまるで涼風でも浴びているかのような涼しげな態度を崩すことは無い。

淡々と、必要な説明を口にした。

「一年一組の織斑一夏、及び一年四組の更識簪はタッグを組むこと。これは学園運営部より指示された強制決定事項だ。他の生徒はその旨を理解した上で、この二人以外のタッグパートナーを探すこと。以上、解散！」

え？ 質問の隙間すら与えないの？

姉ちゃんは一息で言い切った瞬間きびすを返し、まーちゃんを小脇に抱えて教室を後にしてしまった。

バタン、と廊下へと続くドアが閉じられる。

当然、教室には僕ら五名のみが取り残されてしまい。

「姉ちゃん、逃げたな……」
がたつ。

「一夏……」「一夏様？」「一夏」「我が夫よ」

迂闊な僕の一言が、全ての引き金となったようだ。

僕が自分で決めただけじゃないんだけどなど、確実に言ったら藪

蛇に違いなかった。

ここは言葉ではなく、行動で示すべき場面だろう。

具体的に言えば廊下側最後尾、即ち直ぐそばにある扉を即刻開いて全力ダツシュする方向で。

「そう言う訳なんで、僕はタッグパートナーと……」

ガラリ。

僕が開けたわけではないのに、廊下側から扉が勝手に開いた。

「一夏居る？ って、何よその腰の引けた格好」

教室を覗き込んだのは、腰まである黒髪の美しい少女。快活そうな瞳は、でも少し大人びた空気も纏っていた。

「……やあ、鈴ちゃん」

ファン・リンイン

鳳鈴音女史である。思いつきり逃げ道を防がれた格好となった僕は、引きつった声で挨拶した。

と言うか、椅子に座ったまま体を伸ばしてドアを開こうとしていた関係で、ドアを開いて教室を覗きこんできた鈴ちゃんの胸に飛び込んでいる体勢でした。

と言うか鈴ちゃん、自然な動作で腕を首にかけないで下さいませんか？

「でかしたぞ中華丼。そのまま一夏を拘束しておけ」

「うん、これからじつくりと尋問しなくちゃいけないしね」

「拷問　ああ、それなら丁度良いですわ。先日故郷から帰還した折、間違えて乗馬用の鞭を鞆に詰めてきてしまいましたの」

「ふふっ……この期に及んでまたぞろ女を増やそうなど、最近私は少しお前に甘かったかもしれない？」

え〜っと、皆さんが凄いだス黒いオーラを滾らせながら、こちらに近づいてきています。

因みにみんな、腕部だけISを部分展開していて、それが象る異形のシルエットが恐怖を助長するのですが！

「毎回毎回懲りないわね、あんた達……」

ふう、と鈴ちゃんが僕を抱きしめたままため息を吐いていた。呆れている。僕に、と言いかむしろ、皆に。

その落ち着いた態度に、皆は氣勢を殺がれて立ち止まってしまふ。

「だって鈴ちゃん、一夏が……」

「どーせアレでしょシャルロット。タッグマッチのパートナーのハナシ」

「その通りだ。こともあるうに妻たる私以外の女と組もうなど

夫の浮気、許すまじ」

「誰がアンタの夫なのよ、まったく……。一夏は四組の代表候補とは組まないといけないでしょ？」

ラウラとシャルに言葉を返した後で、鈴ちゃんは僕に発言を促した。

後頭部に顎を乗せている鈴ちゃんの言葉に、僕は頷く。

「え、ああ……。うん。打鉄式うちがね同士ってことで、ね」

鈴ちゃんは、ふーんと、興味なさそうに鼻を鳴らした。

「二機一対の連携テストのための 必要なことなんでしょ？」

「えと……はい」

打鉄式うちがねは、前衛仕様の丁と、後衛仕様の丙の二種機体を連携して運用することを前提としていた。

そして、丙型武装の打鉄式うちがねを専用機にしているのが、更識簪。

たっちゃんさんの妹さんであり、同時に日本国の代表候補でもある少女だ。

打鉄式うちがね・丁を専用機とする僕は、開発に必要なデータを収集するために彼女とタッグを組まなければならない。

ISの開発への協力。

それは国家から専用機を貸与された専用機保有者にとっての、れっきとした義務である。

「じゃ、仕方ないじゃない」

説明を終えた僕に対する鈴ちゃんの返事は、実にあっさりとしたものだった。

まるで解りきっていた事情を、改めて確認しただけのようですら、ある。

篝ちゃんが不貞腐れた顔で口を挟んできた。

「……お前は、悔しくないのか？」

鈴ちゃんに向けて。

理性と感情は別だろうと、言いたげな態度で

対する、鈴ち

ゃんは。

「そりゃ、あたしだって組めるものなら一夏と組みたいけどでも、仕方ないじゃない。あたしたちはISに乗るために此処に居るんだから。私事にかまけて仕事を疎かにしちゃったら、後が悲惨よ」

落ち着いた言葉を、皆に聞こえるように、言った。

そして、今度は僕に向けて。

「それじゃ、あたしはもう行くわ。一夏の口から事情を聞いておきたかっただけだし。それじゃあね」

一度だけ僕に抱きつく腕の力を強めた後で、あっさりと。

ストレートの黒髪を翻して、鈴ちゃんは廊下の向こうへと消えていった。

誰かに発言を許す暇も与えず、軽やかに。

「……なんなのでしょう、こう、色々なものが敗北したような気分は……」

「解らん……解らんが我々は敗北したことだけは確かだ……」

セリアの言葉に、ラウラが肩を落としていた。

「鈴ちゃん、なんかすっかり落ち着いちゃったよね……」

「髪を下ろすようになってから、雰囲気が変わったな、確かに」
シャルと篝ちゃんも、口々に言う。

まあ、確かに。

再会した当初に比べて、行動の端々に落ち着きが出てきたかなあとは、僕も思う。

なんて、考えていたら。

「あ、ゴメン。一つ言い忘れてたわ」

ひょいっと、鈴ちゃんが再びドアから顔を覗かせた。

何事、と一斉に集まる視線をもともせず、僕に向かって色気のある笑みを向けて、鈴ちゃんは言う。

「この埋め合わせは、期待して良いのよね？」

そして僕の答えを聞くことも無く、鈴ちゃんは再び、廊下の向こうへと歩み去って行った。

僕には、言葉も無かった。

単純に、鈴ちゃんの笑顔に、見惚れていたせいかもしれない。

「負け、たのか」

「負けだね」

「負けですわね」

「ああ、負けた……」

皆が、とぼとぼとした足取りで、教室を後にしていく。

何ていうか、うん。

その後姿と先ほどの鈴ちゃんの足取りを比べてみれば、その勝敗は明確って感じではあるけど。

それにしても。

「……何の勝ち負け、なんだろうね？」

皆への埋め合わせをどうするべきか頭を悩ませつつ、僕も漸く、席を立った。

九十七話（後書き）

A・女子力のな何か。

九十八話

隣、良いかなと、彼は言った。
良い訳がないと、彼女は答えた。

それが、更識簪かんざしと織斑一夏とのファーストコンタクトだった。

断つたのに。

視線を横に移すことはせずに、簪は眉根を寄せて不快感をあらわにする。

此処が高性能の情報端末が設置されている騒音厳禁の資料室の一角でなければ、怒鳴りつけている場面だ。いや、自分に人を怒鳴りつけるような感情的な行動が出来るかどうかは、疑問だけだ。

兎も角、簪はそれだけ不機嫌だった。

わざと他の利用者が来ない資料棚で死角になっているような場所に置かれた端末を利用していたというのに、ぬけぬけとした態度で横に座られたのだから。

パーソナルスペースを侵された不快感で、気持ちが悪わつて治まらない。

空間投影ディスプレイに映し出されている、専用機の駆動データが、全然頭に入ってこない。

苛立たしげに、キーボードを強く、隣の端末を利用している人間が耳障りと感じるような音が響くほどに、強く叩く。

「……今時骨董品の機械式キーボードを持たで使用する人が僕意外にも居るなんて、知らなかったよ」

「え？」

カタカタカタカタ。

隣の席からも簷の手元で鳴っている音と同じ音が響いていることに、簷は気付いた。

卓上投影式のキーボードが主流の現在、機械式のそれを使うのは一部の懐古主義のマニアくらいのもだろう。

軍事機関ですら、普通に投影式の物を利用して行くくらいだから、その利用者の少なさと言ったら押し知るべしである。

「何処に行っても懐古趣味とか言われて鬱陶しがられてたんだけど、まさか学園にお仲間が居たとはね」

嬉しい発見だと、満足げな顔でその人は頷いていた。

頷いている横顔を、間近で、簷は漸く、見た。

女の子？

そんな訳は無いのだが、線の細い顔立ちは、どうにも男性的な空気を感ぜさせない。

声もどちらかと言えば高めだったし、椅子に座っている状態でも人目で解る位、小柄な少年だった。

全体的に細く、むしろ華奢といってしまった方が早そうな、でも、妙な存在感はある。

あつて当たり前だ。

何しろこのIS学園に、男子は彼一人しか居ないのだから。

むしろ、女だらけのこの学園の中で、存在感がある程度で違和感無く溶け込んでいる事実こそ、驚く場面だろう。

織斑一夏。

ブリュンヒルデの弟。世界で唯一の男性IS操縦者。自由国籍保
持者。篠ノ之束の与えた専用機。

その経歴に纏わる幾つもの情報が、簪の脳裏を掠める。その何れも興味を引かぬ、データを閲覧しただけの物に過ぎない。必要になるかもしれないからと、気は進まないけれど、仕方なしに閲覧しただけ。

更識の家に生まれた者として、その教育を受けてきたものとしての当然の。

織斑一夏は更識楯無の。

情報の連鎖が、不必要な知識へと結びつく。

見たくないと放棄した筈の情報を、簪は改めて思考の中で認識してしまった。

席を立つべきだろう。精神衛生上の意味も含めて。

「作業、良いの？」

「え？」

動作に移る一瞬の隙間を縫うように、言葉が被さる。

戸惑う。言われた言葉の意味を理解するのに、一瞬遅れた。

「手、止まつてるみたいだから」

トン、とピアノの鍵盤を弾く動作でキータッチを一つ行った後で、

織斑一夏が体ごと簪に向き直る。

カタカタと鳴る音が、それで消えた。

だからつまり、いつの間にか簪の手は、キーボードを叩く手を、止めていた。

一夏は簪の方へと、体を向けた。

だからつまり、一夏の横顔を見ていた簪は、至近距離で彼と視線を交わすこととなった。

「っ！」

悲鳴を上げそうになった。理由は無い。だから悲鳴を上げることが、出来なかった。

ただ、悲鳴を上げるのは何とか防げたが、身体が逃げの体勢へと変わることは、止め切れなかった。

キヤスター付きの椅子の上で変に身体をねじってしまう。

ガタ、と言う音と、突然前後が不確かになる感覚。

変な体重のかけ方をしてしまったため、椅子が横に倒れそうになっているのだ。

こける。無様に。人前で。情けなく。床に。ぶつかる。痛いかも。

混乱する思考の中で、数瞬後に我が身に訪れるであろう事態が、次々と脳裏を掠める。

だが。

「おっと」

華奢な手だ。小さい。袖が余りがちだ。だけど、ひ弱では、無かった。

「……」

「大丈夫？」

一夏が横から手を差し伸べて、倒れそうになる身体を、支えてくれていた。

何も言えなかった。より一層近くなった一夏の顔を、目を見開いて見あげることしか、簷には出来なかった。

だから一夏が引き起こそうとしてくれる動作にも、まさにされるがままで。

結果。

「ええっと……」

何でこうなる？　と言う声が聞こえてきそうな顔を、一夏はしていた。

簷は、初めて体験する身内以外の異性の胸の中の感覚に、戸惑っ

ていた。

資料棚に囲まれた、部屋の死角となる位置にある端末機の前で、何故か初対面の二人が、抱き合っていた。

そのままの体勢で、五秒。

ドン、と言う衝撃は、自分が彼を突き放した結果感じたものだ。信じられないことをしていると、自分のやったことに簷は戦慄を覚える。

助けてくれた　　であろう　　人を、唐突に突き飛ばす。失礼な行為だ。謝らなければ。

「ゴメンね」

穏やかな笑みと、謝罪の言葉がそれを封殺する。

その顔を引つ叩いてやりたい。

そう思ってしまった自分に、簷は戦慄した。

「……………なんなの？」

こらえて、こらえるために吐き出した言葉は、自分でも眉をしかめてしまうくらいに、嫌悪の響きを伴っていた。

初対面の相手に。元から一方的に知っていた相手だけ。それはきつと、相手も同じなのだろうけど。

言い訳染みた思考が、ない交ぜとなつて落ち着かない。

「ん？ うん。え〜っと……………まあ解つてると思つけど、顔合わせってヤツが必要かなって、ね」

でも落ち着かないのは簷だけで、一夏の態度は落ち着きがあると言つのを通り越して、むしろ暢気な有様。

目の前のしかめっ面にも、険のある声も。まるで堪えて居ないかのような、飄々とした態度。

慣れているんだろう。慣れているに違いない。慣れていない、訳

が無い。

だってこの人は一学期の間中、姉と。姉たちと。

「必要、無い」

「訳が無い」

「……」

簪は絶句してしまった。

何が必要ないかすら、尋ね返してくれなかったことに。或いは、会話にもならない会話の中身を、一夏が正確に理解していたことにきつと向けられている謂れの無い不快感にも、気付いているだろう事に。

だというのに、まるで平然としていることに。

「相互理解は必要だと思うよ、僕らは。」

人物の好き嫌いは兎

も角として、兎も角相手を理解しなきゃいけない状況に僕らはある。

それは、解っていてくれると思っていたけど」

誰とでも直ぐに仲良くなれる。

そんな幻想みたいなことは現実には有り得ない。

その事を彼が確りと理解していることに、簪は少しの驚きを覚えた。

常に誰かとベタベタとしている、ヘラヘラと軟派な人間だと思っ
ていたりも、したから。

そんな筈が無いことは当然なのに。

そうでなければ、あの姉が、あんなにも。

「ん……」

やり辛い。

顔に出さずに、でも内心で、そう思わずには居られなかった。

睨んで来たと思っただら顔を伏せて、眉根を寄せて苦しそうに。

暗い、と事前にたっちゃんさんに聞いて居たが、暗いと言うより

むしろ、溜め込むタイプなのだろう、彼女は 更識簪と言う名

の、目の前の少女は。

やり辛い。実にやり辛い。

押しの強い女の子の相手をする事に慣れ過ぎて、どうもこういう、内に籠ってしまいうタイプの女の子への正しい応対の方法が見えてこないのだ。

当初の予定では、軽く挨拶をしてあつかましく思われないう程度の、事務的な確認の会話だけ交わしておけば、先ずはそれで良いか程度に考えていたのだけれど。

一言一動作のたびに、更識簪と言う少女は考えすぎてしまいうタイプなようで、上手い具合に会話が転がってくれない。

何を話しても地雷を踏みそうで、迂闊な言葉を言えそうに無かった。

会話のきっかけをつかむために、わざわざこれ見よがしに打鉄うちがねの調整作業なんて始めてみたんだけどなあ。

話が転がらないでやんの。

しかし、何時までも向き合ったまま固まっていると言う状況も具合が悪いし このまま逃げを打つのも、何か後々誰かにバカにされるであろう未来が見えてしまって、宜しくない。

「…… 八八」

度し難いなど、自嘲の笑みを漏らす。

格好よく初対面の内気な女の子をエスコートして、後で別の女の子に褒めてもらおう何て未来を思い浮かべていた自分に、気付いて

しまったから。

女性と話しているときに、別の女性と　　とはいえ、そんな蘊蓄を覚えてくれたのも、また別の女の人なんだけど。

「あのさ、更識簪さん」

だから、声をかける。シンプルに、名前を呼んだ。

少女は顔を上げた。戸惑っているのか、眼鏡越しの瞳が、揺れていた。

第一印象は最悪なんだろうなと思いつつ、それでも此処で会話を終える訳にはいかないと、僕はなけなしの度胸を振り絞る。

そもそも自分から女の子に声をかけるって経験自体が、滅多に無い筈なんだよなあ。

最近の日ごろの環境から、忘れがちだけでも。

「キミと話がしたくて来たんだ。時間を作ってくれと、助かる

いやゴメン。少し時間を作って欲しい」

だから、無様に、率直に。

そういう態度を示すことしか、出来なかった。

しかして、更識簪の反応は。

「……明日、同じ時間、此処で」

一言、言い終えるが早い。

更識簪は端末からキーボードの配線を引き抜き、胸の前に抱えて、去って行った。

それで今日は、おしまい。

挨拶も自己紹介も交わず、当然相手が何を考えていたかなんて、どういう人かなんて。

会話の一つもまともに成立していないのだから、解る訳も無い。

「……これは、相当なご褒美を期待しておかないと、気力が続かな
そうだなあ」

妹を宜しく、と言った何処かの誰かに向けて、ぼやく。

それは紛れも無い、気の聞いた会話も一つ出来なかったことへの、
負け惜しみだった。

兎も角、仕切りなおして明日だ。

明日こそ、織斑一夏と更識簪のファーストコンタクト と、
なれば良いのだけど。

本当にまるで噛み合っていないなかったのだなと、笑い話に出
来たのはずっと後になってからである。

九十八話（後書き）

登場……なんだけど全然キャラが掴めてないなあ。

他の娘と違って好感度ゼロ値から始まってるって部分を取っ掛かりに、何とか進めて行きたい所存。

まあ、原作だとちよろいさん張りに速攻で落ちたけどね！

あ、後ゴメン。前回のラストは完全なミスです。
誰か二回しゃべってるよね。

九十九話

再び、放課後。資料室。

何時もの奥まった場所にある、人目の届きづらい静かな席。

「とりあえず。まずは自己紹介、かな」

言葉の端々がまごついていて、その事実が簪には意外に思えた。とてもとても、とてもとてもとても女慣れしている人間だと思っていたから。

女性に声をかける事くらい訳無いだろうと、そう思っていたのだ。

それと多分、少しだけ期待もしていた。

簪は自分が人付き合いが得意ではない人間だと、その程度のことではなく、ちゃんと弁えていたから、だから、そんな自分を如何様にエスコートしてくれるのか、そんな期待を、ほんの少しだけだけど、確かにしていたのである。

勝手な期待であることは間違いなく、しかし、日ごろ視界の端に見かける彼と、彼を取り巻く女性たちの楽しそうな掛け合いと、現在の自分と彼のまるで盛り上がりがない空気とを比較してしまえば、勝手な期待であるからこそ、不機嫌にもなるだろう。

簪は彼の言葉に首肯を返した。僅かに眉根を寄せながら。

そのことが、益々彼の笑みを固いものにしたことには、簪も確り

と気付いている。

だが、無表情の中に不機嫌を隠し切るのは、今は無理なようだった。

自分でも意外に思うほどに、今の自分は、感情的になっているらしい。

何故だろう。理由は一つしか見当たらない。

そのことが理解できてしまうから、尚更に不機嫌になるのだ。

「……ええつと、織斑一夏、です」

宜しく。

入学初日のホームルームで無理やりやらされる自己紹介ですら、もうちよつと言葉を付け足すだろうに。

困り笑顔の彼の言葉は、酷くシンプルな物だった。期待はずれも、良い所である。

簪は益々機嫌を悪しきに変えて行き、それを隠そうとしないまま、口を開く。

「更識、簪」

以上。

不機嫌な気分のまま答えて、その不機嫌さ丸出しの自分の声音に、泣きたくなつた。

何処の子供だ、お前はと。

故に、恥を搔かされた気分だと責任転換気味な事を脳内に並べ立てながら、彼から視線をはずしディスプレイへと向き直る。

私は不機嫌ですので、もう帰ってください。

貴方と理解しあうつもりなど、一辺たりともありませんから。

誰にでも、そう受け取れる態度だろう。

事実彼は、声無き呻きをもらしながら額に汗を浮かべていた。

どうするだろうか、彼は。帰るか、帰らないか。

と言うよりも、自分はどうして欲しいのだろう、彼に。

帰って欲しいのか、それとも。

自分でも不思議なほど、彼に執着している。

何故だろう。理由は一つしか見つからなかった。その事実が、簪の心に暗い影を落とす。

内側に沈んでいく、押しつぶされそうな重たい感覚が、心にのしかかる。

一人になりたい。いいや、一人では居たくない。

どちらだ。どちらでもない。ああもう、思考がぐちゃぐちゃだ。

これだから他人と言葉を交わす事は嫌なんだ。疲れる。余計な事を考えなくちゃいけないから、疲れる。

つらい。

……なんでこの娘、一言二言しか喋ってないのに、どんどん暗くなってくんだろう？

僕、何かしたか？

いや、うん。何か妙なプレッシャーを放っていたせいでちょっとどもりがちになってしまいました。

流石に此処までバリア張られちゃうとは思ってなかったから、ゴメン、少し顔に出てたかも。

っーかマジで、僕は何かしたか？

ディスプレイに視線を固定してしまった更識簪さん。
次の一手が思いつかない僕。
打ち破ったのは、ほがらかのんびりまったりだらんな声だった。

「じゃあ、次は私だね〜」

のほほんとした空気が、背後に唐突に現れる。

「のほとけ布仏本音です〜。 なかよくしてね？」

ほっこりと、間違った、ひよっこりとのほほんさんが僕の肩越しに顔を覗かせてきた。

「いや、近いから。と言っかなんで居るね」

「仲良くしてね？」

「充分してるじゃない……」

「鈴ちゃんくらい」

「……その辺は後日真面目な顔で面談しましょう、と言っ事で」
「ういっい」

……何でこの娘、出てくるたびに全部持ってこごとするんだろう。
素なのか狙ってるのか、実に判断に困る。

「可愛いから良いけど……って、違う。何で居るの？」

「あ、おりむー。女の子を前にして別の女の子に目移りしてちゃ駄目だよ？」

…… 毎度毎度変なところを拾ってくるなあ、本当にもう。

というか、自分が可愛いって言われてる事を当然と受け取っている事に関して、僕は突っ込んだ方が良いのか？

いや、言ったの僕だけだ。

「本音……なんで？」

ポツリと、のほほんとした空気を返る、声。

更識簪さんが、戸惑った顔でのほほんさんを見上げていた。

「んぐ。だつてほらあ、私はかんちゃんの専属メイドだし」
あ、そうなんだ。

メイドねえ。のほほんさん、メイド服は似合いそうだけどメイドの仕事は全く似合いそうなイメージが無いよな。

「つーか、前に同居していたときに部屋の片付けとか、むしろ僕の方が……。」

「私わあ、やれば出来る子なのでえす」

ぐりぐりと頬をグーでねじられた。あんまり痛くないです。

「……というか、二人が知り合いだからここに居るって、それ理由になつてないよね？」

「面白そうな気配がしたので、おりむーをこっそりつつけてきましたあ」

「取り繕えよ！」

「素直じゃないお嬢様にお仕えしているので、その分私は素直に生きようと決めているのでえす」

「何か、似たような台詞を君のお姉さんから聞いたような記憶が……」

更識家の使用人つてのはアレか。

主人を弄つて遊ぶ事に長けていないといけないとか言うローカルルールでもあるのか。

いや、弄られているのは現状、僕なんだけど。

「……ご主人様になりたいの？」

「いや、全力で遠慮しておきたいんだけど」

「それはあ、かんちゃんに失礼な発現だよあ」

「本音、ちよつと……やめて」

「本物のご主人さんがマジ困りしてるみたいだけど、良いの？」

簪さんは指をぐにぐにと絡ませながら、視線を落ち着き無くさまよわせている。

慌てている顔は、少し姉に似ているんじゃないかなと、思

えた。

「女の子を前にして別の女の子を思い浮かべちゃだめだよ？」

「失礼しました」

頬をぐりぐりグーでねじられた。痛い。

「今はあ、かんちゃんとお話するお時間でしょう？」

「そのお時間をブチ壊したのはのほほん……ゴメン、僕が悪かった」
頬をぐりぐりグーでねじられた。とても痛い。

ともあれ、本音ちゃんの言っている事も事実。

本音ちゃん存在が、多少なれども場の空気を和ませたのも、事実。

「丁度本職のメイドさんも居る事だし、一緒にお茶でも、どうかかな？」

更識簪さんは、大きく目を見開いた。

「どうぞお」

「……ありがとうございます」

「ありがと。……すげえ、マジで虚^{うつ}さんと遜色の無いティーポット
捌きだ……って、ゴメン、痛いからやめて」

異性に誘われるのは、当然初めての経験だ。

だから、これほどに気が乗らないことだとは、知らなかった。

嘘だ。

気が乗らない理由は単純で、誘ってきた男が、自分のことをまるで構って来ないからだ。

自分でも解る位、全身から『話しかけるな』と言うオーラを放っているくせに、我が事ながら度し難いと、簪は内心で毒づく。

話しかけられたいなら、先ず態度を改めれば良いのに　と、
そこまで考えて簪は思う。

つまり自分は、織斑一夏と話したいと思っているのだろうか？

改めて考える。

そもそも昨日の段階で、今日改めて会うなどと約束を取り付ける必要も無かったのだ。

約束をしたとしても、無視してしまっても、良かった。
学園の行事でタッグを組まなくてはいけない。

でも、行事は所詮行事。

真面目にやるのに越した事は無いだろうが、だからと言って無理をしようと思つほどに、それに入れ込む必要も無い。

今のところ開発部との連携は上手く行っていると思つから、一度二度負けたところで、専用機を取り上げられる筈も無いのだから。

「……専用機」

専用機。自身の。打鉄うちがね式。

彼の。打鉄うちがね式。

「そうそう。丙と丁で二機連携……って、その辺は更識さんのほうが詳しいか」

「……苗字を呼ぶの、やめて」

漏れた眩きを拾われてしまい、一瞬驚き、思わずそんな言葉を返してしまふ。

彼は一瞬目を丸くした後で 笑った。

「じゃあ、簪さん……で、良いかな？」

穏やかに過ぎる笑顔が、受け入れ難かった。

「名前で呼ぶのも、やめて」

言葉に詰まった彼を見て、少しだけ気の晴れた自分が、情けなくなつた。

片っ端から否定を繰り返してばかりで、子供か、私は。

「じゃあ、かんちゃんさんで良いか」

「……」

絶句。傍に控えていた本音も、額を押さえて呆れているようだった。

「……なんで？」

「や、キミのお姉さんをたっちゃんさんって呼ばせてもらってるし、解りやすくして良いかなって思つて」

本音がため息を吐いている事が解つた。

だが、そんな事はどうでも良かった。

胸のうちから湧き上がってくる黒い衝動が、止められなかった。

「姉さんと一緒にするのは、やめて……！」

地の底を這う獣の如き、声。

彼は当然、慌てて言葉を撤回、

「一緒にするなら、普通に更識さんって呼ぶよ」

しなかった。柔らかく受け止められて、往なされてしまったと、解る。

「たっちゃんさんと、仲悪かったりするのかな？」

「　　そんな、こと、は」

「苦手なだけか」

「そんなこと、無い。姉さんなんて、関係無い……」
苛立ちよりも、戸惑いが先にたつ。

なんなんだろう、この人は。

てつきり解……つていて話題に出していなかったのだと思っていたのに、唐突に。

ズケズケズケと、普通聞かないだろう事を、次々に。

気遣いが出来そうなタイプに見えるのに、デリカシーの欠片も無い。

なんなんだろう　　何が、したいのだろう。

「ま、そりゃ関係ないか」

簪が混乱している間に、彼は一人で納得してしまったようだった。「じゃ、そんな事より今後必要になることを話そうか。まずは、そうだな……機体特性とか……得意な戦闘機動の話とかの方が、先かな」

話の内容が、あっさりと切り替わる。

自分から話題を振っておいて、まるで未練も残していなそうなの態度に、簪は戸惑った。

戸惑ったけれど、だからと言って蒸し返されて面白い話題ではなかったから、そのまま、彼の会話に乗っかるしか、無かった。

「解っている、と思うけど……私の丙は、後衛装備で……」

「僕の丁が前衛仕様……丁度良いから端末に装備データとか出しちゃおうか。機体の駆動パターンとかのデータも見せてもらいたいし」

「一式同士だから、殆ど同じだと思うけど……」

「いやあ、結構違うと思うよ。コレだけ用途がはっきりとわかれちゃってると、素体に同じ物つかってても、共通仕様の部分なんて殆

ど……」

「自分の調整が終わっていないから、見ただけじゃないの……？」

「それは言わないお約束。　　って、そうか。セリアとのあの無様な試合を見てたんだっけね」

「うん。酷かった……」

「自覚はあるから、ホントに言わないで……」

背後で本音が苦笑しているように思えたのは、おそらくは、気のせい。

笑えるような部分は何処にも、無かつただろうから。

これで漸くまともに会話が成立したのだと気付いたのは、
そうなるように誘導されていたのだと気付いたのは、もっとずっと
後の話だ。

九十九話（後書き）

相変わらず噛み合っていない感じ。

一人増やしたら会話が弾むかなーと思ったらそつちとばっかり話出すとか……。

でも多分、このハナシはこのトリオで回す事になる筈。

デレ期が、遠い……。

で、次がどうやら百話らしいですね。

話数の表記自体が洒落みたいなものだから何の記念にもなっていないような気がしますけど。

「それじゃ、明日の放課後。第四格納庫で」

「……うん」

「あ、どうせならクラスに迎えに行こうか？」

「いい。いいから、やめて」

「じゃ、それは次の機会って事で」

「次なんて……無いから。やめ、て」

そんな会話の後で、扉を閉じる。

寮の廊下を進む簪の足音に、一夏は少しの間耳をそばだてた後で

それから。

「……ふう」

一つ息を吐いた。

「……お疲れ？」

「気疲れ」

尋ねてきた本音に、やれやれと言葉を返す。

自分で肩を揉み解しながら、先ほどまで座っていた席に再びうつとして、気付いた。

「……あの、そのケーキ僕のだよね？」

簪との会話に集中していて口を運んでいなかった、自身の分と振舞われていた箸の茶菓子か、いつの間にか本音の前に移動していた。

既に最後の一欠けらしか、皿には残っていない。

「意地悪したから、おしおきい」

ひよい、ぱく。一言を一夏に告げた後で、本音はあっさりとそれ

を口に含んでしまふ。

「意地悪って……なにさ」

自分の部屋なのになんでアウエーの気分がするんだろうなと思いつながら、一夏は尋ねる。

本音は上唇についたケーキのクリームを、小さな舌でぺろりとなめとつた後で、一夏の疑問に答えた。

「もっと優しく出来たでしょ？」

「もっと……って、ああ」

一瞬眉根を寄せた後で、本音の言いたいことを理解する。

意地の悪いやり方だったと言う自覚が、確かに彼にもあった。

更識簪が彼女の姉である更識楯無に含むところがあるのは、既に一夏の知り得るところだ。

少し言葉を交わした程度でも理解できる簪の性格から考えれば、それは触れて欲しくない話題に違いない。

だというのに、ズケズケとその話題を口にする。

そして、その話題から遠ざけるために、別の方向に話を膨らませていく。

簪は姉の話題から離れられるのならばと、それに乗っかっていくだろう。

そもそも、楯無の話題を口にしたのは一夏であるから、そう。

「でも、仕方ないじゃない。会話を成立させるためにはやっぱり簪さんに感情を外に向けてもらわなければならなかったし。壁を作つて籠られちゃってたら、やりようも限られるさ」

計算して話を振っていたと自ら認める言葉を、一夏は口にした。

本音はリスのように頬を膨らませる。

「やり方に問題があるって言ってるのさ。かんちゃんも打たれ弱い

女の子なんだから、おりむーならもつと優しく出来たでしょお？」

「随分買いかぶられてるね、それは」

「買いかぶっているのではなく、期待しているんでえす」

自分の分のお茶だけを入れなおしながら、本音は言う。

それは期待しているんじゃないやなくてプレッシャーを掛けているだけじゃないのかと突っ込みたい衝動を堪えつつ、一夏は頷いた。

「まあ、女の子の期待には全力で答えるよ、僕は」

「ホントに？」

「そりゃあもう。それなりに行動で示してきたつもりなんだけどな」

足りない？ と話を振ってみると、本音はアルカイクな笑みで頷いた。

足りないのか、と一夏が苦笑を浮かべようとしたところで、本音は口を開く。

「じゃあ、さっきのお話の続き」

行動で、示して。

笑顔を向けられた。

獲物を前にした野生の肉食動物のような顔に見えたのは、多分気のせいだろう。

「……さっきって、どの話かな？」

つい先ほどまでは簪と打鉄うちがね式式の調整の事を話し合っていた。

簪の丙型装備も、どうやら最近最終仕様が確定したばかりで、調整が未完了らしい。

むしろ、一夏の丁型とのバランスも考慮して、二機で運用テストを繰り返しながら調整をしていく事をこそ、開発側は望んでいるらしかった。

故に、明日以降はとにかくまず二機で動かしてみようと言う話を、

何とかまとめきった の、だが。

「おりむーは女の子の期待には、答えてくれる人だよな？」

「どうやら、いや、考えるまでも無く、本音の言いたかった事は違
うらしいと一夏は理解する。」

「いや、実を言えば最初から理解していた。」

理解できてしまう事が、付き合いの長さの良し悪しとも言つべき
部分だなと、一夏は苦笑いを浮かべる。

『鈴ちゃんくらい』

『……その辺は後日真面目な顔で面談しましょう、と言つ事で』

「女の子が昼間から男に振る話題でも無いと思うんだよなあ」

「もう夜だよ？」

牽制球を投げる。バットを投げつけられた。

「……」

窓に視線を逃がす。その先のベランダの向こうの景色は、既に夜
の闇に包まれていた。

星明りが美しい。どうも思いのほか、簪との会話が長引いていた
らしい。

「……」

存外自分は動揺しているんだと、一夏は思った。

後ろめたいから、なのだろうか。後ろめたいのかと、自問する。

後ろめたいに決まっていたが、後ろめたさを感じて良いものでは
ないだろうと、自分を正した。

しかし、内心に結論付けただけでは、状況は解決しない。

試しているのか、期待しているのか 或いは、誘って、居る

のか。

目の前の少女は、微笑を浮かべていた。

「……とは、いえ。キミと鈴ちゃんを同じ風について考えるのも、ね？」
必要以上に曖昧な言葉遣いなのは、言質を取られたくないと言う逃げの発想が成すが故だろう。

後ろめたさを感じる男が言うであろう言葉そのままを、知らず、一夏は口にしていた。

無論、そんな日和った発言が一对一の場面で許されるはずが無く。「鈴ちゃんのことを好きってこと？」

本音が切り込んでくる言葉は、辛辣極まりないものだった。

息が詰まりそうな感覚を断固として打ち払いながら、一夏は改めて口を開く。

「鈴ちゃんの話は、そりゃ、好きだ。好きだけど、でも、……そうじゃなくて」

果たして何と言えば納得してもらえるのだろうか。

解らぬままに口になっている言葉に、力なんてある筈も無く。

「鈴ちゃんが、好きってこと？」

私より？

「……」
言外に含まれていた言葉を、理解出来ないはずが無かった。

時間が過ぎる。

既に日は落ちていたから、夜空の色で経過が解る訳ではないけど。時間が、過ぎた。

「僕と鈴ちゃんって、さ」

「うん」

口を開いた瞬間、間髪居れずに応じる言葉があった。

視線は初めから、絡んでいる。そのまま言葉を続けることに決め

た。

「普通、なんだよな。皆と違って」

「ふつう……」

良く解らないと、本音は首を傾げた。

一夏は一度彼女から視線をはずす。息を吐く。

「普通の女子高生と、男子高校生、なんだよ。ISだの何だのってのは、後から付随してきた物で　本質の部分で、僕らはそういう世間一般の普通を自分たちの下敷きに行っている……と、思う」

思いのほか自分が平静なことに、少しの驚きを覚えながら、改めて本音へ顔を向けた。

「だから、好きあっている普通の高校生の男女が夏休みを一緒に過ごせば、こういう風にもなる。それだけの　いや、勿論僕と鈴ちゃんの間では『それだけ』なんて言葉で括れるようなコトではないんだけど、でも、傍からすればそれだけの、何処にでもある話しなんだと、思う」

「私にとっては、それだけ、なんて話じゃ無いよ?」

淡々とした言葉に、むしろ隠しようも無い怒気を感じて、しかし一夏は、恐れは覚えなかった。

「そうだね。そうだと嬉しい。……だけど、普通の家に生まれた普通の高校生って部分を理解している僕と鈴ちゃんと違って、キミ……本音ちゃん達みたいに、生まれたときから普通じゃない、いや、特別なお家に生まれた女の子だと、さ。　違うと思うんだ」

「違う?」

瞬きする本音に、一夏は頷く。

「違う。僕と鈴ちゃんがした……している、ような事に対する考え方、捕らえ方が、やっぱり違うと思う。だから、鈴ちゃんと同じようには、無理だ。ただ互いの想いを確認しあう、二人だけの秘め事ってだけでは、どうしても終われないだろうから」

例えばセシリアなら。

例えばシャルロットなら。

例えばラウラなら。

それぞれに背負っている物がある。

背負って欲しいと、思っている物がある。

行為に至るとすれば、きっとそれは彼女たちがそれを男に背負わせる決心をした時に違いないだろうと、そんな風に考えている。

一方的に一夏が背負いたいと望んだところで、少女達がそれを躊躇ってしまえば、成立し得ない事なのだ。

だから、鈴音と同じような風には、行かない。

行為に対する捕らえ方が違うのだから、りんと同じ風には、いかないのだ。

そしてその事は、本音にも当て嵌まる。

裏の仕事を連綿と続けてきた家を、裏から支える家に生まれた少女。

好きあって結ばれて、幸せでした　では、終われない物がある。
ある。

互いの了解だけでは解決できない問題が、あるのだから。

「……………」
「……………」

言葉を区切って、しばしの無言の間が広がった。

日は既に沈んでいる。夕食の時刻も、きつと過ぎているだろう。

二人はしかし、じつと視線を合わせたまま、動かなかった。

そして、漸く。

「……………ねえ」
「うん」

本音が口を開き、一夏が頷く。本音は小首をかしげて、一夏に尋ねた。

「言い訳？」

「……まあ、そうだね」

一夏は苦笑して肩の力を抜いた。一応彼も、理解しているのだ。何処まで取り繕ったところで、自分が言いたいことは一つだけ。

『他の女とはセックスをした。だが、今は望まれてもキミとセックスをするつもりは無い』

それだけのことである。

無論、口にした言葉も本音だったことには、違いないのだが。

「ただ、あの娘がしたからじゃあ、私も……なんて、皆はそんな安い女じゃないはずだって、期待もあるかも」

「……むう、期待かあ」

若干砕けた口調の一夏に、本音は酸っぱい物を口にしたような顔をする。

それを見て、一夏は笑った。

「僕も鈴ちゃんも、それなりに勇気を振り絞ったんだから。

それに便乗されるような真似は、好みじゃないな」

「む、その言い方はちよつとぐさあ~~~~~つて来るね」

「僕も結構、精神的にグサグサ来てる状態だからね、お相子つてことで」

あんまり取り繕えるほどの余裕は無いんだと、一夏はくたびれた笑みで本音に答えた。

背もたれにだらしなく体を預けながら、そんな訳で、と続ける。

「納得いただけましたでしょうかね、お嬢様？」

尋ねられた本音は、数度の瞬きの後で、にんまりと笑みを浮かべた。

「うん。おりむーが据え膳にラップを掛けて冷蔵庫に仕舞っちゃう

ような変体趣味のヘタレさんだつて事は、よくつく解つた」

「……わあ」

可愛い笑顔で刺々しいなあと、一夏は頬を引きつらせる。

「まあ、この期に及んでヘタレてるって自覚は、あるにはあるけどさ……」

「だいじょーぶ。ヘタレのおりむーも、ちゃんと大好きだよ？」

「そりゃ嬉しいや。でも、このまま好きで居てくれ続けて貰えるかは……」

自信が無いんだよなあと、それこそヘタレたことを続けようとした。

そんなヘタレた真似を、本音が許す筈も無かつた。

「だいじょおぶ、もう愛してるから」

これなら、好きで居続けなくても、平気でしょ？

「……わあ」

何も言葉を返すことも出来ず、一夏は間抜けに言葉を漏らすしか、出来なかつた。

本音は笑つた。一夏の好きな本音の笑みだつた。

「ふふふ、ねえ、嬉しい？」

「嬉しいよ。嬉しすぎて……うん、ごめん。とてもキミを抱きたい気分になつた」

愛情と愛欲つてのは同一なんだなと、一夏はしょうもない悟りを開いた。

しかして、本音の返事は。

「ざあ〜んねん。今日はもう、オアズケ」

「笑みも言葉も態度すらも、全てが完璧すぎて。

……残念だ」

本当に。

心底からの敗北宣言を言うしか、一夏に出来ることはなかった。

百話（後書き）

祝・百話記念。

……百話記念って事にして良いのか、コレw

まあ、序とか加えると実は百一話とかだったりもしますし、ある意味何時もどおりのノリ　　を、何時もよりちよつと煮詰めてみただけだよね、うん。

生々しい話を生々しく見えないように書こう、とか考えてたはずなんだけどなあ。ラストの方、明らかに逆を打ってますよね。

まあ、こんなんがこのSSの芸風ってことで、一つ。

「……やめてって、言った」

「教室に迎えには、行つてないだろう？」

廊下で待つていただけで。

「絶対やめてって言った」

「放課後に迎えに行くのは、ちゃんと控えるさ」

今は、昼休み。

食事を受け取るためのカウンターに並ぶ列の片隅から、不機嫌この上ない更識簪さんを隣にお迎えしてお送りします。

「他に一緒に食事取る相手くらい、貴方なら幾らでも、見つかるでしょう……？」

「ああ、大丈夫。ちゃんと断ってきたから」

「そんな事、聞いてない……」

だろうね、と内心で頷く。

意識してしまえば彼女は僕に『何処かへ行け』と言っているのであつて、僕は僕で『やなこつた』と返しているだけの事だ。

会話はテンポ良く進んでいるが、当然形成される雰囲気は険悪なそれで、前や後ろに並んでいる女子の皆様は、それはもう居心地が悪そうだった。

カウンターでトレーを受け取った列の前の女の子が、逃げるように足早に僕たちの前から去っていく。

何時もなら、並んでいるときには結構知らない人からも話しかけられるんだけどね。何しろ僕、客寄せパンダなんで。今日はむしろ避けられてるけど。

「うどん、好きなの？」

簪さんのトレーに乗せられたどんぶりを覗き込んで、尋ねる。彼女は、僕に視線を合わせようとすらしなかった。

「好き嫌いは、特にない……。でも、デリカシーのない人は、嫌い」

「ああ、居るよね。空気読まないでズケズケ他人のパーソナルスペースに踏み込んでくるようなヤツって。僕も嫌いだよ、そういうヤツ」

「……」

「っ……！？」

どうやら怒らせすぎたらしい。無言で脛を蹴り飛ばされた。

危うく、クラブサンドの乗ったトレーを落としそうになるのを、なみだ目になりつつ耐える。

三フロアぶち抜きのだった広い食堂の隅に、スタスタと歩み去っていく簪さんを、僕は痛みを堪えて追いかけた。

二人がけの狭いテーブルに並ぶのは、かき揚げうどんとクラブサンドという、和洋折衷も甚だしい取り合わせ。

「いただきます」

「……いただきます」

続く言葉は期待していなかったのだが、対面から応答があった。

食に対する礼儀と言う物を、確りと心得ているのだろう。

別に、挨拶を続けたからといって彼女が僕と仲良くお喋りをしてくれると言つ訳ではない。

うどんの乗せられたトレー、その一点だけを見て、向かいに座る僕の姿など一片の視界にも収めようとしないまま、更識簪さんは箸を進めていく。

見ていることに気付いているだろうに、意地でも、顔を上げたくないのだろう。

僕は一つ、気付かれぬように息を漏らす。

何故、こんな事をしているのだろうか、自嘲しながら。

『こんな事』と言うのは無論、この更識簪と言う少女に自分からアプローチを仕掛けると言う、慣れない、似合わない行為の事を言う。

元々僕は受け手に立つタイプの人間で、こうやって自分から前へと踏み込んでいくのは、性分に合わないと言うのに。

（事務的な会話は成立するようになったんだから、それで充分って気もするんだけどなあ）

目の前で、うどんの上に載った掻き揚げを箸で器用に小分けにしている少女が、独りで居たがっている事は、ちゃんと理解している。その程度の空気は、僕にでも読める。というか、僕程度に空気を読む能力に欠けた人間でも解るくらい、彼女は拒絶のオーラを撒き散らしていたのだから。

（たっちゃんさんに義理立てしてるって訳でも……）

無い。

無いと、思う。

たっちゃんさんが僕に望んだ事は、『気にかけてあげて』と言うことだけで、『仲良くランチタイムを楽しむような仲になってね』、なんて話は何処にも出てきていない。

そもそもあの女性は、誰が誰と仲良くするとか言う問題に口を挟むタイプの人じゃないし。

その人の意思を尊重して遠くから見守るタイプの筈だ。筈だから多分、疎遠の妹の事も、遠くから見守っていたのだろうけど。

たまたま見知っている僕が近くに行く事になるから、一報をくれただけの話。

じゃ、他の娘達に　　つてのも、特に無い。

基本的に皆、僕がやりたければその事を尊重してくれる人たちだけど、逆に言えば僕が自分から動こうとしない事態に、無理やり引き込むような事は……

(まあ、自分の方に引つ張ろうとしては、来るけどもさ)

昨晚の本音ちゃんとか。

あの娘はいつもいつも、いつも通りのペースのままたまにズバつと踏み込んでくるから、おっかないんだよなあ。

兎も角。

僕は誰に頼まれたわけでもなく、こうして更識簪さんを強引に食事誘ったりしている。

昨日やさしくし損ねたからと言う意識も、別に無いのに、放課後には会う約束を取り付けているのに、わざわざ皆の誘いを断って、こうして昼休みのひと時を使って。

(何がしたいんだか……)

本当に、簪さんが独りで居たがっているのは、ちゃんと解っている筈なのに　　解っているのに。

(……解っている)

「ああ」

声が漏れた。

簪さんが視線だけを僕に向けてきた。

僕は苦笑を浮かべると、簪さんは、一瞬眉根を寄せて、掻き揚げを崩す作業へ戻った。

何となく解った。

(似てるんだな、この娘)
意地でも自らの世界に没頭しようとするその姿が、誰かに重なった。

誰かに。独りで海の底へと沈んでいった、何処かの、誰かに。

(代償行為に耽られる程、偉くなった訳でもあるまいに……)
昔の自分を見ているかのようだ、なんて。

こんな可愛い女の子を、どこぞの引き籠もりと同一視するなんて失礼極まりないだろう。

(まあでも、納得したわ)

つまるところ僕は、この娘に周りの人間と仲良くなって欲しいらしい。

その理由は単純で、そうする事が過去の僕自身への、遂に訪れなかった救いへの代償行為になると思っているから。

僕は僕自身の満足のために、更識簪と仲良くなりたい。そう思っている。

だが。

「独りで居るのも、それはそれで、楽しいもんね」

他人の干渉を極力避けて、自分の世界を頑なに守り続けようとする生き方も、それはそれで当人にとっては楽しい物だ。

そうなたきっかけが、何であったにせよ。

経験則的に、僕はそれを知っていた。

もつとも、僕は自分からそんな生き方を始めておいて、結局そのことに耐えられなかった情け無い人間だけだ。

独りで居たいなら、そうさせてやれば良い。

逆に本人が独りが嫌だと言ったら、その時はそれこそ、たっちや

んさんとの約束を守る丁度良い機会に、なるだろう。

うん、そうだ。今後の方針はそれで行こう。

そんな風に、考えていると。

「……………」

簪さんが、不思議そうな顔で僕を見ていた。

「……………どうかした？」

「どっつて……………」

眉根を寄せている。

いつの間にか、彼女は自身のトレーを空にしていた。

因みに僕は、まだ半分程度クラブサンドを残している。

「サンドイッチを食べもしないで、ブツブツと……………一人がどう、とか」

「……………ゴメン、思考がただ漏れだったか」

気をつけるよ、と誤魔化すように食べかけのクラブサンドを口に運ぶ。

簪さんは手持ち無沙汰に両手をテーブルの上で絡めたまま、席を立つことはしなかった。

眉根を寄せて、奇妙な物を見る目つきで、僕を見ている。

「どうかした？ 割と、メシ食ってるところを見られるのって、恥ずかしかったりするんだけど」

「……………貴方も、さつきずっと見ていた」

「食事って言うのは、人の生の部分なまが一番出るって言うもんね。ゴメン、デリカシーが無かったか」

「次は、気をつけて……………」

次、あるんだ。

「……………」

「いや。　　そういえば、何かの雑誌とかで見たけど、放映する時間帯で映せないからって、食事のシーンをベッドシーンの代わり

に使ってるとか、何とか……ゴメン、食事中に出す話じゃなかったわ」

誤魔化そうとして、出した話題が明らかに間違っていた。女の子を相手に何を話しているんだ僕はと、反省しようとして、しかし。

「……！」

目を見開く簪さんの態度に、たじろいた。

心なしか、身を乗り出してないかこの娘？

「どうか、した？」

何か怒らせるような事を言ったか。だが、怒っている風ではない。頬に赤みが差しているような気がするけど、多分それは、怒っているのではなく。

「それ……、朝の特撮ヒーロー番組の、脚本の人」

「は？ 特撮？」

いきなり何を言っているんだこの娘はと目を丸くしていると、簪さんは明らかに興奮したように、身を乗り出してきた。

「雑誌のインタビュ……。ネットの、アーカイブで」

普段が普段のダウナー加減なので、興奮しても大人しめだったが。織斑も、見てるの……？ 朝とか」

が……つまり、えっと。

なんだ、これ？

いや落ち着け。いきなりどうして簪さんはこんなに盛り上がったらしやると言うのか。

僕は何を言った？

と言うかどっから特撮ヒーローなんて単語が出てきたんだ、この雰囲気です。

ええと、彼女は何て言ったっけ……特撮、雑誌。脚本に、インタ

ビューがネットとか何とか。

…… ネットのアーカイブ。

話の流れから察するに、古い雑誌をデータにして保存し、ウェブ上にアップロードしたものを言っているのだろう。

特撮の脚本家のインタビューが乗った雑誌のアーカイブなんて、よほどその手の趣味人じゃなければ覗きに行かないようなサイトだろうに、僕はそんな物を見た記憶は…… いや、僕は。

「ああ、そっか」

納得した。

僕は確かに、その記事、脚本家のインタビューとやらを、詠んだことがある。

印刷されて書店に並べられていた雑誌で、直接。

(少なくとも十五年以上前の話だろ。そりゃ、忘れもする…… っ、待て)

僕は、雑誌から直接それを読んだ。昔に。

では、簪さんは？

今を生きる女子高生の簪さんは、一体、どこからそんな、マニア向けの雑誌の。

「…… 簪さん、特撮番組とか好きな人なの？」

「っ！」

簪さんは、がばつと、椅子の上で大きく仰け反る。

興奮が冷めたらしい。汗をダラダラと額に浮かべていた。どう考えても、どう見ても焦っている。慌てている。

隠しておきたい事だったのか。

隠しておきたい事、だったのだろう。

その気持ちは、実に良く理解できた。

周囲に理解され難い趣味だと言う事は、それを趣味にしている人がこそ、一番理解しているから。

だからこそ大切な物を大切に思い続けるために、自分から壁を作るのだ。

「この人せ……じゃなかった、この仕事始めてからアニメとか特撮とか、全然見なくなっただけど、最近って何が流行ってるの？」

「……織斑、見る、の？ アニメ、とか……」

不思議な物、理解できない物を見るかのごとき目で、簪さんは僕を見ていた。

僕は微笑交じりに、頷く。

「男の子だからね。割と好きな方だと思うけど」

「……意外」

「一応念のために聞いておくけど、僕の事どんな人間だと思ってるのさ、キミは」

「……現実が充実している人」

もうそれ、素直に『リア充』って言うてくれても伝わるから。反論も出来ないし。思えば遠くまできたなあ、もう。

「そーいえば、この前に映画見に行ったとき、やってたっけね」

特撮の。アレも何気に、夏休みの定番として息の長いシリーズだよなあ。

「……見たの？」

「いんや。見たのはドイツのメタフィクション映画。簪さんは、見た？」

「……まだ。今年の夏休みは、一式式の調整が忙しかったから簪さんはさも無念そうに首を横に振った。

……今年の夏休みはって事は、この娘はきつと、毎年見に行ってるんだろっなあ。

それにしても、そうか。

オタク系の娘っ子だったのか、簪さん。

今の僕になつてからはすっかりそっち系の趣味とは関わらなくなつちやつたけど、久しぶりに同好の士に会えたとなると、すこし嬉しくなつてくるな。

「じゃあ、今度の休みにでも一緒に見に行く？ あそこの映画館、ちよつとコネがあつてプライベートシートとかも安く取れるし。でかい画面を独り占めして好きな映画を見るのって、結構気分良いよ」「……！ 行く！」

僕の誘いに、簪さんは強い言葉で同意を示した。

じゃあ、と言う事でその後は昼休み一杯を使って、二人で出かけるための予定を立てる事となった。

さつき決めたばかりの方針をすっかり忘れていた事に気付いたのは、食堂を出た後の事。

百一話（後書き）

ふらぐが たった！

……ブラックコンドルが出るんだよなあ、日曜。

階段を上る傍ら、窓に映った自身の顔を見て、前髪を少し整えなおす。

準備はそれだけ。

焦りなど微塵も感じさせぬ足取りで最上階まで上りきり、そこで唯一使用されている一室を目指す。

鼻歌を歌いながら、軽やかな歩調で。

目指す部屋は、角にある階段から真っ直ぐ進んで、一番距離の遠い場所にある。

広い寮の長い廊下で、しかしたいたした距離でもない。

一分かかるかどうか、その程度の短い距離を、しかし鈴音はたっぷりと時間をかけて、むしろかかる時間にこそ楽しみを見出さんとはばかりの軽やかで、そして緩やかな足跡を刻んで行く。

九月第二週の、日曜日。

二学期が始まってから、初めての休日だ。

ルームメイトとの雑談交じりの朝食をのんびりとすごして、しかし尚昼と言うには早い時間。

予定は未定の休日をどうやって消化するか、考える必要も、無かった。

目的地への到着まで、後、十歩。

優雅な仕草で、ロングスカートの小物入れからIDカードを取り

出す。

顔写真入りのそれを扉脇の読み取り機のスリットに通せば、そのまま部屋の電子キーとなる優れものだ。

目的の部屋は無論、鈴音の部屋ではない。

しかし鈴音は、その部屋の開錠認証のためのコードを、手にしているIDカードに登録していた。

「あたしだけって訳じゃないのが、ちょっと気に入らないけどね」
今は視界の範囲内に居ない誰かを眺めるような口調は、楽しげなそれ。

興が乗ったのか、そのまま、カードキーに軽く口付けなんかもしてみせる。

恋に逸る快活な乙女は、今や恋を知った情深い女の艶やかさを有するに至った。

黒く輝く長い髪を翻して、扉の前へと立つ。

色気のある指仕草で、IDカードを、読み取り機へと運ぶ。

縦に刻まれたスリットの天辺に、カードを差込み、そして。

ゴン。

ごろごろごろごろごろ。

カーペットが敷かれた廊下の上を、慣性力の命じるままに、突然一、横合いから突っ込んできた何かに吹っ飛ばされて、鈴音は転がっていく。

「づあつつたあああ~~~~~!？」

先ほどまでの雰囲気全台無しにする、ある意味少女らしい悲鳴。
床を転がるにつれ髪は乱れに乱れ、スカートは捲くりあがるしシヤツの下で下着がずれる。

「一体何……?」

何時か似たようなことが無かったかと思いつつも、鈴音は身を起こす。

髪が長い分だけ、乱れたときのそれは傍目にも酷い有様だった。一度首を振って背に髪を払った後で、鈴音は改めて状況を確認する。

床に金糸が舞っていた。

だが、何時ぞや見たそれに比べて、若干朱に近い色をしているか。それに、随分と広がった範囲が狭い。リボンで纏められていたから、尚更。

「……シャルロット？」

「あ痛たたた……」

鈴音の言葉につられたと言っわけではないのだろうが、弱弱しい可憐な呻き声を漏らしながら、シャルロット・デュノアが身を起こす。

「ゴメン鈴ちゃん、ちょっと余所見してて」

「ちょっと、余所見、ね」

短いスカートから覗く西洋人らしい白く長い脚線美が、女の目から見ても色っぽかった。

その色っぽい長い足で全力ダツシユから体当たりを食らわされた身分としては、色々と思う事もあったが。

大体、一本道の廊下で人がいる事に気付かないほどに勢いをつけて飛び出してくるってどんな状況だ。

一瞬窓ガラスが振動したような気がしたし、ひょっとしてISの加速機能を使っていないだろうな。

「アンタ何をセシリアみたいな事やってるのよ……」

「うう……だって、誰かに見られてたりしたら、恥ずかしいじゃない」

男の子の部屋に一人で遊びに行くなんて。

『なんて乙女なんだろう、この娘は』と、鈴音はシャルロットの発言に呆気にとられてしまった。

男の子の部屋に遊びに行くのは恥ずかしい、勇気の居る行為だ。トキメキを感じる場面だ。

そう、その筈。その筈だ。

以前の自分なら、確かにシャルロットと同様の気持ちを抱いていた筈だ。

ドキドキして、その事で胸が、頭が一杯になって、他の事など目に入らない。

ライバルと正面衝突して無様に廊下を転がってみたりしてしまうほどに、スリル溢れる行為　その筈だった、のに。

「慣れつつ恐ろしいわね……」

想い人の部屋に遊びに行く事を、『暇だから顔を見に行こう。約束してないけど、居たらラッキー』程度に考えるようになっていた自分に、鈴音は少し以上に驚きを覚えていた。

「女らしさは欲しいけど、乙女心を失っちゃ駄目よね、うん」

「……鈴ちゃん？」

いきなり何を言っているんだと言う顔をしているシャルロットに、鈴音は何でもないと首を横に振る。

「一夏に会いに来たんでしょ？　こんなところで無駄話してないで、入りますよ」

返事を聞かず、IDカードを拾い上げてそのまま読み取り機に通す。

施錠を示すレッドランプが開錠を認めるグリーンに変わり、機械仕掛けの錠前が壁の向こうでガチャリと外れる音が聞こえた。

扉のロックが解除されたため、同時に外部から室内の状況を隠蔽するために展開されていた対探知シールドが解除された。

専用IS保有者として常時展開している周囲状況を探査するため

のセンサーが、室内に動体反応を検知。

その意味を理解して鈴音は僅かなため息を吐きつつも、既にドアを開けてしまったのだからと、ドアノブを握る。

そこで、シャルロットが眉根を寄せて自身を見ていることに気付いた。

「シャルロット？」

どうかしたかと、鈴音はドアノブを握ったまま尋ねる。

シャルロットの表情が、あからさまに不機嫌なそれに変わった。

「……どうして、鈴ちゃんのカードで一夏の部屋の鍵が開くの？」

無言の空間。

押し寄せる圧力に額に冷や汗を浮かべながら、鈴音は此処には居ない何処かの誰かに『バカ』と毒づく。

と同時に、『慣れてって恐ろしいな』と改めて内心で繰り返した。自分が当たり前だと思っている事が、他の人にまで当然であるとは限らないのに。

鈴音はシャルロットがこの部屋の鍵を所有していない可能性を、失念していた。

そもそもこの部屋の主は、鈴音たちの側から提案しない限り、自室の鍵を預けるなどと言う真似は絶対にしない男である。

純情可憐な絵に描いたような乙女であるシャルロットが、そんなはしたない提案を自分でするわけないじゃないか。

そもそもこの仏蘭西娘は、部屋の主をインターホンで呼び出して、鍵を開けてもらうとか言うシチュエーションとかが、きっと好みなのだろうし。

一年以上同棲状態だった筈なのに、未だにそういう初々しさを失わないのがシャルロットと言う乙女の凄さと言えた。

「鈴ちゃん？」

どうして？ と可憐な笑顔のまま尋ねてくるシャルロットに、鈴

音は答えに窮し　　そして、自分で解決する事を放棄した。

「コイツらに聞いて」

鈴音は徐に扉を開いた。

ガチャリ。

外開きの扉を開く。

立ち居知的に丁度、シャルロットは直ぐに室内の様子を確認できる位置に居た。

「……え？」

シャルロットは目を丸くした。

「あ、でゅっちゅ」

「あら、珍しい組み合わせ……でもないかしら」

「のほ……のほとけ布仏さん、それに……セシリア」

シャルロットは目を丸くした。丸くもするだろう。

扉を開けて直ぐに見える位置にある方卓を囲って、見知った少女たちがティータイムを楽しんでいたのだから。

此処は、織斑一夏と言う少年が、彼一人……で使っている彼の私室なの。……

しかも片方が何故かメイド服を着ていて、もう片方は部屋着……のドレス……だったりするから、一体何処のお屋敷だ此処はと、益々自分の

目を疑いそうになる光景である。

もつとも、メイド服姿の布のほとけ本音も普通にテーブルについていたが。

いそいそと新たな来客用のティーカップをそろえているのは、むしろドレス姿のセシリア・オルコットの方だった。

「箒とラウラは？」

「ぼっちーはあ、国の人に来ててお仕事お。箒ちゃんはお外お」

「外？ 遊びにでも行ったの？」

「取材だそうですわよ、雑誌の」

「ああ、アイツ専用機貰いたてだもんね」

どつりで、と鈴音は本音の隣に腰掛けながらセシリアの言葉に頷いた。

本音とセシリアが当然のように室内に居た事には、まるで疑問を挟まない。

「じゃ、山田先生は？」

「少し前にドアの前でうるちよろしてましたけど、結局電話で呼び出されて何処かへ」

「あれ、ぜえ〜つたい、織斑センセからの電話だったよねえ」

「あんまり名前出さない方が良いわよ。あたしらのところにも電話来るから」

セシリアからティーカップを受け取り、皿に盛られたクッキーに手を伸ばして、当然のように会話を繰り広げていく。

シャルロットは眩暈を覚えた。

状況に疑問を抱く自分がおかしいのか いやまさか。

家主が居ないのに当たり前前に部屋に居座ってお茶会を開いているこの人たちの方がおかしいに決まっている。

決まっついていてくれないと、シャルロット的には色々と困る事になる。

「因みにわたくしは、本音さんにかけてもらいましたよ」

「……なんだろう。ここで安心しちゃうのも少し違う気がするんだけど……」

不意に挟まれたセシリアの言葉に、シャルロットは曖昧な顔で咳く。

つまり、本音は一夏の部屋の中に居たと言う事だ。

「欲しいって言えば、くれるとおもっけどにやあ〜」

「あたしの方を見て言うな」

小物入れにIDカードを戻しながら、鈴音は本音の言葉に応じている。

シャルロットは、それでもう何か色々諦めることにした。

自分にこの二人と同じ真似は出来ないと、無理やりに自分を納得させる。

「ちなみにい、自分の部屋の鍵を預けているのはあ、せっしーだけなのでえす」

「そりゃ、あたしの部屋ルームメイト居るし」

「未だに使っては頂けないのですけど」

「……もう良いよ。僕は僕のペースで頑張るから」

頑張らないといつの間にか周回遅れになってそれで嫌だなあと、シャルロットは大きなため息を吐く。

そして、自分がこの部屋を訪れた理由を思い出した。

その理由が、存在しない事を思い出した。

「……一夏は？」

「でえ〜〜〜〜〜とあ」

妙に低い声で即答された。

でえと……デート。

「誰と？」

頬を引きつらせつつ、シャルロットは尋ねる。

内心で、お前ら暢気にお茶を啜っている場合なのかとも思ってい

たりした。

「かんちゃんです」

本音はシャルロットの内心を察しているのか居ないのか、相変わらずの調子で言う。

「……誰？」

シャルロットには聞き覚えの無い名前だった。

鈴音も同様だったらしい。僅かに首をひねった後で、ぼんと一つ手を叩く。

「ひよつとして、例の四組の？」

「更識簪さん。ニツポンの代表候補ですわね。四組とは合同授業を行いますから、あまりどのような方かは存じませんが」

「前半三クラス、後半三クラスで合同授業って固まってるものね。」

そつえばあたしも、良く知らないわ。更識って苗字なんだから、あの扇子女の関係者なんでしょうけど」

「うん、たつちゃんのいもうとお」

本音は頷く。

シャルロットは漸く合点がいった。

一夏が四組所属の専用機持ちと、次の全学年合同タッグマッチのためのタッグを組むと言う話は既に知りえていたから、漸く名前と記憶が一致したのだ。

「……いや、それ別にデートする理由にはならないよね？」

タッグを組む。

理由は一夏とその更識簪の使用する機体が、二機での連携運用を想定して開発された物だからだ。

面識が無くとも、仕事とあれば組まざるを得ない。

シャルロットは、それで泣く泣く一夏とのタッグを諦めたのだから、それは記憶にある。

だが、

「会ってからまだ四日か五日ってトコでしょ？ 手が早いわね、全く……」

「そうだよ！ デートって言うからには二人つきりなんですよ、その人と！ 会ったばかりなのに……仕事とかじゃ、無いの？」

「違いまあすう。二人で映画館へ行く、これはでえ……」

「布のほとけ仏さん、少し怒っていらっしやいますわよね？」

「唐変木のことなんてえ、しりませえくん。だから冷蔵庫の中にあつたおかしとかも食べちゃいます」

「……明らかに、この状況を見越して用意しておいたヤツじゃない、コレ」

駅前の女子に人気の有名ケーキ屋のクッキーを摘みながら、鈴音は呆れたように言う。

この状況とは、つまり、こうして女が四人集まっている、この状況の事だろうか。

謝罪の代わりのつもり、なのだろうか。
「……むう」

お菓子は美味しい。友達と話すのも、楽しい。
だからって、こつそりと知らない女の子とデートに出かけるなど。

しかし、余り追求しすぎたりするのも、そもそもシャルロットも約束を取り付けていた訳ではないし。

休日に一夏が何処へ出かけようと、基本的に彼の自由なのだから、シャルロットが文句を言う資格は いや、資格は欲しい、欲しいけど、でも今はまだ。

加えて、明らかに文句を言う資格を持っていると思わしき鈴音や本音辺りが、毒を吐きつつもそれで済ませているところで、自分だけがと言うのもある。

同じ立場であって欲しいセシリアですら、落ち着いているのだし。

「むう……」
クッキーを見ながらシャルロットがうなっていると、鈴音は一つ

鼻を鳴らして、言った。

「美味しいお茶とお菓子があれば、女は何時間でも時間が潰せるって、解ってないのかしらね？」

「……ああ」

その手があったかと、シャルロットは思わず頷いてしまった。何時間でも。それこそ、家主の帰還する、夜遅くまでだって。

それならば、うん。

せっかく用意してくれたお茶菓子を味わいながら、この場を生かして情報交換会と洒落込まなければなるまいに。

彼が不在の彼の部屋で、少女たちの休日が過ぎていく。

百二話（後書き）

女子会。

この後は赤裸々トークでお送りしますが、赤裸々過ぎてアレなのでナシな方向で。

いや、本当は書くつもりだったんだけど、集合するだけで妙に尺が掛かったので、無しに。

本当は会話の都度都度女の子が増えていく感じにしてみようかと思っただんですがねー！。

お陰で出番にあぶれたHOUKUIさんがまたKUKUIに……。

いや、どっちみちオチ要員になるだけだったんだけど！

「最近の特撮って金掛かってるんだなあ」

「CG技術が発達したせいで、むしろ如何にCGを使わずに作るかってなってる、みたい……」

「ホンモノ志向ってヤツだね。昔は石切り場でしか発破使えなかつたのに、この国も進歩的になつたものだよ」

いや、堪能した。

感慨深げな一夏の言葉に、簪もじつくりと頷く。

他人に邪魔されずにスクリーンを独り占めしてヒーロー映画を見ることが、これほど心地よい事だとは思わなかった。

若い男女が数の限られた個室を占領して、何を夏休みの子供向け映画を見ているんだと言う映画館のスタッフの視線すら、全く気にならない至福のひと時だった。

完全予約制の、少人数で利用するためのプライベートルームと呼ばれるそこから出た一夏と簪は、出口へ向かうための下りのエスカレーターに乗る傍ら、視聴し終えたばかりの映画の感想を語り合う。「それにしても、織斑……、結構古いドラマとか見てる、よね……？」

「古い、ね。ハハ……まあ、昔は引き篋もりがちの子供だったからね、僕」

趣味に使う時間は沢山あったんだと、一夏は何処か苦味の入った笑みを浮かべる。

当然だが、簪は『昔』と言う言葉の意味を取り違えた。

今は複数の女性の相手をするために手一杯。自分の時間など持っていないのだろう。
そう考えている。

「……っ！」

売店で買ったばかりの映画のパンフレットの入った鞆を両手で抱きしめて、簪が固まる。

「かんちゃんさん、どうかした？」

「……！　なん、でも……無い！」

顔を覗き込んでくる一夏から、簪は慌てて視線を逸らす。

一夏は不思議そうな顔で首をひねっている。

頬が熱い。きつと、一夏が不思議に思うくらいには、朱色に染まっているに違いなかった。

簪は気付いてしまったのである。

女性を相手にするために目一杯時間を消費している男。

今、その男が隣に居る。

その男が、更識簪のためだけに、時間を、しかも休日のひと時を、消費している。

(しかも、二人きり、だ……)

二人きり、なのだ。

同い年の少年と、今の簪は私服姿で賑わう街の中で、二人きり。

隣り合ったまま、歩いていた。

(ひょっとして……これって……まさか……)

まさか　まさかも何も、無いだろう。

好きなヒーロー作品の映画を、しかも最高の環境で見に行ける

おまけに、同好の士と一緒に。

その喜びに浮かれて、その光景が傍からどう見えるのか、簪は今

の今まで全く考えていなかったのだ。

男女が二人で休日に待ち合わせて出かける。その意味を、理解していなかった。

(織斑は、どう、思っているのかな……)

チラと、顔を伏せたまま一夏に視線を送る。

唐突に口をつぐんだ連れ合いの態度に文句の一つも言わず、そつと歩調をあわせて隣を歩いていくれた。

ごく自然に。休日の一部を楽しんでいるようにしか見えない穏やかな顔で。

簪の隣を、一夏は歩いている。その顔に、不快な部分を発見する事は、出来なかった。

気付いていない？

この織斑一夏が、気付いていないなんて、そんな馬鹿な話があるか。簪自身じゃあるまいし。

(これじゃまるで、で、で……)

単語が、脳内ですら出てきてくれない。

出せる筈も無い。

こんな可愛げのかけらも無い自分には縁遠い物、そう信じていた

いや、いるから。

(そう、違うに決まってる……)

むしろ、そうだ。

一夏は女性と遊び歩く事に慣れているんだから、これもその一環。ただただ趣味が重なった、時間が重なった友達が……友達？ いや、友達、更識簪と織斑一夏は、友達なのか？

出会ってからまだ一週間もたっていないのに。

(でも、デート、してるし……)

「~~~~~っっ!~!~!」

「ど、どうしたの?」

自分の思考に顔を真っ赤にして頭を振る簪に、一夏が目を丸くしていた。

「なんでも、無い……違うの。違う、から……」

「いや、何が違うと……?」

「だから、違う、の。違う。デートじゃ、無いから、あ」

言葉にしてしまった。大慌てで口をふさいでも、最早遅い。

隣を歩く一夏に聞き取れなかった筈が、無いだろう。

「……あの」

「……」

何を言えば良いのか解らないまま口を開いて、しかし無言のまま目を丸くしている一夏に、簪は言葉をなくした。

彼が何を思っているのか、それが解らなくて、とてもとても恐くなつた。

恐くて、恐くて、恐くなって。

「はい、ストップ」

駆け出そうとした瞬間、手を握られて止められた。

振りほどこうとして、華奢なわりに意外と握力が強かった事に、

簪は驚く。

「離し……」

「お断りだね。デートしてる女の子に逃げられるなんて、末代までの恥になりそうだし」

「でっ……だから、違っ!」

「生憎こっちは、今日はキミとデートだからって事で怖い人たちにお断りを入れてきたんだ。デートをしてくれないと、困るんだよね」

「そんな無理やりな話、私、知らない……」

「そ、無理やりな話だから、これ。僕が無理やりキミを連れまわしてるだけ。そう思って悪態は僕に向けててくれれば、良いよ」

だから、行こう。

「あ……………」

反論すら許されず。反論なんて初めから見つからなかったけど。一度離れた手が、今度は掌に絡められて、そのまま引きずられるように、歩みだした彼に連れられていくより、簪に出来る事は無かった。

手を繋いで、街中を歩く。男の子と。

……………な、男の子、と。

(デート、なんだ)

胸が高鳴らずには、いられなかった。

心が急速に冷えていく。

「……………ええつとお……………」

頬を引きつらせる一夏。

「……………」

無言の自分。酷い顔をしているに違いないだろう、更識簪だ。

休日の臨海公園、海沿いに並んだベンチ。その一角。

太陽の日差しをさえぎる、街路樹の作る木陰。残暑の熱を涼やかな物へと変えていく潮風が心地よい。

学生二人がデートをするには、絶好のシチュエーションと言えるだろう。

二人きりでのんびり歩くだけで、充分な幸福を得られるだろう。

二人きり、だったのなら、ね？

「それで、こんなところで何をやっているんだ一夏？ ……随分と楽しそうだったが」

薄化粧をした、少し大人びた格好をした、きりりと引き締まった秀囲気を自然と有している少女。

今は、随分と眉の辺りを引きつらせていた。

「篝ちゃん、そういう格好も似合うね……」

「そ、そうか？メイクの人に着せられたままだったんだが、そうか、似合うか？」

「うん、可愛いよ」

「可愛い……。良かった、取材の記念にくれるって言うから、貰っておいてよかったって、いや違う、そうじゃないだろう一夏！」

一時間前の自分を見ているかのようなだと、簪は苛立つ心の片隅で思いながら少女を見ていた。

見ていた。じっと。きつと人によっては睨んでいたと言っような目つきで。

見ていた。

突如二人の空間をぶち壊した、篠ノ之篝の姿を、見ていた。

ジュースでも買ってくる。

男はそう言って逃げ出した。

後で殴ると決心した。多分、隣に座っている女も、同様のことを

考えているに違いない。

「……」

「……」

無言のままの空間。

怒気と敵意が、渦巻いている。

(……私、怒ってるんだ)

自分が誰かに怒気を向ける。

その事実には、簪は少しの意外感を覚えた。

そんな積極性のある人間だっただろうか、更識簪と言う女は。

根も暗く、俯きがちで、他人を自分から遠ざけて。

(私はあの人に敵わないと知った時から、もうずっと、そんな風に生きてきたのに……)

周囲に関心を持つ事、周囲から関心を向けられる事を、拒んできたのに。

簪は今、間違いなく隣に立っていた、今は隣にたっているべき男へと、怒気を向けていた。

それを邪魔した、隣に座っている邪魔者にも。

(篠ノ之、篤……)

篠ノ之篤。IS発明者の妹。専用機保有。

帰属国家未定であり、織斑一夏と並ぶ学園の不穏の種の一つ。

織斑一夏とは、幼馴染。織斑一夏とは、IS学園で六年ぶりに再会した。織斑一夏と同じクラス。織斑一夏の事を、好いているらしい。あの人の横槍無ければ、織斑一夏と寮で同室になっている筈だった。織斑一夏と。織斑一夏の。織斑一夏が。織斑一夏は。

織斑はこの娘の事を、どう思っているのかな？

わたしと、くらべて。

(……~~~~~!~!~!)

茹っている。

自分の思考は、今間違ひなく茹で上がっているのだと、簪は必死で自らに言い聞かせた。

駄目だ、このままではいけない。一時の盛り上がり流されて、思考が変な方向で固定されてしまう。

クールダウン。クールダウンすべきだ。いつもの自分を取り戻さなくては。

いつもの自分は、いつも　さて、何を考えているだろう。

例えば自分のこと。自分の趣味。自分の不甲斐なさ。不甲斐ない自分。誰かと比べて。比べる相手は、勿論。

思考が急速に、冷めて行く。

冷えてゆく。冷えて行く中で、一つ思い出す事があった。

チラ、と隣に座る少女に視線を移す。

腕を組んで、むっつりと口を引き結んでいる篠ノ之箒。

そしてこの篠ノ之箒が。

(……あの人と)

タツグを組んだ。

(しかも誘ったのは、あの人)

簪には見向きもしない、前だけを向いて、何時も何時も先に行く、あの人。

あの人に、篠ノ之箒は選ばれた。

完璧過ぎるあの人が選んだパートナーなのだ。

だから篠ノ之箒はきつと、更識簪など及びもつかない完璧な人間なのだろう。

そして彼女は、織斑一夏の、幼馴染。織斑一夏を、好いていて。

織斑一夏だって　織斑だって、きつと。

(私、なんかより……)

心が凍り付いて、もう、動けそうも無い。

「そろそろ戻らないと不味いよなあ」

三本の缶ジュースを手に抱えたまま、僕はため息混じりに呟く。
と言うか、グラビア撮影中だったらしい篤ちゃんの突然の登場とその剣幕にたじろいて逃亡してしまっただが、冷静に考えれば何処にも逃げる理由なんて無かった気もする。

勢いあまって逃げた事で返ってこの後の展開が気まずくなってしまっているんじゃないかなろうか。

「……あの二人の組み合わせがどんな展開を呼ぶのかとか、まるで予想もつかないし……」

二人とも人付き合いが良いタイプじゃなかったから、縁が無ければ一生会話すらないような関係になりそうな感じだし。

「不味いな、早く戻らないと……でもって、素直に熱したフライパンの上で正座でもしよう」

自分に言い聞かせながら、自販機の前から、踏み出そうとして、しかし。

「おっと」

ジュースの缶を一つ転がしてしまった。しかも自分用買った炭酸のものを。

「……何か、この後に待ち受ける展開の悲惨さを予感させてるような……」

遠くに転がっていく缶ジュースを追いかける。

ジュースの缶は、たまたま立ち止まっていたらしい誰かのつま先に当たって、止まった。

夏らしいサマードレスを着た、小柄な少女だ。

「すみません」

声をかけながら、僕は傍に近寄る。

近寄って。

「……え？」

目を、疑った。

だって、そこに立っていたのは。

その少女の顔は。

「……」

背筋が凍りそうになるほどにきれいな笑顔を浮かべている少女。

その顔に、僕は見覚えがあつた。

いや、見覚えがあるなんてもんじゃやない。

「……僕？」

十五、六歳ほどの少女。しかしその顔は、明らかに、朝も鏡で確認した、僕自身の顔と瓜二つだった。

見る度のため息を吐きたくなるような、男らしさのかけらも無い、女顔。

「お前だと？」

笑わせるなど、少女が嘲りの笑みを浮かべる。果たして僕に、こんな表情が出来るだろうか。

こんな表情を出来てしまうこの少女は、何者なのか。

「私はお前などではない。私は　　いや」

少女は一步一步僕に歩み寄りながら、言った。

細い腕、その先の小さな掌に握られていた、黒光りをする無骨な鋼の塊に気付いたのは、その時だった。

その時には、最早遅かった。

「私が、織斑マドカだ」

言葉と共に差し出されたのは、鈍い光を放つハンドガン。

パァンッ！

乾いた銃声が休日の公園に響き渡る。

百三話（後書き）

七巻です

(一夏は何時になったら戻ってくるんだ……っ！)

腕を組んで視線を正面　　水平線の向こうへと固定したまま、
箒は内心で毒づく。

武道家らしい広い視野を利用して、視線は向けぬままに同じベン
チに座っている少女を観察する。

俯きがちの少女。

偶然にこの臨海公園で遭遇した、一夏の連れれの、少女だ。
顔と名前くらいは、IS学園に入学する前から知っていた。

箒は一応日本国籍を保有していたため、学園への入学前の顔合わ
せで、日本の代表候補であるこの少女の存在は見知っていたのだ。

更識箒。

IS学園一年四組。専用機持ちの日本の代表候補。

知っているのは、その程度だが。

世界中の誰もが聞けば納得するであろう諸般の事情で他人とのコ
ミュニケーションに積極性を持たなかった箒は、他人の氏素性など、
文章化された情報を流し読みする程度の興味しか抱けない。

他者とは箒にとって、自らの自由を奪う、はっきり言えば敵だ
った。そう考えていた。

だから、敵を退けるため、敵に抗うために自らの力を高める事に

しか、ここ数年以上も興味が持てなかったのである。

今は、それほどでもない。

近づきたい誰かが居て、そしてその周りには自然と人が集まるから。

腕力を鍛えただけで距離が縮まる関係でもなく、自然、会話によるコミュニケーションの必要性を再確認する羽目に陥った。

再び、他人を知人に、知人を友人に、身内に変えていく行為を、その楽しさを思い出すようになった。

しかし、精神性の確立に重要な役割を果たす、思春期の数年を某に振ったが故のブランクは重い。

筈は未だに、他者に対して積極的なコミュニケーションが取れるとは、言い難い性格のままだった。

数年の歳月は、素直なで真っ直ぐな子供を、頑なで気難しい少女に曲げてしまうには、十分な時間だったらしい。

だから、こんな風に話した事も無い他人と、二人きりで残されても、困る。

しかも、よりもよって想いを寄せている少年が、逢引をしていたらしい相手となんて。

友好的な構えを取る前に、敵意の方を先に示してしまった手前もあつたから、今更、口にすべき言葉が見つからない。

だが、如何にもこの淀んだ空気は良くない。

一言二言、何か。せめて自己紹介程度は。

そのためには、話題、話題が必要だ。

共通の話題。一夏の事。却下。

(鈴やセシリアではあるまいし、私にそんな話題が朗らかに語れるか……！)

脳内会議をするまでもなく、そもそも議題に挙げる気も起こらなかった。

では他に。例えば共通の知人とか。知り合ったばかりの少女と？
そもそも人付き合いの悪い性格であると自認している筈の？

一夏以外の、共通の知人……。

(……居た)

直ぐに思いついた。

と言うよりも、直ぐに思いつけなかったあたり、自分はどれだけテンパっていたのか。

篠ノ之箒と更識簪の共通の知り合いなど、最近であれば一人しかないではないか。

「更識、楯無……」

俯いていた簪が、箒の方へと首を向けた。

暗い、陰のある瞳をしていた。

「貴女の、姉だそうだな」

躊躇いがちの口調で、その言葉を振られた。

言葉を振られて、しかし返す言葉は思いつかなかった。

故に、簪は黙ったまま、箒を見上げた。

どちらも椅子に座っていて、そもそも身長も大して変わらない同年代の少女を、横から見上げる。

毅然と背筋を伸ばした篠ノ之箒と、俯き三歩前の地面ばかりを何時も見ている自分との、それが、決定的な差なのだろうと、簪は思

った。

(嫌いだな)

そう思ってしまった自分が、少し不思議でも、あった。

「再来週……いや、今日は日曜だから、もう来週か。タッグマッチのリーグ戦で、楯無さんと私はタッグを組む事に、なった」

無言のままの簪に、箒は、ポツリポツリと言葉を重ねていく。

彼女の見た目の雰囲気こそぐわない、躊躇いがちな口調。

(きっと、私とあの人の違いに、戸惑ってる)

そうに違いないと、簪は判断した。

それは何時もの事だったからだ。

更識簪は更識楯無と比較される。比較され続ける。

優秀な　　優秀すぎる姉、楯無。

高校在学中に既に更識家当代の証たる楯無の名を受け継いでいると言う事実が、彼女の類稀なる優秀さを示している。

それと比して、妹の簪は。

努力はしている。成果も挙げている。家の名を汚すような真似は、一つとして。

でも、それだけだ。

比肩しうる者無き姉が傍に居る段階で、簪程度の努力と成果など、有って無きが如し。

認めるに値しない程度の、価値。否、無価値。

無価値であるなら、まだ良い。

なまじ生まれた家が、歳が、進む道が、姿かたちが似てしまったお陰で、簪は楯無と常に比較され続ける状況へと貶められて居るのだ。

絶対に勝てる筈が無い逸材と、平凡な才能しか持たない簪が、だ。似ているだけで、比較され続ける。誰と出会っても、何処へ行っても、比べられ続ける。

そして他人は大抵、簪の努力を、身勝手に足りないとのたまう。

その事に苦痛を覚えるのは、当然だ。

だけど。

(昔は、こんなじゃなかったよね……)

姉に対して、優秀な姉に対して、何でも出来る格好の良い姉に対して、簪は確かに尊敬の念を抱いていた筈なのだ。

凄い、凄いと。無邪気に、瞳を輝かせて。

その背中を追いかけて、追いつきたいと、思っていた筈なのに。

だけど今は、その名前を聞く事すら苦痛だった。

(そう、言えば)

篠ノ之箒にも、姉が居た筈 居るに決まっている。

おそらくは現代で尤も有名で高名で、そして悪名高い姉が。

世界を変えた女。誰も隣に立つことが不可能な、頂上で世界を睥睨している女が。篠ノ之束が。

(この人は、苦痛を覚えなかったっていうの……?)

感じなかったわけが、無いのに。

簪は更識家に生まれた人間として、必要な知識として自らに係わり合いのありそうな全ての情報を取得していた。

だから、篠ノ之箒が姉である篠ノ之束のせいでのどのような生活を送る嵌めになったのかも、当然。

知っている。辛かっただろうと、知っている。知っているのに。
暗い炎が簪の心の内に灯る。

「貴女にだって、姉が居るでしょう……?」

言葉が、止められるはずが無かった。

「貴女にだって、姉が居るでしょう……?」
「何?」

言葉の意味を理解する前に、低い音が口から漏れる。
そして、気付く。

非友好的な目を、向けられている事に。

いや、そんな生易しい物ではない、敵意に満ちたと行ってしまっ
た方が早いような、そんな、暗い瞳が直ぐ傍にあった。

「……お前」
戸惑う。

更識簪が自身の存在に苛立ちを覚える程度なら、当然だろう。

少なくとも簪自身が彼女の立場だったとしたなら、一夏と二人き
りだった状況を乱されれば、その相手に怒りの一つも覚える。

挑発染みた言葉の一つも、口にしたくなるだろう。

だが、果たして此処まで陰気に満ちた視線を向けるだろうか。

あからさまに悪意的な言葉を、向けられるだろうか。

(別の理由が……いやまて)

姉の話題を出したら、姉の話題で返された。

冷静に考えればそれだけの事ではないか。

だが簪は心がざわつくのが止められなかったし、簪は簪で、暗い
怒りの炎を瞳に宿らせている。

(姉か……そういえば楯無さんは)

篤は、更識楯無に半ば強引にタッグパートナーへと指名された。一夏以外に、特別組みたい相手が居た訳ではない篤は、戸惑いつつもそれを了承する。

共に戦いに挑むパートナーであるからには、当然互いのことを理解しあわねばならないから、自主訓練も共に行いも、する。

共に居る時間が長ければ、互いにそれまではしなかった会話を交わす。

まだ一週間とたっていないが　しかし、楯無は強引なほどに社交的な人だったから、今日までにそれ相応に会話を重ねてきていた。

篤は口下手なところがあったから、主に楯無が尽きないネタで喋りつくすという展開が多かったが　そう、いろいろな話を、してくれたのだ。

あの更識楯無と言う人は。

だがその中に　更識簪の話題は、あっただろうか。

篤にとっては同学年の同じ専用機持ち。

楯無にとっては同じ学校に通う妹。

楯無の会話の中には布のほとけ仏姉妹の事や、一夏やその他の代表候補生たち、或いは昔の友人、海外の有名人の話題など、幾らでも出てきていた。

その中で、近しい存在であろう妹の、簪の話題が一言も無かったのは、いかにも。

（私のことを考えて避けていてくれたのか……？　いや、違う）

ISの実践的な運用法に関するアドバイス、そこから続いた篤の専用機である紅椿あかつきはなの事に話が続きに至り、当然それを用意した束の事に関しても、話題に上った。

そのとき、篤は居心地の悪そうな顔をしていたのだろう。

楯無は、問うた。『束の事が嫌いなのか』と。
箒は『苦手なのだ』と言葉を濁した。
楯無はそのとき、笑って箒に頷いた。

『そう。だったら良かった。やっぱり家族は仲良くしないとね』

そんな言葉を、口にしながら。

その時の楯無の顔。言葉の色。

続く会話の中に覗いた、慈しみの念は、果たして箒にだけ向けられた物だったのか。

更識楯無は不可能な事などあり得ないと思わせるほどに完璧な、特別な、格好の良い尊敬の出来る女性で だから、箒のためだけを想って労わりの言葉を口にしてくれた。

そう考えても、しまえる。

けど。

(私は、知っている……)

知っている、心の中で箒は繰り返す。

人は完璧なだけでは居られない、その事を。

梅雨の終わり、七月の初め。此処から近い海の上で、箒は知ったのだ。

クロッシング・アクセス
相互意識干渉の波に乗って、怯える少年の声を、確かに聞いたのだから。

子供の頃から、優しい瞳で箒を見守ってくれていたあの少年ですら、それだけではないのだ。

拭いきれない、隠したい、他人が何故と思うような、他人に言わせれば簡単に解決してしまいそうな、そういうコンプレックスを抱えていたりもする。不器用な一面を、持っていたりもする。

だから、或いは、更識楯無も。

「貴女は、余り楯無さんと仲が良くない、のだな……」

言葉は、想像以上に強い力を秘めていた、らしい。

「……っ！」

ギリと、噛み締めた歯の擦れ合う音すら聞こえてきそうなほどの、勢い。睨みつける視線の強さ。

「貴女に、何がわかる……っ！」

発せられた言葉は、むしろ箒自身のものとすら思えた。

だからきつと、条件反射的に口に行っているのだろうなどと、箒は先ほどの自分に羞恥心を覚えた。

「あまり解りたくは無いが、少しくらいは」

解る、と頷く。目を見開く簷に、微苦笑を浮かべて。

「だけど……」

だけどやっぱり、家族とは、そう、続けようとして。

しかし。

パァンッ！

休日の公園に響き渡った銃声が、それを遮った。

百四話（後書き）

お互いの状況が似てるからって親しみを覚える筈だったんだけど
なあ……？

まあ、いきなり予定からズレてますが、そろそろバトルフェイズへ入っていく感じで。

久しぶりだなー、バトルシーン。

目を覆ったし、無様に両手を顔の前で交差した。

こういうとき、僕は『戦う人間』では無いんだなど、実感する。カン、カン、カン……。

擬音にすれば冗談にもならない音を立てて、手にしていた缶ジュースが地面を叩く。

それで漸く、僕は腕の交差を解いて、顔を上げた。

「ほう……?」

僕と良く似た、しかし僕のものよりも、少し高い声が、感嘆とも嘲りと持つかない声を漏らす。

おっかない。恐い。恐くて当然だ。

突然目の前で拳銃の引き金を引くような女が、恐くない訳が無かった。

アクティブ・バインダー
「非固定自立稼働防壁。情報にあつた通り、平時に於いても常にI Sの自動防御機構を最大レベルで設定しているのだな」

眼前に浮遊し、銃弾を弾いてくれた鋼の盾を見て、僕と同じ顔の女が、僕には真似の出来ない顔で晒っている。「キミ、一体……」
詮無い言葉と、自分でも思う。

思っても、それ以外に言葉が思いつかないのだから仕方が無い。
自らの混乱、焦燥感ともいえるものを落ち着けるためにも、何か言葉が必要だったのだ。

だが、僕が問いかけを放ったとして、果たしてそれに応じる声があるかとすれば。

「では、こんな玩具は役に立たんな」
無造作にハンドガンを投げ捨てる女。
そして。

「　　っ！」

経験と言う物に感謝するべき場面だろう。

エネルギーロスを無視してISスーツも含めた打鉄式式の全機能を量子顕現。

戦闘レベルでコアエネルギーを各部位に伝達し、躊躇うことなく最大出力で脚部スラスターを振り絞る。

背後へ、スラスターの膨大な熱量が巻き起こす公園への壊滅的な被害など気にも留めず、僕は背後へと飛ぶ。

刹那の間も於かず、僕が建っていた場所へと降り注ぐ粒子光弾の雨。

転がっていた缶ジュースは全て一つと除かず、缶ごと纏めて蒸発した。

身にまとう打鉄式式のハイパーセンサーが、地面を穿って出来た土煙の向こうに、正体不明のISの顕現を感知した。

ヘッドセットのクリアバイザー越しに、データ補助を元に再現されたその姿は、いかにも攻撃的な印象を受けるシルエットを有している。

それを纏う華奢な少女の身体以外、ISを構成するその全てが鋭角的なラインで構成されている。

色は青。各部位のパーツ構成、機体を浮かせるPICの干渉波形から推測するに、英国製の機体、なのだろうか。

機体の中心で残忍な笑みを浮かべているのは、僕と同じ顔をした日本人としか思えない少女だったが。

攻撃的な概観の機体は、しかし見た目に反して武装は片手に保有している開放式の電磁バレルを有する大型のライフル一丁のみ。

だが、最初の一撃は明らかに複数の砲弾が多方向から打ち込まれた物で、思考伝達によるセンサーの観測結果により、その答えはあっさりと見つかった。

上空に浮かぶ、複数の高エネルギー体。

「アンロック・ユニット
非固定稼働部位……？」

本体のP I C干渉領域内で本体から独立して浮遊するI Sの武装の一種。

だが、あれらは明らかに、浮かんでいる六機が別個に慣性制御を行っている。

個々にスラスタを有し、本体から離れた場所で、浮遊 ではない、飛翔している。で

それに、独立したジェネレーターを搭載していなければ発揮できないであろう、先ほどの砲撃の出力。

先ほど計測したP I C干渉波のパターン。

「B T兵器かよ……っ！」

降り注いでくる光弾を、脚部スラスタの推力任せの強引な回避機動で避けながら、叫ぶ。

B T兵器。大英帝国が威信を掛けて開発中のI Sの次世代装備。

量子通信を介した思考制御により自在に飛行可能な、粒子砲を備えた小型戦闘機群。

複数のそれを同時に制御する事により、従来の単独の機体では考えられなかった全方位からの攻撃が可能となる。

『全方位オールレンジ攻撃』と呼称されるものだ。

I Sのハイパーセンサーですら補足しきれないほどの密度で行われる全方位からの同時砲撃。

それだけでも脅威に違いないが、B T兵器の真に恐るべき機能は。

砲弾が降り注ぐ。逃げ道をふさぐように。

慣れない機体で、それでも何とか回避機動をとって。

至近距離を過ぎ去る光弾をギリギリのタイミングで回避した

そう、思ったとき。

ゴオン！

「~~~~~！」

予想外の方向からの衝撃に身体をゆすぶられる。

被弾。アクティブ・バインダー非固定自立稼動防壁、エネルギーバリア展開不可。自立稼

動機能、機能不全。放棄を推奨。

クリアバイザーに投影された自機のコンディションに舌打ちした
くなった。

接近戦用の機体として、運動性能の低下を妨げるために打鉄うちがね式・
丁は防御系の装備は左腕付近に浮遊している非固定自立稼動防壁以
外存在しないのだ。

敵の攻撃は防ぐのではなく避ける。この機体の運動性能を考慮す
れば、そうするべきだと言うのは解っているのだが 乗ってい
る人間が僕である事を、少しは考慮して欲しい物である。

僕には不意に横から殴られて、超絶な反射神経とか発揮するのは、
無理なのだから。

「だから嫌だったんだよ、殴り合い専用の機体なんて……！」

アクティブ・バインダーPIC干涉領域から、非固定自立稼動防壁を除外。方形の盾は、
浮力を失い重力にとらわれ、地面へと落下していく。

眼下で逃げ纏う人々に激突しやしないか、意識を払っている暇は
無かった。

敵の攻撃は、まだまだ続いているのだから。

回避。回避機動。これだけ攻撃を浴びていれば、否応無く気付く。

「また、曲がった!？」

一直線に打ち出された光弾が、僕の機動を追尾するかのように、
機動を変化させたのだ。

粒子砲弾が曲がる。

発射後に、まるで意思が在るかのよう軌道を変更するのだ。
常識では考えられない原理不明のその現象こそが、BT兵器の秘
め、恐るべき真価だった。

「遊び甲斐が無いな……」

蓄積エネルギーを消費しきったのか、BT兵器を背部のラックに
戻しながら、僕と同じ顔をした少女が、吐き捨てる。

言ってる言葉の割りに、蟻を踏み潰し如雨露で巢に水を流し込ん
で悦に浸る童女のような笑みを浮かべているのだから、おっかない
事この上ない。

背部兵装担架に接続された六機のBT兵器が作り出すシルエツト
が、浮かべている残忍な笑みと併せて、悪魔染みた雰囲気を感じ起
こさせた。

「そう思うのなら、遊んでいないでとつと帰ってくれ……！」
息を荒げながら、半ば以上本気で僕は言った。

推力バランスの調整が未了のこの機体で、実戦レベルの回避機動
を取り続ければ、いい加減息が絶える。

事情も何も解ったものではない状況だが、撤回してくれるのであ
れば、この上なくありがたい状況だった。

無論、目の前の少女は此処で事を収めるような性格ではないのだ
ろうが。サドい表情的な意味で。

「そうだな。では……」

しかし意外や意外。謎の少女は僕の言葉に頷いた。

諧謔を理解するようなタイプには全く見えなかったので、絶望的
なまでに嫌な予感しかなかった。

開発チームに無理を言って搭載させた短銃身サブマシンガンのト
リガーを、問答無用で引いた。

炸裂鉄鋼弾を容赦なくばら撒く。炸裂し、爆ぜる空間。

確実に直撃した。このまま弾幕を張りつつ、回避機動を
だ
が。

爆風を縫って、一瞬で少女が間合いを詰めてくる。

遊びは、終わりだ。

戯れ交じりの、声を聞いた。

「……………」

思考の速度よりも早く、反射的に腰部ラッチから、雪片・改ゆまひらを引き抜く。

少女が持つ大型ライフルの底部に備わっていた銃剣と、雪片・改ゆまひらの刀身とが激突し、そのどちらもが纏っていたエネルギーが反発し合いスパークを撒き散らす。

「貴様を殺して、直ぐに帰る事にしよう」

額をぶつければかりの距離でにらみ合った少女の顔が、そう告げていた。

「あまり解りたくは無いが、少しくらいは」

叩きつけた怒りは、寂しそうな笑みに受け流された。

戸惑う。それも当然だ。

心を凍りつかせて、感情の波風を立てないようにと腐心してきた簪にとって、怒りと言う激情の範疇にある感情を維持し続ける事は、酷く難しい事だったのだから。

だから、ぶつけた勢いそのまま弾き返してくれなければ、再び同等量の怒りを相手に向けることが、出来ない。

戸惑う。戸惑って、目を丸くするしか出来ない。

『だけど』と唇を動かす篠ノ之箒を、目を丸くして、見ている事しか、出来ない。

その時の、こと。

パンッ！

「……っ！」

「なんだ!？」

休日の昼日中の公園に、似つかわしくない乾いた破裂音。

学園で、仕事の先で、いや、実家に居た頃から幾度と無く聞いてきた音。

(銃声!)

それも、近い。直ぐ傍で、誰かが銃を撃った。

立ち上がる。音のした方へと振り向く。

右手中指に嵌められた指輪を、無意識の動作で抑える。その仕草に、反応したわけではないのだろうか。

所属不明機の実体化反応を検知。高エネルギー反応。戦闘出力と推定。座標……

常にリンクしている自らのISから、意識下に次々と情報が連ねられていく。

正体不明のISが出現した、と。そのISは、既に戦闘態勢をとっている、と。

そして、その情報以上に目が引くのは。

友軍機1：『打鉄式式・丁』、戦闘態勢へ移行

友軍。丁が、戦闘態勢。表示された座標に示された光点は、所属

不明機の目の前。

友軍。丁が、所属不明機と、戦闘。

友軍。丁の。打鉄式式・丁の、操縦者は。

「……織斑？」

ゴオオツ！！

目の前を超高圧の空気が吹き抜ける。視界を奪うほどの、暴風。既に起動していたISのハイパーセンサー越しに、その内側にあった存在を、見た。

方や青。方や鈍色。高エネルギーを放つ、鋼の塊。

その両方の内側に、全く同じカタチの人型。

「ISだと!？」

箒が人型の軌跡を目で追いながら叫ぶ。

街路樹を砲屑のごとく吹き飛ばし、二機のISが海沿いの遊歩道へと飛び出して行く。

敷き詰められた煉瓦を跳ね上げながら、絡みもつれ合う二機の人型。

それらの機動は不規則に乱れ、ぶつかり、弾け合い、交差を繰り返す。

罅迫り合いを繰り返しながら。

突如始まったIS同士の戦闘に、周囲で休日を満喫していた人々が、騒然となって走り去っていく。

悲鳴を上げ、転げるように。

「なんだコレは！ 何故一夏が……あの青いのは、一体……!」

狂騒に陥ったその中で、箒が混乱した面持ちで叫ぶ。

簷にとて、解るわけが無い。

一夏が敵性体と戦闘を行っているとしたか、解らない。

何故だかは、解らない。解らないけど。

長銃身ライフル銃の底部に備えられた銃剣で、一夏の打鉄式式うちがねが握る大剣　雪片ゆきひら・改を弾き飛ばす正体不明の青いIS。
期待の周囲に浮かべた複数の非固定稼動部位アンロック・ユニット　いやアレはもしゃ、BT兵器なのだろうか。本体から独立して自在に飛翔しながら、大剣を握り接近を試みる一夏を翻弄するように、粒子光弾を放つ。

ドオン！

「くうっ！」

「くうっっ！」

至近に着弾。

煉瓦を跳ね上げ手すりを焼き尽くし、土砂が吹き上がる。

巻き起こる悲鳴、悲鳴。続く戦闘。轟音、地上を押しつぶさんばかりに吹き荒れる、衝撃波。

簷は理解の追いつかぬ状況に混乱したまま、空を呆然と見上げていた。

歯を食いしばり正体不明のISと戦う、一夏を。

（織斑は、接近戦は苦手……。丁はまだ、調整が万全じゃない。武装だって……）

敵の青いISは、その操縦者は明らかに戦闘に慣れている。

BT兵器の砲台を巧みに操って、一夏をあざ笑うような優雅な機動で空を支配している。

勝てない。一夏では、打鉄式式うちがねでは、勝てない。一夏一人では、独りでは勝てない。

勝てない、なら。

（私、私が……）

混乱する思考の中で浮かび上がる一つの決意。決意にも満たぬ、

軟い意思だったが、しかし。

震える足を踏み出すには足る、それは決意

「一夏、今行く！」

決意にも見たため意思を吹き飛ばさんばかりの勢いで、赤い閃光が、弾丸のように空へと飛翔していく。

空へと、飛んでいく。軽やかに。それを当然のこととして。

「……あ」

呆然とした簪の体を、鋼の鎧が包んでいく。

今の簪にはそれが、自らを縛り押し掛かる、鎖のように思えた。

百五話（後書き）

ガッツリバトル回。

例によって容赦なく『そんな設定ねーよ』を混ぜ込みながら送りしています。

にしても、本当にどうやってビーム曲げてるんですか、マドカさんよ……。

百六話

「ハアアアアッ！」

裂帛の気合と共に、切り結ぶ一夏と青い機体の間に赤い剣閃が割って入る。

「チイツ」

「おわっ!？」

舌打ち一つと共に脛で一夏の腹を蹴り上げ、青い機体は自らを狙って放たれたエネルギー刃から身をかわした。

「一夏、無事か！」

蹴り飛ばされて崩れた姿勢を立て直した一夏の前に、緋色の装甲を煌かせた篠ノ之箒が二刀を構えて立つ。

「箒ちゃん、助かったあ……」

「本気で泣きそうな顔をするな……っ！ 男なんだからもうちよつと虚勢を張れんのか、お前は！」

心底からの安堵している男の態度に、箒は体の力が抜けそうになった。

如何にも一夏らしい態度だと言えば、実際そうなのだが。

「……ええい、兎も角。一体どういう状況なんだ、これは。アイツは……アイツ、は……アイツは、え？」

気を取り直し、改めて正面から敵を見据えた箒は、青い装甲を纏

ったマドカの顔を見て、目を瞠った。
訝しげな目で箒を睨む、その顔に。

「……なんだ、お前は」

ISのハイパーセンサーが補足する三百六十度全方位を維持する
視界に、同時に二つの同じ顔が存在していると言う状況。

敵が想い人と全く同じ顔をしていると言う現実。

敵前で我を失うには、充分すぎた。

「一夏、だと……？」

「……第四世代機」

一方のマドカは、新参した赤いISが何者であるかを理解してい
た。

あかつきはき
紅椿。

IS発明者篠ノ之束が自ら開発した、世界で唯一の第四世代機。

展開装甲技術を用いた、リアルタイム・マルチロール・アクトレス即時万能対応機。

現在その帰属を巡り、世界各国が揺れている。

だが、そんな技術的な意味合いは、マドカにとってどうでも良か
った。

(赤いIS……)

沸々と湧き上がる、黒い炎。

赤いIS。それを纏うべき存在。目の前のIS。それを纏ってい
る、何処の誰とも知れぬ小娘。

黒い炎が、殺意となって現実を焦がす。

「……死ね」

「なっ!？」

問答の暇も与えずに、マド力は箒に向かって銃剣を叩きつける。その背後に居る、怯えた目をした一夏ごと、押しつぶさんばかりの勢いで。

眼前に展開されているホログラフィックバイザーに表示された、撤退命令など目に入る筈も無かった。

「何なんだお前は、何のつもりで　　っ!」

「フン」

嵐のように叩きつけられる斬撃。

その一つ一つに、明らかに自身に向けられた怒りを感じ取り、箒は戸惑う。

正体不明の、一夏とそっくりな女から向けられる、明確な敵意。殺意。

「コイツ、強い……!？」

二刀で連撃を裁きながら、箒はその事実には戦慄する。

背部に待機させたままのBT兵器。そして、今振り回している銃剣。　　そう、銃剣なのだ。

明らかに遠距離からの砲撃戦に秀でた機体で、二振りの刀を主武装とし、そして自身も剣戟を得意とする箒を押し込んでいる。

肌を震わせる程の明確な殺意の込められた一撃一撃は重く、箒の内心に焦燥の念を沸き立たせる。

実戦の命のやり取りへの、当然の経験の無さが、箒の余裕を奪つ。

もし彼女が独りであったならば、早晚と間を於かず、首を取られていただろう。

「箒ちゃん！」

「っ！」

名を呼びかけられただけで、意図を理解する。叩きつけられた銃剣をいなして、半身を捻る。その僅か隙間を縫うように。

ガガガガガッ。

毛ほどの躊躇いも無い銃撃が、青い機体へと浴びせられた。

箒に当たる危険性など、まるで考慮していない。箒が確実に射線から逃れる事を、確実に信頼している。

一夏が、手にしたサブマシンガンを、箒の背後から撃ち込んだのだ。

銃身は短く、弾速の遅い威力の無い攻撃ではあったが、一瞬の隙を作るには、充分。

「テエエエエアアッ！」

回避のために捻った体、翻す身体にスラスターの推力も交えて強大な遠心力を発生させ、それを余すことなく運動エネルギーへと変換し、必殺の斬撃として叩きつける。

青い機体は銃弾への対処に一瞬箒への対応が疎かになっていた。

箒は直撃を確信した。

だが。

「っ！？」

「アクティブ・バインダー
非固定自立稼動防壁！？」

驚愕に目を見開く箒。一夏もまた、驚きの声を上げる。

ニヤリと、嘲りの笑みを浮かべた、青い機体の操縦者。

彼女と箒の二刀との間を隔てるように、高密度の防御力場を張り巡らした浮遊物体が滞空していた。

それは、青い機体の背部兵装担架にBT兵器と共に連結していた

羽状のユニットに違いなかった。

「……シールドビット。あらゆる位置から敵を狙う牙と対を成す、あらゆる攻撃から身を守る盾。ちゃんな連携など、この私に通用するものか」

侮蔑を隠さない声音と共に、次々と青い機体の背部から、砲撃ユニットが切り離されていく。

それらが砲口を向けるのは、勿論。

「このっ……！」

「又ウウ　　！」

弾幕をばら撒く一夏。エネルギー刃を四方八方に奔らせる筈。

「ハハハハハハッ！　蚊蜻蛉の様に無様に落ちろ！」

襲い来る光弾の雨に、悪魔の嘲笑が重なった。

どうするんだ一夏、このままでは斃り殺しだぞ！？

アイツ、狂った感じの言動の割りに、やってる事が的確すぎる！

近づかねければ脅威にならないって、弁えてるよ！

そもそも何なんだアイツは！　何でお前は襲われているんだ！

何処の女だ！　何でお前と同じ顔をしている！？

知らないよそんなの！　どうせアレだって、生き別れた双子の妹か、失踪した親父たちが拵えた隠し子とか、それか悪の秘密結社とかが作った僕か姉ちゃんちゃんの戦闘用クローンか何か！　ISもあからさまに盗品っぽいし、多分絶対如何わしい事情があることは間違いないよ！

悪の秘密結社って、お前……いやまて、戦闘用クローンだと？

そんな馬鹿な話が、そもそもヒトクローンの製造は理論的に不可能だと半世紀も前に……

本音とか建前とか、そういうの色々あるんだって、さ！ で、そういうやつちゃいけない科学実験とかもやりたくなる人達も居るの！

……姉さんのような人が

東さんの場合はそんな誰にでも出来る事をやるとは思えないけど……ああでも、姉ちゃん二号とか作りたくなったりとか、どうなんだろうなあ？ まあいいや、兎も角、僕とか姉ちゃんとか、ついでに篝ちゃんもなんだろうけど、そういうのが勝手に作られそうな理由とか、身に覚えがありすぎて困るくらいだろ？ 実際に目の前に現れたって、ちっとも驚かないよ！

わ、私の！？

……いや、そうだな。そういう恐ろしい真似も、する人間も居るか。居ても、おかしくない

でしょ？ だから今はその辺は気にしないで、後で考えれば良いって！

それも、そう、だっ……！ どの道、小難しく考えている余裕も無いしな！

役立たずで本当にゴメン！

機体の実体化と共に励起したコアネットワーク越しに、男女の掛け合いが簪の耳の奥に届く。

今や見る影も無く荒れ果て、人影の失せた休日の公園で、ISを纏ったまま空を呆然と見上げていた簪の耳へと、上空で戦闘を繰り返す一夏の会話が、耳に届くのだ。

青い機体との戦いに臨んでいる二人の連携は、有体に言ってお粗末極まりない。

と言うより、連携が出来るほどに、どちらも機動が洗練されていない。

二対一、機体性能的にも勝りはしても劣らないだろうと言う好条

件で、一方的に敵に攻められているのだから、言い訳も出来ないだろう。

下手をすれば、どちらかが撃墜される危険性がある。

援護が、必要な場面だった。

(わた、し……私、が)

援護を。マニピュレーター越しに感じる可変速エネルギーライフルの重みに、手が震えた。

これを使って、いや、手にした銃でなくても良い。

背負った二門の連射型荷電粒子砲でも、或いは、量子化したままの近接戦闘用の超振動薙刀でも。

この打鉄うちがね式うちがね式・丙の真価とも言つべき、多連装ミサイルランチャーでも。

一撃の介入があれば、戦局は大きく変動する場面なのだから。

敵は簪の方には一瞥もくれない。攻撃は高い確率で命中する公算がある。

撃つべきだ。攻めるべきだ。

更識簪の存在を示すためにも、攻撃を、戦闘を行うべきなのだ。

(でも……どうして、なんで)

動けない。動けないのだ。

最初の一步を踏み出し損ねただけ、それだけで簪は、動く勇気を失っていた。

戦う事が恐ろしいのでは、無い。

自分の行動の意義が無に帰す事が、何よりも恐い。

それは、あらゆる面で自身より勝る優秀な姉を間近で見てきた諦念が生み出した、拭えない恐怖だった。

いざ攻撃を、援護を行って、それが、不ふ必要ひつだったと言われたら

(怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い……)

自分の想像でしかない未来の光景に、背筋が凍り、身体が震える。

(怖い。怖い……)

だがどれほど恐怖を訴えても、そこに救いなどありはしない。

既に皆、簪を置いたまま、簪に見向きもせぬまま、先へと進んでいるのだから。

(いや、いやだよ、いや、いや、いや、なんで……)

なんで、何時も何時も、こう。

気付けば誰から見向きもされなくなっているのか。

足が訳も無く震え出す。

意味も無く後ずさり、ISを身に纏ったまま、無様に尻餅すらつきそつな有様。

ガサリという、何かを踏みしめる音が、聞こえた。

「……あ？」

呻き、下を向き、足を、どかす。

それは、薄いビニール袋に包まれた、映画のパンフレット。

僅かに覗く表紙に記された、特撮ヒーロー映画の、タイトル。

面白かったねと、語り合った。二人並んで、大きなスクリーンで、見た。

「……ああ」

装甲に包まれた手に、不意に、暖かな感触が、蘇る。

凍りついた心を溶かす、暖かな胸の高鳴り。

手を繋いだ。男の子と、初めて。

「織斑」

空を見上げる。

激突しあう金属の軋む音。空を走る火線。

そこに、彼は居た。厳しい顔で、敵へと立ち向かう、織斑一夏が。簪の手を握ってくれた優しい少年が、確かに、そこに。

そこに居る少年の顔を確かに視界に納めて、遂に、簪の心の内に僅かな、勇気が芽生えた。

(いける……ううん)

頭を振る。恐怖を追い払うために。

(今、行くしかない)

決意を、宿すのだ。宿した決意を、形にするのだと、そう決意を重ねる。

(私が、私が織斑を　　織斑のところへ、織斑の手を)

つかむ、助ける。振り向かせる。

そう、だから今こそ。

足元に落ちていた映画のパンフレットを、手に取り、恭しく、胸に一度だけ、抱きしめる。

勇気を貰うように、勇気を確認するように。

それからそっと、まだ無事だった、ベンチの上に戻る。

本当はきつと、彼と隣り合って座る筈だった、ベンチへと。そこが自分の居場所だと、確認するかのように。

脚部スラストーに火を点す。

上を向き、視線は一点に固定し、やるべき事を、定めて、胸に宿った僅かな勇気が消えない間に、今、飛ぶしか　　いや、間違いなく飛ぶのだ。

決意を、意思を形にする鋼の鎧は、簪の心に従うまま、彼女を空にいざなう。

(援護を)

打鉄式うちがね式は急速に上昇していく。最早簪の胸の内には、恐怖のかけらも存在しない。

戦う意思が、戦うと言う意思だけが、最早それしか、存在しない。
(背後から、一気に……！)

前方に居る二機への攻撃に集中している青い機体へ背後から奇襲を掛ける。

勿論味方に攻撃が中らないように高度を、角度を調整して。

(荷電粒子砲、最大出力……！)

背部に背負われた二機のバレルが肩口から九十度倒れ、前方へと向かい発射体制を作る。

膨大なエネルギーの集中を示すように、砲口からエネルギーが光となって漏れ出す。

高エネルギー警報を感知したのだろう。

敵が振り返る。味方への攻撃に集中していたBT兵器が、機動を変える。

「遅い……！」

我知らず、言葉は漏れていた。

もう遅い。

迎撃は間に合わない。簪の攻撃は中る。

簪の勇氣は、確実に形になる。

彼と繋いだ手の感触、掌に残る確かな暖かさ　　勇氣を示すために。

手を繋いでくれた彼に、更識簪と言う存在を刻み込むために。

必要だと、思ってもらったための。想ってもらいたいが故の。

「荷電粒子砲、発射……っ！」

マニピュレーターユニット内の砲撃管制トリガーを、引き

「更識、止める！」

少年の声。

瞬間、掌に感じる暖かさが、消えた。

百六話（後書き）

噛み合わない。

不幸属性なのかなーと、書いてて思った。

まあ、周回遅れで参加したヒロインは、単行本一冊以内に追いつこうとすればそれはそれは苦労する、と言う話なのかもしれません。

原作ではあっさり落ちたけどな！

具体的には七巻の半分目くらいで！

百七話

高エネルギー警報。友軍機からの支援砲撃。

発射体制に入った打鉄うちがね式式・丙。

敵だけを見据える、更識簪。

敵以外見えていない、更識簪。

水平線を、青空を、太陽を背に、ISの内側で口を引き結んでい
る。

高エネルギーの発生源は、長射程大出力を有する、両肩から前方
へ向かって伸びる二門の荷電粒子砲。

本体のジェネレーターと直結したそれは、打鉄うちがね式式・丙の武装の
中でも一際激烈な威力。

その一撃が、決まれば、あの青いISは大ダメージを受ける事は
間違いない。

況やシールドビットとやらで防いだとしても、防ぎきれぬただで
済むとは思えない。

そして敵は僕と篝ちゃんへの攻撃に集中しており、更識簪は敵の
背後を取った。

直撃必至。

戦況を一変する必殺の一撃。

これで、危機を脱出できるという歓喜の念と
でも。

何故だろうか。

背後で、太陽の日差しを反射する、磨きぬかれたビルの窓が、いやに気になった。

(背後、に……)

ビル。開けた臨海公園の直ぐ傍には、高層ビルの立ち並ぶ、ビジネス街。

それがどうした。今更何を、そんな事を気にしても　　いや、待て。

悪寒が実感を伴い、背筋を走る。

「更識、止めろ！」

とつさに湧き上がった衝撃そのままに放った声は、悲鳴のようにも聞こえただろう。

おそらくは必死の形相で、僕は砲撃体勢に入った更識を押しとどめる。

撃たせてはいけない。撃てば　　背後の、ビル群が。

荷電粒子砲は打鉄つちがね式・丙の保有する武装の中でも極めて高い威力を誇る射撃兵器だ。

その破壊力は、B T兵器が発射する粒子光弾が豆鉄砲と思えるような、過剰な　　都市部で放つには、あまりにも過剰に過ぎるものだ。

戦闘空域は、臨海公園を間に挟み、海とビル群の狭間に形成されていた。

海側から敵を撃とうとすれば、当然敵の背後には林立する高層ビルが射線に入る。

荷電粒子砲は、過剰な威力を誇る。鉄筋コンクリートで作られた、耐震性に優れた日本の構想建造物であっても、容易く貫通する程度には、過剰な威力を誇るのだ。

今日は日曜日、休日とはいえ　　オフィス街に、人間の姿がゼロと言う発想を浮かべるのは、あまりにも樂觀が過ぎるだろう。撃ってしまえば、敵に避けられてしまえば、無関係の人々に、高い確率で死傷者を出してしまうと考えるのが、当然の状況だった。

「撃つんじゃない、撃つな更識！」

改めて、僕は繰り返す。

更識も、どうやら僕の憂慮に気付いてくれたのだろう。

更識が構えた二門の砲頭から、エネルギーが失散する　　してくれた。

「助かった……って、っつ！」

安堵の息を吐いて、しかし次の瞬間には目を見開いていた。

砲撃体勢を解除した更識に向けて、敵が、青い機体が銃剣を振りかぶっている。

一瞬で更識の元まで、詰め寄ったらしい。

「待てこのっ！」

サブマシンガンを発砲。シールドビットの防御力場を貫通するよ
うな威力は無い。

つまり、足止めにもならなかった。

「この……っ！」

篝ちゃんの声は焦りを伴っていた。

彼女はBT兵器の砲撃により行動をさえぎられている。位置的、
距離的な意味でも更識への救援は不可能。

では、僕と言えば。

やはり更識への救援のための最短距離をふさぐ様に、BT兵器の
射線が差し込まれている。

機体の防御力は元より少ない。僕の回避能力は低い。僕にはこの
機体の運動性を引き出しきれない。

更識は空に立ち尽くしている。

何があったのか、回避の軌道の一つも見せず、呆然と　　呆然

と。

(……僕を、見ている?)

いや、見ていない。

視線は僕に向けて、その実、瞳は何も映していない。

まるで、物の見方を忘れてしまったかのような、色の失せた瞳

その瞳を、見てしまえば。

「勘弁してくれ……っ！」

年頃の可愛い女の子が、場末の雑居ビルの屋上から飛び降り自殺でもしそうな男と同じ瞳を、するなんて。

「勘弁しろってんだよ、もうっ！ ゴメン箒ちゃん、ちよっと頼む！」

「ちよつとお!? って、まて一夏、お前一体何を……！」

箒ちゃんに一言告げて、そしてそれ以上は何も告げず　　そんな

な余裕も無い。

思念制御により、機体システムへの命令を入力。

特殊機動制御機構『スターバック』起動。

その入力を完了した瞬間、僕の身体から、全ての自由が消えた。

入力を受けた機体が自動でイグニッション・ブースト瞬時加速に入る。

超高速の近接格闘戦に対応するために機体の各所に備え付けられたサブスターの全てを展開し、人が人として活動するのは到底不可能な、ISのPICですら処理しきれぬ程の変態的な起動に突入する。

ジグザグに、デタラメに。

戦闘起動としての正しさなど端から無視したその動きは、BT兵器として追いきれぬものではない。

(BT兵器を丸ごと潰しきった実績だって、僕にはあるんだよ……)

！)
全身に掛かる荷重に歯を食いしばりながら、動かぬ身体に反して唯一自由を維持している、思考に全力を傾ける。

イメージは一つ。

大海の荒波を越えて、海中に潜む獲物に突き立てる、鋸状の刃を持つ鋸。

自らを一個の巨大な鋸へと変えて、敵を目掛けて、突撃を掛ける。

モビータック

クワイエケ

白鯨に搭載されていた有線式自在稼動鋸の誘導制御プログラムを移植し、それをIS本体の起動制御プログラムとして応用すると言う、離れ業　　というか、無茶。

傍から見れば特攻としか思えないだろうし、現実にもそうだ。

シールドブレイカー

やってる事は正面に雪片・改を構えて、敵目掛けて体当たりを仕掛けるだけなのだから。

うちがね

現状、僕がこの打鉄式式・丁を操るにあたって、しかし最も有効にこの機体の運動性能を生かす方法は、これしかなかった。

ISのハイパーセンサーとリンクしているが故の、超加速された思考。

しかし、現実には於けるそれは、刹那の間と表されるような、ほんの僅かな時間。

粒子光弾の着弾すら間に合わぬ、一瞬の後。

眼前に、青。鈍色の前を塞ぐ寒々しい青色だ。

加速により黒色に染まりつつある視界が捕らえたのは、それだけ。

それで、充分。

衝撃は、一瞬も間を置かずに、訪れた。

機体が軋む。それはつまり、内側に居る軟い僕の身体も、軋む。

轟音に、目を見開く。

現実を認識しようとして、認識できずに混乱した。

(そもそも、私、何を……)

していたのだろうか。ここは、何処だっただろうか。今は、どんな時なのだろうか。

「試作品は試作品か、結局……」

目の前で声が聞こえた。苦渋に満ちた音だ。

見る。二つの鋼が重なり合っていた。

青と、鈍色。鈍色は、簪自身もまた、纏っていた。

「……なんだこれは？ 何かの冗談か？」

「こっちだって冗談だって思いたいつての……！ 切っ先には、シルドブレイク機能が届いていないとか、どんな、冗談……」

グラリと、鈍色の機体が傾く。

手にしていた大剣に、青い機体に向かって突きつけていた大剣に輝が入り、刹那の間も於かず、砕けて散った。

侮蔑の顔を浮かべる、青いISの操縦者。

苦渋の顔を浮かべる、鈍色のISの操縦者。

青い機体は、装甲損傷により内部機構から火花を散らすシールドビットを手前に配置した、悠然とした態度。

鈍色の機体は、両手持ちしていた大剣は鍔元から先は粉々に砕け散っており、あまつさえ、脇腹に。

「つくづく、つまらん」

グイと、青いISはマニピュレーターを捻る。

胸の前に突き出し、長銃身のライフルのグリップを握った、マニピュレーターを、捻る。

「っ、ぐう……っ！」

その動きに反応して、鈍色の機体からうめき声上がる。

当然だろう。青いISが握るライフルの底部に備わった銃剣の鈍い切っ先が、腹部の装甲を貫き、脇腹を抉っているのだから。

銃剣の切っ先に、赤い血が滴る様を、簪は見た。

「……え？」

理解の出来ない、それは光景だった。

理解を拒みたくなるような光景、だった。

だが現実だ。目の前で現実としてそれは成立していた。

織斑一夏が腹を抉られているという、その状況が、確かな現実として、簪の目の前で繰り広げられている。

(なん、で……)

何でこんな事に。どうして。

何があつて、簪の目の前にはこんな悪夢のような景色があるのか。

こんな現実は、おかしい。

こんな現実、あつてはならない。

(だって……だって　私が。織斑を)

『更識、止める！』

(　　っ！)

認めがたい、それが現実だ。

簪は窮地の織斑一夏を救おうとして、しかし織斑一夏はそれを拒んだ。

何故、と理由はわからない。拒まれた。行動を、勇気を否定し、

妨げられた。

その結果が、これ　　これ？

(違う……ちが、う……)

その後で、簪は砲撃の姿勢のまま、何も出来ずに呆然としていた。呆然としたまま、向かってくる敵に、何の対処もせず　　目の前で一夏が、傷ついている。

目の前で、一夏が。攻撃を受けていたのは、簪。傷ついているのは、一夏。

「私の、せい……？」

漏らした言葉に、でも、誰も答えない。

目の前の二人　　同じ顔をしている？　　二人は、互いのみを視界に納めていた。

簪には、一瞥も、くれない。

「思いのほか時間が掛かったが……漸く、帰ることが出来そうだ」
貴様の望みどおり、と。サディスティックな笑みで青いISの操縦者は言った。

一夏は腹に刺さったままのライフルに手を添えて、呻く。

「いやいや、まだまだ。お楽しみは、これから、……だろ？」

あからさまな虚勢。簪ですら理解できる、苦痛に満ちた顔で吐き出された、虚勢。

青い機体の操縦者は、その言葉に晒った。

「なるほど、確かに。　　楽しみは、これから、だな？」

恐悦に満ちた笑み。正面から見れば、確実に自らの死を覚悟せざるを得ないだろう、そんな笑みを、浮かべて。

女は、一夏の腹につきたてた銃剣　　長銃身のライフルのトリガーに、指を。

(　　！)

助けなければ。簪の思考は、瞬時にそれに満たされた。

一夏を救出する。今すぐに、自分が動いて。

自分だけが動ける、目の前で行われようとしている惨劇を、簪だけが、止められる。

動けば。動く。動いて　　っ！

「アアアアアアアアアッ！！」

「！？」

また否定されたらという恐怖を、怨念染みた使命感で塗りつぶし、簪は自らのISを目の前へと突撃させた。

行動の意味を、結果を、彼女は何も考えていない。

ただがむしやらに、スラスターを全快にして、目の前の惨劇へと、叫び、突っ込む。

「邪魔だっ！！」

「んぎっ！？」

猛進的な行動は、あるうことが救うべき織斑一夏を盾にするという行為によって、遮られた。

「あああ！？」

激突。二体の打鉄つちがね式式が、無様に背と腹をぶつけ合う。

纏れ合い、デタラメな方向へ推力を向けて、結局は地面へと。

轟音と、舞い上がる土煙。ISのシールドバリアによって殆どの衝撃が殺されている事が、いつそ惨めだった。

ハイパーセンサーで補正された思考が、その全ての現象を経緯から結果に至るまで余すことなく理解させるのだから。

（どうして、どうして、どうして……っ！）

救おうとして救われて、今度こそと思えば無様にしくじる。

涙が零れ落ちそうなほど、余りにも惨めな状況だった。

「どうして、こんなっ……！！」

二機のISの質量の激突によって形成されたクレーターの中で、身を投げ出したまま、簪は呻いた。

もう嫌だと、悲鳴を上げたかのような、声で。

「……本当だよ、全く」

「……え？」

土煙の中で発した言葉に、確かな答えが、返ってきた。
直ぐ傍から。

自らと重なり合うように土に埋もれている織斑一夏からの、返事の言葉が。

「ホント、どうしてこう、上手く行かないんだろうね？」

彼は彼女を見ていない。

空から銃口を突きつけてくる青い機体だけを、見ている。

でも、言葉は確かに、簷の声に応じたものだった。同調したものだった。

「僕だって本当はさ、思っただよ。格好よく敵をやっつけて、華麗に女の子を救ってみたいとか、さ。……でもどうしてか、いつもいっつも……」

上手く行かない。

青い機体が手にしたエネルギーライフルを簷たちに向けて放つ。

赤い斬光が割って入り、それを逸らす。

背後のラックに戻したBT兵器の砲口から、シャワーのようなレーザーの雨。

赤い機体が、必死の挙動でそれを防ぐ。

二刀により弾いたレーザーが、周囲の地形を土砂の山へと変える。「というか、上手くやろうとするとときに限って失敗するんだよなあ。

この前は腹。今回もか……ああクソ。痛いなあ畜生。僕らみたいな戦闘向きじゃない人間って、こういう時苦労するよ」

冗談とも本気ともつかない、言葉の割には暢気に過ぎる声。

意味が解らない。何が言いたいのか、伝わらない。

本当に言葉は、簪に向けて言っているのかどうか、不安を覚える。そもそもだって、簪が今この状況に陥っているのは、陥っているのは。

（貴方が、私を……）

織斑一夏が、更識簪の救いを。

「貴方が私を、拒んだから……っ！」

無下に、無残に。引っ叩くように、伸ばされた手を叩いて払う様に。

織斑一夏が更識簪に行った行為がそれだ。

「……僕が？ 更識を……」

目を丸くする一夏。本気で、意味を理解できていないと言っ風だった。

簪は一夏を睨んだままそれ以上は何も言わなかった。言えなかった、とも。そもそも、先の言葉すら口にする気が無かった物だったから。

数度、瞬きを繰り返す一夏。やがて一つため息を吐いた後、口を開く。

「良く解らないけど」

そんな前置きから始まった。失望感が、簪の心を満たす。

だが、その後続く一夏の言葉は、簪の理解を超えていた。

「でも確かに、この状況は僕が悪いか。お陰でデートが台無しだし」

本当に、ゴメン。謝罪の言葉は誠意に満ちていた。

「デート中に相手の子を方って鉛球ばら撒いてるなんて、幾ら自分の命が掛かってても、やっていい事ではなかったね。うん、ゴメン。久しぶりの命のやり取りだったんで、その辺の配慮を忘れてたよ」

戦鬪の経緯、その結果の自身の負傷など、何一つ言葉には含まれていない。表情は、本気のそれ。

彼にとって重要なことはそうということなのだ、簪は漸く理解し

た。

「……デート？ それ、なの？ 謝るのは」

「……何か間違ったかな、僕。他に何かあったっけ……？」

「あつ、たつて……、だつて、今」

敵。お腹の怪我。援護の拒否。重要な事は幾つもあるはずだ。

だが一夏は目を瞬かせた後、軽い調子で頷く。

「……？ ああ、ああうん。ごめん、面倒ごとにつき合わせちゃつて悪いね。直ぐ終わらせるから、そしたらデート再開だ」

まるで、授業で使った教材を早く片付けて、さっさと放課後に街に出かけよう、とでも言いたげな気軽さで。

それは簪の理解の範疇を超えた言葉だった。

……人が必死になっているときに、随分といいご身分だな、一夏？

会話に筈が割り込んでくる。戦闘中だというのに、聞き逃せなかつたらしい。

一夏が不味い、と言う顔で付け足した。

「再開は、二人であるの恐い人から無事に逃げ出した後にしようか」

その恐い人とやらが誰なのか、私としては実に気になる場面だが「ゴメン、マジでゴメン。この埋め合わせは後でちゃんとするから！」

……まあ良い。怪我は平気なんだな？

「平気。出血は止まつてるよ。局部麻酔も効いてきた。動ける」

それは平気な状況とは言わん！ 私は私でそろそろ厳しい

が、暢気に話しているくらいだから手はあるんだろうな！

(……！)

ネットワーク越しに響く筈の言葉に、簪は今の状況を思い出した。そう、戦闘は継続中で、青い機体の脅威は未だに去っていないのだ。

デートだなんて些細な事に、気を払っている場面ではない。

だが一夏は何処までも一夏だった。

「勿論。一生に一度の初デートを邪魔したからには、確り馬に蹴られてもらおうか　あ、馬じゃなかった」

お前は全く……まあ良い。タイミングは合わせるから、さっさとやっつけてくれ

「了解」

若干切羽詰った感のある筈との通信を、しかし一夏は落ち着いた態度で終える。

既に自分の勝利を確信した者の、それは余裕だった。

自信に満ちた態度だ。

この状況に、どのような解法を導くのか。

我知らず、簪は緊張に息を呑んだ。

一夏の次の言葉に、全霊を集中する。聞き逃さないように、耳を澄ます。

土煙が晴れたクレーターの中。簪の目の前で。

一夏は空を仰ぎ、そして遂に、言った。

「じゃ、よろしく、ウサギさん」

了解した

返事は、空を切り裂く弾丸と共に訪れた。

ビル群の谷間から飛来したプラズマを纏う音速の鉄鋼弾が、筈を覆うように展開していた青い機体のBT兵器を粉碎する。

超長距離からの支援狙撃に違いなかった。

「……他人頼み？」

「誰かに助けてもらわなければ生きていけない弱い生き物だからね、僕は」

呆然と目を見開く簪に、一夏は何て事のない風に応じる。

簪は開いた口が塞がらなかった。

百七話（後書き）

追い詰めすぎてもアレだし、しかし追い詰めすぎないのもなあってんで、色々書いては消しを繰り返してたらこんなトコロに落ち着きました。

バトルは次回で終了かな！。

百八話

「にしても、流石ラウラだね」

そうだろう。もつと褒める

「うん、助かるわ本気で。僕一人だと篝ちゃんに負担かけすぎちゃつてたからね」

私が口を挟むのもなんだが、その礼の言い方は、流石にどうなんだ……？

構わんぞ新兵。側室の面倒を見るのも本妻の務めだからな

誰が新兵で側室だ！

「……ホント、ラウラは凄いわ」

何処からとも無く 一度として、同方向からの砲撃は来ない

飛来する砲弾によつて、次々にBT兵器が打ち落とされていく光景を見上げながら、一夏は殊更暢気に賞賛の声を上げた。

因みにだが、私も居る

通信越しの硬質な声が、それに応じる。一夏は眉根を寄せた。

「……クララさん、だよな？ あの、良いの？ ドイツ軍の人が街中で発砲って。ラウラだったらまだ学園の生徒って事で言い訳が聞けど」

視界を覆うホロティカルモニターに表示された通信者の名前は、クラリツサ・ハルフォーフ。

ドイツ軍特殊部隊に所属している、れっきとしたドイツ軍人である。

そんな人がISを使用した戦闘行動を、他国で勝手に行ってしまう

つたら国際問題になるだろう。

心配は要らん。たかが国際問題の一つや二つより、亭主の身の安全の方が優先されるからな。どうだイチカ、こんな良く出来た嫁は？

「誰が何時亭主になったんだよ！」

……？

「疑問符浮かべないで！」

……ああ、スマン、失礼した。日本語のミスだ。旦那様、と呼びかけなければいけないのだったな

「いい加減、変な漫画で仕入れた知識を鵜呑みにするの、止めましようよ……」

腹の痛みがぶり返して来たかのようなげっそりとした顔で、一夏は呻いた。

クララ。

クラリツサ・ハールフォンとはつまるところ、真面目な顔をして平然とお茶目な方向に思考をぶっ飛ばしてしまう女性だった。

申し訳ありません隊長、どうやら貞淑な妻路線は失敗だったようです。かくなる上は第一小隊から上申された、淫乱若奥様路線への路線変更を……ご心配なく、既に大隊付き参謀より作戦立案は完了しております

何時もながら素晴らしい仕事だ、大尉。優秀な部下を持って、私は誇りに思う

お褒めに預かり恐悦至極

「良いけどね、楽しそうだし……助けてくれて助かったし……」

仕事で近くまで来ていた二人の存在に気付けなかったら、もっと無茶な事をしなければいけなかった場面なのだ。

二人の本気が天然か判断付きかねる漫才にも、付き合っつてやるのが礼儀だろう。

「……これ、ラウラ・ボーデヴィツヒ？」

恐る恐るたずねられた言葉に、振り返る。

簪が、何とも言いがたいといった風な顔で、空を見上げている。

一夏は彼女に一つの疑問を覚えつつも、頷く。

「うん。ラウラ、丁度仕事でこのあたりに居たみたいだからね。救
援要請しておいた」

「……何時の間に」

まるで気が付かなかったと、簪は感嘆染みた息を漏らす。

その返しに、一夏はふと沸いた疑問を、たずねずに居られなかつた。

「何時の間について……あのさ、更識さん。ハイパーセンサーの情報、
チエックしてないの？」

「え？」

瞬きをする簪。たずね返された言葉が、理解できなかつた。

ハイパーセンサー。

宇宙空間での運用すら想定されているISの、周囲環境情報収集、
及び解析を行う超高性能センサーである。

当然、砲撃可能圏内などという至近距離に存在するISの情報な
ど、集める事は造作ない。

だが、

「……あ」

声を震わせた。

今漸く気付いたのだ、彼女は。

戦闘開始してから数分と於かずに、味方識別信号を有するISが
潜伏（対探知）モードで射撃可能エリアに進入してきていた事を。

事象集積ログを辿れば、彼女の纏う打鉄うちがね式はその事に初めから
気付いていた事が解る。

そして。

「あ、ああ……」

その情報を見つける。

1 0 0 1 0 1 2 | 警告・至急：要出力補正。要射角変更。民
間施設破壊の可能性・大
1 0 0 1 0 1 3 | 警告・至急：要出力補正。要射角変更。民
間施設破壊の可能性・大
1 0 0 1 0 1 4 | 警告・至急：要出力補正。要射角変更。民
間施設破壊の可能性・大
1 0 0 1 0 1 5 | 警告・至急：要出力補正。要射角変更。民
間施設破壊の可能性・大
1 0 0 1 0 1 6 | 警告・至急：……………

機体のログは同様の文章を幾度と無く繰り返していた。
機体が叫び続けていた言葉を、簪は漸く理解する。

撃てば、都市を破壊する危険性があると。撃つのを止めると。撃つのを。

『止める、更識！』

「……………」

「まさか……………気付いて、無かった、とか」

「……………」

「ああ……………」

耳を塞いで頭を振る簪の態度を見て、一夏はなるほど、と察した。

会話の流れに、合点が入った。

「まあ、頭に血が上っちゃうと周りが見えなくなったりも、するよね」

特に、彼女は内向的で頭の固い娘っぽいしと、これは内心だけで思う。

「わた、し……………なんてこと」

「いやいやいや、未然に防げたんだから次に生かせば……って、キヤラでもないか、キミは」

声を震わせ顔を青くする簪に、一夏は苦い顔を浮かべる。

頑なな人間によく見られる、たった一度だけの失敗で心が折れてしまつと言う、簪は今まさにそういう状況なのだと、容易く見て取れたのだ。

そして、こうなってしまうと、周りがどんな言葉を言っても伝わらない物だとも、理解していた。

(……経験、あるしな)

ため息を吐いて、過去回想に耽り、以前の自分を内省したい衝動を覚える。

だが、そんな優雅な時間を過ごしている場面ではないと、解っていた。

空では少女たちが、未だ戦闘中である。

既にいくつかのBT兵器を破壊されているというのに、ラウラたち、こちらの援軍の登場により数的な不利は増しているというのに、青い機体は撤退する様子が見られない。

この状況下に於いても、巧みな起動で正面の幕を跳ね除け、ラウラ達の支援砲撃を回避し、砲門を地表にいる一夏たちに向けようとしている。

一夏は自分が戦いという行為において役に立たない人材であると、自認している。

負傷している現在の状況で幕の支援などしようと思ったのなら、返って足を引っ張ってしまうと、正しく理解している。

だが、おそらく自分が原因で、『女の子同士が生死を賭けた戦いをしている』などという心臓に悪い状況が繰り広げられているのは、それをただ、見上げているだけなのは、いかにも具合が悪い。

だが、何が出来るというのか。

主武装である雪片・改は既に破損して存在しない。
予備の実体剣である脇差や、小型の拳銃を用いて近接戦を行うなど、自殺行為どころか周囲を巻き込んで酷い事になるであろう事は、先に述べたとおり。

サブマシンガンは、射程が短く、此処から撃つても届かないし、そもそも近づいて撃つてもたいした威力は無い。

つまりは、手詰まり。

自分一人で、あつたのなら。

(都合が良いやら、悪いやら……)
ため息が出た。

震えて膝を突く少女の肩に、手を置いた。マニピュレーターを量子の波に戻して、直接。

俯いていた少女がそれに反応して顔を上げる。
涙で頬が濡れていた。

自身の失敗を致命的なものだと思ひ込み、絶望に打ちひしがれている顔だ。

何を言うべきか、言っても何も伝わらないだろうなどと、そういう思いが先に立ち、結局、一夏の口から出た言葉は。

「……そんな貴女に、チャンスをプレゼント」

おどけた調子で、何処かの誰かの真似っ子だった。

簪から返事は帰ってこなかった。瞳も、相変わらず色を失ったまま。

一夏は構わず、言葉を続けた。

今度は、簪以外の誰かに向けて。

「やり方は知っている筈だな、打鉄……さあ、歌え」

簪は恐怖に震えていた。失意に沈んでいた。

彼女はこれまでも誤解無く、自分が不必要な人間だと正しい理解をしていた。

だが、不必要なだけで、まさか存在が害悪になる人間だとは、思っていないかった。

むしろ自らの行為が、状況を悪化させている。

自分が居ない方が、むしろ状況はより良い方向へと好転していた。その事実を理解してしまったが故、彼女の心は壊れていく。

『居なくても良い』ではない、『居てはいけなかった』だなんて、絶えられる筈が無かった。

(いやだ、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや、いや……！)

何も考えたくない。何処へも行きたくない。一人になりたい。

しかし独りで居れば、必要以上のことを考えてしまう。

自身の無様、無能を、むしろ自分こそが、責めたててしまう。

辛い状況。救いは、自分の内側には存在しない。しかし、他者に救いを求める事は出来なかった。

なぜなら、彼女は自身を、他者に関わってはいけない人間だと、理解してしまったから。

故に彼女は、何時までも一人で沈み続ける。

まるで泥濘の中、或いは、冷たく凍えるような、深海の中をただ一人で。

(……………い)

そこに。

(……………い)

海の底で、彼女は自分以外の声を聞いた。
そんな気分を、覚えた。辺りを見渡す 辺り？

「ここ……？」

何処だろうか。

前後左右、上下の差の無い不可思議な空間。
PICの独特の挙動とも違う、無重力の感覚。
視覚ではない他の何かで認識する世界。
簷はいつの間にか、そんな場所へ居た。

一人で？

いや。

(……………い)

他に、誰かの声があった。
姿は見えなくても、確かに、声が この声の主は？
いや、この声は、何処から響いて、何を言っているのか……？

(……………い、……………い)

耳を澄ます。

何を言っているのかと、耳を澄ます。
そして漸く、聞こえた。

「え？ ……ええ？」

突然恐怖を訴える言葉の羅列がやんだと思ったら、簪の知る何時もの一夏の声が聞こえてきた。

辺りを見渡す。しかし周囲には謎の空間が広がっているだけで、人の姿は無い。

姿は無い、しかし、人の気配はあるように感じられた。

誰かに見られている感覚がある。誰かが傍にいる気配がする。

しかし、姿は見えない。それなのに、見ている気もする。

「何、なんなの、これ……？」

「ゴメン、怖がらせちゃったか。まあ突然だったし、説明しても聞いてくれなそうだったし……って、言い訳だな、コレ」

何となく、頭を掻いてたりするのかな、というイメージが簪の中に浮かんだ。

(イメージ……)

イメージ。簪はこの不可思議な空間において、織斑一夏と会話をしているイメージを有している。

織斑一夏が傍にいるような、この空間の何処かに 違う。

むしろ、この空間こそが。

「織斑の……」

「そう、僕の心の内側、とでも言うべき場所なのかな。普段取り繕ってるなつつつつつつさけない声が聞こえたたる？」

漏れた言葉に、あっさりと正答を返された。

照れくさそうな顔をしている と、簪には思えた。

空間がそんな風に揺れている感じがしたのだ。つまりは、彼が言ったとおりに、この空間は、彼自身の。

「種をばらすとね、ISのコア同士のプライベート・ネットワークを利用して操縦者の深層意識を接続しているんだ。もうちょっと正

確に言うと、僕の意識領域に、更識さんを招いたって事になるんだけど」

「意識……それ、クロッシング・アクセス相互意識干渉じゃ……クロッシング……それは、まさか」

資料で読んだことがある。

織斑一夏の資料。彼の操るISの資料。そのISが持つ、IS同士を強制的に相互意識干渉させる、特異な単一仕様能力のことを。

「かぜのさかなのうた……?」

「ISは人間には見えない領域で、各機体の情報を非限定情報共有している。あらゆる情報を、だ。各国が秘匿している第三世代武装モビータイックの設計データだろうが、単一仕様能力だろうが。そして、白鯨の単一仕様能力である。かぜのさかなのうたは機体の武装、形状によらないコアのみの性質によって発現する能力だ。やり方を知っていれば、モビータイック白鯨でなくても、出来る。……多分」

「多分!？」

滔々と語りつくして最後に出た言葉に、簪は目を剥く。

周囲の空間がばつの悪そうな空気を纏った。

「いやね、姉ちゃんたちに『絶対やるなよ!』って前フリ……じゃないや、命令って言うかお達しを受けてたから、実際に打鉄で白鯨の単一仕様能力を使うのは、コレが初めてなんだよ。まあ、これは能力というかコアのブラックボックスに秘匿された機能的な性質が大きいから、何とかなったんじゃないかな、うん。パソコンで言えば普段は暗号化されて閉じられているポートを開いちゃっただけみたいな物だし」

「ポートって……。コアのブラックボックスに手を加えるなんて、出来るわけが」

「案外頼めば開けてくれるものだけだね……って、まあそんな事は今は良いや。クロッシング・アクセス相互意識干渉下の時間的概念から半ば切り離された状態って言っても、限度があるんだ。本題に入ろう」

「……本題?」

それはさておき、と手芝居する様を幻視しながら、簪は尋ねる。

本題。

そもそもそういえば、今はどういう状況だったのか、そう。

「……っ！」

気付いた。故に、身体が恐怖で震える。

だが一夏はそれに構わず、言葉を続けてきた。

「現状、僕に敵を攻撃する有効な手段はない。だから、キミの打鉄うちがねの武装である四十八門からなる独立型誘導ミサイル発射機構やまあらし『山嵐』の誘導制御を渡して欲しい」

「やま、あらし……でも、アレはまだ、マルチロックオンシステムの調整が。下手をしたら……」

それこそ、未遂で終わった民間施設の破壊の様を、顕現してしまう事に。

未完成の誘導制御システムを搭載したミサイルを実戦運用するなど、簪には恐ろしくて出来ようもなかった。

もうこれ以上失敗したくない。その思いが、強かった。

「それを僕が、この相互意識干渉クロッシング・アクセスを利用してマニュアルで制御する。大丈夫、誘導弾の制御には慣れてるんだ」「他のISの固定武装を、外部から操作する？ そんな、こと……出来るわけ」

マニピュレーター保持の銃型、或いは刀剣型の武装のような単純な機構のものならまだしも、機体と搭乗者の特性に合わせて調整された精密誘導兵器の制御を外部から行おうなど、とても可能とは思えなかった。

だが一夏は自信を持って宣言する。

「出来るよ。キミが許可をくれて僕をキミのISのコアに接触させてもらえれば、確実に出来る。この単一仕様能力ワンオフ・アビリティはそういう事が可能な能力なんだから」

「私、が……？」

「キミのISで、キミの武器だろ？ 最終的に優先されるのは、キミの意思だよ、こればかりはね。……東さん、そういうちょっと融通が利かない感じがあるのとかが好きなんだから」

便利便利とばかりには行かないんだ、と一夏は軽い調子で言った。

「そん、な……」

ここまでデタラメなことが出来るのだから、全部自分でやってくれれば良いのに。

何故最後の最後で都合の悪い事を言い出すのか。何故今更、私に頼ろうとするのか。

簷の心に恐怖が湧き上がる。

もう一度ISの引き金トリガーを引く事への恐怖。

一夏の頼みを断る事、その事で彼に失望される事への、恐怖。

そして、そのどちらも選ばない事、そのために過ぎていく漫然とした時間への、恐怖。

怖い事だらけだった。動ける筈がない。動けない事も、恐ろしかった。

(怖い……怖いよ、怖い、怖い……怖、い……って、あれ？)

震えて、現実の状況と同様に膝を落とし、肩を抱いて　そして、思い出すことがあった。

恐怖に震える。同じ言葉を繰り返す　そんな心の在り様が、今さっき、自分以外にも。

「……織斑」

「……どうかした？」

「織斑は、だって……」

尋ねたまま、独り言を呟いてあたりを見渡す。

ISのコアネットワークを利用して結ばれた、精神空間

織

斑一夏の精神、なのだろう空間を。

恐怖を感じた。

状況に対する恐怖。生死に関する恐怖。戦う事への恐怖。自分自身への。他者の視線への。昨日、今日、明日以降続く日々への。

恐怖ばかりが、織斑一夏の中にはあった。

馬鹿馬鹿しい。傍から見ていれば誰もが幸福だと感じる毎日を過ごしている男が、何をそんなに恐れてばかり。

馬鹿馬鹿しい。

「……ああ」

そうなんだ、と。簪は気付いた。なるほど、腑に落ちた。

「織斑にとってはバカみたいに思えること、なんだろうね。私の、悩みは……」

「まあ、不幸自慢って言うのは、往々にして友達とかに聞かせてみると、『なんだつまらん』って言葉が返ってくるようなものだからね」

「私、友達とか、居ない……」

「全日本の女子学生の夢、休日デートまで経験した女の子が、言えた言葉かね、それ」

「夢なの……?」

「さあ? 僕は女子じゃない。キミの方が詳しいんじゃないの、その辺の事情」

「私、そんな事を聞く友達なんて、居ないし……」

「同性の友達が居ないとか、そりゃまた寂しい話をする」

「それ、織斑にだけは絶対言われたくないよ……?」

雑な言葉の応酬だった。

これが友達同士の会話なのかな、と簪は思った。
楽しいな、と簪は思った。

「力を貸して欲しい」

一夏の言葉を聞いた。

「うん」

簪は頷いた。

力を貸してあげたい。友達に。織斑一夏に。

心底から、そう思った。

だけど、でも、なんて恐れ的气氛も。

どうしても、なんて使命感や焦燥感も存在しない。

当然の態度で求められて、当然の態度で応じる。

軽く、本当に軽い調子で。

「しょうがないから、助けてあげる。ちょっと怖いけど、織斑は…
…ともだち、だし」

はにかんだ笑顔で簪は言った。

百八話（後書き）

チエルシーさん出してクラリツサさん出して、ついでにマドカも出して、これで後、出してないのは……学園の生徒とか教師とか、まだまだ結構居るんだよなあ。

流石にこれで打ち止めかなー。

戦闘はもう一話くらいのこと。

勢い余ってマドカさんを出したせいで、処理するためにテキスト量のインフレが凄い事に……。

百九話

詰の段階での駄目押しの一撃、と言う結果となったのだろう。

空中を乱れ舞うミサイルは、しかしそれぞれの軌道に確実な意味合いが存在しており、機動力で勝るISを、BT兵器を、数で圧倒した。

ミサイル同士が激突し爆炎を散らし足止めの役目を果たし、そこに本命のミサイルが回避不能の一撃を叩き込む。

得意、と言う言葉に偽りはないのだと、簪は知った。

チラと視線を背後に移す。

瞳を閉じて、PICの効力によって空中に寝そべっている姿勢の、

一夏の姿があった。

瞼を閉じて、身じろき一つしない。

簪の纏う打鉄うちがね式式・丙の多連装ミサイルポッドを、外部から誘導制御しているのだ。

マニュアルで　そんな事が、可能なのだろうか？

「練習すれば更識さんにも出来ると思うけど」

心の内側の言葉に、返事があった。瞼を閉じたままの一夏の言葉だ。

機体同士のリンク越しに、簪の思考が伝わってしまったのだろう。その事に羞恥を覚えた簪をよそに、一夏の言葉は続いた。

「そういう特性を見込まれて、この機体を与えられたんじゃないの？」

「私に……」

「出来るよ。沢山失敗を繰り返しながら、練習すればね」

「失敗……」

成功には失敗が前提。

当然の話であるが、それが苦痛でもある。

特に、失敗をしたことのない人間を常に間近で見続けてきた、簪にとっては。

「……手伝ってくれる？」

出てきた言葉は、甘えの言葉。自分でも意外に感じた、慌てもしたが、今更取り消せなかった。

意外と恐怖を覚えなかった事が、逆に怖かった。

「……僕が？」

不思議そうな声でたずね返す一夏。

瞼は開けない、姿勢も動かさない。

敵を撃破 或いは撤退に追い込むための、重要な局面なのだから、当然だろう。

簪とて、そういう重要な場面だと理解していて しているの

に、しかし、今は自分の言葉に答えてもらう事の方が重要だと思っ
てしまっても、いた。

「得意、なんでしよう？ 織斑は……」

モビーディック

「まあ……ね。白鯨の時に組んだ分割思考制御補助用の特殊プログ
ラムもあるし。コツを教えるくらいなら出来ると思うけど」

「じゃあ、教えて」

ねだる言葉。

「りょーかい」

肯定の返事に、簪は吐息を漏らすほどに深く安堵した。

一夏はこっそりと微笑を浮かべた後で 瞼を開き、空を見
上げる。

刹那、交差する視線。

自らと全く同じ顔。違う表情。

箒の斬撃を捌き、ラウラ達の支援砲撃すら凌ぎきり、だが遂に一夏と簪によるミサイル攻撃によって、自慢のBT兵器はほぼ全て損失した。一夏の突撃で破損し、機能を失ったシールドビットが残るのみだ。

翼をもがれた青い悪魔　　しかしその顔は未だ力を失っていないかった。

余力が残っている。隠し玉が、あるのかもしれないと言う底の知れなさを感じさせる、冷たい横顔。

「早く帰れってんだ……！」

四十六のミサイル。

高速で飛翔するBT兵器の破壊のために、既に三十九の弾頭を消耗している。

戦闘空域を飛翔する残り七機のミサイルを、一夏は全て、その進路を躊躇うことなく青い機体本体へと向けた。

白い尾を引き、四方八方から突進する七つの弾頭。

一を避け、二と三が粒子砲に焼かれ、その爆発に四が巻き込まれる。

残り三発。三発はしかし、間違いなく、天空へと飛翔する青い機体へ追いつき、僅かずつの時間差を作りながら遂に、直撃を。

青い機体が最後の足掻きとして、最早防御力場の生成能力を失ったシールドビットをミサイルへ向けて射出する。

それでは一発しか防げない。

残る二発のうち一発がシールドバリアー破り、もう一発は直撃する。

縦しんばシールドバリアーの突破に二発の直撃が必要だったとしても、箒が、そしてラウラたちが居る。

簪の砲撃すら、可能なのだ。

(これで……！)

一夏は勝利を確信し拳を握り締める。

大爆発。天を焦がす。爆風が一夏たちの居る地面に届くほどの。
街路の木々がなぎ倒されるほどの。至近から広がる海面が、沸き立つほどの。

「……通信障害!?!」

「チャフが……っ!」

赤く染まる空を見上げて、一夏が、簷が叫ぶ。

敵の位置を見失った。撃墜を確認した、ではない。

センサーが機能を損失したのだ。

ISのハイパーセンサーをかく乱するためには、それに匹敵する性能の 即ち、ISの能力を用いねばならない。

ならば、このタイミングでハイパーセンサーに不調が発生した意味は、一つ。

「ラウラ!」

こちらにもセンサーがダウンした。爆心地を中心として半径百キロ単位内の全情報が収集不可能になっている。目視情報に注意を払え!

海だ、潜るぞ!

ラウラの言葉に続き、箒が吼える。

爆風の衝撃で波打つ海面に、巨大な水柱が複数発生する 複数。

「ダメーまで……!」

「逃げる、の?」

「追撃を……!」

いや、止めておけ。無闇に追ったところで、出てくるのが蛇で済むとは限らん

逸る筈の言葉を、ラウラが止める。その傍に居るであろう、クラリッサも続いた。

それに、いい加減日本軍も行動を開始する頃だろう。隊長、我々は……

うむ。面倒にならん内に撤収する。夫を助けるついでに、運良くブリッツの実戦データの収集も出来た。この辺りを潮時とするべきだろう。一夏、スマンが……

「ああ、いや。こつちこそゴメンね、休日にお陰で命拾いしたよ。何を言う。無茶をすれば、この程度の危機なら一人で乗り越えられただろうに……まあ良い。何時ぞや中華丼も言っていたが、貸しを作った時は埋め合わせとやらに期待してもいいのだろうか？」

「前向きに善処します……まあ、お手柔らかに」
話の前半はスルーしつつ、言い訳染みた言葉を返す一夏。通信越しに、ラウラがニヤリと笑ったことが解った。

たっぷりと期待させてもらおう。では大尉、そう言う訳なので貴様は速やかに大使館経由で本国へ帰還しろ。了解しました、隊長例の作戦計画に関しては、後ほど暗号データ化して提出するよう

に
無論です。それでは、失礼します。ではイチカ、さらばだ

「あ、お疲れ様です。碌にお相手も出来ずにすいませんでした。今度近くに来た時には、お茶でも……」

隊長のオマケとして、期待させてもらおう

一夏の言葉に、クラリツサが微笑交じりの言葉を返す。ラウラの不機嫌な声が、続いた。

私の前で部下を口説こうなどと、良い度胸じゃないか一夏。埋め合わせとやらが、実に楽しみだ

「……お手柔らかに」
フン

冷や汗交じりの言葉は、鼻を鳴らす音で返された。
通信ネットワーク上から、ラウラとクラリツサの名前がロストする。

ISを待機モードか、或いは潜行モードに移行したのだろうか。

爆風が生み出した熱気が、海風に溶かされて行く。

「一夏」

通信越しではない、耳に届く筈の声。紅椿が、地上に降りてきた。あかつきはき

着地と同時にISを解除し、駆け寄ってくる。

そういえば、と一夏も自らのISを解除した。

「……あ」

直ぐ傍にいた簪が、此処ではない何処かを見上げるような仕草をする。

ミサイルを制御するために繋がっていたリンクが途切れたことが、解ったのだろう。

その事も含めて色々と思うところがあつたが、一人だけISを纏いつ放しというのもどうかと思い、簪もまた、ISを解除した。

「一段落、なのかな……」

一夏の呟きに、筈がくたびれた声で応じた。

「何が始まって何が終わったのか、未だに状況が解らないのだがな、私は」

「そんなの、僕だつて良く解らないよ。通り魔に襲われた気分だ」

「通り魔なんて可愛げのあるモノじゃなかっただろう、アレは」

口調はどちらも、苦い。

一夏としてはとりあえずくたびれたから、と言つもので、筈の方は、接近戦で勝ちを拾えなかつた悔いもあつて。

人の気配など最早ある筈もない、街路樹がなぎ倒され煉瓦が吹き散らされた荒れ果てた公園に、重たい空気が満ちる。

簪が、そつと口を開いた。

「そんなことより、織斑……怪我、平気なの？」

ISの解除と共にISスーツも解除し、私服姿に戻っている少女達とは違い、一夏はIS本体は解除したが、ISスーツは装着したままである。

いや、装着したままと言うのは語弊がある。
銃剣に穿たれた傷を塞ぐために、新たにスーツを変換しなおして
いた。

ISの搭乗者保護機能により既に簡易的な止血は済んでいたが、
戦闘中に完全な治療が完了する筈もない。

濃紺のISスーツのわき腹には、うつすらと朱色の染みが見えた。
「麻酔が切れた後が、怖いなあ……」

簪の手を借りて壊れていなかったベンチに腰掛けながら、一夏は
微苦笑交じりに言った。

「笑い事じゃ、ないよ……？ 病院、ううん、救急車……」

「いや、呼ぶなら救急車より姉ちゃん辺りの方が良い……というか、
もう呼んだけど」

「千冬さんを？」

簪の言葉に、一夏は姉ちゃんを、と頷く。

「街中で突然IS使って戦闘しちゃった訳だから、ね。下手に日本
国内の医療機関とかにお世話になっちゃうと」

面白くない事になる。

簪の言葉に、心底面白くなさそうに一夏は答えた。

そして、顔を曇らす少女たちに向けてシニカルな笑みを向ける。

「此処が日本で良かったよ。世界中でこの国ほど緊急、非常事態へ
の対応がのろい国は無いからね。ま、アレが市街戦なんて挑
んできたのも、その辺の事を考慮してって事なんだろうけど」

「横須賀の米軍が動かなくて、良かったね……うん？ 動いた方が、
良かったのかな？」

簪は自分で言った事に、自分で首を捻る。一夏は肩を竦めた。

「アメリカさんに助けてもらうと、命は助かっただろうけど、それ
以外が無事に済むかは解らないって話になるからね。危ない橋は渡
るもんじゃないさ。素直に学園の門の中に逃げ帰った方がよっぽど

安全だ。あそこ、国際IS委員会直轄の治外法権だし」

他にも色々あの国には頼みごとをしたくない理由とかはあるんだけど、付け足しつつ、一夏は言う。

「それ以外、か……」

箒は深々とため息を吐いた。

一夏や自分が、いつの間にかありがたくない場所に立たされていると、気付かされたのだ。

ただ彼に近づきたい、それだけの気持ちで選んだ道だったはずなのに、何故こうも煩わしいものが付きまとうのか　そう思わずには、居られなかった。

「あかつはき紅椿なんて、まだどの国への帰属も決まっていない、国際法上存在しないISだからね。元々無いものが無くなっても、誰も文句は言えない訳で」

「……恐ろしい話だな」

もう慣れたという口調の一夏に、箒はしみじみと述べる他無かった。

そこに、

「貴女の危機管理が緩すぎるだけ」

箒の一言が入る。

ピシリと、弛緩した空気に輝を入れるかのように。

箒は腹を押さえベンチに座る一夏を支えるようにして、その隣に腰掛けていた。

箒は二人の正面に立っている　頬を引きつらせて。

「……今、何か言ったか？」

「自分の、立ち居地を……少しは理解すべき」

一夏は、『あ、言っちゃうんだ』と現実逃避気味に思った。

案の定、箒の眉がピクリと跳ねる。

箒は箒と視線を合わせようとしない。一夏の隣に寄り添うように

している。

冷や汗だか脂汗だか解らないものが、ダラダラと額を伝う感触を、一夏は味わっていた。

「あ、あのさ、二人とも？　せっかくひと段落したんだから、もうちよつとリラックス……」

身振り手振りを交えて、慌てて口を挟もうとする一夏。

しかし、横に座っていた簪が身体ごと向き直って両肩に手を添えて、それを押しとどめる。

「織斑、怪我してるんだから、あんまり動いちゃ、駄目……」

ほぼ至近距離で抱きついているような構図である。

視界一杯を覆うメガネをかけた簪の顔の背後に、一夏は量子の波が空間を揺らすのを目撃した。

因みに、位置関係的にその位置には簪が居ると言う事は言うまでもない。

「リラックス、か……そうだな。では私も少し、休ませてもらう事にしよう」

おもむろに、或いは高らかに、簪は宣言した。

宣言したまま、ドカリと、一夏の隣、ベンチの開いた部分に腰掛ける。無駄にきびきびとした動作で。

一夏の上に半身を乗り出している簪。一夏の隣に腰掛けている簪。そして、二人の間に座る一夏。

三人それぞれの頭の位置を俯瞰してみると、実に恣意的な意味合いを感じさせる三角形が完成した。

「……」

「……」

「……ええ？」

何これ、どんな状況だよと一夏が内心で突っ込みを入れるも、しかし当然答えなどあるはずが無い。

少女たちは口を引き結んで互い互いに明後日の方向を向いていたし、そもそも二人は、それほど語彙が豊富なわけではない。

セシリアや鈴音のように、元気に言い合いでも始めてくれたほうが、まだ精神的に落ち着くような重く苦しい空気が、そこにはあった。

（胃が痛くなってきた……）

当然だが、怪我が悪化したからと言う理由の筈が無い。

漸く一難去ったばかりでどうしてこんな難局が訪れるのか、一夏は自分の身に降りかかった不幸を嘆きそうになって。

（……って、そういえば）

何事も無ければ、元々こんな感じの状況になるのは確かだったけど、嫌な事実に気付くのがだった。

その後、山田真耶の運転する小型車に乗った千冬が現場に到着するまで、胃の痛い空気は続いた。

百九話（後書き）

戦闘終了。

何かもう締めめの展開っぽいんですけど、実を言えばまだ五合目六合目と言っただけだったり。

ラスボスどうすっかねー。

マドカさん出しちゃったせいで、ナニ出してもしよばく見えるよねー。

それにしても、その後の日常をタラタラ書き連ねるって当初のコンセプトは何処へ行ったのだろう。

次回から事後フェイズ。と言うか、日常パートと言うか……。

百十話

高層ホテルの最上階のロイヤル・スイート。

豪華と言つ言葉では語りつくせぬ優美と気品さが調和された調度品に囲まれたその一室。

クイーンサイズのベッドの上で、裸の女性が身を起こしていた。

「……そう。ご苦労様エム」

ベッドの上で裸体を惜し気もなくさらし、受話器越しに在る誰かに向けて、妖艶な笑みを向けている。

他者からはスコールと呼ばれている女だ。尤も、それが彼女の本名なのかは、実際には解らないが。

「貴女のお陰で無事に スレイプニル の搬入も終了したわ」
『そうか』

労働に対する正当な対価。労わりに満ちた言葉はしかし、聞きようによつては嘲っているようにも、聞こえる。

一言の間もおかず受話器から帰ってきた言葉の淡々とした度合いも、それを象徴しているようだった。

彼女の電話越しにある相手は、明らかにスコールに対して友好的な感情を抱いていない。むしろ嫌悪しているかのようだ。

聞くものの背筋をあわ立たせるような冷たい空気を、その声は纏っている。

「本当に素晴らしい陽動だったわ。貴女がこの ファントム・タスク 亡国企業 の一員で、本当に良かったと思うほど」

しかしスコールは、受話器から聞こえる冷たい声を、まるで微笑ましい光景を見るかのような笑みを浮かべながらいなす。

「でも、変ねえ？」

受話器の向こうから返事はない。独り言のような言葉を、スコールは続ける。

「私が貴女に望んだのは、陽動として港湾区画のIS関連企業に対して無差別攻撃を行うこと。それが、何故
「
笑い、笑い、笑い。」

スコールの顔には笑みしかない。

それは美しく完璧な、完成された美術品のようにであり、だからこそ、ヒトの身で完成してしまっている彼女は、何処までも恐ろしかった。

「何故貴女は勝手に、織斑一夏への直接攻撃へ、作戦を変更したのかしら？」

「……………」

咎める言葉に、返事は無かった。

スコールの笑みは変わらない。笑みを称えたまま、一方的に言葉を続ける。

「貴女にとっては劇的な出会いであっても、こちらは困るのよ。あまり無軌道に動かれるとね？」

『操縦者を殺害してしまえば、ISの確保も容易くなるだろう』

「あら、私のためを思ってたのね。ありがとう、エム」
非友好的な色を隠さない反論の言葉に、スコールは嬉しそうに声を弾ませて応じた。

舌打ちの音が、受話器の向こうで響く。

「フッフ……………」

何が楽しいのか、スコールは声を出して晒う。

晒った瞬間。

『ぐぎつー！？』

悶え苦しむ声が、受話器の向こうで響く。

『ぐつ、ゲハアッ……！ ガハッ！？』

床に膝を打つ音が、胸をかきむしる音が、喉を詰まらせる音が。

スコールは極上の笑みで、それを聞いていた。

「ねえエム。貴女が織斑マドカであろうとなかろうと、私には関係ないわ。けれど、くだらない拘りでおいたをしてしまうような悪い子は お仕置きされてしまうのが、当然なのよ？」

『ゴハッ、グウツッ……』

返事はある筈が無い。

悶え苦しむ声だけが、受話器の口から少し離れた場所から、届くだけ。

「解るでしょう？ 貴女は織斑マドカである前に、『ファントム・タスク亡国企業』の
エム。我侬で周りに迷惑をかけるのは、謹んで頂戴」

優しく、優しく、殊更優しく、スコールは幼子をあやすような声で、受話器の向こうで未だ苦しみの声を上げる少女に、ゆっくりと
言い聞かせる。

「織斑一夏にやられた傷も痛むのでしょうか？ しばらくはそこ隠れ家で養生していらっしやい。じつとして、ゆっくりと、傷を癒しなさい。
次の任務までは、無理をせず……ね？」

『こん、な……かすり傷、だっ……ギヒッ！？』

「ゆっくり、おやすみなさい？ ね？ 無茶しちや、駄目」

『カハッ……ガッ……わかっ、……た』

「素直な子は好きよ。それじゃあね、エム」

最後まで朗らかな態度を一片たりとも崩さぬまま、スコールは受話器を置いた。

照明の落とされたベッドルームに、静寂が満ちる。

「子供の躓って、ホントに大変」

やれやれだわと、育児に疲れた若奥様のような吐息を、スコールは漏らした。

本気が、冗談か。本人自身にも解っていないのかもしれない。

苦笑して頭を振り、そして、口元に手を当てる。

「それにしても、興味深い……。本来固有の筈の単一仕様能力を他の機体で使用するなんて。機体だけが特別なのではなく、やはり、織斑一夏自身に何かがある、と言う事なのかしら？」

次の作戦がどのような結果を生むか、楽しみでもある。

「スレイプニル、何処までやれるかしら」

そう呟いて、優雅な動作で身体をベッドに寝そべらせる。

大人の女性の蟲惑的な肢体の重みに、ベッドのスプリングが弾む。

「んん……」

むずがるような音が聞こえた。

天井に顔を向けたまま、視線だけを横に逸らす。

あどけない女性の寝顔が、そこにはあった。

普段、起きている時は野生の獣のような雄雄しさを称えているというのに、スコールの傍で裸体をベッドに横たえている今は、部屋飼いの猫の如き愛らしさを見せている。

「スコール……？」

眠たげな目をこすりながら、スコールの名を呼ぶ金髪の美女。

スコールは喜悦の相を浮かべながら、彼女を自らの胸元に抱き寄せた。

「ゆっくりとお休みなさい、オータム」

「んふっ……すこおるう……」

絵に描いたような幸福の顔を浮かべて、オータムと呼ばれた女は、スコールの豊かな胸にすがりつく。

二人の女が、ベッドの上で裸身を絡ませあう。

「結果を楽しみに待ちましょう？」

その言葉を最後に、スコールも瞼を閉じた。

舞台の仕込みは既に終わり、あとは、観劇の席で演目を見るのみだったから。

最後まで笑みを湛えたまま、スコールは瞼を、閉じた。

未熟な人間を一人前の戦闘兵器の操縦者に鍛え上げると言う『IS学園の性質上、生徒の安全性、または最悪の事態を考慮して、『保健室』と呼称される施設には、最新の医療機関並みの医療機器が配備されている。

その中にある、長期間の入院治療が可能な個室。

「……内臓傷ついた筈なのに、半日経たずに普通のご飯が口に出来るようになるってのは、ありがたいよね」

旧世紀と違って糸で縫い合わせる必要も無い。

傷一つ残っていない、完璧に再生治療が完了した腹部をなでながら、一夏は言った。

「怪我をしないでくれるのが、私としては一番ありがたいのだがな」

「そりゃ、僕だって生傷まみれの生活なんて御免なんだけど」

「お前は何時まで経ってもISが下手だからな。生傷の一つや二つ、覚悟しなければならんか」

特に最近は、全く似合わない高機動型の機体を操縦している訳だしと、織斑千冬が息を吐く。

既に夜も遅い病室には、姉弟の二人しか居ない。

見舞いに訪れた生徒たちは、門前払いにあっている。

昼間の臨海公園での遭遇戦から、既に四半刻が過ぎている。

あの後一夏たちは、日本の軍や警察組織より一步早く現場に到着した千冬達に身柄を確保され、学園まで運送された。

街中で、ISを用いての不許可での戦闘行為。

法治国家として看過できないだろう事態を引き起こした当事者である一夏たちは、しかし未だにその身柄を日本国に拘束されては居ない。

IS学園への身柄引き渡し要求も、行われていないらしい。

「……幸い、あの辺りはIS関連施設が多いからな。それを狙ったよくあるテロ事件として処理される」

「この国も物騒になったよねえ……」

「束のせいだな」

その割りに、治安維持に払う労力の度合いは、何時まで経っても旧来通りなのだから、日本と言う国の平和ボケ気質も極まっていると言う他無いだろう。

「まあ、そのお陰で助かってるって話でもあるんだけど」

「馬鹿を言え。危機管理能力が欠如しているのは上だけだ。現場は

浜松では最初の爆発が発生した段階でスクランブルが掛かっていたんだぞ？ 強引に押し留めるのに、どれだけの労力を払ったと思っっている」

「横須賀の方でも出撃体制を取っていたの、センサーがキャッチしてたねそういえば。あと、官公庁街にある各国の大使館とかにも、ISの顕現反応が」

仮にそう言った連中に救助されていたらどうなっていたのか。

想像するだけで恐ろしいなと、一夏はしみじみとした声を漏らす。

「ドイツに関しては、ラウラが居たからな。学園の管轄範囲として処理できる。一人、余計な人間も混じっていたような気もするが」
「多分、授業参観でもあったんじゃないかな？」

「お前は、自分が一国に貸しを作ることがどれほどの面倒を巻き起こすか、もう少し考えて事態を処理しろ」

「国相手に貸しを作った訳じゃないって。知り合いのお姉さんに手伝ってもらっただけで、それにホラ、クララさんが撃った武器は、あくまでラウラのレーゲンに搭載されていた武装だし。大丈夫。クララさんがISを使った戦闘を行ったってデータは残ってない」
ぬけぬけと言っただけのける弟に、姉は額を押さえて呻く。

「どんな強弁だ、それは……いや、まあいい。既に国外に脱出されてしまえば、文句も言えんだろうからな」

「ま、文句なんて言われても、どうしようもないしね」

僕だつて事情は解らないのだから。

一夏と千冬は、ここで初めて、視線を合わせた。

無言。迂闊な言動を慎みなくなる空気が、病室を満たす。

互いが互いを、無表情と言う表情のまま見つめあい、そして、口火を切ったのは。

「私は」

「織斑マドカ」

何かを言いかけた千冬を遮って、一夏は単刀直入に切り込んだ。

「僕と同じ顔をして、僕と同じ苗字だ。でも僕は、今日初めてその存在を知った。あれは」

「一夏」

誰だ。そう続けようとして、今度は千冬が一夏の言葉を遮る。

反論を許さない強い　否、頑な色に染まった瞳で、ベッドの上に半身を起こす弟を見下ろす。

「私の家族はお前だけだ」

一言。

再び二人は黙りあい、視線を向け合う。無言で。痛みすら感じそうなほど、緊張感に溢れた空気の中。

そして、やがて。

「家族……家族、ね」

苦いものを含んだ笑みを、一夏が浮かべた。噛み締めるように、家族と言う言葉を繰り返す。

唇を引き結んだ千冬の瞳が、動揺に揺れる。

「まあ、家族にも隠し事くらい、するかな」

仕方が無いねと浮かべられた微苦笑を失望のそれと受け取り、千冬は焦る。

「一夏、私は……！」

「あのさ、姉ちゃん」

穏やかな声で、一夏がそれを遮った。

勢いが途切れて、黙る千冬。一夏は気まずげな姉を見上げて、微苦笑を浮かべた。

「僕にとって姉ちゃんは、大切な家族だ」

一夏はそんな言葉を続けた。

「……一夏」

千冬は目を瞬かせて一夏を見る。

自分が何を言われたのか、理解が追いついていないようだった。

一夏の笑みは変わらない。労わりの目で姉を見上げて、言葉を紡ぐ。

「姉ちゃんは僕の大切な姉ちゃんだ。どんな時でも 例えどんな隠し事をしていようと。だから、姉ちゃんが僕を家族だと認めてくれるのを、僕はすごく嬉しく思う」

噛み締めるような言葉は、むしろ自分に言い聞かせているかのとき重みを含んでいた。

織斑一夏は恵まれている。その事をよく理解すると、一夏は自ら

に言い聞かせているかのようだった。

その訳を千冬は理解できない。

だが、自身が姉であることに、弟が感謝の念を抱いていることは、理解できた。

だから。

だけど。

続けられた言葉に、千冬の背筋は凍りつく。

「だけど、何か隠し事をする時の方便として、姉ちゃんが家族と言
う言葉を使ったのだとしたら、僕はすごく　　すごく、悲しい」

悲しいと思う。

繰り返されて、千冬は蒼白になった。

「一夏、私は……」

我知らず、千冬の言葉は震えていた。
自身がしてはいけないことをしてしまったのだと、思い知って
いた。

傷つけてはいけないもの　　表面的な意味では語りつくせない
その、大切な領域を自ら踏みこじってしまった後悔が、沸き立つ。

一夏は、唇を震わす姉を、優しい瞳で見ている。

そして、何も言えなくなった姉に向かって、改めて口を開く。

「あんまり悲しくて、泣きたくなくて、そうだな、ター……いや、
まーちゃんの胸に顔をうずめて、泣いちゃうかもしれないや」

おどけた言葉に、場の空気が別の意味で硬くなった。

「……何故、真耶？」

しかも最初は別の女の名前を出そうとして、途中で変えただろう。
姉が震える声で尋ねる。唇は引きつっていた。

「それはホラ、相手は選ばないと。」

女の子相手に、格好悪い

「ところは見せられないし」

「……真耶なら良いのか？」

「あの人一応、一応僕よりオトナだし」

米神を押さえて呻く姉に、弟はあっけらかんとした態度で答えた。衛いの一つも見られない、イイ笑顔をしている。

千冬はしばし、そんな一夏の顔を見続けた後で

やがて。

「この、愚弟……」

「姉ちゃんみたいな確りした姉ちゃんが居てくれて、本当に助かってるよ」

最高の褒め言葉だとしても言いたげな顔で、一夏は千冬 of 言葉を受け取った。

「お前は、まったく……」

やってられんと、千冬はため息混じりに頭を振る。

それから、気を取り直したように顔を上げて、正面から一夏を見据える。

「一夏」

「うん」

一夏もまた、表情を改めて姉の言葉に頷く。

「お前は……いや、お前が、私の弟だ」

唯一人の。 そんな言葉は何処にも含まれず。

だからこそ、千冬自身が思い、願う。それが真実の言葉となるのだろう。

織斑一夏は織斑千冬を姉と思い、織斑千冬は織斑一夏を弟と思っている。

それに付随する、自らの知りえぬ色々な事実が存在しているのだろうが 　しかし、それは重要度の低い話だ。

重要な言葉を、確かに貰った。一夏には、それで充分だった。

「うん、ありがとう」

だから、礼を言う。心から。

「ばか者が」

そして姉は、弟の言葉をそんな風に受け止める。

感謝など何処にも必要の無い、当然の事実として。

二人は確かに姉弟だった。

百十話（後書き）

> スコールさんが ログイン しました
> オータムさんが ログイン しました
> スコールさんが ログオフ しました
> オータムさんが ログオフ しました
> マドカさんが ログオフ しました

……という訳で、亡国企業の皆様はこれで上がりで。

若干一名寝言呟いているだけで終わった方も居ますけど、まあ、世の中そんなものです。

どうせだから出しておくべきかなって思ったんですけど、そのお陰でマドカさんが電話口で退場になりましたけど。

でもこの状況で下手に台詞言わせると雑魚っぽく見えちゃうからなー。

出すのは簡単だけど、上手く引っ込めるのは、やはり難しいです。

百十一話

「はふう……」

私室の備え付けの浴室。

簪は湯船の中で一人、くつろぎきった声をもらした。

浴槽のふちに腕をかけて、顎を乗せるだらけた姿勢。普段の彼女を知っていれば想像も付かない、蕩けきった姿。

「はふう……」

もう一度、吐息を漏らす。

全身にのしかかる倦怠感と、それに勝る胸の底からわき上がる高揚感を、簪は同時に味わっていた。

堪能していた、と言ってもいいかもしれない。胸の鼓動、自らの衝動、情動と言つべきものを、彼女は味わっていた。

沈み続け、心が凍りつく

そういう経験なら、これまで幾度

となく経験してきた。

だが、浮上し続け、外に溢れてしまいそうな心を必死で押しとどめると言う経験は、未だかつてなかった。

初めて感じるその甘美な感覚に、簪は虜になっていた。

「おりむら……」

名前を呼ぶ。

心に触れた、彼の名前を。

それは、触れて、感じて、到底心地の良いものではない。情けなくも弱々しい、目を背けたくなるものだった。

見てはいけないものを見てしまった気になっている。

自身の立場であれば、自殺したくなるほどの羞恥心を感じただろう。

あれは緊急事態だったから、やむを得ずに行われたことで。だから、彼のことを思うのであれば、そっと記憶から消し去ってしまうべき事なのだろう。

だろう、けど。

「ふへへ」

笑みがこぼれる。自然と。幼げでだらけた笑み。

普段の彼女を知るものならば、啞然とするであろうにやけ面。

「おりむら……ふふっ……」

我ながらバカみたいと、名を呼び、笑みをこぼしながら簪は思った。

湯船の淵にたまった水滴に指を当て、彼の名前をひらがなでなぞる。

阿呆の所業。誰かに見られたら恥ではすまない。

幸い、湯気に隠れて、誰にも見えなかったが　いやそもそも、

一人用の風呂場には、簪以外居ない。

簪は、誰憚ることなく開放感に浸り続けるのだった。

「お、り、む……ら」

名を呼び、瞼を閉じ、思い出す。

怖い、怖いと、そればかり。

何時も周りに誰かが居て、笑顔で、簪とは絶対に相容れない場所に居る筈の、織斑一夏。

それが、蓋を開けてみれば、簪と何一つ変わらない弱さを秘めて

いた。

簪にとつて、それは衝撃的な経験だった。良いか悪いかは、別として。

兎角、一夏という離れた位置に居る筈の存在が、まさか自分と同じ場所に立っていたのだというのは彼女の精神に強烈な印象を与えてしまった。

親しみ。共感。同族意識。或いは。或いは。

その感情を示す言葉がなんであれ、唯一つはつきりしている事は、「おりむら……ふふふふふふふふ……」

いつそ解りやすいほどに、誰が見ても明らかかなほどに、簪は一夏に惹かれていたのだった。

「織斑……」

幾度となく名を呟いて、自分の気持ち揺らして遊ぶ。楽しむ。

しかし些か戯れが過ぎたらしい。

不確かな、ぐにやぐにやと形に成りきらなままだった筈の心の内に、『会いたい』と言う情動が湧き上がってきてしまった。

会いたい。会いたい。織斑一夏に、会いたい。

今すぐ。今すぐに。今此処で。

出来る訳が無い。

自室の風呂場に、今直ぐに一夏を連れてくるなんて、幾らなんでも難しすぎるから。

(……ちがうつてば)

ぐてんとした姿勢のまま、自分の思考に僅かな理性が突っ込みを入れる。

じゃあお前、連れてくる手段があつたら実行するつもりかと、それがどういふ結果を生むか理解しているのかと、茹で上がった自分を怒鳴りつけてやりたかった。

彼の部屋がある最上階と違って、簪の部屋のあるフロアには、当

然別の女子たちも生活している。

他の女子にバレたら、きつとうるさい事この上ないだろう。

(……あれ?)

何か間違ったような気もするし、そうでもないような気がする。どうでもいいやと、簪は思考を放棄した。どうでもいい。些細な事。

今はもっと、もっといっぱい、彼のことと心を満たしていたい。そう思っていた。

「はふ……」

吐息を漏らす。誰にも聞かれないからと、子供のような音色の。

誰にも 誰も。此処には簪、一人しか居ない。

会いたい。せめて、お話でも。

お話。一夏とお話。

いっぱい我侂を言っ、困った顔とか見たい。笑う顔が見たい。声が聞きたい。

「お話……したい、な。おりむら……お話したいよ」

『ええつと……いやまあ、それは構わないんだけど』

「……え?」

瞬きをする。辺りを見渡す。

メガネが無い。良く見えない。そもそも、見えたとしても湯気で真っ白な空間である。

『更識さん、だよね?』

再び耳に届く声。簪の名を尋ねる、声。

「え? ……え? ええ?」

ザバつと風呂の中で膝立ちになって辺りを見渡す。

声はする、しかし姿はあらず。簪は混乱した。

『いや、何かコアネットワーク経由で通信回線が開かれてるんだけど……ええと、調整ミスか何かかな?』

届く言葉も、何処か戸惑った風だった。

その声の主が誰であるかなど、簪に悩む必要は無い。

「お、お、おおお織斑？」

『え〜と、うん。現在保健室のベッドの上の、織斑一夏です』

「な、なんで!?! …… って、あ、通信…… って、ひゃう!?!」

足元がおぼつかない湯船の中で膝立ちなどしていた簪は、急に身を捻ったせいでバランスを崩した。

ザッパ〜ンと、景気の良い音共に、頭から湯船に突っ込む。

『ちょ、おい、だ、大丈夫?』

「だひつ、違つ、だいじよ、うぶつ」

舌を嚙んだ。お湯を飲んだ。ついでに鼻にもお湯が入った。

有体に言つて、他人に見せられる顔じゃなかった。

『うぶつて…… ゴメン、あの、ひょつとしてお風呂か何かだったりするのかな?』

物凄く気まずそうに、一夏は尋ねてきた。

漸く簪は状況が理解できてきた。

ISの通信機能が簪の思考を曲解して勝手に一夏への回線を開いてしまったのだろう。

部分展開したホロティカルモニターにも、そのように表示されている。

完全な思念操作も考え物だと思わされる瞬間である などと、考えている場合ではない。

「あえ…… あ、えとつ」

右を見て左を見て上を見て下を見て。

当然だが助けなんて何処にも無い。

せいぜい、湯気越しに壁にはめ込まれた防水性の鏡に移る、濡れ鼠の酷い顔が見えるだけだ。

何か言わなければ、何か、何か、何か。

しかし思考が『何か』と言う一つの単語でループしている間に、タイムリミットは過ぎてしまったらしい。

申し訳なさそうな一夏の声が、耳の裏側に聞こえる。

『……ああ、ゴメン。何も言わなくて良い。後でこっちからかけなおすよ。そうだな、一時か』

そもそも通信を繋がれた側である一夏は、どういう状況なのか把握している筈も無い。

(通信、切られちゃう)

この状況を維持したいのであれば、簪が自分で何とかするしかなかった。

「駄目！ ま、まっつて！」

風呂場で大声で叫ぶ。反響がとどろく。

必要も無いのに身を乗り出して、きつと間抜けな格好をしているに違いなかった。

『……えええつとお……駄目……ですか』

「だ、だめ……です。……だめ」

何故か二人ともですます口調だった。

『と、は、言ってもお……ん~~~~何か、緊急の用事、とか？』

風呂に入っている女子から通信を繋がれるとは、当然だが予想していなかったらしい一夏は、何とも決まり悪げな声で訪ねてくる。

緊急の用事。

そんなの　　あるに、決まっている。

「お話……」

『は？』

「おはなし、した、するの……織斑と」

『……はあ』

間の抜けた返事が返ってくる。

後ろ手に頭をかいている一夏の姿が、容易にイメージできた。

「~~~~~っっ！」

ざばんと、膝から崩れ落ちて水面に顔をつ込む。

自分で言った言葉の内容が理解できてしまい、簪は死にたくなくなるほど恥ずかしくなったのだ。

泣きたい、と言うか死んでしまいたい程の恥辱。

(織斑のせいなんだから……っ！)

湯に顔をつけたまま、内心で喚く。

『僕の！？ 僕が何をしてどうなったのさ！？』

「何で聞こえるの！？」

ざばあつ、と曰ころ無いオーバーリアクションで頭を振り上げながら、叫ぶ。

『いや、多分。思念通話モードがオンになってるせいだと思うけど』

「思念……え？ あ、や、え？」

慌ててホロティカルモニターの表示を確認する。

一夏の言ったとおりだった。通信機能の状態表示の部分に、普段はオフになっている項目がオンに 作動状態になっていることを示すランプが点灯していた。

そもそもISは空気の存在しない宇宙空間で活動するために開発されたパワードスーツである。

生態電流を有効に使用するために、顔面、肌などの露出は極端なまでに多く、それ故、通常の宇宙作業服のように内部に音を伝播させる空気を充満させた機密性の高いヘルメットなどを被ることも無い。

ISの操縦者はシールドバリア、生態保護機能のみを頼りに、素肌のまま真空中に投げ出される事になるのだ。当然、口を開いても声を届かせる事は出来ない。

それ故の、音声を解さない 思念 音声 変換式の通信システムが採用されている。

思考の表層、言語解釈が可能なレベルにまで発達させた思考を音声情報として通信回線に乗せる事により、音の届かない宇宙空間などでも、言語コミュニケーションが可能となるのだ。

当初の開発理念を放り出して、航空戦闘兵器としての性質が強くなった。加えて、戦闘以外の興行演目としての性質すら付与され始めている昨今では、あまり必要とされない機能である。

観客からすれば『声を掛け合って遼機と連携する』と言う美意識こそを機能、効率面よりも優先すると言う事だろう。

故にIS学園の授業の中でも、この思念通信機能は必要外に於いては常にオフにしておく事が望ましい、と教育される。

各国代表候補生たる専用機持ち達への個別教育の中でも、同様だ。

とはいえ、ISは思考によるボタン操作によらないコントロールを実現した（この時代の技術レベルに於いてもでも）独自の意思を持つ未来兵器。

操縦者の思考状態を判断して、アナログな解釈で機能のオンオフを行う程度の事は、当然やってのける。

勿論操縦者からの許可が下りなければ実行されないが、つまり、操縦者が意識的、無意識的とはいえ許可してしまえば、実行してしまったりもする訳で。

「~~~~~っ！」

『なんていうか、その……「ごめん？」』

実に気まずそうな声。というか、実際に気まずくて仕方ないであろう一夏の声が、届く。

耳をふさいでも聞こえてしまうのが、今は辛かった。

（どうして、こうなるの……！）

『それを僕に聞かれても……』

「織斑には言つて無いもん！」

『じゃあ通信切ろうよ、気まずくなるから！』

「や、やだ!」

『やだつて……いや』

「お話、お、お話を、するの……」

自分でも解らないくらい必死になっている。

頭が茹で上がりそうな状況で、思考を空回ししながら、簪は訴えた。

『お話、ねえ……むう』

困った、と言う内心の声が伝わってきた。きそうな声だった。

次の一夏の言葉がどんな風になるか。緊張で簪の胸は激しく鼓動する。

聞きたい、聞きたくない。聞こえたくない、聞いて欲しい。全く持って、落ち着いてくれない。

そんな状況で少しの間、無言で取り残された後。

『まあ、良いか。良く考えたら更識さんとゆっくり雑談の時間を取った事って、無かったからね。……そのための時間になるはずだったデートも、台無しになっちゃったし』

だから、少しの間付き合つよと、一夏は言った。

簪の胸が歓喜で沸き立つ。嬉しい。とても嬉しい。胸がいつぱいで、言葉が出てこない。それは困る。お話しするのだから。沢山。

『とはいえ、何を話したものやら……って、ああそうだ。更識さん、怪我とか平気だった？ 背中打ち付けたりしてたと思うけど』

簪が戸惑っている間に、一夏が話題を振ってくれた。慌てて返事をする。

「へ、平気……平気、だよ。織斑、は？ 怪我……」

『男の怪我は勲章みたいなものだからね……と言っても、傷一つ残らずに再生しちゃったんだけど』

「その方が、いいよ。傷跡なんて……勿体、無い」

『……勿体無い?』

何が、と尋ねてくる一夏に、簪はクスリと微笑んだ。

「織斑、可愛い顔してるし」

『そりゃどうも、ありがとう……』

きつと一夏は今、顔を引きつらせているに違いない。そう思うと、簪は楽しくて仕方が無かった。

楽しい。友達とお話するのは、楽しい。一夏と話すのは、楽しい。

「……ふふっ」

『ハハッ』

忍び笑いに、応じる笑い。

その後も会話は弾む。

否、傍から見ればきつと、ぶつ切りの、たどたどしい言葉の応酬だったのかもしれないけど　しかし、簪にとっては楽しいひと時だった。

一夏もまた楽しんでくれていたと確信できる、ひと時だった。

それは、簪が長時間の入浴によってのぼせ上がるまで、続く。

その後、図らずも湯あたり患者の第一発見者となってしまう一夏が背負った苦勞に関しては、別のお話。

百十一話（後書き）

単一仕様能力を使ったら風呂、ってのがお約束なので、恒例のついても、ちよつと毛色が違う感じですが。漸くこのキャラの動かす方向性が解って来たかなー。

毎度の事ですが、ISが超兵器過ぎて出来る出来ないの塩梅に困る。

作品舞台設定上から逆算すると凄まじい超兵器になるんだけど、本編中の描写だとそれほど……って感じですよね。

まあビーム曲げるくらいはやるんですが。

百十二話

「お帰りなさい。私にする？ 私を食べる？ それともお、ワ・タ・シ？」

「たっちゃんさんで。で、たっちゃんさんを食べた後、もう一度たっちゃんさんにします」

一息で言い切ったら、目の前でドアを閉じられた。ガチャリと内側から鍵がかかる音がする。

ドア脇の認証スリットに、カードキーを通す。あっさりどドアが開いた。

ドアの前の位置で固まった姿勢のたっちゃんさんを発見する。彼女はしばしの間固まっていたが、やがてギ、ギ、ギ、と錆付いたブリキの玩具のような動作で首を僕の方へ向け　　あ、普通に動き出した。

「台詞が卑猥すぎるよー夏君！」

「アンタが振ったネタに乗ったんだよ！」

実に、グダグダだった。

保健室からの退出許可が取れた、事件開けの早朝。

朝の自主トレーニングを始める生徒がかるうじて起きている、そんな時間。

欠伸をかみ殺しながら自室に戻ってきた僕を出迎えたのは、学園

の制服の上からエプロンスカーートを巻いた、我らが更識たっちゃんさんである。

「……夏前に比べて露出度が落ちたなあ」

前こんな感じだったときは、エプロンの下はフツーにブラもせずハミ乳しながら面積のやけに少ないパンツはいてらっしゃいましたよねー、この人。

「言わないで！ どう頑張ってもあの頃みたいにはもう絶対出来ないから！」

「いや、痴女じゃないんだから頑張らなくて良いんですけど。と言うか頑張らないでください。僕、清纯派が好みなんで」

「うっそだあ。一夏君って欧米のエツチ本に乗ってるみたいなドーンときてバーン、みたいな格好とか大好きでしょ？」

「そういうのは、バーンでキュでバーンって感じの向こうの人たちがやるから似合うんです。日本人なんだからその辺の様式美っつーか慎ましさを解りましようよ」

「否定しなかったね……って言うか私、一夏君と同じ自由国籍だし日本人違う、と手を顔の前でパタパタする。」

どうでも良いけ、何で警戒している男と二人きりでする会話に、こういう話題にあえて乗ってくるんだらう。マジで誘ってるんでしようか？

あ、後この人、スタイルが割りと日本人離れしてます。ぽよんできゅっでぶによんって感じ。柔らかそう。

「……目がエロいよ？」

ジト目で睨まれた。

「いや、だからたっちゃんさんのネタ振りに乗っかってるだけなんですけどね、僕は」

「ネタって解ってるんだつたら、本気にしないで欲しいにゃー」

「じゃあ初めから際どいネタは慎みましょうよ……」

ただでさえ寝不足で、判断能力がぞんざいなレベルに達してるんだし。

迂闊に据え膳とか出されたら、味見じゃすまない事態になること
請け合いなのだから。

「お姉さんの言葉に頬を赤らめてドギマギしてくれた純情ボーイ
は何処に行っちゃったのかなあ……」

「そんな死語なボーイは初めから居なかったと思いますけどね」

「でも、前はこんなに欲望……うん、本能？ 兎も角、何かそーい
う感じのに忠実過ぎなかったよね？ あんまりそういう部分丸出し
だと、女の子に嫌われるよ？」

口を尖らせるたっちゃんさんに、僕は笑顔で答えた。

「大丈夫ですよ、相手は選びますから」

「選んでよ、相手を！」

「？」

「首を捻らないで！」

やべえ、この人イジメ……もとい、イジるの超楽しいんだけど。

怖かったり修羅場ったり難しい顔の姉ちゃんを慰めたりで疲弊し
た心が癒されていく感じ。

「いじめっ子だ……いじめっ子がいるよ、ここに……」

あ、いかん。ちょっと涙目になってる。そろそろ軌道修正しないと
不味いか。

「いやほら、アレです。好きな子ほど苛めたくなくなるとかなんとか」

「え？」

「え？」

なんで目を丸くしてるの、この人。

「え、えつとお……冗談？」

「何がですか？」

「え、ホラ、だってホラ、だって……」

言葉をブツ切りに濁すところか見てると、やっぱり更識さんと姉
妹なのかなとか、思う。

と言うか、マジで何が言いたいんだ、この顔を真っ赤にしている
エプロンつけた可愛い生き物。

「……解ります?」
解らない時は、素直に質問を試みるに限る。

「私に解る事は、いい加減お二人とも部屋にお入りなさい、と言う事です」

ゴミ屑を見るような目を、キッチンから出てきた虚先輩うつほに向けられた。

「ですよねー」

「ごめんなさい……」

額を押さえてため息を吐いている虚先輩へ、二人して頭を下げる。と言うか当たり前のように更識主従が居るけど、此处、僕の部屋だよな?

今更かも知らんけど。

「お二人とも仲が宜しいのは結構ですが、人前では少し慎んだ方が宜しいかと思えます」

「いや、ほんと、ごめんなさい……」

食卓に着きつつ、素直に頭を下げる。

ここで『虚うつほさんが出歯亀するの止めればいいんじゃない?』何ていったらおそらく酷い事になるのは請合いなのだ。本当に、相手は選ぶべし、と言うお話。

なんて事を、眠気覚ましのコーヒーを口にしつつ考えていたら、対面の席に座る虚先輩うつほに睨まれた。

「私は見たくて見ている訳ではありません。お間違え無きよう」

「え、うっそだあ。虚うつほちゃんこういうの興味深し……ゴメン、な

んでもない」

「主従関係がはっきりしてるなあ……」

と云うかたつちゃんさんは、自分がやってるコントが周りからどう見えてるか、一応自覚はあったのか。

自覚あるのに付き合ってくれる辺り、なんだろうねこの人は。微妙に読めん。

あ、因みにたつちゃんさんの席は僕の隣です。

正面で顔を合わせたくないらしい。何か色々間違ってるけど。

「何でエロい目でみるかな」

「見てませんよ。愛でてるだけです」

「愛でっ……一夏君、月の無い夜は気をつけた方がいいよ？」

「僭越ながらお嬢様。それはどちらかと言つと、お嬢様の方ではないかと愚考します」

「一夏君助けて！ 虚ちゃん（虚）が苛める！」

「だからそこで僕に振るなよ！ あんたは助かりたいのか苛められたいのか、一体どつちなんだ！」

腕にしがみついてくるし。何で自分から地雷原に飛び込むんだ、毎回毎回。

初対面時の出来るお姉さんは一体何処いったのか……。

「いや、初めっから居なかつたっけ？」

「エロく無いけど、なんだか凄く不愉快な視線を向けられてる気がするよ……？」

気のせい気のせい。あ、虚（虚）さんが眉間に皺（皺）を寄せてる。

「え〜と、そろそろ本題に入りましょう。今日はこんな朝早くから、何用で？」

目の前からの視線が怖いし、と隣でスープ啜（啜）ってる人に話を振る。

「んゆ？ えーつと……何かあつたっけ？」

「は？」

間の抜けた返事に、目を丸くする。

「いや、何かあるんじゃないんですか？ 昨日の一件の顛末とか、

事後処理の行方とか。あとあのテロリスト何者ですか、とか」

「あはははは、やだなあ一夏君。弟が通り魔に襲われたなんて大事件、ブラコンのお姉さんが万端抜かり無く処理しきっちゃったに決まってるじゃん。後ついでに、あのテロ娘さんの正体は私も聞きたいです」

「ごめん後で査問会とかに出なきゃ駄目かも、なんてカラカラと笑いながら言ってくれやがります。

余裕の態度。実に余裕の態度だ。態度だけは。

チラ、と手を膝の上においている虚先輩うっほへ視線を向ける。軽く、肩を竦められた。

視線を隣の席へ戻す。

美人系の顔立ちだけど、浮かべる表情は可愛い、とかに分類される、そんな顔。

明かりのつけていない、早朝の光量の足りない室内であることを考慮しても、普段のそれよりも、顔色は若干青白く思えた。

冷静に考えれば、あれほどの 具体的には、広い臨海公園が焦土へと変わり、死者は居らずとも負傷者多数、重症者の姿もちらほら居る、というとんでもない大惨事の当事者の一人が、当日の晩に女の子と長電話を楽しんでいられると言つのは有り得ない訳だ。

無論、査問会一つに出れば済む、という話でもない。

本来なら投獄されて一生出てこれない可能性の方が、よっぽど高い筈だ。

だが、

「……査問会に出るだけでいいんですよね？」

「うん。非公式のに、一応一度だけね。頑張つて脂ぎったおっさんたちにつるし上げ食らってきて。それで終わりだから」

「勿論、僕だけって話ですよね？」

「そ、一夏君だけ。だって篝ちゃんや簪ちゃんやラウラちゃんを、

加齢臭のするメタボ中年の前に出す訳にいかないじゃない。
頑張れ、男の子」
「いやまあ、良いんですけど」

そんな風になんて事の無い話として、事件は既に、一晩のうちに解決している。

誰かがよほど強力な力で庇い立ててくれなければ、こつ僕にはかり都合の良い形で終息を見たりはしないだろう。

誰か。誰が。その答えは、考えるまでも無い。

姉ちゃんは確かに力がある　　が、それはどちらかといえば個人の戦闘力的なもの。

政治勢力的な力としては、特に日本国内ではそれほど大きくはない。

ならば別の誰かが　　例えば、日本国の暗部とかに精通して、色々政治家や利権屋集団なんかに関わりを行う能力のある人が。例えば、目の下の隈を隠しきれない、何処かのお嬢さんとか。

「……なんだよう」

「いえ」

昨日はお楽しみ　　じゃない、お疲れ様でしたね。

なんて素直なお礼を口にするのも、それはそれで、逆に申し訳ないような気がする。

この年上の女性のプライドは、他者の日常を影から守る、守りきる事でこそ満たされるのだから。

影で動いている事に気付いて、その事にお礼を述べてしまうのは、悪い。

「……何でしたら寝室使ってくれても構いませんよ？」

「いきなり何!？」

ぎょっと、目を見開かれた。

わざとらしすぎたかと思ったけど、そうでも無いらしい。

単純に、こういう話題を自分以外の人間に振られるのが苦手なだけかも知らんけど。

「寝不足は美容の敵ですよって話です」

「その察してますみたいなのが凄く悔しいんだけど……というか、一夏君も眠そうだよな？」

「眠いですよ、お宅の妹さんのせいで」

欠伸をかみ殺しながら、ジトつとした視線に頷く。瞬きを返された。

「……簪ちゃんが、何かしたの？」

「中々寝かせて貰えませんが、お陰で寝不足なんですよね、僕」

「何したの！？ ねえ、何したの！？」

シスコンのお姉さん、大慌てである。途中から言葉の矢印が僕の方を向いてるし。

僕は微苦笑を浮かべた。

「昨晚遅くにちゃんと学園内にいれば、ご理解なさってくださいってると、思いますけど？」

「うう」

たっちゃんさんは言葉を詰まらせた。

礼儀正しく目を伏せていた虚先輩（うつぱ）に話を振ってみる事にする。

「責められると弱っちい人ですよ、この人」

「慣れていないのですよ。責めてくださるのは一夏君くらいですか」

「その二人！ なんでしみじみと分かり合ってるの！？ というか本人の前でやらないで！ なにこのイジメ！？」

たっちゃんさんは半泣きだった。

僕は良い笑顔で笑い返してやった。

「そりゃあホラ、アレですよ。女性を口説くなら、まずは徹底的に弱らせた後で優しく手を差し伸べると良いって言いますし。安心してください。今からたっぷりねっとり優しくしますから」

「どこの詐欺師の手口だよお、それ！ ていうかねっとりって何！

？」

「なんでしたら寢室へ移動しますか？」

「そんな下心丸出しの優しさなんかゴメンだよ！」

テンション高いなあ、朝から。

感心した眼差しを向けていると、たっちゃんさんは大いに剥れた顔で言った。

「まったくもう……だいたい、痛めつけた後優しくするとか……それ、簪ちゃんに使った手じゃない」

「……む」

ビシッと指を突きつけられると、冗談でも否定しがたいものがあった。

しまったなと、本気の気分で後ろ手に頭を搔く。

「その話題を振りますか」

いやま、流石に遊びすぎた僕の責任かもしれないけど。

苦い顔をする僕に、たっちゃんさんはジト目を向けてくる。

「……自覚、あるんだ」

「お陰さまで半徹で実感した所存」

僕はしみじみと頷く。

そう、自覚があるのが、困りものなのである。

しかし自覚があるからといって、今の僕がひょいひょい飛び込んでいって許される話題でも無いんだよな、という自覚も勿論あるのだから、それはそれで困りものなのだ。

「すいません、とは、すいませんけど言えませんが」

一応、多方面への誠意の形として、それだけは本気で口にしておいた。

怒られるのを覚悟で。

「むう……うう、私がお願い、とか言った話だし、私が口を挟める話でも無いんだろうし……むう」

たっちゃんさんはむつかしそうな顔をして、唸る。

まあ何か、僕が自分で言うのも悲しい話だけど、私生活が最悪にだらしない男と目の奥に入れても痛くない最愛の妹が必要以上に親しくなるって言うのは、たっちゃんさん的にあんまり面白い話では無いらしい。

それ、お前が言えた口かよと、二重の意味で誰かに突っ込まれそうな話だけど。

「なんつーか、猫科の生き物になつかれちゃった気分です」

会話するにも一苦労の気難し屋だったしね、更識さん。

「途中で無責任に捨てたら酷いよ？ …… うう、捨てなくても酷いんだけど」

「大丈夫ですよ、今も変わらずたっちゃんさんの方が好みですから」「何が大丈夫なの！？ と言うか私はその言葉にどう反応したら良いの！？」

「まあ、好みのタイプと好きな人が必ずしも合致する訳でも無いんですが」

「うわー、一夏君が言うと言得力あるなー」

よりどりみどりだもんねーと棒読みで言われた。

僕は苦笑交じりに肩を竦めた。兎も角、と前置きした後で続ける。

「今のところ仲良くさせてもらってますよ、としか」

言えません、と。

更識さん曰く『友達』らしいのだが、世間一般からどう見えるかなんてのは勿論理解してるけど。

今後それがどういう方向に発展しやすいか、何ていうのも、勿論解っている。

けど、否定はしたくないのだ、もう。そういう生き方を選ぶって、決めたのだから。

「……泣かせたら酷いんだからねー」

決まり悪げな顔で、たつちゃんさんは最後通告染みた言葉を、言った。

当然だが、幾ら優しいこの人だからって、納得してくれる筈も無い。

僕は頷く時だけは真面目な顔を浮かべて、しかし口を開く時にはもう、軽薄な顔をしていた。

だってほら、この人に簡単に許可をもらえてしまっ、と言っのはそれはそれで、僕としては微妙な気分なのだ。

「ま、たつちゃんさんを泣かせないために、万難排して努力する所存」

「そこで何で私なのさ!？」

「勿論、たつちゃんさんが好きだからですけど」

妹想いのお姉さんに、いつそあっさり言ってやる。

案の定、瞬間沸騰っで感で顔を真っ赤にされた。

「大事っばい言葉をあっさり流すように言わないで! …… ああも

う、こーいうところがあるから信用できないんだよなーこの子」

もうやだ、とたつちゃんさんは机に突っ伏す。

「喜んでくれれば嬉しいのに」

「喜んでじゃってるから嫌なんだよ……」

うわやべ、何か凄い可愛い生き物が完成したぞ。

もう少し踏み込んでみても良い場面なのか、ひよっとして。

そんな風に都合よく考えた瞬間、正面の席から強烈なプレッシャーを感じた。

「……お二人とも、せめて私が見ていないところでやって貰えませんか?」

無表情という名の表情が、実に恐ろしい。

「「ごめんなさい」」

たっちゃんさんともども、速やかに虚先輩うつほに頭を下げる。
その後は実にシンプルな、説教のお時間でしたと、さ。

百十二話（後書き）

姉のターン。

もうちよつと真面目な話にするつもりが、冒頭の展開がグダリ過ぎていたのでそれに併せてみたら、こうなっていました。

まあ、最近ちよつと真面目な方向に行き過ぎてたから、丁度いいかもしれません。

やっぱ姉の人のほうが動かしやすいかなー。

星明りが照らす夜空を駆け巡るのは、青い涙滴型の小型機動兵装

無数の推進装置とレーザー砲塔を備えた、BT兵器。

無線遠隔誘導システムによって自在に操作出来るそれは、直線と直角の軌道線を空に描き続けていた。

軌道線が鋭角的なのは、いかにも操作者の性格が現れているかもしれない。

対するは、四十八発から成るミサイル弾頭。

噴進煙を円弧の形に吐き出しながら青い空を行きかう六機のBT兵器を追いかける。

最新の独立誘導システムを導入する事によって、全ての弾頭に対して別個の軌道を進ませる事が可能な筈だったが、しかし実際に空を舞う姿を見れば一目瞭然。

それぞれが固体座標をずらしつつも、軌道線だけは一定な意味の無い軌道を取っている物ばかりだった。

四十八のミサイルに対して、軌道パターンは半分にも満たない。つまりは、二十四発ほどは無駄な動きをしている。

「くっ……！」

地上、すり鉢上の客席に囲われたISアリーナの中央で直立した姿勢のまま、簷は唇を噛む。

視界を覆う、精密照準モードに設定したホロテイカルモニターには、上空遙か彼方で追いかけてくを続けるB T兵器と自身が操る四十八発のミサイル群が前後時間の情報すら補足した四次元映像として映し出されている。

直角に、軽快に軌道を変更していく目標であるB T兵器に比べて、自身が操るミサイル群は如何にも動きに無駄が多い。

旧時代的な座標事前入力型のミサイルと違って、簪が操縦する第三世代型IS 打鉄うちがね式式・丙 に搭載されているミサイルは、全てリアルタイムに進路情報を入力、変更する事が可能だ。

ゼロコンマ以下の刹那の間に、戦闘領域の変遷に併せて適宜、各弾頭毎に進路を変更させていく事が出来る 出来る筈なのだ、設計の上では。

ミサイルは本来、操縦者の思念操作に併せて自在に天空を舞う筈なのだ。本来ならば。

「ええいつ！」

眉根を寄せて、簪は呻く。

思念誘導による四十八の飛翔体の同時操作。

機械的処理に任せない全手動操作は想像以上に簪の思考演算能力に負担を与えていた。

次々と変わる空間情報。敵の位置。弾頭それぞれの相対座標。気圧、風向、温度。

刻々と変わっていくそれらに、ハイパーセンサーの補助によって演算能力を活性化させている今であっても、簪の思考は処理が追いつかない。

どうしても全ての弾頭に同時に別々の軌道を探らせる事が、出来ないのだ。

「……もう！」

普段のおとなしい彼女らしからぬ、苛立ちに満ちた声が漏れる。

何度練習を重ねてもまるで成果が上がらない自らにこそ、簪は苛立っていた。

ホロティカルモニターの脇に表示されていたカウントタイマーがゼロを示し、枠の色がレッドへと変わる。

それは即ち、一方的に追いかけられていた敵の、反撃開始の時の意味していた。

「いきますわよ！」

気品のある声は簪の直ぐ傍から。

簪は思わず舌打ちしたい衝動に囚われて、慌てて口を引き結ぶ。

練習相手に当たってどうすると言う分別　いや、プライドだ

ろうか　　くらいは、彼女にはあった。

そんな、益体の無い思いに脳の演算の一部を奪われてしまった、刹那。

機敏に姿勢を変えながら空を舞う蒼い雫が、先端部から閃光を煌かせる。

レーザー砲塔による攻撃。蒼い閃光が空を焦がす。

それは無様な軌道を描くミサイルの幾つかを穿ち、漆黒の空に朱色の華を咲かせた。

「……っ！」

発射予測は出来ていたのに、避け切れない。回避軌道への変更を、失敗した。

簪は己の不甲斐なさに、齒を食いしはり悔しがる。

だが、彼女以上に悔しがっているものが居た。

「きい〜〜〜っ！　なんで曲がりませんの！」

悔しいと言う感情をまるで隠す事の無い、甲高い声。

三百六十度の視界補正によって、視線を移す必要も無く、見える。

そもそも、このアリーナには簪と彼女の二人しか居ないのだから、それが誰だか何て、明白である。

蒼い装甲を纏う金髪の美貌。

英国IS操縦者代表候補、セシリア・オルコット。

現在簪が必死で追いかけているBT兵器のコントローラーだった。

「……………当たった!」

「あっ! もう、このっ……………曲げるのに集中しすぎて……………って、あらっ?」

「……………今の、少し、曲がった?」

「何ですか!? 何で適当に撃つた時は曲がるんですか!」

「わ、私に言われても、知らない……………」

二人は共に地上、アリーナの中央に直立したまま、それぞれの遠隔誘導兵器を空に放ち、それを持って互いのそれを撃滅し合っている。

それぞれに目標を定めて。二人は共謀して夜遅くに訓練に励んでいた。

「お疲れ様でした」

「お疲れ、さま……………」

淑やかな礼を見せるセシリアに習って、簪もあわてて頭を下げる。
「更識さんがご協力してくださったお陰で、今日も良い訓練になりましたわ」

今日も。

二人が夜間の空いた時間にアリーナを貸しきって訓練を行っているのは、今日が初めてではない。

九月の第二週。週始めから初めて、既に半ばも過ぎ。その期間を、共に訓練に充ててきた。

秘密特訓、なんて言葉を使ってみてもいいかもしれない。

尤も、アリーナは学園の施設であるから、使用許可申請の折に学園に、そして学園の施設貸し出し予定表を通して全生徒に伝わってしまうのだが。

無論、隠したい相手にも。

彼の人物とは再来週行われる 学園の設備点検のため予定より一週間延期することとなった タッグマッチのリーグ戦でタッグを組む事となっているから、当然、そのタッグパートナーが連携訓練を終えた後に更に居残りで訓練をしよう、などと考えている事は直ぐに悟られてしまう。

尤も、彼の人物は女性が隠している事を無理に聞き出そうとするようなタイプではないので、今のところは気付かれていないと、言う事になっている。

だが勿論、簪自身も秘密がばれていると言う自覚があるから、最近二人きりだと微妙に気まずい。

こちらに恥を掻かせない様に黙ってくれているその気遣いに感謝するべきか、それともいつそひと思いに引導を渡してくれと言うべきなのか、微妙に判断に困っている昨今だった。

「えっと……こちら、こそ」

むやみやたらに高級品っぽいティーカップを両手で抱えながら、簪は慣れないなと内心で思う。

訓練後にはミーティングを兼ねたお茶会を、セシリアの部屋で。

二人きりで。静かな夜に。

自覚があるほどに人付き合いが苦手な少女にとり、同年代の少女と同室で向かい合って、そんな場面で言葉が見つかるはずが無い。そもそも、だ。

一緒に訓練をしていると言っても、互いの訓練目的が違うのだから

ら、ミーティングなんてわざわざする必要があるのか。

と言うか、気づいたことは割と訓練中に話していないか、とか。

ここ数日のこの空間で、訓練の内容についての会話になったことがあったか、とか。

簪は、色々と目の前の英国淑女に言っただけでやりたいことが多かった。

「更識さん、紅茶のお代わりはいかが？」

「だ、だいじょうぶ、まだ……だいじょうぶ」

どもりそうになりながら、返事をする。

小声だ。恥ずかしくて、視線が合わせられなかった。

「そうですか」

セシリアはニコリと微笑んで、自らのティーカップに口付ける。

眩暈がしそうなほど優雅な仕草である。半刻前までキーキーと唸っていた少女と同一人物とは思えなかった。

同姓である簪から見ても、その姿は様になっていた。

気品と呼ばれるものが滲み出ている。住む世界が違うのかなと、思わずに居られない。

(なにやっってるんだろ……わたし)

元々、この『秘密特訓』を計画したのは簪の方だった。

自らのISの武装を完璧に使いこなすために、その訓練相手に相応しい人間をと、自身の都合をセシリアに押し付けたのだ。

断られるのを覚悟で。

結果は了承の意が帰ってくることとなる。

一応、簪の特訓に付き合うことにセシリアにもメリットがあるよ
うなプレゼンを行ってはみたつもりだったが 実にあっさり
りと了承され過ぎてしまっただけで、返って戸惑う事になった。という
か、未だに戸惑っている。

なにしろそれまでほぼ見えず知らずの状態だったのに、突然無理を
言った立場なのに、何故だかやたらと親しくされているのだから。

「初日に比べて随分と洗練されてまいりましたわね？」

「え？」

唐突な言葉。そう思っているのは簪だけか。

セシリアにとって、他者との会話と言うものは、これほどにゆったりと間を置きながら、優雅に行うものなのかもしれない。

だから、言われた言葉が理解できずに瞬きする簪に、セシリアはゆったりとした口調で繰り返す。

「弾頭の誘導制御が、初日の頃に比べて随分と無駄が少なくなつて、洗練としてきましたわ」

「あ……っと、あり、がとう？」

返事に詰まって出たありきたりな謝礼にも、セシリアは優雅に微笑む。

「どういたしまして」

お力になれたのなら幸いです、と。

「あの……ありがとうございます。凄く……助かって、る。それから、迷惑かけて、ごめん、なさい」

自分のために他者の時間を拘束する。申し訳なさを覚えぬ訳には行かなかった。

しかし、顔を伏せる簪に、セシリアは首を横に振る。

「迷惑だ何て、そんな悲しいことを仰らないで下さいな。お友達の頼みなんですから。協力するのは当たり前です」

「……おとも、だち？」

あまりにも自然に告げられた一言に、簪の思考は真っ白になった。

友達。

更識簪と、セシリア・オルコットが、友達？

まともに言葉を交わしたのは、わずか数日前の話なのに 友達？

「はい」

だが戸惑う簪とは対照的に、セシリアは断言する。

「同じ目標へ向けて互いに切磋琢磨する関係を、友達と言わずに何

と仰るのです?」

自分たちは友達と言つ關係にあると。

「同じ、目標……」

「解りませんか?」

解るはずが無い。

二人が特訓の目標に掲げているものは、別々だ。

簪はミサイルの同時多数個別誘導を目標に。

セシリアはB T兵器による偏向射撃　レーザーを曲げること
を目標に。

互いが互いを、利用しあっている。二人の目標は一致しない。

「ん……そうですわねえ」

わずかに首を横に振る簪に、セシリアはたおやかな仕草で口元に指をやって小首を傾げる。

その後で、華のある笑みを、戸惑う簪に向けた。

「目標ではなく動機と言い変えたら、どうでしょう?」

「……動機?」

「はい。更識さんが見ず知らずの私に頭わたくしを下げてまで訓練を行う必要性に駆られた動機。　その切欠となった、想い」

「おもい……」

簪は内向きで消極的な性格をしている。

努力よりも諦めが先に立つ、そんな弱い心の持ち主だ。

冒険は苦手だ。新しいことを始めるのは、苦手なことをするのは、人前に出るのは。

そういったことには、可能な限り視線を逸らし耳を閉じ、踵を返すようにしてきた。

しかし簪は、不可能を可能にするためにセシリアという親しくもない少女を頼り、そして今日まで特訓に励んできた。

自分で思い返しても、確かに、異常なことだ。

よほどの決意が無ければ、出来なかつたであろうと自分でも思う
ほど。

(……想い)

或いは情熱と言ひ換えても良いかもしれない。

胸の内を燃やすものが、そんなものが果たして存在するのか
存在、するのだ。

「私は、織斑だけを頑張らせたくないから……友達が、頑張ってる
のに、我慢してるのに……何にも、しないなんて」
出来ない。してはいけないと、思う。

彼に失望されたくない。

彼を知りながら何もしないままで居る自分を、失望したくない。

だから、努力をする。慣れない真似も、苦手なことにだって、挑
戦する。

「私も、ですよ」

万感たる想いを込めて、セシリアは簪の言葉に頷いた。

「あの方の傍に立つに相應しい、恥ずかしくない自分で居たいので
す。あの方が好んでくれる自分を、大切にしたい」

だから、ほら。

「つまりは、あの方のため。あの方の隣に立つ自分のため。私たち
は同じ目標を、抱いているでしょう?」

「あ……うん」

そうかもしれないと、簪は頷く。

織斑一夏のために。織斑一夏に……。

(……あれ?)

いやでも、何か間違つていやしないか?

一夏のため。動機は確かに、そうだろう。でも何か、少し自分とセ
シリアは、ズレて居る　ズレていなければ、可笑しいような。

「ああでも……」

首を傾げる簪をよそに、セシリアは言葉を続ける。

「お友達と言う表現がお好きでないのでしたら、『恋敵^{ライバル}』でも宜しいですけど」

「恋つ　！？」

簪は顔を真っ赤にして声を引きつらせた。

あまりの事に口をぱくぱくさせている簪とは対照的に、セシリアは優雅にお茶を嗜んでいる。

「私^{わたくし}、何か間違いましたかしら？」

「なに……っ、何、何も、違っ！　違っよ！　私、違っ……！」

「こ、こ、こひとか、違っ、恋とかじゃ、無いから！　織斑は、わたっ、私の……！」

「わたしの？」

小首を捻るセシリア。

清ましてんじゃねーよこの縦ロール。

ひっぱたいたるか、と自分らしからぬアグレッシブな思考が簪の脳裏を掠める。

「ともだち、だもん！　恋、とか……違っから！」

プルプルとチワワのように震えながら、簪は言う。

セシリアは、そんな簪の言葉に、ゆっくりと首肯した。

「でしたら、私^{わたくし}たちはただのお友達ですわね」

あっさりとして、不思議なほどあっさりと同意したのだ。

「私^{わたくし}と更識さんはお友達。一夏様と更識さんも、お友達。　　ですわね？」

「そう……そう、だ、よ？」

あまりの手ごたえの無さに戸惑いながらも、簪も頷き返す。

セシリアはなるほど、なるほどと二度頷いた。
頷いた後で、綺麗な笑みを浮かべて、簪に尋ねた。

「では、ただのお友達の私わたくしへ向ける更識さんの想いと、ただのお友達の一夏様へ向ける更識さんの想いは、同じものなのかしら？」

「……え？」

問われて、簪の思考は真っ白に染まった。

否定、肯定、反論、虚偽、訂正、同意。幾つ物思考が右往左往し、まるで口から言葉が出てこない。

顔面は、まるで火がついたかのような熱が宿っている。

恨めしいことに、自身をこんな状況に貶めたセシリアは優雅に微笑んでいる。

それで、一つだけ解った。

この新しい友達は、案外、意地が悪い。

百十三話（後書き）

聖母がスールで薔薇の館な空気のな何か。全然違っけどさw

例によって引っ張ってくれる人が居ないと、自立心が芽生えるって事なんだと思います。

組み合わせ的には『とりあえずやってみた』的なものだったんですけど、案外良い組み合わせになったかもしれないですね。

原作だと、別のヒロインとほぼ全く会話して無いんだよね、この子。

百十四話（前書き）

恒例（？）の夢オチ回です。

夢オチで締めますので、この話は本筋には全く影響を与えません。

ぶっちゃんけ読み飛ばしても何も問だ（ry

百十四話

「ああ、ヤダヤダ」

人気の無い、夜の遅い都心の官公庁街に、一夏のくたびれた声が小さく響く。

セットした髪を自ら掻き乱し、息が詰まりそうなほどぴっちりと締めたネクタイを緩める。

「ほんつと、やんなるな……」

街灯の照らす夜道を駅前へ向かって歩を進めながら、一夏はもう一度毒づく。心からの声で。

ついでに、苛立ち混じりにソフトコートで補正された地面を革靴で蹴る。

「……はあ」

大きなため息。眉間にしわを寄せて、まさしく不機嫌そのものだった。

それは、普段の彼を良く知るものからすれば、珍しいと思える光景に見えただろう。

自分　あくまで自分、他者には掛からない　　の負の感情をむやみに表に出し、周囲の人間に不快感を感じさせることは、彼にとって尤も忌諱すべきことのひとつだったからだ。

今の彼は一人だ。

周囲に人の気配は無い。この街に彼の知り合いは、居ない。

そして精神的に大なる疲弊を負っていたから、多少、内に込めていたものが漏れてしまうのも、止むを得なかった。

「男の嫉妬なんて、見苦しいだけだっつーの」

言葉が毒々しい色に染まってしまふのも、仕方が無いだろう。

査問会、と言う物が開催された。

IS学園近くの臨海公園で起こった、一夏も参加した戦闘行為に関する物だ。

重軽傷者多数。幸い死者はゼロだったが、臨海公園は文字通りの壊滅。

芝生の広場もレンガ敷きの遊歩道も、ついでに地下の大駐車場とか、付近の道路、ライフラインなども。

元々戦闘行為が発生するなど想定していなかったそれらの施設は、全損。

算定中の被害総額は、目を覆うべきものとなるだろうことは間違いない。

『お咎めなし』で済ませるわけには、国家政府のプライドに掛けて、いかなかったのだ。

とは言え、事は国防を飛び越し世界のパワーバランスに関わるISに纏わる問題である。

例えば当事国が断固とした態度を取ろうとしたところで、横槍が入るのは必死だ。

特に今回の一件に関わったIS操縦者が、こぞって特殊な立ち居地に立つ者達であれば。

責任を取らせて拘束する、などと言う意見が通るはずが無いのだ。そう言った事情からの、今日、今まで行われていた査問会である。当事国が当事者から直接事情を聴取し、そして『お咎めなし』を確認するための、作業。

『問題が無いことを自分たちで確認した』と言う形で、法治国家

としての建前を満たすための、意味の無い作業である。

会場でどのような経緯をたどろうと、結果は予め『お咎めなし』と決まっている。

世界が、その結果を肯定している。織斑一夏、及び他のIS操縦者たちに責任を負わせないことを、求めている。

相応の責任を負わせたいだろう当事国は、憤懣遣る瀬無いことこの上ない状況である。

査問会の会場は、毒々しい空気が満ちることとなった。

結果は予め決まっているのだから、弁護士などつかない。誰も容赦などしない。

少年一人を数時間以上にわたって起立させたまま、周囲を囲う権力者たちが寄って集っての吊るし上げだ。

厭味たらしく、ねちっこく、悪意に満ちた。

そんな、苛立たしいばかりの時間に、一夏は今まで晒され続けていたのだ。

言葉の端々に、こらえ、溜め込んできた毒が見えてしまうのは、止むを得ないだろう。

「羨ましかつたら自分も腹に風穴開けてみればいいんだよ」

自分でも良くないなと気付いていたが、湧き上がってくる黒い思いを留めるのは、難しかった。

「……ああ、くっそ！」

前髪を掻き筆る。

久しぶりに正面から悪意の波に晒されてしまって、自身で制御できないレベルにまで感情がささくれ立っている。

この状況で学園に戻ってしまえば、胸に蟠る黒い感情を、誰かにぶつけてしまいそうだった。

溜め込むくらいならいっそのこと誰かに、と言う思いもある。

一度吐き出してしまえば楽になれるのだから。

しかし、それをしてしまうと、余りにも自分の都合で他人を使いきる結果となる。

正気に返ったときに、その事が理由で凹みそうでもあった。

「……こー言う時はお酒でも飲んでさっぱり忘れるのが」

良いのだけど。

ひらめきに、自画自賛的に頷く。

だが悲しいかな、若干十五歳の一夏が好きに酒を飲める環境など、自宅以外のどこにも無かった。

そこらの居酒屋に入ろうとしても、門前払いを受ける事は想像に難くない。

会員制のホテルのバー辺りなら……それでも、難しいだろう。

「家に帰れば……いや」

現在の住居の学生寮ではなく、生家に戻れば、私物の酒が確保されている。

しかし、家には迷惑をかけたくない人が、居るのだ。

その人には常日頃から自分のせいで大きな負担をかけていたし

そしてこの一件ではもう既に、かなりの苦勞を強いてしまっているのだ。

その人なら、一夏が苦い顔で酒瓶を空にしているところを見れば、先ず間違いなく付き合ってくるだろう。

愚痴も聞いてくれる筈。だがそれでは、本末転倒である。

愚痴を聞かせたら、その内容に後で、その人はきつと、一人で落ち込むに違いないから。

ならばやはり、実家以外で。場所の確保以前に、先ずは酒類の確保が大変になってくるが。

「そういえば」

呟いて、一夏はスライドパッド式の携帯端末を懐から取り出す。

慣れた手つきで画面をスクロールさせていくと、目当てのデータ

は直ぐに発見された。

そのデータを見て、コレならいける、と一夏は一人で頷く。頷いた後で、苦笑を浮かべた。

「……でもコレ、一人で利用するって、どうよ？」

アイデアとしては悪くないが、些か決まりが悪いと言うか、格好が付かないと言うか。

「誰か付き合ってくれる人とかが居ると良いんだけど……」

出来れば優しく受け止めて、或いは笑い飛ばしてくれる、年上の包容力溢れるお姉さんとかを、希望。

「海外転勤中は、恵まれてたって事かなー」

皆、構ってくれたしなどと、嘯く。

既に一人で気晴らしをしようと言う当初の目的から大きく外れた事を考えながら、一夏は夜道を進んでいた。

このまま駅に辿り着いてしまえば、諦めて帰るしかないなと思いつながら。

その時、車のクラクションの音が、聞こえた。

顔を上げる。

路肩に一台の乗用車が止まっていた。運転席の窓が開いて、よっこらせと危なげな動作で、女性が半身を乗り出してくる。

「お疲れ様、いーくん」

童顔、眼鏡。窓枠に押しつぶされた服から零れ落ちんばかりの巨乳。

「まーちゃん？」

「えへへ、迎えに来ちゃいました」

にへら、と微笑むその人は、IS学園一年一組副担任、山田真耶に違いなかった。

どうやら、自家用車で一夏を送迎してくれるつもりらしい。

非公式の査問会は、何時に終わるのか判別付かないものだったか

ら、ひよつとしたら結構長時間待たせていたのかもしれない。

一夏は数度、瞬きを繰り返した。
そして。

「……まあ、この辺で妥協するかあ」

「何のこと!？」

凄い失礼な言葉の後に、真耶に一つの誘いをかけた。

都会の片隅。高い堀と木々に囲まれた内側に、その場所はある。

古めかしい趣を感じる、こじんまりとした洋館。無論、外装、内装共に完璧に磨かれ抜かれており、瑕一つ、埃一片ありはしない。

内側は華美に走り過ぎない落ち着いた調度品で飾られており、そこで時を過ごす人々に、安らぎを与えてくれた。

「じゃ、乾杯」

「かんぱい……って、あの、いーくん？」

天然の木立を思わせる静かな庭を見張らせる窓辺のテーブルで向かい合って、一夏と真耶はグラスを合わせる。

一夏は愉しげに、対照的に、真耶は戸惑いを浮かべたまま。
真耶が困惑するのも当然である。

何しろ、一夏は彼女の自家用車の助手席に乗り込むが早い、勝手にオートパイロットの目的地を設定してしまったのだから。勿論、真耶には何の説明も無く。

車の目的地は、都心の何処にこんな土地が余っていたのかと疑問

を感じてしまうような塀に囲まれた森の中の洋館である。

外界からの進入を閉ざす背の高い門は、一夏が自身の携帯端末をかざす事であっさりと開いた。

車は敷地内の誘導管制に誘われるままに駐車場へと止まり、二人を車中から解放する。

そして、一夏に手を引かれるままにたどり着いたのが、この場所だ。

こじんまりとした二階建ての洋館。

一夏がドア脇の端末に携帯端末を重ねると、扉のロックはあっさりと解除される。

洋館の内部は無人。全自動給仕配膳用のロボットが、真耶たちを出迎えた。

戸惑う真耶を尻目に、一夏は音声操作でロボットに食卓を整えるように命令。

そして気付けば、二人は向かい合って、ワイングラスを併せていたのだった。

「あの……いーくん、此处、何？」

チビチビとグラスを傾けつつ、真耶はたずねる。

「ん？ うん。別荘」

「別荘！？ いーくんそんなの持ってたの！？」

年下の少年のあっさりとした返しに、真耶は大声を出して驚く。

一夏は微笑を浮かべた。

「違う違う。会員制で共同使用している場所なんだ、此处は。ホテルほどサービスが良くない代わりに、見知らぬ他人と一つ屋根の下に居る必要も無い。世界中にあるから、お金に余裕のある人たちが異国にのんびりと滞在したい時とかに使うんだってさ。因みに、柵の広さから気付いてたと思うけど、敷地内には他の人が使ってる屋敷もあるよ」

先ず顔を併せないように管理されているらしいけど、と聞き伝の口調で一夏は応じた。

「元々偉い人たちが密やかなお付き合いとかをするための場所だから情報管理も徹底してるし。此処なら気兼ねなく、周りの目を気にせずにお酒が飲める」

「あの、私、学校の先生……」

「何言ってるのさ。まーちゃんがお酌をしてくれたんじゃないか」
同罪同罪と、一夏は笑う。因みに、互いにお酌をしろおうと提案したのは、一夏である。確信犯だった。

笑いながら容赦なく真耶のグラスにワインを注いでいく。

「うう……高いお酒が飲めるのは嬉しいけど……良いのかなあ」

倫理的に考えれば、当然だが良い訳が無い。

が、真耶自身も既に酒に飲まれてしまっている状況で、言葉には微塵も力が無かった。

「因みにいーくん、こおいう場所って、お金とか……」

既に何杯も飲んでいる状況で聞くのもどうかと思いつつ、安月給の教員は教え子に尋ねる。

教え子は何てことも無い風に肩を竦めた。

「セレブリティ御用達しの会員制超高級ラブホテルって最初に言っただでしょ？ 食費とかのお金は全部会費から出てるらしいから、財布の事は気にしなくて良いって」

「言ってる無いよ！ ら、ら、ららら、ララブホテルなんて私聞いて無いよ！？」
と言つかいーくん、なんでそんなのの会員になってるの！？」

「ん？ 知り合いのおねーさんから誕生日の前祝にプレゼントって貰った」

顔を真っ赤にして捲くし立てる真耶に、一夏はいつそ暢気な口調で返す。

因みに会費もくれた人持ちだから好きなだけ飲んで良いよ、などと、完全に他人事の態度だ。

「それ、絶対くれた人が一緒に使うためにくれたヤツだよ……」
「いやいや、貰ったからには使い方の自由は僕にあるに決まってる」
「うわぁ」

真耶は駄目だこの子、と言う顔で一夏を見ていたが、ふと、彼が言った言葉に気になるところがあることに気付いた。

「……誕生日？」

「うん。月末誕生日だよ、僕」

目を瞬かせる真耶に、一夏は頷く。これで漸く十六歳だと、若干嬉しそうに。

「……私、聞いて無いよ」

「言っただけだったっけ？」

「うん……ううん？」

一度首肯して、しかしその後、真耶は自分の言葉に首をかしげた。一度ワイングラスを傾けた後で、もう一度記憶を浚い直す。

織斑一夏の誕生日。

「……九月の二十七日？」

「なんだ、知ってるじゃない。学園のデータとかで見た？」

「違う……と、思う」

そう、違う。だって、この知識は。真耶は思い出した。

「三年前に……聞いた」

「あ、やっぱり言ったよね」

一夏は気楽に頷いてくれたが、真耶にしてみれば、自分がその事実を忘れていた事が、疑問だった。

一夏の誕生日。

聞いたからには自分が何かをしようとしたのは道理であり、そして思い返せば、事実として何かをしようとした記憶が、思い出せる。(……でも、確か)

何かをしようとした　けれど、その年の九月、真耶は自分が何かをした記憶は、無かった。

忘れていたわけではない。なぜなら、何もしなかった記憶は、ちゃんとあるのだから。

（私は、何も出来なかった……）

恥ずかしくて、怖くて。他にも色々、感情が無い混ぜになって初めて出来た好きな人。出会ってから初めて迎えるその人の誕生日。

真耶は準備だけはして、しかし実際に行動に移す事が、出来なかった。出来なかったのだ。

（それで、そう、それで……）

その、出来なかった分も含めて。

それまでの怯えから来る失敗を全て取り戻すために。

その年の春。一夏が海外へと旅立つ、その数日前。

真耶は、自身の想いを、一夏に伝えた。

（伝えて……逃げた）

口に含んだ赤い雫が、いやに苦く感じられた。

苦い記憶。拭ってしまいたい、忘れてしまいたいような。

そして事実、真耶は可能な限り、それら失敗の記憶を忘れようとしたのだ。

誕生日何ていう情報も、勿論。季節が一巡するたびに失敗の記憶を思い出すのは、辛かったから。

「情けないなあ、私……」

「いきなりどうしたのさ？」

一夏が目を丸くする。真耶は微笑を浮かべ首を横に振った。

恥ずかしげに目を伏せて、グラスに残ったワインを口に含む。

空になったグラスに、再び一夏がワインを注いでくれた事に礼を

言いながら、真耶は内心で、一つの決意をした。

(今年は、絶対ちゃんと、プレゼントを贈ろう)

今まで渡せなかった分も含めて。忘れていたお詫びと
から。 それ

(それから、今度こそ……)

曖昧にしたままの自らの想いを。

(想いを、形に……形……かたち?)

想いを、形に。

「~~~~~!!」

「ど、どしたの?」

突然ぱつと身を起こし、凄い勢いで辺りを見渡す真耶。一夏は目を丸くした。

(かたちに……かたち、って。此处、さっき、いーくん)

「まーちゃん? まーちゃん?」

何度も何度も首をめぐらせて、辺りを見渡す。

古めかしい洋館。人気の無い 二人以外は、居ない。

窓の向こうだって、木立が揺れるのみ。誰も見ては、居ない。

二人きりだ。

若い男女が、良い仲の、若い男女が、二人きりなのだ。

思い出せ、織斑一夏は、この場所を何のための場所だと、言った
のか。

(ら、らら、ら、ららららららぶ、ラブホテル……っ!)

ラブホテル。

それは所謂。男と女がごにょごにょにょにょで。

これはひょっとして。

(ち、チャンスなのでわっ……!!)

B GがB L塗りつぶしに切り替わりT光の雷エフェクトが1 K中4で瞬きそうな衝撃が、真耶の背筋を駆け抜ける。

(学園では生徒の皆が居るから全然二人きりなれないし、夏休みの時はファイルス先生が全部持ってっちゃったし、外で会おうとしても約束を取り付ける段階で先輩にばれるし……でも、でも！)

ひよつとして、今なら、イケるんじゃないか。そんな確信的な予感を、感じた。

一夏に視線を向ける。

「……さつきから、どしたの？」

「う、……ううん、べ、別に！」

「あ、そう？」

「そう、そうなの！」

首を傾げる一夏に、無理やりな笑みで誤魔化す。

(チャンス……これ、チャンスだよな？ そ、そそそそそそそういうための、場所なんだし！ それに、そう！ たたたたたた誕生日のお、お祝いとか、で、理由にしちゃえば……！)

イケる。間違いない。

ゴクリと、緊張で喉を鳴らす。

乾いた舌を濡らすために、グラスに満たされていた液体を、一息で飲み干す。

思考は既に赤熱化している。顔からは火が出はじめそうなほど。

身も心も、湧き上がる思いで焼け焦げそうなほどだ。

口を開く、喉が渇く、グラス 空だ、瓶から液体を注ぎ、満

たし、飲み干す。

ふう、と、大きく息を吐く。そして大きく、息を吸う。

一度、瞼を閉じて、カツと目を見開き そして。

いーくん、私と……

「ひいふううううううう……ふひゅう」

パタリ。

目の前で年上の女性がテーブルに突っ伏すのを、一夏の視界はスローモーションで捕らえた。

そりゃ、倒れるわな、と冷静に理解していたりもする。

「あんだけ一気に飲んでればなあ……」

意外とアルコールきついんだよな、とグラスの中の赤ワインを揺らしながら、苦笑した。

「いいふううん……」

真耶は何かよく解らない寝言を呟いている。真っ赤な　　しかし、幸せそうな顔で。

童女のような笑みだなど、一夏は思った。

「見てると心が癒されると言うか……」

少なくとも、薄汚い脂ぎった中年の粘ついた視線は記憶から消し去れそうな笑みである事は、確かだった。

「それにしても、なんで何時も何時も、この娘は僕と一緒に居る時は、一人で先に寝ちやうんだらうね？」

昔　　浜松で訓練していた頃からの話である。

信頼されているのだらうか。

それとも、相手にされていないのか。

古い付き合いで、実は男と思われていないのかもしれない。

「まあ、何でも良いか」

少なくとも自分の気持ちだけは固まっているんだから、機会を作る努力さえしていれば、そのうちどうにもこうにもなるだらう。

半ば酔いどれの思考で、一夏は思う。

半ば負け惜しみの思考だよなと、一夏は苦笑する。

「お休み、まーちゃん」

テーブルに置かれた空のグラスに自らのグラスの縁を合わせて鳴らす。

二人きりのゆったりとした夜が、静かに過ぎていく。

その後の話を少しだけ語ろう。

真耶は体よく、その晩にあつた全ての事実を記憶から消失した。

一夏の誕生日を、月末に控えていた事も含めて、全てを、だ。

何故こんな場所に居るんだろうと疑問を覚えながらも、一夏に背を押されるままに、二日酔いの頭を抑えて学園への岐路に付く事となる。

誕生日を前日に控えたその日、一人だけまだプレゼントを用意していなかった事に気付いて、真耶が大慌てになるのは、全く別のお話。

百十四話（後書き）

『ま〜ちゃんのに〜づまだいあり〜』への道は遠い、と言っ話。
このコンビは何かイベントがあるたびに、最終的にどっちかが記憶を飛ばすのがお約束と言っ事で。

最短でもあと十年くらいかかるんじゃないかな！

「あれ？　じゃあ一夏は外へ出かけたんだ？　平日なのに」

「う、うん……」

更衣室でISスーツに着替えている途中。

最近は何人に話しかけられる事が増えたなど、親しげな声で声をかけてくれたシャルロット・デュノアに返事をしながら、簪はこっそりと思う。

「市内には一夏の端末の反応は無いし、バス、電車の搭乗履歴も無い……誰かの車か何かで、遠出してるのかな」

「シャルロット、当たり前のようにネットワークに進入しての特定個人の位置情報をトレースするの、止めなさいよ」

ホロティカルモニターに表示された画像を確認していたシャルロットに、ため息を吐きながら鳳鈴音が突っ込みの声を入れる。

当然だが、ネットワークへの不法侵入はバレたら犯罪である。バレなくても勿論犯罪だが。

しかし、『シャルロットは何それ美味しいの？』とばかりにニコニコと笑っていた。
ぶっちゃん怖い。

「だって、何処へ行ったか気になるじゃない。簪さんもそう思うでしょ？」

「わた、私……？」

突然会話を振られて、簪は戸惑う。シャルロットは気にせずにつけた。

「うん。だってパートナーなんだし。気になるよね？」

ただの相槌の言葉の筈なのだが、『パートナー』と言う単語の響きだけが、妙に圧力を持っていたように感じたのは、気のせいだろうか。

気のせいって思っておきなさい　と言う文字情報が網膜に投影された。発信元は直ぐ近くに居た鈴音である。

簪は見なかった事にした。当然、シャルロットの言葉にも、疑問は感じていない事にする。

「私は……ちゃんと、行く先、知ってる……よ？」

「だと思っただわ。大体ホラ、パートナーを放って勝手に訓練してるのは、あたしらも同じじゃない」

何かを誤魔化すかのように、殊更大きな声で鈴音が同意した。

因みに鈴音のパートナーはセシリア。シャルロットのパートナーはラウラ・ボーデヴィツヒである。

現在両者は、それぞれの国の事情で学園を留守にしていた。

そして一夏も、学園内には居ない。

偶然互いの事情を知ってしまった三人は、ならば効率よく三人で訓練をしようと示し合わせて、こうして同じアリーナへとやってきたのだった。

タッグマッチリーグを二週間後に控え、それぞれ別個にパートナーを有する三人が一緒に訓練する事は、本来ならおかしい話だ。

だが、最初に三人で訓練しようとして誘いをかけてきたシャルロットは、どうやらパートナー同士ではないセシリアと簪と一緒に夜間訓練をしていた事を知っていたらしい。

だったら僕達と一緒に訓練しても良いじゃないかと、人好きするにこやかな笑みで背中を押されてしまえば、簪も頷くより無かった。

鈴音も、なら良いかと頷き、今に至ると言う訳だ。

「代表候補生は訓練以外にもやる事があるから、仕方ないよね」

シャルロットはしみじみと頷いた。

頷いている　ただ頷いているだけなのだが、何故だろう。

代表候補生ならやる事もあるだろうけど、そうじゃないならやる事は無い筈だ、とても言いたげに感じてしまうのは。

「簪さん、どうかした？」

「なん、でもない……よ？」

フランス人形のような愛らしい笑みを向けられて、簪はチワワのように震えながら首を横に振った。

ぶっちゃけ凄く怖かったのだ。　慣れなさい　と言う文章情報は気にしない方がいいかもしれない。

「と、ところであんた達、知ってる？」

頬を引きつらせながら、鈴音が口を挟んでくる。

明らかに話題を逸らすのが目的だろう。簪はそれに乗っかる事にした。

「知ってるって、なに、を？」

たずね返すと、鈴音はよし来た、とばかりに指をピンと立てて続けた。

「生徒会がブックメーカーとして仕切って、タッグマッチリーグでオッズをつけるって話」

生徒会、と言う単語を聞いて、一瞬簪の心がざわめく。

それが顔に出る前に、シャルロットが反応していた。

「賭け事をするって事？　そりゃ、国際リーグとかでも公式にやってる事だけど……学生が賭け事って、良いの？」

「賭けるのは食券だって。　って、まあその辺はどうでも良いのよ。問題は、三年とかはもう集計始めてて、オッズが出始めてるって事」

オッズ。つまり倍率が少ないチームほど、人気が高いと言う事だ。リーグ戦に参加するタッグチームを思い浮かべれば、どのチームに人気が集まるかなど　どのチームが優勝すると皆が思っているかなど、想像に難くない。

「……篠ノ之箒と生徒会長のペアが、一番人気だよな？」

簪は尋ねた。暗い声にならないように、意識して気を払いながら。鈴音は少しだけ片眉を上げたあとで、頷いた。

「そ。一番人気はあの扇子女のペア。二位が上級生ペアで、因みに私とシャルは揃って横ばい。簪と一夏は」

「最下位、だよな……」

言い辛そうな顔をした鈴音に、簪は微苦笑を浮かべて続ける。

「簪さんたちは今までの行事に参加してなかったから、データが全然無いし……後は多分、人气が低いのは、一夏のせいじゃないかな」シャルロットが苦笑する。鈴音もしみじみと頷いていた。

「遠距離一本槍の一夏が、よりもよって接近戦用の機体だもんねえ」

誰も勝てると思わないわと、肩を竦める。

それはその通りだなと、簪も思う。

何しろ簪ですら一目見て理解できる通り、一夏は接近戦が苦手だ。と言うか、高速機動　　どころか、飛行自体が苦手なのだから、最早救いようが無い。

『世界で唯一の男性IS操縦者』でなければ、間違ってもISに搭乗することは無かっただろう、それくらい才能が無い。向いていない。そもそも学園の敷地を跨げなかっただろう。

そして、簪も最近漸く専用機が運用段階に入ったばかりで、調整の余地はまだまだ有り余っている状況だったから、そんな二人の組み合わせが期待されていないのは当然だろう。

当然だろうと、理性で理解できる。

だが、しかし。

「私は、勝つ、よ……」

大人しげな口調で、でも、はっきりと口にする。声に出して言う。勝ちたいと、簪は思っていた。

逃げずに戦わなければと、簪は信じていた。

「へえ」

その言葉を聴いて、鈴音はニヤリと笑った。シャルロットも、頷く。

「うん、やるからには勝ちたいもんね」

「そうよ、周りの意見なんて、知ったこっちゃ無いわ」

でも。

「あたし等だつて負ける気は無いのよ？」

「そうそう、目指せ全勝だよ」

それは、鈴音とシャルロット、二人とて同じなのだ。

二つの強い笑みを向けられて、簪は一瞬たじろくも、しかし顎を引き、口を開く。

「……負け、無い……よ」

確りと、言う。

「私と織斑が、勝つ……いっばい、頑張ってるんだから」

今日だつて、そうだ。頑張っている。

一夏はどう頑張っても勝機の薄い現状を打破するために、開発会社への交渉へ赴いているのだ。

武装の改良、或いは、機体自体の仕様変更を行うのか。

それは解らない。

だが、『当てはある』と言っていた、一夏の言葉を信じて、簪は自分出来る事をすれば良い。

「……行くっ」

「そうね、何時までも此処で時間つぶしてるのも勿体無いし」
着替えを終えて立ち上がる簪に、鈴音も頷いて続く。

「そうそう、簪さんと一夏のごことは、訓練中に聞けば良いだけだし」
二人の背後に続くシャルロットが、ニコニコしながら、言い添えた。

「……ホント、慣れたほうが良いわよ」

「……頑張る」

助けて、織斑。

そう思ってしまったのは、簪だけの秘密だった。

(……あれ?)

更衣室からアリーナへ続く道すがら、簪はふと疑問を覚えた。

今日の一夏の行き先は、市内　バスを乗り継いだ先にある、
打鉄うちかね式式の開発元である『倉持技研』の研究所の筈だ。

市内に、ある。

(でも、シャルロットはさっき……)

一夏は市内には居ない。

そう、言っていないかったらどうか　?

まもなく到着しますと言う機内アナウンスを耳にして、一夏はタブレット型端末に表示していた電子ブックから視線を上げた。

小さな窓から、外の景色を覗く。

午後一で学園を飛び出してきてから、まだ時計の針は四十五度と動いていない。

だがいつの間にか、空は朱色に染まっていた。

水平線まで見渡せる海の青と、空を焼く、沈み行く夕日の赤い色。絶景、そう言う他なかった。

自らISを使って、風を受けながらそれを見渡せば、尚心地よかつたかもしれない。

そんなことできる筈が無いと、解っていたが。

何しろ此処は既に、日本ではない。

此処は、世界最大の大国が、太平洋の中心に持つ領土の楽園、ハワイ州。 常夏

一夏は、そこへ来ていた。

「夏って感じたなあ」

むせ返るような熱気。湿気。

背筋を伸ばしながら、滑走路に停止した軍用機のタラップを降りる。

日本とハワイの間を僅か数時間で結ぶ高高度高速輸送機は、しかし客を乗せるために開発されたものではなかったから、当然、貨物室に無理やり据え付けられた簡易座席に座らせられていれば腰も痛くなる。

周囲を歩きかう軍人たちが時折向けてくる訝しげな視線に気付かぬ振りをしたまま、一夏は滑走路へと降り立った。

ゴツイ日焼けした兵隊に先導されるがままに、滑走路脇の待機所か休憩所のような小屋に押し込まれる。

しばらくお待ちくださいと、そのまま、空調など存在しない熱気に包まれた狭い小部屋に、一人で放置されることとなった。

「扱いワル……」

ため息を吐いて、勝手に窓を開ける。

室内と殆ど変わらない熱気の籠った風が吹き込んできて、一瞬間
そうになった。

やる気の失せた態度で大きいため息を吐いた後で、暇つぶしに辺
りの景色を見渡す。

海上迷彩された戦闘機や輸送機などよりもよほど、建築資材を運
ぶ重機の方が目に付いた。

米軍ハワイ基地は、現在復興の真っ最中だった。

「派手にやられたもんだなあ」

夏の始まりのころ、この基地はテロリストによる襲撃を受けて壊
滅的な打撃を蒙った。

配備されていた戦闘機、及び艦船その他が徹底的に破壊され、つ
いでにレーダーや管制塔などの基地主要施設も軒並み叩き壊された
のだ。人員の被害も、勿論尋常ではない。

太平洋の覇者たる大国の、その主要基地が壊滅　などという
結果を引き起こしたのだから、なるほど、ISと言う兵器がどれほ
ど桁外れな存在か、解ろうという物だ。

「……にしても、少し遅くないかな」

窓の向こうの広い敷地の中では、軍服姿の人々がせわしなく行き
かっている。

一夏の存在など、誰も気にも留めていない　そもそも、彼が
居る事に気付いているのかどうか。

いや、関わるなど伝達されているのかもしれないが。

IS関連の事例に関しては、ISに携わるもの意外は原則干渉不
可能と言つのが定番だったし　と、そこまで思考を働かせてい
た時。

ゴオオオオオオオ。

ジェット噴射の音が聞こえた。

滑走路が近いから、何もおかしくは無いのだけだ。

ゴオオオオオオ。

ジェット噴射の大きな音が聞こえた。どんどん近づいてきている。と言うか、窓の向こうでいるんな人が空を見上げて叫んでいる。驚き逃げ惑っている。

「あ………」

その後の展開が大いに予想できてしまった一夏は、始末書を代筆させられる人が可哀想だなと思い、自主的に小屋を出る事にした。「な〜んでこんなにはっちゃけた人になっちゃったのかなあ」

いや、気付いていなかっただけで元からだったんだっけ？

やれやれと苦笑しながら、手荷物を量子格納庫に収納して、ついでに防御システムを最大レベルで稼働させる。

音の壁が上空から突っ込んできていたが、そのお陰で何の問題もなかった。

夜景を眺める気軽さで、空を見上げる。

「一夏！」

喜色満面な声と共に、金属の塊が突っ込んできた。

金属以外のパーツの方が多い筈なんだけど、総じて言えば金属の塊である。

それが、音速を超える速度で一夏にアスファルトの地面の上に立つ一夏に向かって、斜め八十度くらいの角度で、空から突っ込んできた。

瞬時、ISの全装甲を顕現。

スラスタ噴かして逃げてやるのかなとか言う思考も一瞬浮かんだが、文句一つ言わず身を伏せて耐えてくれている基地の兵隊の皆

さんに悪いかと思いとどまる。衝撃波で聞こえないだけで本当は言ってるのかもしれないけど。

そして、ゼロコンマ以下の間に行われた無駄な思考が終わったのとほぼ同タイミングで、衝撃が、来た。

衝撃は、意外なほど軽く。

金色の波が広がり、一夏の視界を覆う。

金属の塊はいつの間にか消えていた。

激突の瞬間にPICを最大効率で発揮して、慣性力の全てを打ち消したのだと　そんな理屈染みた話は、どうでもいい。

気付けば、一夏自身もISを解除しなおしていた。

天より舞い降りてきた乙女に　自分のために天より舞い降りてきた乙女に、自らの手で、指で、触れるために。鋼の鎧は、今は余計だったから。

触れ合う。抱き合う。身を絡めあう。見詰め合う。

何だかんだと事前にブツブツと口にしておきながら、一度触れ合ってしまったえば、視線を絡めてしまえば、結局こうなってしまうのかと　微苦笑を浮かべた、つもりで。

きつとそれが、満面の笑みだと周りからは見えてしまうのだろうかなどは、当然、気付いている。

気付いていて、今は無視する。意識を目の前の女性にだけ、向ける。

額を触れ合わせた距離で、互いの身体に腕を絡ませ合っていたら、柑橘系の、夏の日差しを思わせる香りがした。

不意に、歓喜と郷愁と、そこに未練を含んだような、言い表しがたいない交ぜの気持ち、一夏の中に湧き上がる。

何時まで経っても、慣れない。

顔を併せるだけで舞い上がってしまう自分の心をこそ、一夏は笑

った。

その笑みのまま、再会の言葉を告げた。

「久しぶり……と言っても、まだ別れて一ヶ月経ってないけど。兎も角、久しぶり、ターシャ。……うん。相変わらず綺麗なままで、安心した」

「もうっ……そこは、前より綺麗になったねって言うてくれたら、もっと素敵なのに」

「いやだって、ターシャは何時だって美人で、綺麗だ」

「……一夏、ちょっと口が上手くなったんじゃない？」

頬を赤らめ、微笑んだ後で。

「お久しぶり一夏。会いに来てくれて、とっても嬉しいわ」

ナターシャ・ファイルスは少女のように愛らしくはにかんだ。

百十五話（後書き）

女の子たちが真面目に頑張ってるのに、このアホと来たら……。

と言う訳で、『全員出すよ！』の当初目標にのっとりラスボス出陣。

次回はウザいバカップルの進行でお送りします。

既に充分ウザいけどな！

百十六話

「ターシャ……」

「一夏……」

「ターシャ」

「一夏」

二人はそのまま至近距離で見つめあい、やがて、どちらともなく
瞼を落とした。

更に近づく、二人の距離。更に、更に、更に……。

「アンタ達、そろそろいい加減にしてくれない？」

頭上から、最高のタイミングでストップの音が掛かった。

お約束とばかりに凄じい勢いで身を離して、空を見上げる。

余談だが、二人が全く同じタイミングでそうした事が、余計に周
囲で遠巻きに見ていた人々の気分を鬱なものにした。

「時と場所を考えなつてのよ、全く……」

PIC特有の反響音を響かせ空へ浮かんだまま、躍動感溢れる美
体を誇る女性が、それに見合わぬ疲れた顔を浮かべていた。

タイガーストラップ
虎縞模様の装甲が特徴的なISを纏うその女性は、一夏、ナター
シャ共に、見知った顔である。

二人は苦笑いを浮かべながら、その女性に声をかけた。

「ええつと、お久しぶりです、イースさん」

「あはははは、ごめんねイーリ、つい、ね？」

イス。或いはイーリ。
本名は、イーリス・コーリング。米国の国家代表IS操縦者の女性である。

別に、男の姿が無いと言う訳ではない。

だが女性しか操る事の出来ない超兵器　　ISの関連のエリア
と言う性質上、どうしても女性職員の比率が大きくなる。

故に必然としてその空間は、『男子禁制』と言う雰囲気纏う。

此処での主役はあくまで女性。男は添え物以下の役割しか与えられない。

女性優位の現代社会の、まさしく縮図とも呼ぶべき空間だった。

だが、例外と言うものは何処にでも存在する。

そして『例外』と言う存在は、往々にして、目を引くのだ。

例えば世界唯一の男性IS操縦者、織斑一夏なんて存在が居たら、それは目立つに違いない。

とは言え、今彼が人目を集めているのは、全く別の理由なのだろうが。

外に比べて、明らかに金の掛かった近代的な作りをしている広大な建造物。

巨大な搬入口の脇に備わっていた勝手口を、先導するイーリスに続き潜った一夏が見上げる先は　　ある意味、見慣れた光景と云えた。

IS整備格納庫。

広い空間、高い天井を持ったその内部には、両壁面に沿って、ゼ口からの組立作業すら可能とする専門の調整装置が並んでおり、現在はそれらには、基地保有の汎用 操縦者を特定しない、共用機 ISが、完全復元状態で何台も接続されている。

それ等の機体には専属の整備員達を取り付き、ケーブルで繋いだ端末を操作しながら、調整作業に勤しんでいた。

勤しんでいた 過去形である。

なぜなら彼女等は、傍を一夏達が通り過ぎるたびに、作業の手を止めてしまうのだ。

皆が皆、ヒソヒソと近くの者と内緒話を初め、或いは彼に視線を向けて、或いは指を差し、さらに剛の者に至っては、私用の携帯端末のデジカメ機能で写真を取るような有様だった。

おそらく、一夏が笑顔で手を振れば歓声 と言うか、嬌声があがるに違いない。

「コラ！ よそ見してないで作業に戻りな！」
前を歩くイーリスの一声で、蜘蛛の子散らす勢いで、視線は逃げていった。

「全く……悪いね、一夏。何時も何時も」
背後を振り返ることなく、イーリスは言った。

一夏は微笑交じりに頷く。

「まあ、ある意味、慣れてますんで」

気にしてませんよ、と肩を竦め……それは、ちょっとした事情で出来なかつたけど。

「学園で毎日毎日何時も何時も女の子に囲まれてるから、慣れてるものね？」

これは、ナターシャの言葉だ。

からかいを多分に含んだそれを、一夏は空笑いで避けて、イーリスは僅かに肩を震わせるだけで黙殺した。

その態度のまま一夏に向かって言葉を続ける。

「ま、まあ見ての通りの男っ気の無い職場だからな。ある程度は、

我慢してくれ」

「いえ、気にしてませんので、本当に」

「皆の王子様は、皆に見られるのがお仕事なものねー？」

硬い言葉と硬い返事に、空気を読まないお気楽能天気な言葉が続く。

再び一夏が頬を引きつらせ、ついでに冷や汗を額から垂らす。

イーリスは青筋が浮かぶほどにコブシを握り締めて、震わせていた。

「ほら一夏、手を振ってあげなくっちゃ」

はしゃいだ調子で言いながら、ナターシャは勝手に一夏の手を持ち上げ、それをパタパタと振り回す。

「いや、あの……ターシャ？」

「なあに？」

ニコリ、と年齢を感じさせない笑顔。成熟した女の美貌が浮かべる、生娘のような愛らしい笑みに、一瞬一夏の胸は高鳴る。

が、前を歩いている人の放つ気配が、そろそろマツハの勢いで凍り付いてきていたので、慌ててそれを追い払った。

「あのお、ターシャ」

改めて言い直す。

「なあに？」

ナターシャは、相変わらず一夏の手を取ってパタパタと振り回していた。

手と手を取って、顔の位置に持ち上げて、振り回す。

「これ、手を振るって言わないから」

ただ、仲良く恋人繋ぎで互いの指を絡めあっているのを見せびらかしているだけである。

因みに、二人の肩はゼロ距離にまで接近している。

「この、馬鹿ツプルどもめ……！」

前を歩むイーリスが眉間に皺を寄せて、呻く。

男っ気の無い職場で好き勝手にイチヤイチャイチャイチャとして
いるのだから、お前等空気読めよと思いたくなるのも当然だろう。

「え〜？ コレくらい普通じゃない」

しかしナターシャは自他共に認める、『愛に生きる』女だった。

ついでに、夏を跨ぐ辺りで遂にそれまで培ってきた『美人で優し
く色っぽい年上のお姉さん』と言うキャラクターが崩壊し、その本
性が一夏に知れてしまったため、ならば最早、彼女が自重する道理
は 本人の中では 何処にもなかったのだ。

好きな人が居れば、引つ付く。甘える。愛をささやく、或いは表
現する。

双方が同意の上でなければ、完璧にウザい女そのものだった。

「いや、そこで『ね？』って言う顔を向けられても、僕に答えられ
る言葉は無いんだけどね」

ハハハ、と乾いた笑いで一夏は応じる。その返事を聞いて、イー
リスが再び、大きなため息を吐いた。

「そこで強く『NO』って言えないんだから、キミも同罪だよ、一
夏……」

素直ないい子だったのに、すっかりナターシャの色惚けにそまっ
ちやっとなあと、イーリスは近所の小母さんのような哀愁を漂わせ
ながら呟く。

「せめて人が見てないところでやれっつての」

半ばと言うか、完全な諦め口調だった。

「大丈夫よイーリ、人が見ていないところではもっとうまい事してあ
げるから」

「イーリスさんと話してたのに、なんで途中から僕の方みるのさ！」

「あ、顔赤くなつたあ。なあ〜に想像したのかな〜」

「何って……ターシャが往來で変な事言うからいけないんじゃない
か！」

反論する一夏の頬をつつくナターシャ。

イーリスは絶対に背後を振り返らない事を堅く誓った。

二人を引き離す勢いで格納庫を進む。

無論、キャツキヤウフフな殺意を覚えそうなほど甘ったるい空気は、何処まで行ってもついてきたが。

重厚な造りの隔壁を開き、更に奥へと進む。

下方に向かって緩やかな傾斜となっている、何度も何度も折れ曲がる通路。

通路の一片の長さは、上から見れば格納庫を構成する四辺とほぼ同じ距離だ。

つまり、格納庫の外壁に沿って張り巡らされた通路を下って、地下へと向かっている形になる。

時たま通路脇に見える巨大な扉が、その奥にある貴重な存在を予感させた。

「ネバダと変わらないね、この辺の造りは」

相変わらずナターシャと腕を絡め身を寄せ合わせたままの一夏が、興味深げに、或いは感慨深げに辺りを見渡す。

「建設されたのが同時期だもの。設計をそのまま流用してるのよ」

「まあ、IS関連の研究開発施設なんて何処も一緒のつくりになるか」

兵器体系としてまだまだ歴史の薄いISは、本格的な軍事運用が開始されてから、まだ十年と経っていない。それに付随する施設の建設は急ピッチで行われていたから、工期短縮のために可能な限り設計図面等は流用される事となっていた。

無論、IS本体の研究予算の確保のために、工費をケチりたいと言っ理由もあったが。

「ネバタの頃、思い出す？」

鼻面を頬に触れさせる勢いで顔を振り向かせ、ナターシャが尋ねてくる。

「忘れた事なんて一度もないよ」

「あら？ ……フフ、私もよ」

一夏の答えに頬を緩ませ、ナターシャはそのまま顎をつい、と上へ傾ける。

朱色の薔が、一夏の頬に触れる。

一度として背後を振り返っていなかったイーリスの刻む足音が、その時だけやけに大きく響いた。

「あらイーリ、どうかしたの？」

「あんた等をどうにかしてやりたい気分で一杯だよ……」
とぼけた 真面目に解っていないらしいナターシャの疑問の

声に、イーリスはがっくりと肩を落として呻く。

「ナタルは元からだったけど、まさか一夏までこうなってしまっ
んて……」

「あ、何かひどいこと言ってる」

「いや、僕がイーリスさんの立場だったら、ほぼ同じ思いを抱いて
いると思うよ。だからうん、少しは自重しようよターシャ」

若干頬を引きつらせながら一夏が言う。

だが、言っておきながら自分から手を離すそぶりすら見せない辺
り、最早救いようがなかった。

「環境は人を変えちまうんだね……」

イーリスは漸く背後をちらりと振り返り、そして大げさなため息
を吐いて、立ち止まる。

「ここだ」

既に二十四回ほど、角を曲がった時のことだった。

地下第六階層。気密情報管理エリア。

壁にはめ込まれた無機質なプレートには、そう刻まれていた。

その下にある端末に、イーリスは自らのIDカードを通す。天上からレーザーセンサーが降り注ぎ、イーリスの全身をスキャンする。数秒の間を置いて、認証が完了。

ドアロックの表示が、開錠を告げるグリーンへと変わった。

ISのハイパーセンサー越しでもないと確認できないエネルギーバリアが分解され、そして物理的な隔壁が、上下左右に四分割され、自動的に扉は開口される。内部と外部の温度差に、霧が吹き出してきた。

内部に広がっていた空間は　　どう言っても、『空間』と記すしかない場所だった。

面積は、外周を取り巻く廊下の幅を差し引いて、更にそこから一回り狭くしたくらいだろうか。

壁と天上と床。全て同じ材質の白いパネルで隙間無く覆われており、距離感を見失わせる。

かろうじて中央とわかる場所に屹立する床と天上を結ぶ巨大な円柱が、何やら神聖な雰囲気すら感じさせた。

「実際には、ただの量子サーバーなんだけど」

きつと趣味人が設計したんだろうなと、やけに演出がかった景観の室内を眺め回して、一夏は苦笑いを浮かべた。

ここにあるのは、米軍国防ネットワークを構成する最新の量子サーバーの内の一つだ。

旧来的な電子ネットワーク技術の延長にある民生用ネットワークからは完全に独立しており、重要機密情報の管理維持に於いては、重要な役割を果たしている。

「……にしても、わざわざサーバー本体に来る必要ってあったのかね？」

巨大な円柱に端末をセットして、空間モニターを表示していくイ

ーリスに、一夏は尋ねる。

「上は七月の一件で随分警戒心が強くなってるからね。データバンクをネットワークに接続したくないのさ」

ーリスはぼやき口調で応じた。

因みにそれが、一夏がハワイくんだりまで来た理由である。

一夏は、先週日曜日に発生した突発的な市街地戦、その過程と結果に相応に思う事があったので、対策案の一助とするべく旧知の米軍にアポイントメントを取った。

欲しいデータがある、譲ってくれ、と。

そのデータは米軍のネットワークを構築する量子サーバーの一つに、特殊なプロテクトをかけられて厳重に保管されていた。

通常は各サーバーにネットワークから切り離されて保存されているデータだったから、他のサーバーを経由して情報を引き出すためには、相応に複雑な手順が必要にはなる。

だがネットワークに接続してしまえば、やりようによっては外部からの干渉が可能となってしまう。

例えば電子戦用ISの優れた 常軌を逸した諜報能力を用いられれば、如何な軍用量子ネットワークと言えど、クラッキングは防げない。

「日本も少し見習うべきだよなあ。委員会に突っつかれた程度で、スクランブル取り消しとか」

警戒感と言うか国防意識が低すぎるだろう、と一夏は嘯く。

現実問題、たった数機のISで大国の主要基地の一つが半壊してしまうのだ。

現有兵器を圧倒するISの秘めたるポテンシャルを考えれば、石橋を叩いてわたらうと言う米国の判断は、まったく間違っていない。喉元を過ぎればあっさりと熱さを忘れてしまえる、日本人の能天気さは、些か問題があると思えた。

「そついえば、大変だったみたいね。街中で襲われたんですって？ 怪我とかしなかった？」

「うん、平気。英国のB T兵器実験機、サイレント・ゼフィルスだ
つたっけ。此処を襲ったのと同じヤツでしょ？ 多分、亡国企業ファントム・タスクの」
「あのテロ屋ども……あたしら二人がかりで、逃がしちまったんだ
よなあ」

嫌な事を思い出したとばかりに、イーリスが頭を掻く。
ナターシャも気難しげな顔で黙っていた。

国際テロ組織 ファントム・タスク 亡国企業 によるハワイ基地襲撃事件。

その一件に端を発し たのか、それとも、それよりずっと前
から始まっていたのか。

兎角、三人はそれぞれ事件の当事者として巻き込まれ、その経緯、
結末に、それぞれが複雑な思いを抱く事となった。

吐息を漏らして、一夏に身を摺り寄せるナターシャ。

自然、開いた片手が彼の腹部に触れていた。

一夏は微苦笑を浮かべて、彼女の手に、自らの空いたほうの手を、
重ねる。

「ん……」

「……うん」

腕を絡め、更に空いた手もまた、握り合う。互いを慈しみ合う笑
みを、向け合った。

「結局そうなるのね、アンタ達は……」

メモリーチップにデータを転送し終えたイーリスが、皮肉交じり
の微苦笑を浮かべるのも無理が無い光景だった。

如何に常夏の国であっても、日が沈めば、夜の闇が訪れる。

満天の星空の元、滑走路の片隅に、彼らは居た。
来る時に利用した輸送機が、背部ハッチを空けて、一夏の搭乗を待っている。

帰還の時間。つまりは、別れの時間だった。

「それじゃ、ターシャ……また」

「……うん」

微笑みかける一夏の手を取り自らの頬に擦り付けながら、ナターシャは頷く。

瞼を閉じて、何度も、何度も。周囲の視線など微塵も気にせずに。一夏はナターシャのするがままに任せて、イーリスの方へ視線を向ける。

「イーリスさんも、わざわざありがとうございました」

「気にするなつて。久しぶりにアンタの顔も見えておきたかったし、ついでにどのみち、あたしはナタルのお守り役だからね」

「……えーっと、ご迷惑、お掛けします？」

「一夏が謝る事じゃないよ」

引きつった笑みの一夏に、姉御肌な言葉でイーリスは応じる。心地よいほど面倒見の良い女性だった。

「それより、データだけで良かったのかい？ どーせアンタのために作ったモノなんだから、現物持ってつちやえば良かったのに。量子変換しちまえば解らないだろ？」

「いえ、これで充分ですよ」

極薄のメモリーチップを収納したケースの入った胸ポケットを軽く叩きながら、一夏は言う。

「それに一応、倉持が開発したモノじゃなきゃ使つちや駄目だつて決まりらしいんで」

「それで設計図だけ、ね。現物を捨てるのは、あくまで日本のクラモチ、と。あくどくなつたねえ、一夏」

ニヤリ、と笑うイーリスに、一夏は肩をすくめる。

「まあ、狡賢く頭働かせて無いと、生きていけない環境に生きてますから」

「……ナタルがナタルなら、一夏も一夏だ」

「参りました、とイーリスは呆れた声で言う。今度は一夏がニヤリと笑う番だった。」

「ま、頑張りなよ」

「ええ。イーリスさんも。お元気で」

「じゃーね」

別れの言葉を交わし終える。

イーリスは、ヒラヒラと手を振りながら、その場を後にした。

後には、一夏とナターシャ。二人だけが、残される。

「ターシャ」

「……うん」

漸く、ナターシャは一夏の手を、離れた。

半歩分の距離で、見詰め合う。

「……少し、背が伸びたのね」

「……最後の最後で気づくことかな、それ」

ナターシャの見上げる視線に、一夏は微笑を浮かべた。

「もう直ぐ十六歳だよ。成長期真っ盛りさ」

「その内、立ったままの私を胸に抱きしめてくれるようになるのかしら」

「個人的には、あと十センチは伸ばしたいかな」

「具体的だ。何か、目標でもあるの？」

「実は、あるんだ」

具体的な目標。何処かの誰か。自称『地球人』の姿を思い浮かべながら、一夏はナターシャに微笑みかける。

そして、半歩分の距離を縮めるように、今度は自分の意思で、ナターシャの頬に手を添えた。

「目標を確かめることができたのは、そういえば、ターシャ。……キミの、お陰だ」

「それって……？」

「どう言う事なの、と。」

当然の、しかし返事を伝え難い質問を封じるために、一夏は半歩分の距離を、踏み出す。

ゼロ距離。

見上げる角度はほんの僅か。

顔の位置は、目線は、唇の位置は、殆ど変わらない。

ゼロ距離　　だから。

一拍の間。

「誤魔化された気分」

「いつでも、本気だよ」

「口ばかり上手くなって……皆に同じこと言ってるんでしょっ？」

「まさか。皆には皆のために、それぞれ別の言葉で伝えてるさ」

「……っ、もうっ」

真面目腐った一夏の顔に耐え切れなくなって、ナターシャは噴き出す。

一夏も、自分で言うておいて酷い言い草だったなど、肩を震わせ
て笑う。

互いの笑みと笑みを間近で見合って、それが更なる笑いへと発展
した。

ひとしきり、飽きるまで笑いあって。

「……じゃあ、またね」

「うん。また」

また笑顔で、会いましょう。

そんな言葉を交わした後、二人は再び、別れた。

百十六話（後書き）

テキスト量のインフレが止らん……。

でも今回結構削ったんだよなあ。

また五話くらい使って俺以外は得をしない話になりそうだったから。

まあ、削ったのは主に事情とか設定関係のむしろそっちを書けよって部分なのが、実に相変わらず俺得な話なんですが。

二次創作ってそういうもんだよねー。

お陰で一ヶ月以内に終わらないっばいですけど。

太陽を遮るほどに空を覆う網。

五つの爪状射出体それぞれの尾部から伸びる細い糸が、空の上で複雑に絡み合い、立体的なドーム状の網目を形成しているのだ。

糸は互いに絡み合っている。ならばいずれ、絡まりつくして射出体それぞれの動きを互いに阻害しあうようになるのではないか
そう考えるのは、如何にも早計だ。

太陽の光を反射し、朝露の如く煌くそれは、宇宙開発用の工作ロボットの遠隔操縦のためなどに用いられる、特殊な液体金属によって構築されている。

糸同士が接触した瞬間、高度な演算処理が行われ適宜流体結合や分離を繰り返す。つまり、絡まる瞬間に、どちらかが都合よくすり抜けるのである。この空を覆い尽くす糸は。

故に、糸を引きずる射出体の操作ミスを待つ事に意味は無い。
黙って見過ごしていれば、いずれ網の隙間はゼロ以下となつてしまふことだろう。

それほどに、射出体の操作は緻密で的確で、無駄が無かった。

(得意って言うだけある……でもっ！)

簷はその操作精度に見惚れながらも、自らの成すべき事を決して忘れていなかった。

ホロティカルモーターに表示される、五十三の空間飛翔体。その内四十八が、簪自身が発射したミサイル弾頭の群れだ。そしてそれらは全て、今や完全に簪の支配下に置かれていた。視線誘導、思考制御、鍵盤上のホロティカルキーボードによる手動打ち込み入力。

更には専用にかスタマイズした平行分散処理プログラムの補助まで加えて、およそ考えうる全ての方法を用いて、簪はミサイル弾頭に命令を入力。

何度も、何度も何度も何度も、失敗を繰り返しながら、遂に簪は四十八からなる全弾頭の個別同時制御に成功するに至ったのだ。その動きは複雑怪奇。生物的でもあるし、機械そのままにも見える。

縦横無尽、或いは好き勝手にすら見えるように、四十八の弾頭がそれぞれ空を舞い踊り、そしてそれぞれが決意した目標へ。或いは網目の隙間へ、或いは爪状の射出体そのものを、或いは液体金属の網そのものを吹き飛ばし、後続の突進を援護するために簪の意思に従って、解き放たれる。

着弾、着弾。回避もされる。再突入を試みる。小型の飛翔体が、高速で追いかけてくを繰り返す。

操縦者たちは、それを地上で見上げるのみだ。

液体金属の網に着弾した幾つかが、大輪の紅い華を咲かせる。

高性能炸薬の点火により、液体金属の網はとたんに吹き飛ばされる。かに、思われた。

「復元率が……！」

「惜しい惜しい。次弾の突入に時間を掛け過ぎたね」

「それだけじゃない、爆発の威力がかなり相殺されて……凝縮率を上げた、の？」

「正解。液体金属の密度、硬度、ついでに柔軟性を上げることにより衝撃を緩和して、再結合までの時間を短縮する。有線式自

在稼動話のナノファイラメントワイヤーより、確かに便利だ。第三世

代ISレベルの情報処理能力の円滑化が行われていないと使えない
ってだけあるわ」

お陰で、エネルギー馬鹿食いだけど。

攻撃を防がれて呻く簪の傍で、片手を空に掲げた姿勢の、射主体
の操縦者が嘯く。

その姿に、簪はチラリと視線を送る。

簪の纏う 打鉄式式・丙 と通ずる衣裳のIS。

名を、 打鉄式式・丁 。簪の操る丙の姉妹機であり、二機連携
運用を想定している。

丙の砲撃主体の運用思想とは真逆に、丁は近接戦闘に優れた設計
となっていた。

故に、同型機ながらその形状は中々に違いがある。特に、高機動
スラスタユニットを備えた背部は、二塔の荷電粒子砲を背負った
丙とは全く違う印象を抱かせた。

だが、設計開発元が同一のため、シルエットは違えど、ユニット
それぞれのデザインラインは同様のもので纏められていた。

纏められていた 以前までは。

今は、一箇所だけ明らかに毛色の違うユニットが装着されている
部分があった。

今も空に向かって掲げられている左手。

腕部マニピュレーターである筈のその部分が、右手のそれに比べ
て明らかに肥大化している。

そして先端、五本の指を構成する筈の部分から、五本の金属系が
伸びていた。

指が無い 否。

中央部に球形レンズをはめ込んだ化け物の如き巨大な掌の、本来
あるべき巨大な指は、今は空の彼方に存在している。

金属系を尾部から伸ばす爪状飛翔体が、その正体だ。

「全領域対応特殊兵装改め、打鉄うちがね式専用多機能特殊腕部 雪羅せつら。これ一つで、射撃斬撃防御までこなせる。いやあ、倉持も良い仕事するよねー」

爪が無くなり残った指関節をワキワキと動かしながら、愉しげな口調で織斑一夏は言った。

嘘ばかりと、簪は冷めた視線で鼻を鳴らす。

その形状は、明らかに打鉄うちがねのデザインラインから外れている。他の武装と比べてみれば一目瞭然だ。

簪の記憶が正しければ、米軍軍工廠辺りがよく選ぶ形状に感じる。と言うかそのまんまだ。

打鉄うちがねの他のユニットと似ている部分は、精々色くらいのものである。表面の分子配列を組み替えるだけで簡単に塗り変わるけど。

(アメリカ……)

市内の倉持技研の研究所に行くと偽って、あるうことが一夏は、ハワイまで飛んでいたらしい。

その事実が判明した時、本音やシャルロットの空気が空恐ろしいものになったのを思い出して、身震いする。

銃をジャキジャキやっていたり、或いはフフフフと低い声で笑い続けていたのは、今思い出しても正直思い出したくない思い出だった。とても怖かったし。

何であんな恐ろしい思いをしなければならなかったのか 決まっている、一夏が嘘をついたからだ。

「……っ！」

弾頭制御。網目を食い破るための二連続攻撃。初撃の爆風に巻き込まれないように次弾位置制御を綿密に行う。

水銀のように方々に飛び散る液体金属。半ば気化状態にまで拡散したそれは、しかし分子レベルでは未だ尚、再結合が可能な位置にある。急速に復元していく金属糸。

しかし、音速の衝撃波が、それらを更に吹き飛ばす。二撃目の、そして必中を帰した一撃。

「やられたか」

「やった……っ！」

む、と眉根を寄せる一夏と、歓喜に声を漏らす簪。

アリーナの地面に立つ一夏に向けて、ミサイル弾頭が飛来する。

簪は爆風に巻き込まれないように距離をとった。

着弾。爆裂。一夏を中心にして、激しい粉塵と、黒煙が巻き起る。

弾頭に込められた高性能炸薬は、一夏のISのシールドバリアーを大きく削る一撃になったであろう事は、想像に難くない。

当然、爪状射出体とIS本体とを結んでいた金属糸も、先端から散り散りになる。

優先接続故の精細な制御が緩む。隙を見逃さず、残ったミサイルでの集中攻撃。

五機の射出体の内三機を撃滅することに成功した。

空を覆う金属系の天蓋が緩む。糸同士の間隙が大きく広がっていく。

チャンスだ。残りすべての弾頭を、一直線に一夏へ向けて飛ばす。

ソニックブームで緩んだ糸を吹き飛ばしながら、それらは瞬時に、未だ黒煙に包まれたままの一夏へと殺到した。

直撃、直撃、直撃。

簪は自らの勝利を確信した。

しかし。

「視覚的な情報に惑わされて、拙速に逸るのは良くないね」

「！？」

息をするのも難しいだろう黒煙の中から、あまりにも呑気な、声。

視覚 単語の意味を理解した瞬間、ハイパーセンサーがとっ

くの昔に捉えていた情報に気づく。

爆心地にて、重力変動を感知。

敵性体の周囲空間を覆うように、重力障壁が展開されていた。

高密度の重力場は、爆発炎上の渦中にありながら、ドーム状に広がるその内側に、一片の塵埃も寄せ付けない。

センサーの感知した情報を元に、視界に映る全てがCGモデルに切り替わった。

透過処理された黒煙（のCGモデル）の向こうで、織斑一夏が微笑んでいる。簪に向かって。

（完全に防がれた！？ ……っ、駄目！）

必中の一撃を止められた。無傷。いや、それよりも問題なのは、ミサイルの直撃を防いだ重力障壁が、未だ展開されたままと言うこと。

（攻撃停止命令、軌道変更 間に合わない！）

今更ミサイルの動きを変えることは、出来ない。既に着弾も間近なのだから。

ミサイルの制御に集中しすぎてセンサーの察知した情報の詳解を怠っていた自分に、簪は齒噛みする。

（アレほど強力な重力場……展開には相当エネルギーを食うはず。

なんとか、この攻撃で……っ！）

エネルギーを削りきれば、簪の勝ちだ。

今回の模擬戦は、互いに使用する武装を制限して、IS本体の回避行動を行わないことがルールとしていた。 実戦であれば確実に機動力を生かした回避に移るであろう攻撃も、全て直撃を受けるか、或いは使用可能な武装で防ぎきらなければならない。

（全領域対応特殊兵装って言ってたけど、あんなに強力な防御能力を備えているなんて）

むしろ、この高密度重力場による防御能力こそが主であり、小型有線誘導兵器の方は、オマケの機能に過ぎないのではないかとすら思わせるものだった。

機体の駆動制御を補助する慣性制御と異常干渉を起こしそうな規模の重力障壁など、そう、目にかかれるものではない。

簪がこの模擬戦で唯一使用できる武装であるミサイルも、流石にそんなものを突破することを想定した威力は持たされていなかった。果たしてこの攻撃で、重力場を展開不能になるほどにエネルギーを消費させ、そしてIS本体のシールドバリアーを削りきる事が出来るかどうか。

弾頭が、遂に重力場へと接触する。

「……余所見をしていて、良いのかな？」

不意に耳に届いたその言葉と共に、簪の体は空を舞った。

「更識さんはアレだね。一つのこと集中しだすと、直ぐに周りが見えなくなるって言うか」

「……うう」

一戦明けての、その垢をシャワーで洗い落として、更にその後。アリーナ脇に備えられた休憩施設のベンチに隣り合って腰掛け、簪と一夏は、模擬戦の反省会を行っていた。

「無線誘導出来るなんて、聞いてない。爪が爆発するとかも……」

「そりゃ、最後の手段だからね。秘密にくらいはするさ。あ、変な姿勢でぶつかったけど、身体は平気？ 打ち身とか捻挫とか、してない？」

「平気。……少し背中が、痛いけど」

はう、と弱々しい吐息を、簪は漏らす。

模擬戦は一夏の勝利に終わった。

ミサイル弾頭は全て、着弾の間際、突然紡錘状に　　雨を凌ぐ傘のように変化した重力障壁に斜線を捻じ曲げられ、一夏の周囲の地面を耕すだけの結果に終わった。

重力障壁は展開範囲に限りがあり、形状を変化させれば本体全周を覆うことは不可能となるらしい　　が、尤も威力の高い直撃弾でなければ、充分IS本体のシールドバリアーで耐え切れる。重力障壁は必要ない。

体よく攻撃は避けられ、そして、簪は一夏の反撃を食らうこととなる。

糸が途切れ空に残っていた撃墜を免れたまま放置されていた二機の射出体が、簪へ接近。

途中で途切れた残り少ない糸を硬質に変化させて、簪を拘束し、体勢を立て直す暇を与えずに、高高度に上昇　　そして、地面目掛けて一気に落下。

ISを纏う簪自らの質量がもたらす衝撃の威力に、巻きついていった射出体の内部に仕込まれていた炸薬の破裂が加わる。

その結果、簪は模擬戦開始時に設定していたシールドバリアーの限界耐久値を超えてしまい、敗北することとなった。

「ま、今回はお互い可能な限り突っ立ってるだけってルールだったから上手く行ったけど、実戦だったら此処まで都合よくは行かなかつただろうし」

あまり気にすること無いよ、と一夏は慣れた手つきで簪の頭を撫でる。

「それより、更識さんが誘導弾の制御が上手くなってるのが、パトナーとしては有難いかな」

剥れた面でそれを受ける簪に、一夏は更に笑いかける。頑張ったね、と。

その態度が、余計に簪の顔を剥れさせた。

「……頑張った」

「うん？」

「私、頑張った」

「え〜と、うん」

何か空気があらぬ方向に行っていないかと感じつつ、一夏は頷く。

簪は顔を剥れさせたまま、不機嫌です、と言う態度を隠さぬ声で続けた。

「織斑がぜんつつっぜん、手伝ってくれないから、皆と一緒に頑張ったもん」

「……あ〜」

ヤベエ、怒ってる。一夏は瞬時に理解した。

誘導弾の制御の訓練を手伝う。一夏は簪と、確かにそういう約束をしていた。

だが。

「まあ、ね。あまり付き合いが良いとは言えなかったのは、うん。その通りさ。その通りだけど……ホラ、僕は僕で、方々に連絡を取って頑張っていた訳で」

その成果が、今日完成し、模擬戦で披露したばかりの新型武装、多機能特殊腕部 雪羅^{せじら} なのである。

と、言い訳してみるのだが。

「……ハワイで遊んでたくせに」

「ハハハハ……」

ご存知でらっしやる、と一夏は頬を引きつらせた。

「いや、でもね、うん。ター……ファイルス先生達の口利きが無ければ、データの回収が出来なかったからね？ その、ホラ。色々と権利関係も複雑だし、裏側の事情も諸々でして、手続きとかで時間を取られまくってしまった訳で……」

じ〜〜〜〜。

無言で睨まれた。

「……ごめんなさい」

一夏はあっさりとは敗北を宣言した。藪で蛇では済まない予感が合っただけだ。

情けない調子で頭を下げる男を見て、簪は大きく息を吐いた。

「良いよ、別に。リーグ戦でちゃんとやってくれば」

「勿論、確りやりますとも。この間みたいな自殺特攻^後、墜落、みたいな情けない姿は見せませんって」

そのために、グレーゾーンを擦り抜けて旧白鯨^{モビーディック}の開発途中だった武装のデータを米国から回収してきたのだ。

慣れない大剣だけを握って下手糞な機動を無様に晒すような真似は二度としないと、一夏は自信を持って頷く。

因みに、左腕に巨大なクローアームである 雪羅^{せじろ} を装備した関係上、両手持ちで振り回すことが前提とされる 雪片・改^{ゆきひら} は装備から外されることとなった。

今は変わりに、脇差型の予備の実態剣を備えている。勿論、一夏はそれを使う気は微塵も無く、銃身を長く、口径を大きくして威力、射程を高めたサブマシンガンを主武装として使う気が満々である。

更に 雪羅^{せじろ} がエネルギーを食うからと、高機動型のスラストユニットも出力を低めに設定されており、最早打鉄^{うちがね}式式・丁の初期コンセプトは瓦解しかかっている有様だった。

「出来れば右腕もユニットごと連装砲^{タケイ}に交換したかったんだけどなあ」

「……それ、本当にただの白鯨^{モビーディック}だよ、ね……？」

「まー、建前を気にし過ぎて、それで命の危機に陥っちゃうと、もう遠慮してられないっつーか」

「冗談染みた口調で、本気の言葉なのだろうなと簪は理解した。

公園での一件は、下手をすれば実際に命を落としていた危険性があつたのだ。

しかもおそらくは、紙一重の確立で。

「……今度は、私も、ちゃんとやる、よ」

あの時は何も出来なかつたけど。怖くて動けなかつたけど。

でも今は違う。戦えると、簪は決意を込めて言う。

「期待してるよ」

「任せて」

深く、頷く。その後で、パチクリと瞬きをした。

「でも……織斑の新武器のせいで、すっかり連携の仕方が変わった
やうね」

「ああ、そういえばそうかな」

一夏は苦笑を浮かべて頷く。

簪の言うとおり、雪羅を装備し、それに併せて機体を再調整した打鉄つちかね式・丁には、最早近接戦闘能力を期待するものもおこがましい、ほぼ別の機体へと成り果ててしまっている。

「近接戦に期待できなかったのは、元からだけど」

「更識さんも言うようになったね。事実だけど」

半笑いで、一夏自身が同意してしまうほどに、一夏はISの超高速戦闘に向いていない。

得意距離はOTHと言い切ってしまう、偏った能力を持った男だった。

「まあ、アレだよ。有線式自在稼動クワイークエケ……じゃなかった、雪羅

のワイヤークローを使って僕が牽制。更識さんが砲撃で止めて感じかな」

「近づかれたら、危ない？」

「キミの薙刀捌きに期待しよう」

「織斑が、盾になるべき……そのための、新武装でしょ？」

「重力障壁グラビティウォール、まだまだ燃費悪いからなあ。範囲設定難しいし、ぶつちやけ止ってないと使えないし」

モレーティック
白鯨を使っている頃に間に合わなくて、まったく実戦で試してい

ないから、と一夏は苦笑する。

簪は頬を膨らませた。

「駄目。頑張るの」

「駄目と来ましたか」

「……駄目。やる前に諦めるのは、駄目だよ」

「……随分、気合入ってるね？ 僕ほどじゃないにしても、こういうバトル系のイベントとかは好きじゃ無いタイプだって思ってたよ」
出会った当初は無気力な娘だったよな、とか内心で思いながら、
一夏は尋ねた。

簪は断固とした態度で、頷く。

「勝ちたいから」

誰に、と、尋ねる必要も無かった。

「私は姉さんに、更識楯無に、勝ちたいの」

勝つために戦いを挑みたいのだと、簪は強い決意を、口にした。

百十七話（後書き）

見た目は名前通りで色違い。まあ、ギミックが違ってますが。

因みにこのチート武装の前フリをしたのは二十一話。およそ九十
六話ぶりの伏線回収だったりします。

本編で設定だけ考えておいて、結局使わなかったんだよなあ、コ
レ。

これを両手に装備して必殺のグラビトロカノンでラスボスを撃破
だな、とかこの頃は考えていたらしいです。

結果は新型に出番を奪われる事になったんですけど。

あ、ところで 亡国企業 に関しましては、これは仕様というこ
とでお願いします。

ゴメン、もう直してられんわ……。

百十八話

訓練終了後、例によって一人でやりたい事があるからと、別のアリーナへと向かった更識さんと別れて、僕は格納庫で白鯨……モレィデック……じゃなかった、打鉄式うちがね式の調整作業に当たっていた。

新武装である 雪羅 に、やはり色々と問題が多かったのだ。

何しろ、雪羅 は元々も別の機体で使用するための武装だったし、それを機体バランスも考えずに強引に打鉄式うちがねに取り付けてしまったのだから、問題も出ようと言うもの。

先ほどの運用実績を流し読みするだけでも、問題となるべき部分は恐ろしいほど多発していた。

パーツのマッチングが悪いのか、バイパスに不明瞭な膿のようなものが溜まってしまい、エネルギーを無駄に消費したりもしてるしで、肩部装甲と物理的に干渉してしまっていると言う事案が、可愛く見える有様である。

タッグマッチリーグ戦の開催は来週、日曜明けて直ぐ。

調整は急務と言えた。

と言うわけで、女の子同士で仲良く訓練しているパートナーからハブられつつも、リーグ戦の勝利を目指して一人 本当に一人で。

僕は全システムを顕現させた打鉄式うちがねをハンガーデッキに固定し、一次装甲を排除し内部機構を露出。

駆動系、動力伝達系も含めたフルメンテナンスを行うこととなった。

配線を確認し、有線ケーブルで専用の調整用端末を繋ぎながら、パラメーターの設定を細かく変更していく。

一人きりで。自主訓練中の一般生徒の皆様にご退場を願って。

これが学園保有の訓練機なら、誰かに手伝いを頼む事も出来るのだ。

訓練機に個人設定を登録　　と言っても、データを学園のサー

バーに保存するだけだが　　するときのように、整備科の上級生

とかに手伝ってもらえると、作業が早く進むに違いないのは当然である。

しかし如何せん、僕が扱っているのは最新の機密兵器である専用機である。

通常の訓練後の簡易メンテナンス程度の時であるならまだしも、内部機構を露出させての完全な調整を、まさか未熟な学生にやらせる訳にはいかない。

代表候補生が保有する専用機のフルメンテナンスは、それぞれの所属国家が派遣した機体専門の整備スタッフが行うこととなっている。

だが悲しいかな、現在の僕には専属スタッフが居ない。

白鯨モビータックの時に集めていた整備スタッフ達は、白鯨モビータックの封印処置に伴い、チームを解散。全員が元の配置へ帰還してしまった。

じゃあ、同じ打鉄つちがね式を扱っている更識さんのスタッフを貸してもらえよ　　と、お思いだろうか驚く無かれ。

あの気難し屋の娘っ子、開発企業からのスタッフの派遣を断つちやっただとさ。

最近は社交性が増えて角が取れてきたので忘れそうになるが、更識さんは元々、なんでもかんでも一人でやらないと考える、意固地なお嬢さんなのだ。そりゃ、他の生徒に比べて運用開始が遅れるわって話である。

因みに最近は、開発企業の方へ頭を下げに行ったりもしてるそうです。

「全くもって、成長したなあ……と、ここまで考えると、じゃあ僕も開発企業に顔出しに行けば、と言う話になるんですが、そこはそれ。」

極東のイエローモンキーが世界唯一の男性IS操縦者のIS運用データを独占するなんて誰が認めるかって、デカい声で吼えている人たちが多くてねー。

「ついこの間まで新大陸のヤンキーどもにデータをほぼ独占された時は、特に誰も文句とか言わなかったのに、この辺が外交能力の差ってヤツなんでしょうか。」

「お前ら機体だけ出せな。後は俺たちが、いや俺が、待て待て、俺が、どけ俺が。」

「とまあ、そんな感じで、しばらく一人で頑張りなさいよと玉虫色の回答が。」

「一人寂しく、三年間のワンオフ機の運用で培った経験を生かして機体の調整を行っているのです。」

尤も、そういう玉虫色の回答で留まってくれたお陰で、モビリティック白鯨時代の古馴染みのスタッフに独自に渡りをつけて武装のデータを融通してもらおう、なんてグレーゾーン一直線な真似が出来ただけだ。

「……いや、フォーチューナー星詠みの封印解除してくれよって話をしちゃうと、それまでなんだけど。」

雪羅の導線のチェックを終えて、独り言を呟きながら顔を上げる。

人気の無い格納庫は、いつの間にか自動で照明が点灯していた。

窓の向こうは、とくに日が沈んでいる。時計を　ISのシステムはスリープ状態。表層意識接続による機能の限定使用すら行

えない状況だったことを思い出す。

制服の尻ポケットから携帯端末を取り出し、時刻を確認。

寮の夕食の時間は、開始から既に半ば以上過ぎていた。

この学園、軍事兵器の運用を習熟するための施設と言ふ事で、とにかく敷地が広い。

格納庫があるのは実際にISを運用する　　つまりは一番危険な施設である、アリーナの直ぐ傍。

そして、生徒が朝夕の食事を取るための食堂は、学生寮に併設されている。

学生が日常生活を送る場所と、戦闘兵器を扱う場所は、離れた位置に作るのが当然だろうから、今から徒歩で食堂を目指すには、些か以上に時間が掛かる。

「自販機でサンドイッチでも買ってくるかなあ」

軽食の類は、アリーナ併設の休憩室で買える。

無駄に凝った感のある寮の食堂のメニューと比べて、あまり美味しくないので困りものだが、お腹が透いて思考力が鈍った状態で、命を預ける危険物を取り扱うわけにも行かない。

座り作業をしていたためすっかり固まってしまった膝を軋ませながら立ち上がる。

勝手口の方へと振り返り

「えい」

ぷに、と細い指が振り向きざまの頬を押した。

「そっかそっかあ。簪ちゃんがねえ」

ハンガーに固定してある打鉄うちがね式に背を預け、レトルトパックに詰められた弁当をパクついている僕の前で、ニマニマと頬を緩ませながらジューズを啜すすっているのは、我らがシスコン生徒会長、更識楯無さんその人である。

何を思ったのか、食堂のテイクアウトを持って陣中見舞いにいらっしゃってくれました。

格納庫、機密作業中に付き関係者以外立ち入り禁止って格納庫の扉のロックを設定してあったのに、一体どうやって入ったんでしょうね？

「知ってる？ ナノマシンって悪用するとハッキングとか出来るらしいよ？」

「水をぶっかけると、機械って壊れますもんねー」

ニコニコと笑う水分子制御用ナノマシンなどと言う特殊な武装を備えた専用機を有する女性の言葉に、頷く。

この笑顔を見たときは、深くは考えてはいけなのがお約束だ。

何しろこの人、学園のブラックな面を一手に引き受けてる感じだし。きつとこの学園の何処へでもフリーパスで入れてしまうに違いない。

あ、因みに。相方の虚うつつ先輩はどうやら所要でいらっしやらないらしい。非常に残念。

「何かエロいこと考えてる？」

ジーっと睨にらまれた。

「……一度、たっちゃんさんが僕の事をどんな人間って思ってるのかじっくり聞いてみるべきなんですかね」

「ん？ エロい人」

あとセクハラ魔神とか、小首を傾げた愛らしい態度から酷い言葉が返ってきた。

「誰が何時セクハラなんてしたんですか、一体」

「何時もしてるじゃん！ か弱い乙女に、ことある毎に！」

「雑談の範疇に含まれる話だと思っけどなあ…… たつつちゃんさんが耐性無さ過ぎるだけじゃないですか？」

「いま、なにかいった？」

「じゃきーんと、水で出来た槍を突きつけてくる。」

この人、どうも未だに『出来る年上のお姉さん』キャラを大事にしたいと思っっているらしい。

もうボロが出過ぎてね？ とかは、多分言わぬが花なんだろう。

僕は空気を呼んで話を逸らすことにした。

「いや、別に。ところで、随分嬉しそうですね」

「その『解ってますよ』って目が凄いムカつくんだけど……ま、良いや。嬉しそうって、何が？」

「そりゃ勿論、さっきの更識さんの……」

発言について。

話が横にそれる前までの会話の内容はは、主に最近の更識さんの様子についてだ。

シスコンなお姉さんとしては、距離を置かれているといってもやはり妹のことが気に掛かるらしい。

特に、つい先週辺りに命がけの戦闘行為なんてものを行ったとあっては。後ついでに、悪い男も近くに居るし。

とは言え未だに、この姉妹はどうも仲が悪いと言うか、気まずい関係と言うか。

直接本人に尋ねるには、お姉ちゃんちよつとそれは難しいかなーって話で。

じゃ、本人に聞けないならって事で僕に近況の確認に来た訳だ

まあ、僕としては二人の関係はぜひ二人で解決してください、と言う話だと思っっているので、更識さん本人のプライバシーに関わり過ぎない程度に、彼女の近況を伝えて聞かせることにして見たのだ。

話は、友達が増えたとかその友達と特訓してるとかお陰でISの調整が終わったとか僕がハブられるようになったとか その

最後に。

『更識簪は、更識楯無 偉大な姉を、打倒したいと誓っている』

なんていう、話題を出した。

引っ込み思案の妹の、一世一代の決意とも言つべき言葉。

これまでずっと、適わないと、適うはずが無いと目を背けていた姉を、打倒すべき相手と認めて、立ち向かう。

その決意を。

その決意を、 たっちゃんさんは知って 知った結果。

「だって嬉しいじゃない。簪ちゃんが立ち向かってきてくれるなんて」

ニコニコと、それはそれは、嬉しそうに笑うのだった。

「……ああ、そう」

大きくため息を吐く。

本気で言ってるから性質が悪いな、と思った。

妹が可愛くて仕方が無い たっちゃんさんらしい言葉だからこそ、余計に、本当に性質が悪い。

この構図は単純だ。

挑む妹。受け止める姉。

保護者への反意。それすらも愛情を持って受け止める保護者。

対立、対決を望む妹。その意思を認める姉。

認めるのは意思だけで、姉自身の意思は、妹との対立など絶対に考えない。

姉にとって妹は、守るべき、庇護するべき相手だったから。

更識楯無は更識簪の決意を、優しく愛情を込めて受け止めて見せるだろう。

だが、それだけだ。

受け止めるだけで、それ以上は無い。楯無は簪に自らの意思を押し付けることはしない。

正面から互いの想いを本気でぶつけ合いたいと望む更識簪の決意は、成立し得ない。

「少しは危機感くらい抱いてくださいよ」

「危機感って何さ？　ここはだって、感動する場面でしょ？　簪ちゃんの本気で私に向かってきてくれるなんて、だってこれまで一度も無かったことだよ」

楽しみ、と微笑む更識楯無。偉大なる姉。

「……ああ、そう」

案の定の言葉を返されて、僕は大きいため息を吐く。

同時に、納得する部分もあったが。

なにしろ、人間関係ってものは噛み合わない時は徹底的に噛み合わない物だと、幾つかの経験から知っていたから。誰が誰、と具体例を出すのは控えるけど。

（危機感の一つでも感じてくれれば、更識さんの劣等感が少しは拭えるんだけどなあ）

妹が本気で挑んでくる、と言う事態にはしゃいでしまっているたちちゃんさんに、それを期待するのは無理があるだろう。

この人は多分、仮にもし、更識さんが勝利することに　自分を打倒することになっても、それを笑顔で祝福してしまうだろうから。

悔しいとは思わない　いや、悔しさを覚えても、それを更識さんに見せたりは、しない。

（だからって、たちちゃんさんが悪いわけでもない。『互いのプライドをかけた真剣勝負』なんてモノを欲しているのは、今のところ更識さんだけなんだし）

そもそも、目の奥に入れても痛くない最愛の妹に対して本気で対

立の意思を持って、なんて事をたっちゃんさんに期待するのも、酷な話だろう。

たっちゃんさんはたっちゃんさんで、守ると決めた人を身命を賭してでも守る、と言う断固たる意思を持っているのだから。

(面倒くさい話だなあ、オイ)

比較的姉弟仲の良い家庭環境にある僕では、理解しきれない二人の想いだっただ。

(大体、あるのかね？ このイモウトスキーを、妹相手に本気にさせる方法なんて)

妹を闘争の相手として認識させる方法なんて。

文字通り本気で、容赦なく全力で打倒すべき相手と認識させる。

(少なくとも、今のままじゃ無理だし……今のままりーグ戦が終わったら……更識さん、また鬱モードに入りそうだし、なあ)

自分の本気が丸ごと全て、ぬるま湯のような暖かさで包まれてしまったなら。

失意はこれまでの非ではないだろう。

おそらくそれは、姉妹どちらをも不幸にするもので 傍から

見ている、とてもではないが気持ち良いものではないに違いない。

打ちひしがれる妹と、その理由を理解できずに打ちひしがれる姉。

想像する限り、それは最悪な未来予想図だった。

(あれ？ ひよっとして凄い不味い状況だったりするのか、コレ?)

高い確率でその未来が訪れるという予感に、僕は危機感を感じた。
打鉄式式の整備が終わらないとか、そういう問題とは次元が違う
危機的状况に、漸く気づかされてしまったのだ。

(……しかも、更識さんを焚きつけたのって、どう考えても僕っぱいのがなあ)

あの時、僕と相互意識干渉クロッシング・アクセスなんて行わなければ、更識さんはこん

な挑戦心を抱くことは無かっただろう。

責任の一端は、僕にある。

(何とかしないと……と言っても、たっちゃんさんに本気でやってくれて言っても)

たっちゃんさんの示す本気と、更識さんがたっちゃんさんに望む本気は、違う。

それでは意味がないというか本末転倒である。

(更識さんに諦めさせる……って、どんな外道だよ、僕は)

お前は努力する必要は無い、むしろするな、なんて非道なこと、あの頑張っている少女に言える筈が無かった。

(となると、やっぱり……)

状況から言って、なんとかしてたっちゃんさんに本気になって貰う必要がある。

自身を打倒するために挑んでくる更識楯無を打倒してこそ、初めて更識簪は自らの成長を実感できるのだから。

そして自分に一つの確信を得たその妹の姿こそ、更識楯無にとっても望むべくものだろう。

(いや、打倒に至らなくてもいい。たっちゃんさんが挑んできてくれさえすれば。挑まれるのを待っている、ではなくて……)

でも現実的に考えて、その状況へ至るのが、一番難しいのだ。

何をどうすればそんな絵面が完成するのか、僕にはまるで想像できない。

(登場人物を二人だけに絞ってるから駄目なのか？ なにか例えば

……そう、互いが譲れないものを賭けあって対決するとか……いや) 駄目だろう。

更識楯無が譲れないものだなんて、それこそ最愛の妹くらいしか僕には思いつかない。

「一夏君、さっきから百面相でどうしたの？」

「ああ、いや……」

アンタ達のせいだよ、とは言えず、言葉を濁す。

「機体の調整に関して、少し」

「ふ〜ん」

たっちゃんさんは疑わしげな視線を僕に向けた。

そして、唇を尖らせて続ける。

「どうせまた、えっちい事を考えてたんでしょ？」

駄目だよ？
—

夏君は確りと簪ちゃんを支えて……」

あげないと。

その言葉は、ガタン、と背後で鳴った音に、遮られた。

百十八話（後書き）

締め の 展開。

あと、原作で生徒に最新兵器を弄らせているというアレな展開が正直アレだったんで、設定を捏造する回。

産業スパイし放題じゃねーのアレ……と言っか整備員まで女子なの！？

百十九話

「簪ちゃん」

「更識さん」

何故か鍵の掛かってなかった勝手口の扉を開けて、格納庫に姿を現せた簪の姿に、分解整備中のISの前に陣取って歓談していた一夏と楯無は、驚いた目をしていた。

簪の登場を、まるで予期していなかったのかのような、驚きに満ちた瞳。

隙間の開いた扉の影に潜んでいた簪の存在にまるで気づいていなかったかのような、驚きに見開かれた瞳。

（姉さん、やっぱり……っ！）

ギリっと、簪は奥歯を噛み締めた。

更識楯無ともあるう人が、自分如きの存在に、気付きもしないなんて。

まるで周りのことに気が回っていないような態度になっているなんて。

（姉さんは、やっぱり……！）

違うないと、確信できた。

今まで一片たりとも理解できないと思っていた遠い存在
偉
大な姉を、簪は今確実に理解できてしまった。

更識楯無の想い、自身に向ける想い、更識楯無の、想い。

だからこそ。

踏み出す足に、これ以上込める勇氣は必要なかった。恐れを抱く必要は、何処にも無かった。

同時刻。

太平洋に面する港町の倉庫街で、爆発事故が発生。貨物を保管していた大型倉庫二棟が炎上。

内部に保管されていた輸入建築資材から発火したと言われているが、詳しい原因は不明。

尚、爆発と同時に、上空へ飛び上がる四つの人型の影を目撃したとの情報も寄せられているが、やはり真相は不明である。

現在消防隊による消火作業が行われており、日付が変わる頃までには、鎮火するものと。

簷が此処に居るのは、偶然、ではない。

食堂にも、部屋にも居ない。寮内に、彼の姿は無かった。

軽薄でだらしなく見える私生活の態度に反して、実は神経質で生真面目な事を、簷は知っていた。

他人に迷惑を掛けたくない。弱い部分を晒したくない。

だから、一人でこっそりと、地道にISの調整だつてするだろう。夕食の時刻を忘れるほどの集中力で。

なら、食事を届けに行こうかなと、思ったりもする。

一緒に食事を取っていた同学年の友達たち　いつの間にか、
沢山に増えた　と、熾烈な駆け引きを繰り広げて、タッグパー
トナーという立場すら持ち出して、何とか勝利を、彼に夕食をデリ
バリーする権利を得て。

こうして、弾む足取りを隠せぬまま、格納庫まで来たのだ。

そして、見た。

仲良く、親しげな笑みを交し合って、共に夕食を食べる彼と姉。

そして聞き、知った。

簪の決意を知った、姉の態度。

簪の決意を歯牙にすら掛けない、強者の余裕。

なるほど、その泰然とした態度は、確かに簪の知る姉の姿に相応しい。

完成された美。優れた頭脳。常人を超越した肉体能力。多くの人を掴んで離さない魅力。

更識簪が望み、恐れ、憧れた。それはまさしく、更識楯無その人の有り様だった。

(……けど)

踏み出す足に、これ以上込める勇氣は必要なかった。

恐れを抱く必要は、何処にも無かった。

(けど、私は、知ってる……！)

完全無欠の存在なんて、居ない。

どんなに完璧に見えようと、薄皮一枚剥がすだけで、そこには到底他者には見せられない、弱く、浅ましく、情けない部分が、誰にだって存在しているのだと言うことを。

(私はもう、知ってるんだから……！)

完璧であろうとすればするほど、その内側に広がっていく覆い隠したそうではない部分のことを。

彼にはあった。自身には、当然。話を聞いて、言葉を交わして知った。美しく華やかな友達達にも、その部分は存在する。

(姉さんにだって……姉さんにだって！)

更識楯無にだって　　更識楯無であっても。

(完全無欠では、無い……この人は完全無欠のフリをしているだけ。自分は大丈夫だから、皆を守るからって　　誰も心配する必要が無い、一人で戦える人だからって)

少なくとも、簪の前で示す態度は、完璧その物。

簪が望み、恐れ、憧れ、魅せられずにはいられない　　完璧な姿。

簪はその姿を。

今はもう、取り繕っているだけだと知ってしまったっているその姿を、尚。

(憧れている)

いや、むしろ。だからこそ憧れていると、簪は強く思う。

辛いことも大変なことも一杯あるだろうに、それでも、簪の前では少しもそれを見せず、ただただ、妹が尊敬し得る姉の姿を演じきっていたこと。

その姿、意志の強さに、簪は憧れを抱いた。

その強い意志、それほどの意志力を示せるのであれば　　なるほど、圧倒的上位の視線で簪を見るようなことも、その態度も認められるほか無い。

庇護者たる立場に、甘んじるより無い。

そんな風にすら、感じてしまっていたのだ。

だからこそ。

「姉さん」

簪から呼びかけるのは、果たして何年ぶりだろうか。

そんな事を考える余裕が無いほど、簪は一つの思考にとらわれていた。

「ど、どうしたの、かな。簪ちゃん」

焦って、慌てる姉の姿。

簪は我知らず、奥歯を噛み締めていた。視線を逸らす。呼びかけたまま、それを放って。

この場にいるもう一人の人間、唯一の少年に、視線を向ける。

「織斑」

「はい？」

織斑一夏。

彼の背後には分解整備中のISがハンガーに固定されている。

あそこまで機体を分解してしまえば、機能の部分実行も行えないだろう。

ISを使えないときの織斑一夏は、世間一般の高校生男子の平均を下回るような、反射神経や運動能力、危機察知能力の低い少年に過ぎない。

故に、彼が簪の存在に気付いていなかったことは、まったく不思議ではない。

誰かと違って。

「織斑」

「……はい」

もう一度呼びかける。一夏は硬い表情で頷いた。

簪は続けて口を開く。

「姉さんは学園からの依頼で、仕事として貴方の護衛をしている…
…その事を、知ってる？」

一夏よりもむしろ、視界の端に見えた楯無のほづが、目を見開い

ていた。だが、簪はそれに構うつつもりは無かった。

真つ直ぐに一夏を見つめ続ける。

一夏は数度、言われた意味を噛み締めるように瞬きをした。そして。

「そりゃ、知ってるけど」

むしろ知らないはずが無いだろうと言う態度で、頷いた。

それがどうした、とすら言いたげな口調だ。

彼ならそう答えるだろうと思える、ごく自然な態度だと簪は思った。

一夏の態度は、全うだ。

だからこそ《……》。

眉を八の字にして決まり悪げに唇を震わす、楯無の態度が余計に目に付いた。

「姉さん」

更識簪は、更識楯無と視線を合わせた。

恐れも無く。むしろ恐れているのは、楯無の方にすら、見えた。

名を呼ばれるだけで肩を跳ねさせる女性。合わさる瞳が、揺れている。憧れていた姉が、目の前に居た。

何を伝えるべきか。

どう伝えるべきか。

何を、伝えたいのか。

決まっている。

「私、織斑が好きなの」

楯無の瞳が、遂に驚愕に震えた。

簪はそれを見て、笑みを浮かべそうになってしまった。皮肉な意

味ではない、あまりにも微笑ましくて。愛おしくて。とてもとても、姉の存在を近くに感じられたから。

仰ぎ見上げねば姿の見えぬ、完全無欠の存在は、最早何処にもいなかった。

(だからこそ、だよ……お姉ちゃん)

「私は織斑が好き。好きなの、姉さん」

戸惑っている一夏の姿が、楯無の肩越しに見える。

言葉は、簪の中で確かな本物だ。だからこんな形で知られてしまふのは、惜しいと思う。

でも、今此処で、この場で告げるべき言葉として、間違っていないとも、思うのだ。

「あ、あえ？ えと……あの、簪、ちゃん」

だってこんなにも、姉の心を近くで理解できるから。

声を震わせる姉。戸惑い、恐れを抱く姉。庇護者たる妹に、姉は本気で恐れを抱いている。

人が誰かに恐れを抱くのは、その誰かが、自らを　　自らの領分を、脅かすかもしれないと、気付いた時だ。

楯無は簪を恐れている。

今まさに、今遂に、楯無は簪のことを、自分を脅かす存在だと、優しく受け止めてあげるだけでは済まない存在だと、認めた。

「簪ちゃん、あの、ね？」

「姉さん」

言い訳染みた言葉を、言われる前に遮り除ける。

(認めさせるだけでは、終わらせない……誤魔化させない)

大事な告白を台無しにしてしまったのだ、その代価は貰わなければならぬ。

傲慢な想いを胸に抱き、簪は続けた。

「私は織斑が好き。だから姉さんは、これ以上織斑の傍にいるのは

止めて」

「……………え？」

「これ以上織斑に近づかないで」

「え……………つ、えと、あ、え？」

「邪魔なの。姉さんは邪魔なの。私に　　うつん、私以外にも、織斑を好きな皆にとつて、仕事で織斑の時間を奪う姉さんは、邪魔なの」

だから、近づかないで。二度と傍に寄らないで。

愛しい、目の奥に入れても痛くない妹の言葉。頼み。

「織斑の護衛なら、姉さんなら傍に居なくても、出来るでしょう？
楯無の名を継ぐ、学園唯一の『国家代表』の姉さんなら。わざわざ織斑の傍に張り付いていなくても、何も問題ないでしょう？」

妹の言葉は、事実だ。更識楯無にはそれだけの力がある。

本来なら、離れた場所にあっても、護衛対象に誰かが近づいてきた場合、何事かあっても直ぐに反応できるような、それくらいの能力がある。

護衛対象との会話に夢中で他者の接近に気付かない何て事は、更識楯無にはありえない。

あつてはならない。あつてはならないならむしろ、反省し距離を置くべきだろう。

同じ失敗を繰り返さないために。

だから姉には、それを否定する理由は、無かった。

「……………でも、そんなの、だって……………駄目。駄目、だよ」
だけど、首を振る。横に。つまりは否定の態度。

姉は妹を拒んだ。

姉は妹の成長を、恐れ、拒んだ。

「何で？」

「な……………何って、だって。ホラ。私は、一夏君の……………」

「ただの護衛でしょう。……ううん、一只者ではない最高の護衛、
でしょう？ 更識楯無なら、護衛の前に出る必要も無い、護衛の時
間を取らせる理由が無い。姉さんが織斑の傍にいる、それは理由に
ならない」

言葉は断罪の如き力を秘めていた。

圧倒されると言う感覚を、姉は、始めて妹に対して、抱いた。

妹の意思は固い。その想いを否定するような真似は、楯無には出
来ない。

出来ない。出来ないけど。

無言で弱々しく、瞳を、唇を震わせて、首を横に振る更識楯無。

「……」

簪は顔を顰めた。それが演技なのか本気なのか、最早彼女自身、
解って居なかった。

ただ、尊敬する姉のその態度だけは、とてもではないが、認めら
れなかったことだけが、事実だ。

「嫌なの？」

「……」

尋ねても、楯無は首を横に振るのみ。

まるでそれ以上、簪の言葉を聴きたくないかのように、俯き顔を
伏せて。

此処で漸く、簪は言葉を選ぶ。

間違っても、敬愛する姉の心を折る事が目的なのでは、無い。

目的は別にあるのだから。

瞼を閉じ、小さく深呼吸。

「なら、賭けをしましょう」

顔を上げ、姉の顔を、確りと見据えて、言う。

顔を上げる姉に、傍若な態度で、告げる。

「来週のタッグマッチ戦。その互いの勝敗を賭けましょう。姉さんが勝ったら、私は何も言わない。今言った言葉も、全部取り消す。姉さんが織斑と一緒にいるとき、姉さんの邪魔はしない。その代わり、私が勝つたなら、私が勝つたなら、姉さんは二度と、織斑には近づかないで」

轟然たる、あまりにも一方的な言葉に、格納庫は静寂に包まれる。簪は楯無を見据えて動かない。

楯無は目を見開き、動けない。

この場のもう一人、当事者の一部ですらある一夏もまた、啞然としたまま言葉が無かった。

静かな、しかし張り詰めた空気が、過ぎていく。

しばらくすぎて。そして、やがて。

「~~~~~」

声ならぬ声を上げて、楯無が大きな仕草で顔を伏せる。

ひざの上におかれた両の手は、いつの間にかきつく、きつく握り締められていた。

シャギーの入った髪が、表情を隠す。わずかに、小刻みに震える肩、身体。

「~~~~~」

思い切り、左右に頭を振る楯無。

勢いをつけて跳ね上げる顔。

そこに、あったのは。

「　　良いわ」

完成された美。優れた頭脳。常人を超越した肉体能力。多くの人を掴んで離さない魅力。

更識簪が望み、恐れ、憧れた。絶対に避けては通れぬ、更識楯無その人の姿があった。

「良いわよ、簪ちゃん。貴女の挑戦を受けてあげる」

圧倒的上位の視線で、妹に相對する、それが、更識楯無の答えだった。

簪はたじろきそうになる自分に、活を入れる。むしろ歡喜しろと、檄を飛ばす。

「良いの？ 姉さん。姉さんが負けたら
齒を食いしぼり、揺るぎそうになる眦を、確りと姉に向ける。

しかして、姉は。

「簪ちゃん」

姉の言葉は、姉の視線は、まさに。そう、まさに。

「まさか貴女は 私が貴女に負けるだなんて事態が起きると、
そんな事を本気で信じてるの？」

なんなら、今直ぐこの場で結果を証明してあげましょうか。

それは、確実に打倒すべき相手へと向けられる。

最愛の妹を鬭争の相手として認めた、その証明たる視線に他ならななかった。

百十九話（後書き）

今回の話は、書いてるとき結構脳汁が出てました。
バトル回は毎回そんな感じですけど。

しかし、ハーレム物の話でハーレム外のキャラが修羅場ってるっ
て絵面は中々新しいような。

百二十話

星明りのみに照らされた、夜のアリーナ。

向かい合う、二機のIS。二人の姉妹。更識楯無と、更識簪。それぞれに相手を打ち倒さんとする威を以って、己が頼みたる得物を構える。

決着の方法は一つ。

どちらかが敗北を認めたときが、そうだ。

どちらが売り、どちらが買ったのか。

今更そんなことを考えても仕方が無い。考える暇を与えてくれないほど、姉妹の行動は早かった。

今直ぐに。ええ、今直ぐに。

頷きあい、立ち上がり、アリーナにて、ISを纏い対峙する。

止められる筈が、暇が無かった。

「どうしてこうなるかなあ……？」

アリーナの片隅の待機ピットで二人の様子を見守る一夏としては、頭が痛いことこの上なかった。

現在自身のISは各パーツごとに分解状態でハンガーに固定されている。

ISを装着しないままの状態で、アリーナに飛び込んで二人の間に割って入って強引に止めるとか、不可能を通り越して自殺行為な

現状と言えた。

(ガチでやるにしろ、せめて来週まで待てよ……)
なんでこんなに、姉妹揃って血の気が多いんだと、内心で毒づく。口にした瞬間が自分の命日になることは請け合いの空気だったので、実際には言えなかつたけど。

それぐらい、姉妹二人の間に流れる空気は、空恐ろしいものだった。

正直、近づきたくないし関わりたくない。

悲しい事に、開始の宣言を託されてしまっているわけだけど。

「こんなに怖い思いをしたのって、ターシャと抱き合ってた時、姉ちゃんが真剣片手に乗り込んできた時以来か……？」

因みにその記憶の続きでは、二人の年上の女性が互いにマウントを取り合って血みどろの死等を繰り返すという、トラウマモノのスペクタクルな光景が部屋の隅でガタガタ震える一夏の前で繰り返られるていた。

思い出すだけで、一夏の背筋を冷たいものが震わせる。

その記憶が何故か、アリーナで向かい合う二人の少女の姿に重なって見えるのだから、恐ろしい。

本当に恐ろしい。

何よりも恐ろしいのは、これを下手に止めようとすると、物理的な命の危機が自分の身に降りかかってくるであろう事が容易に想像がつくことだ。

「男冥利に尽きる、とか空笑いしとけつてののか？」

声が引きつっていることが自覚できた。

事態の流れは整理する必要が無いほどに明白だ。

織斑一夏を巡り、姉妹が本気で向き合っている。対立している。

本気で互いを打ち倒そうとしている。

姉妹の真剣な対立。

その状況それ自体は一夏が期待していた通りの物ではあったのだ

が やはり、理由がネック。

(僕ね、僕……更識さんは、まあ、解つてたけど……)
更識簪が自身に好意を向けてきてくれていることは、理解していた。

そも、一夏には彼女の心に火をつけてしまったのが自分であるという自覚もあつたのだ。

仮に彼女が進展を望むのであれば、一夏はともかく自分なりに誠実に対応する、とだけは決めていた。

それ以外に方法が思いつかなかつたとも言つが。

(だけど、なあ……)

アリーナで妹と向かい合う、水色のISを纏つた女性。

IS学園生徒会長、学園唯一の国家代表。あの更識楯無が、妹の言葉にこんなにも徹底的な反発を示すとは、流石に予想できなかった。

(まあ確かに、アプローチを掛けてたのは、僕なんだけど)

正直に言つて好みのタイプの女性だったから、チャンスがあればと自分の気持ちは伝えていた。

好みの女性に、何時までも『年下の子供』と思われるのは癪だったからだ。

気持ちが届くにせよ届かないにせよ、せめて『異性』だとくらいは、ちゃんと認識して欲しいのだ、男としては。

その甲斐あつて、夏を過ぎた頃には確りと異性だとは認識されるようになつてくれていたと、一夏も感じていたが。

(いや、嬉しいよ。勿論。でもこのタイミングでそれが解るつても……)

素直に喜ぶには、些か状況がバイオレンス過ぎる。

向かい合う二人の間には、確実に見えない火花が散っている。

何とか、止められないものか。

一夏はこの期に及んでそんな事ばかりを考えていた。

この状況で、しかもお前が考える事かと外野（居ればだが）から総突っ込みを受けそうな事は解りそうなものだったが、しかしその辺り常人と一線を画しているのが織斑一夏である。

彼は自分の、『怖いから』、『嫌だから』或いは『好きだから』、『大切だから』と言う単純な気分をこそ、重要視する男だった。

（止めてくれよな、女の子が流血沙汰なんて）

ビジュアル的に、どう頑張っても受け入れられないと、一夏は顔をしかめる。

本当に、ルールに固定された学園主催のリーグ戦まで、勝負を預けて欲しいところだ。

この『戦い』の敗北条件は『敗北を認める事』のみ。

どう考えても、シールドバリアの残量がゼロになっても、絶対防御がぶち抜かれても、ISが全損して動かなくなっても、それどころかが負けを認める光景が、全く想像できない。

血を見るのは、必至。

（僕を出汁にしてくせに、僕に対していい嫌がらせだってんだよ、全く……）

最近幸せすぎて反動が来たのかと、一夏は内心で呻く。

「……さて、と」

諦め気分の吐息を漏らして、一夏は壁際のパネルを操作して備え付けのマイクを取る。

アリーナへと声を届かせる準備を、遂に終わらせた。

準備は良いか　　なんて言葉で、場の空気を濁したりはしない。

と言うか、返事の言葉を二人分聴くのが、怖かった。

だから、素直に『初め』、と一言だけ

「……一応、言っておくけど」

そのつもりで、勝手な言葉が口をついていた。

自分が何を言おうとしているのか解らないまま、しかし、一夏は言葉を切る努力を放棄する。

あの二人は、自分のやりたいようにやっている。ならば、自分もそう思っていた。

「キミ等の間でどういう結論を迎えようと、それはそれ。キミたちだけの問題。僕は僕で、自分がやりたいようにやらせてもらうから」

お前らの勝手な約束なんて知るか。

我ながら命知らずな言葉を口にしてているなど、一夏は乾いた笑いを浮かべていた。

思いのほか、自分の神経はささくれ立っていたらしい。

自分に責任が無いとは言わないが、解法の提案をする暇も無く、強引に引っ張られてきてしまった状況に、苛立っていたのだ。

だが、口にしてしまえば、今更引っ込めることは出来ない。

案の定一夏は、理不尽にも、

『織斑、サイテーだね……』

『後で泣かすからねー』

恐ろしい言葉と美しい笑みを、たっぷり二つ、頂戴する事となった。

「解ったから、怪我とかは……まあ、治せる範囲で」

軽く肩を竦めて返して、一夏はマイクを握っていない片手を、顔の横の位置に挙げた。

途端、一瞬緩んだ空気など微塵も感じさせないくらいに張り詰めるアリーナ。

今度こそ一夏は、大きなため息を吐いた。

吐いた後で、それでも一応、自分の役目を果たすべく、

「それじゃあ」

はじめ。

言葉はしかし、流星の如く降り注ぐ光の柱に、遮られる事となる。

アリーナ目掛けて光の柱が降り注ぐ。

凄まじい閃光に、目を焼かれ、視界を奪われる。

熱せられた大気、吹き荒れる突風から身を守るために、僕は両腕を顔の前にやる。

(荷電粒子砲……っ!?)

何度も瞬きして視界を取り戻そうと足掻きながら、そんな悠長なことをしている場合ではないだろうことを理解した。

肌を焼く熱量は未だ衰えることを知らない。

舗装されたアリーナの床を溶かし尽くす勢いで、空からの砲撃、そう砲撃は。

(誰っ……!?!? って言うか、ISの戦闘に耐えられる強度を持つてるアリーナを焼くって、どんな……)

馬鹿げた威力なのか。

交差した腕の隙間から、空を伺う。

昼間のように明るくなった、最早完全に白く染まっているようにしか、見えない。目視の限界だ。

それほどの威力、出力。そして持続時間。

威力を持続出来るのであれば、砲撃の効率を上げるために、砲手が次に取り得る手段は、容易に予想がついた。

気のせいかもしれない。

だが、肌を焼く空気の熱量が、増したような気がした。

怖気が走る。

アリーナの特種強度素材が砲撃に焼け爛れていく不快な音が、次第に、近くなってきたという気がする。

(射線を、ズラして……！)

砲口の向きをずらしていく事で、攻撃面積を広げる。基本的な制圧射撃の方法である。

射線は、僕の居る待機ピットの方向へ、次第に傾いてきていた。不味い、何てものではない。

生身であんな物を喰らえば 掠っただけでも、即死は必至。

(ピットのシャッターを……間に合わない！？)

冗談じゃないと悲鳴を上げる暇も無く、砲撃は。

「一夏君！」

女性の声。安堵を覚えるような。

熱量が消える。

顔を上げると、水色の いや、まさしく水そのものが、視界一杯に広がっている。

空気を冷却させる水の膜。それが、荷電粒子砲を防いでいた。

壁の向こう、砲撃を受けている面では熱に焼かれた水が大量の水蒸気に変換されて行くのが見える。

ピットとアリーナを完全に隔てる規模の水の壁は一メートル以上もの厚みを有していた。

「何をしているの、一夏君！」

その内側から、声とともに水色のISを纏った女性が登場する。

水の壁の内側から出てきたというのに、一片たりともその人は濡れていない。

両肩に浮かぶクリスタル状の非固定稼動部位が神秘的な、一ミス
アンロック・ユニット
テリアス・レイディ《霧纏の淑女》。

ロシア製第三世代型IS を下敷きに製作された、フルスクラッチ・モデル。

通常のISに比べて物理装甲が少ない事が特徴的な機体だったか

ら、操縦者の完成された美しい肢体がはつきりと見える。

操縦者であり同時に製作者でもある才女、たっちゃんさんこと、更識楯無が手に蛇腹剣を携え、僕の前に登場した。厳しい顔でたっちゃんさんは捲くし立てる。

「どうしてISを装着しないの！ 死にたいの!？」

「そりゃ、着たいのは山々ですけど……いやそれより、何ですかコレ、またテロ？」

「それよりって……っ！ 簪ちゃん!」

僕の言葉にたっちゃんさんは眉を跳ね上げるが、しかし、未だ降り注ぐ砲撃の威力が更に増してきたことに気付いたらしい、虚空へ向かって妹の名を呼んだ。

返事は僕には聞こえない。

だが、水の壁の向こう、水蒸気の白く濁った空気の向こうで、赤い華が咲いたのが見えた。

それと同時に、水の壁を焼く光の柱が、途絶えるのも。

「何て硬いシールドバリア……！ 砲撃特化型じゃないの!？」

瞳の前に投影したホロテイカルモニターの表示情報に眉根を寄せながら、たっちゃんさんは蛇腹剣を持たない開いた左手を振りかざす。

両肩の、水ナノマシン制御用 アクア・クリスタル が明滅する。水の壁が水流へと変わり、ドレスのようになっちゃんさんの身体を飾った。

そして、視界を遮る全てが消えた。

僕は夜の闇に染まる空に立つ、異形の姿を目撃する。

半人半馬、とでも評するべきか。

地を駆ける獣のような肥大化した下半身から、本来首と頭があるべき部分に、細身の人間の上半身が生えている。

神話に登場する幻獣ケンタウルスを思わせるシルエット。ただし、

獣の脚は六本あったが。

六本の脚の内、後ろ四本はそれぞれが独立稼動する大型スラスタユニットであり、最前列に並ぶ二本の前脚は、腿から蹄までの形状が大型のプラスタライフルのような形状に見えた。

恐らく、あの二本の前脚から、先の粒子砲を放っていたのだろう。
「フル・スキン全身装甲のIS……なのか、な？」

少なくとも上半身は、そう思わせる形状をしている。

表情の無い鉄仮面のようなのっぺりとした形状の頭部。構成するパーツの隙間から、センサー光らしきものが瞬いていた。

首から肩、胸部、腹部を形作るラインは、女性的な曲線を描いている。

背部には二対のウイングスラスタ。

後頭部から伸びるポニーテールのような長い放熱索と併せて、甲冑を纏った戦乙女のような印象を抱かせた。

「ヴァルキリー戦乙女に鋼鉄の軍馬ね……脚の数が二本足りないけど、スレイプニルってことかしら？」

「北欧神話ですか？ あんなにバカスカとスラスタを付けて、速攻でエネルギー切れになりそう……」

少なくとも、空に居るアレはISであることは間違いない。

有人か無人かは、解らないが。どちらにせよ、如何にISコアと言えど、生み出せるエネルギー量には限界がある訳で、必然、容量以上の武装を搭載してしまえば、あっさりとエネルギー不足に陥ってしまう。

だが、常識的な話と言う物は、得てして唐突に攻撃を仕掛けてくるような非常識な相手には通用しない物だ。

空を二本の光の柱が奔る。

粒子光の色は見覚えがある。更識さんの打鉄うちがね式式の、背部二連装荷電粒子砲による砲撃に違いなかった。

ISの武装の中でもきわめて強力な威力を秘めた二条の光が、正体不明の異形のISへ向かう。

直撃すれば一気にシールドブレイクに持ち込むことが出来る威力を秘めたそれは、違うことなく直撃弾となり　　しかし。

目視出来る程の規模、密度で展開されたエネルギーシールドによって、弾かれた。

「無茶苦茶だ……！」

計算が間違っているんじゃないかとすら思える、高出力エネルギー武装のオンパレード。

あんな物普通のISに乗せていたら、エネルギーがどれだけあっても足りない。足りなくなる筈だ。

だが、あの異形のISはアリーナの床に穴を開け、更識さんの攻撃を防ぎ、そして、砲撃を行った更識さんへと向け、アホみたいな数のスラスターを吹かしながら突進を開始した。

まるで流星のような速度で以って、一気に更識さんへ距離を詰める。

「たっちゃんさん、援護っ！」

「解ってる　けど、それより一夏君も、早くISを！」

呼びかける僕に、薙刀を使用して近接戦闘を開始した更識さんに視線を固定したまま、たっちゃんさんは怒鳴り返す。

何時まで生身のままで居るつもりだと、早く自分のISを展開しろと。

だが。

「無茶言わないで下さいよ！」

思いのほか、自分の声がヒステリックに聞こえたのは、僕の気の

せいではないだろう。

案の定たっちゃんさんは目を丸くしている。

止めた方が良い。無駄な口答えなどしている場合ではない。

そう頭では理解しておきながら、しかし言葉を止めることが出来なかった理由は　やはり、この状況に至る経緯に、色々と言いたいことが溜まっていたせいだろうか。

或いは、遂に互いの想いが交差し得る場面だったと言うのに、妹と遊ぶことに集中しきって僕には見向きもしてくれないこの人の態度が、癪に障っていたせいかも、知れない。

「僕のISは、分解状態のままハンガーに固定しっ放しなんです！
量子パツケージ化してないんだから、遠隔召喚だって無理なんですよー！」

あんた等が、突然喧嘩なんて始めるから。

怒鳴りつけるように、言い切ってしまった。

百二十話（後書き）

引き続きスーパー修羅場タイム……と行きたいんですが、ヒロイン二名の血みどろの決闘がラストバトルのSSって、流石に斬新過ぎるので、まあ、こんなで。

既にボスが若干空気がぽいのは、仕方ないのです。
蹴っ飛ばされにきてるんだから。

百二十一話

「僕のISは、分解状態のままハンガーに固定しつ放しなんです！
量子パッケージ化してないんだから、遠隔召喚だつて無理なんで
すよ！」

苛立ちを隠せていない怒鳴り声。

楯無は驚いていた。

危急的上級もわきまえず、一体何に一番驚いていたかといえは、
実に些細な事実に気付いてしまったことに、である。

迂遠な言い回しで苦言を呈されたことはある。

冗談に混じって厳しい突込みを喰らったことも、あつた。

だが、本気の怒鳴り声、罵声と表現するべき物を、楯無は今日の
今まで、彼の口から言われたことは、無かつた　　無かつた、ら
しい。

「なっ……」

故に、驚き、戸惑いは反発となつて現れた。

「何をしてるのよ！　整備作業を途中で切り上げるにしても、機体
の再量子化を完了させておくのは専用機所持者の常識でしょ！？」

予期せぬ妹の反抗に立ち向かうために、既に一杯一杯になるま
で精神的な疲弊を負っていた楯無にとって、自身に癒し、安らぎを
与えてくれる筈の少年からすら罵声を浴びせられてしまえば、自分

を抑えきれなくも、なる。

「あのなあ……っ」

だが、その言葉は如何にも不味かった。

一夏の顔が、紛れも無い苛立ちの色に染まる。

これまでの経緯から、既に、両者共に大半の余裕が失われていることに、両者共に気付いて居ない程度には、両者とも、余裕が無かった。

なればこそ、売り言葉に、買い言葉。

「誰かさんたちが勢い任せに喧嘩とか始めなければ、とつくに整備は終わってたんだよ！ 大体誰だよ！ 機体の前から人の首根っこをつかんで此処まで引きずってきたのは！」

細かい言葉を省けば、言いたいことは唯一つ。

お前が悪い。

「そんつ……それは、だって！ だって、大体、なんだよその言い方！ 誰のために私が……っ！」

言われた側がわからない筈がなくて、だからこそ、売り言葉に、買い言葉。

横槍が入らなければ、延々と続けていたに違いない。

「二人とも、なにしてるの！」

「簪ちゃ　っ！」

上空から届く切羽詰った妹の声に、楯無は空を見上げて、そして目を見開き、瞬時、一夏を床に押し倒す。

「ずわっ！？」

したたかに顎を打ちつけて、呻く一夏。

しかし楯無はそれに構わず、空に　空から飛来する光条に対して、青い水の膜を展開した。

激突。吹き荒れる水蒸気。飛散する粒子が床材を、建材剥き出しの壁を、焼いて溶かす。

スレイブニル
六本脚からの攻撃。前二脚から放たれる、連結粒子砲。

二門の砲塔を一機の開放式バレルとして活用するその威力は強大だ。

「つくう……！」

先ほどより距離が近い。粒子圧縮率が　　威力が高い。持続時間を犠牲にして、破壊力を増しているのだろう。

霧纏の淑女の最大の特徴たる、ナノマシンによる水分子の制御。

大気中に存在する水分を凝縮して、防御力として活用が可能となる。

熱に分解され水蒸気となったとしても、再びそれをナノマシンで回収して防御に回せば、エネルギーが続く限り、一定以上の防御能力を維持出来るのだが。

（再変換が間に合わないか……！？）

水分の再凝縮に掛かる時間に比べ、消費する、防壁を削られる速度の方が速い。

通常であれば、このまま一箇所を受け止め続けるのではなく、回避を選択するところだが。

（一夏君……！）

背後、足元に居る少年。

ISが無いのであれば、最早ただの無力な一般人と、何も変わらない。

粒子片の一つでも掠っただけで、大怪我では済まない事になるのは確かだった。

楯無はこの場を動けない。ならば、この場から敵の攻撃を逸らすしかない。

フステイター・ネイル
楯無は蛇腹剣を振りかぶる。

「このおー！」

だが、刀剣型武装としては破格の長射程を可能とする連結刃によ

る防御を縫つての攻撃よりも一瞬早く、敵の粒子砲による攻撃は止んだ。

横合いからの簪の一撃。

高周波ブレードの刀身を持つ薙刀で、六本脚を豪快に薙ぎ払う。

六本脚は左手腕の大半を覆う、圧縮防御力場を形成可能な方形の盾（ヒーターシールド）でそれを防ぐが、衝撃までは殺しきれなかった。

加速と質量が多分に載せられた一撃により、アリーナに叩きつけられる六本脚。

砲撃の射線が不規則にずれる。

余波で崩れる内壁。天板も剥がれ落ち、最早待機ピットと言つよ
り瓦礫の山と言つた方が、正確な環境だった。

「織斑、大丈夫!？」

埃塗れの頭を振りながら、よろよると一夏が身を起こす。空を見
上げ、眼鏡をかけた少女の姿を確認して、言った。

「更識さんか……っ！ ありがとう、助かった」

呼びかけられて、はにかむ簪。

「ん……良かった。あ、あと、『更識』だと、姉さんと紛らわしい
から、簪で、良……」

「ちよ、なんで簪ちゃんにだけお礼言つての!？」

楯無は、自分でも無意識のまま、口を挟んでしまっていた。空で
不機嫌な顔をしている簪も、目に入らない。

一夏は目を丸く、啞然としていた。

率直な表現をすると、『お前、何言ってるの?』と言つ顔である。
語尾に『空気嫁』と付け足しても良い。

「いや、助けてもらったんだからお礼くらい言いましょうよ。なん
で変な場面で嫉妬してるんですか、アンタ」「しっ……!!」

嫉妬（しつと）

- 1：自分より優れている人や恵まれている人を羨んだりすること。
- 2：自分が愛情を向けている人の愛情が、他者に向けられている

ことを恨み、妬むこと。やきもち。恪気。

「わ、わたひ、嫉妬なんてしてないひよっ!」

「無茶苦茶どもってるじゃないか!」

「うるしゃっ……うるさいなあ! いちかくんが変なことを言いだすから、おどろいちちゃっただけだもん!」

「姉さん、台詞が幼児退行しかかってるよ……」

いい場面を邪魔されて、本来なら怒っているはずの簪まで呆れていた。

「ううっ……」

「大体、姉さん……。嫉妬とか、そういうの、無いなら……なんで私の賭けに乗ったの?」

「なっ、にゃに……っ! 何っ……なんで今そんなこと言う状況じゃないでしょ!」

焦って早口でまくし立てる楯無。

「微妙に日本語になってませんよ」

「一夏君は黙ってて!」

怒鳴られて、一夏はハイハイと素直かつやる気無さ気に頷く。『この期に及んでこの女めんどくせー』とか、若干酷いことを考えていたりもするが。

簪も白い目をして、呆れを隠そうとしなかった。

「ふ、二人とも、そんなこと気にしてる場合じゃないでしょ! アレ! 何とかしないと!」

明らかに話を逸らすために、粉塵に包まれるアリーナにピシッと指を突きつける。

自身が穿った穴の淵から這い出してきた六本脚スレイニルの姿が確認できた。上空から落下して尚、機体を構成する全身甲冑には傷一つ見当たらない。

「アレ……ね」

嫌な事を思い出させるな、と言う口調で、一夏は呟く。

同時に、楯無の態度を内心で気がかりに思っていた。その背中に視線を送る。

「対策、対策を考えないと……集中して」

焦った声で、わざわざ口に出して繰り返している更識楯無。

いかにも、不自然だった。

普段に比べて感情のブレが、明らかに大きい。

（理由は……考えるまでも、無いのか？）

本気で既に余裕が無い、のかもしれない。妹の方がよほど肝が据わっているのではないかと思えるほどだ。

（何か取り返しの付かない事にならなければ良いんだけど）

そうも思うのだが、同時に直ぐに解決する問題でも無いんだよね、とも理解していた。

命の危機は目の前にある。プライベートな感情に振り回されている場面では、無かった。

「一学期に学園を荒らしたのと、同じ……？」

「ということは、無人機なんだろうけど……前よりゴツくなってるよね。新型って事かな」

簪の呟きに乗じて、一夏は思考を楯無の様子から、アリーナに佇む敵へと切り替えた。

まずはアレを片付ける。全てはそれからだと、自分を無理やり納得させる。

六つの蹄を鳴らしてアリーナに立ち上がる六本脚スレイブニルの異様。

センサーアイを光らせて、辺りの様子を伺っている。何かを探している？

（何だ、何を探して……いや、目的が無ければこんな事はしないか。僕らに攻撃を仕掛けてきたのにだって、何か意味が……うん？。そもそもアレは、僕らへの攻撃……だったのか？）

初撃は、天空からアリーナ目掛けて。地面を焼き払いそのまま粒子砲を横風に。

お陰で、アリーナは壊滅的な有様を示していた。

IS 同士の激突を支える床材は焼け爛れ、基礎が、その下の地下設備の天井隔壁が剥き出しとなっている。

（地下……地下、か。地下に施設を作っておくのは、ネバダもハワイも此処も変わらないな。　　そういえば、前に来た無人機は地下の研究所に搬入されたんだっけ？。それで、調査したら逆に学園システムにクラッキングされて、お陰で篝ちゃんが……篝ちゃん）
思い出す。四月の頃の事件。

一夏自身が目撃した訳ではない、全てが終わった後で、事の顛末だけを少女たちから聞いた、その事件を。

（あの事件は確か、篝ちゃんの使った打鉄うちがねが……いや、そんなこと考えている場合じゃない。今は目の前の無人機を……無人機）

「無人機、だよな？」

斜めの方向にずれて行った思考を正面に向けなおした瞬間、一夏の脳裏に閃くものがあつた。

無人機。　　無人機の、筈なのに。

甲冑を纏った女性のような雰囲気の上半身の動きは、無人の機械とは思えないほど、人間染みた自然な動作を見せていた。

「どうしたの、織斑……」

「あの動き、どっかで見覚えが……」

眉根を寄せる一夏。簪は首をかしげた。

「一学期に見たんじゃ、ないの？」

出所が同じならば、動きも似通った物になるのではないか。簪はそう思つて意見を述べる。

しかし、一夏は曖昧な顔で首を横に振った。

「いや、そうじゃなくて。もっと前……いや、もっと身近に……」
記憶を掘り返そうと額に指を寄せる一夏。

女性的な雰囲気。立ち姿。或いは構え。

「なるほど、本当にスレイプニルって訳か……」

楯無が、先ほどまでとは一変して緊張感に満ちた声で言った。

「たっちゃんさん？」

先ほど感じた心配もあつて、少し優しい声で尋ねる。

「……一夏君。量子パッケージが空でも、ISコアとのリンクは生きているわよね？」

だが楯無の返事は、余裕の無い、堅く緊張に溢れたものだった。

「……はい」

「コアとのリンクが生きていれば、絶対防御が使えるでしょう？」

「はい？」

疑問符を浮かべる一夏に、重ねて尋ねる楯無。

「絶対防御は発動可能よね？」

「そりゃ、一応。外部出力が無いですから、シールドバリア

の展開は出来ませんけど。絶対防御なら、多分」

白銀に輝く腕輪ガントレットを摩りながら、一夏は頷く。

IS搭乗者保護機能の最終防衛線とも言つべき、絶対防御発動はコア自身の判断によつて、搭乗者が危機的状況と判断された場合に自立的に発動される。

効果は絶大であり、外部からの干渉を完全に遮断することが可能だ。

これの存在のお陰で、世界中で現在までにIS搭乗中の人間が死

亡したという事例は、一度も発生していない。

因みにこの絶対防御、具体的にどのような原理で搭乗者の生命を保護しているのかは、なんと詳しいことは不明なのである。

質量の激突だろうと熱量による滅却だろうと、用途を問わず、あらゆる物を防いでしまうその原理は、今尚誰にも理解されていないのだ。

とにかくそう言う機能があつて、実際に多くの危機的状況からIS搭乗者を救っている。

如何に原理が解らなくても、その結果だけは、その利便性だけは納得せざるを得ない。

ISの兵器としての優越性を裏付ける、超機能と言えよう。

「私がアレをひきつけている間に、一夏君、簪ちゃんを護衛に貴方は可能な限りこの場所から　この第一アリーナから遠くへ離れなさい。貴方を庇いながらだと、多分、アレは止められない」
「ちよつと、待った。それでなんで、一人でやるって話になるんですか」

本格的に不味いんじゃないかと、一夏は焦つて言葉を挟む。簪もそれに続いた。

「そうだよ、お姉ちゃん。お姉ちゃんの方が防御力には優れてるでしょ？　アレは私が相手をするから、お姉ちゃんは、織斑を」

訂正。一夏の言葉を退けて別の提案を行つてくれた。頭を抱えつつ、再び一夏は口を開く。

「……いや、そうじゃなくて。僕は一人で格納庫に向かうから、あなた等は二人でそれまで……」

「ううん。今の織斑が一人でなんて、危ない。危なすぎる。だから、お姉ちゃんの防御力に期待して安全圏まで避難してくれた方が嬉しい」

（おっと、意外と冷静な判断だったのか）

ただ姉に張り合っているだけかと思つたと、内心で一夏は簪に詫

びた。

簪と楯無。

二人の機体を比較すれば、楯無のミスティアス・レイデイの方が防御的な能力に優れている。

ロシアお得意の環境支配能力を受け継いでいる霧纏の淑女は、大気中の水分子を制御下に於くことにより、広範囲に対する防御を敷くことが可能だ。要人一人の警護など、造作も無い筈。

楯無は自らの役目に相応しい機体を、自ら選び、組み上げたのだ。

「貴女一人では無理よ、簪ちゃん」

だが楯無は妹の言葉を否定する。

冷徹に繰り返す、楯無。

怒るべきか、悲しむべきか。簪の顔が歪む。

だが、継いで楯無の口をついた言葉に、簪は耳を疑った。

「勿論、私一人でも無理だけど」

「え？」

目を丸くしたのは、簪だけではない。一夏もはつきりと驚愕の目を楯無に向けていた。

学園最強、学園唯一の『国家代表』IS操縦者 即ち、世界でも有数のIS操縦者である更識楯無が、はつきりと『自分はこの敵に勝てない』と言い切ってしまったのだから、それも当然だ。

「アレ、そんなに……？」

じっとしたままセンサーが集約していると思わしき頭部をめぐるせている六本脚スレイヴを見やって、一夏は言う。

楯無は一夏のほうへ振り返ることなく、暗い声で告げた。

「四月、七月に来た無人機の延長線上にある機体であることは、間違いないよ。出力は天井知らずで上がってるし、モーションパター

ンも、以前の非じゃない。殆ど本物通りだわ。オリジナル 下半身があんなだから、解り辛かったけど」

「オリジ、ナル……？」

機動性が上がっている。動きが精密になっている。

ではない。

……本物に近づいている。

妙な表現　しかし、何処かいやな予感を覚える表現に、一夏は眉根を寄せた。

オリジナル。本物。アレは偽者。偽者が、本物。模倣している。

模倣。動きを模倣。本物は　誰？

「そうかつ……！」

偉業の化け物の姿が、馴染んだ女性の姿と重なってしまい、一夏は目を見張った。

重心の据わった姿勢。自然体であり、身体の何処にも無駄な力が掛かっていない。

「VTシステム……！　無人機でっ！」

ヴァルキリー・トレース・システム。VTシステム。

ヴァルキリーとは、IS国際大会　モンド・ロッソ　の各部門優勝者に与えられる栄誉称号を指す。

その名を冠するシステムとは即ち、最高峰IS操縦者の動作方法ひいては戦闘方法をデータ化し再現するシステムである。

そして、現在六本脚スレイブニルのシステム上で再現している戦闘方法の本物オリジナルとは。

「姉ちゃんだな、あの動き！」

歯を噛み締め、呻く一夏。

異形の化け物たる、無人のIS。

しかしその動作姿勢制御たるや、世界最高峰のIS操縦者、第一回 モンド・ロツソ 総合優勝者、戦乙女の中の戦乙女、ブリュンヒルデたる、織斑千冬の完全な模倣に、違いなかった。

「……っ、動く！」

簪が悲鳴のような叫びを上げる。

アリーナの中央に居た六本脚が、首をめぐらせるのを止める。

ガコンと音を立てながら、前脚 二機の荷電粒子砲を正面に、向けた。

「こつちを狙って……！」

「一夏君、早く逃げなさい！」

「言われなくても……！ つうわ!？」

踵を返そうとした矢先、砲撃は開始された。

展開される水の防壁が、砲撃を防ぐ。飛散粒子がアリーナの外壁を焼く。

相変わらずの、桁違いの威力に、今度は防ぎきれないかもしれないと、誰もが思った。

だが、砲撃は一夏たちを狙ったものではなかった。射線が横にずれていく。

アリーナの外壁、客席、或いはその内側にある施設、機材を破壊していく。

通常のISの砲撃なら防ぎきれる筈のアリーナの強固な外壁が、焼き尽くされていく。

「上層施設を破壊して、施設の防御力を低下させるつもり……？ 狙いは、やっぱりっ！」

楯無の呻きを、一夏は聞いた。

この施設の中になにかあるのだと、それで、理解できてしまった。

何が存在するのかを、理解出来てしまった。

「格納庫へ行きます！ 時間稼ぎ、宜しく！」

それがそうであるのなら、一夏はそれを守る義務がある。

「ちよつと、一夏君！」

「織斑!？」

二人の制止の声も聞かず、一夏は踵を返し、ピットと格納庫を繋ぐゲートへと駆け出した。

(そういう事かよ、くっそ！)

残された姉妹。

「簪ちゃん、一夏君を追って！」

姉の叫びに、妹は首を横に振った。

「それで、お姉ちゃんはどうするつもり？」

「どっつて、そんなの……」

決まっている。語らなければ解らない事じゃないだろうと、苛立ちに顔をしかめる。

だが妹は、冷静な顔でそれと対峙していた。

「さっき言ったよね？ お姉ちゃんだけでも、アレは止められないつて。そして私の機体は、誰かを守る能力は 防御能力は、それほど高くない」

事実、簪の機体は後衛仕様であり、火力を高めるために、どのみち後方に配置されて攻撃を受けずらいのだからと、防御能力は重視されていなかった。

無論、第三世代機特有の高起動を実現するためでもあるが。

「お姉ちゃんがアレを止めきれない。私は織斑を守りきれない。

意味が無いわ」

冷静に、冷徹な声で妹は姉の言葉を完全に否定した。

凶星を指されて、姉の顔が苦渋に染まる。

「じゃあ、どうしろって……！ アレにこれ以上アリーナを壊されるわけには行かないのよ！ 私は守らなければいけないの！ 此処にあるものを！」

まるで泣き声みたいな言葉だと、簪は感じた。

一番良いのは楯無が一夏の護衛に付き、そして楯無が戻ってくるまで、簪が一人で時間を稼ぐことだというのは、彼女にも解っているだろうに　　それが、出来ない。

選えらびたくないという我俣すぎる理由だけで、選えべないのだ。

罵倒してでも、咎めて蹴りだす場面。

だが、簪にはそれが出来なかった。

姉の気持ちが少しだけ、理解できてしまったから。共感を覚えて、しまったから。

だから。

時間を稼いでくれと、彼は言った。

パートナーに、頼まれた。頼まれたのだ。

出来ると信じてくれた、と、今の簪は、そう思い込めた。

期待に応えたいと思った。それで、後で褒めてくれたら嬉しいな、とも、勿論。

だから。

「私も、残る。一人で駄目なら、二人居れば……足止めには、充分」

だから簪は、決意を込めて、姉に宣言した。

百二十一話（後書き）

てんやわんや。

何時もエディタで書いたものをコピペしてアップロードしてるんですけど、今回、この投稿機能上での修正が恐ろしいほど多くなりました。

気付いたら千五百文字以上増えてるとか、ねーわw

後の展開と併せると、書くこと増えちゃってなあ。

百二十一話

角の生えた頭。

横に大きく張り出した肩と、そこから繋がる鍵爪を持つ多間接の腕。

妙に猫背の胴体と、逆間接の脚。

鞭の様に撓る尾と、骨格だけで組まれた翼。

女性美を体現するISと言う兵器の有り様を根本から否定する、それは、悪魔的な意匠だった。

『こいつつ、意外に早い!』

『センサー系への干渉が厄介だ! 友軍誤射だけは避けるよ!』

『また、逃げる! なんなのよこいつら! 突然襲ってきたくせに、やる気ある訳!?!』

『焦るな、困んで追い詰める!』

普段乙女達が華やかな日常を送る学生寮。

今は、周囲を悪魔が飛び回り、それと、戦乙女達が追いかけてくるを繰り返している状況だった。

味方、七。敵、三。

しかし敵はヒットアンドアウェイを繰り返し、嫌らしいほど巧突発的なみに距離を取って、数の不利を覆していた。

「VTシステム、だな」

「忌々しい、と千冬がつぶやく。」

彼女は現在、突発的な敵襲に際して防衛の指揮を執るために、学園施設管理棟、中央管理室へと来ていた。

モニター越しに戦況を見守る視線は、厳しい。

「無人機に、可能なんでしょうか……？」

傍の席に座っていた真耶が、コンソールに手をやったまま、恐る恐る尋ねる。

モニターに映った敵の機動に、彼女は覚えがあったのだ。

数の利を容易に覆す、極めて合理的で完成された戦闘機動。

全身を装甲で覆われた、悪魔、異形に違いない姿の向こうに感じる、見慣れた誰か。

「機械であればこそ、むしろ再現は容易いと言いたいのだろう」

忌々しい。千冬はもう一度繰り返し返す。

悪魔的な異様を示すあの全身装甲のIS達は、明らかに千冬自身の動きを模していた。

あらゆる戦いで一度も敗北をしてこなかった、最強のIS操縦者、織斑千冬の。

自らの戦いの経験、蓄積された戦闘データが防衛戦に参加している教え子達に危機を招いている。

苛立ちを覚えない筈がないだろう。

だが、千冬にとって真に忌々しきはそこではなかった。

「真似るならせめてもっと上手く真似てみせる……っ！ あんな無様な、なまじ似ているから余計に無様が引き立つ！」

「はははは……」

傍で聞いていた真耶が冷や汗を垂らす。

織斑千冬は何処までも最強の女だった。

「アレに関しては代表候補達に任せておけば良いだろう。突発的危機にどう効率的に対処するべきかの、良い訓練になる」

聞く人が聞けば啞然とするような言葉を平然と言いつつ後で、問題は、と頭を振って別のモニターへ視線を移す。

「……はい」

真耶も難しい顔で、それに続く。

そのモニターに映っているのは、アリーナの中央に立ち尽くす、六本脚の異形のIS。

頭部装甲の隙間から、センサーアイを不気味に光らせていた。

「新型、か。次から次へと、まったく……」

「計測範囲内で判明しているだけでも、出力が通常のISの二倍強。尋常ではないエネルギー量です」

サブウィンドウに表示された六本脚のISのパラメーターを確認して、真耶が恐れ混じりの声で応じる。

「恐らく、本命はこちらと言うことなのだろう。学生寮の方は、陽動だな」

「第一アリーナ……と、言いますと、やはり、目的は」

「事情は解らんが、更識があの場合にいたのは幸運だったな」

何故居るのかは知らんが、と口元に手をやりながら、千冬は言う。更識楯無は学園が有する最強の手札の一つだ。

現状、一番守らなければならぬ物の内の一つが存在している第一アリーナの防衛に、彼女が回っていてくれることは千冬達にとつてありがたかった。

「ただ、あの……同じ場所に、いーくんも、居るみたいですけど」「なに？」

「あと、更識簪さんも……ついでにいーくん、ISを顕現させてないみたいなんですけど……」

「はあ？」

どういふことなんでしょうねと首を捻る真耶に、千冬は訳が解らないと目を丸くして答えた。

『この非常時に何をやっているんだ愚弟！』
「だから何もしてないってば！ どっちかといえば、僕は巻き込まれただけだって！」
『何もしていないのが問題だと、何時も言っているだろう！』

あまりの音量にスピーカーがハウリングをかき鳴らす。
端末をハンドレス通話モードにしていたため、スピーカーを耳からはずすことが出来なかった。

そして、同タイミングで、小刻みに地面が揺れる。
二重の意味で、一夏は眉根を寄せることとなった。

「ISを使って掘削工事……なんて贅沢な事を」

どうやらあの六本脚スレクニルは地下施設に狙いを定めているらしい。

しきりに上空から、地価への穴を穿とうと砲撃を試みている。

更識の姉妹二人が妨害を行っていないければ、今頃アリーナには大穴が貫通している状況だった。

『くだらないことを言っていないで早く機体の量子パッケージングを終わらせる。そして直ぐにアリーナの防衛戦に参加するんだ』

「言われなくても急いでるってば……一応確認だけどさ、こつちに援軍とか回せないの？」

『残念だが、お前の予想通りそちら以外でも取り込み中だ』

「……だと思った。皆に頑張らって伝えておいて」

『自分で言え』

救援要請をあっさりと退けられて、しかし、一夏はあまり落胆をしなかった。

当然、予想できていた事だったからだ。

故に空間投影キーボードを叩く指を止めることもない。

彼は今、一人で格納庫にまで来ていた。整備中だった自身のISを、コアの保存領域に機体を再読み込みさせ使用可能にするために
現在外 スレイブ 直ぐ傍にあるアリーナでは、楯無と簪の更識姉妹が、あの六本脚と激闘を繰り広げている筈だった。

振動や、窓の向こうが雷光のように瞬いているのは、それが原因である。

「しかしまあ、面倒つてのは重なるものだよねえ」

再びの振動。ぱらぱらと天井から零れ落ちる埃をうっとおし気に払いのけながら、一夏は言う。

女の子達に戦うのを任せている状況は彼の好みではないし、突然の襲撃に恐れも抱いている。

だが同時に、『ああ、またか』と冷静にため息を吐いてしまえる程度には、彼も危機的状況に慣れっことなっていた。

通信端末の

『お前にとって、命の危機は痴情の纏れと同レベルの問題か……』

「むしろその痴情の纏れとか言うヤツの方が、僕としては怖いんだけど。……僕には止めようが無いし」

『お前がそんなことを言ってるから、誰も止まらないんだろうが』

「そうなんだけどね……とは言え……っと。全バイパスチェック完了。量子パッケージング作業、開始！」

『思い切り誤魔化したな、お前』

「ハハハ、気のせい気のせい」

空笑いを浮かべながら、一夏はエンターキーを強く弾く。

無論、後が怖いんだろうなと薄々は気付いている。反省はしないが。

『何処で育て方を間違えたんだ、私は……』

「いや、うん。姉ちゃんの責任じゃないよ」

『責任が自分にあると解っているなら、少しは自重しろ、全く』

「ホント、ゴメン」

姉弟が益体の無い言葉を交わす傍ら、装甲が分解されたままハンガーに固定されている打鉄つちがね式が、量子の波へと還元されていく。最低限のエネルギーバイパスの接続だけを終了させて、装甲の組み立ては量子化した状態で行うのだ。

「エネルギー食いすぎるから、あまりやりたくないんだけど……」
「それでも、生身のまま戦場をうろつかれるよりはマシだ。
イザと言う時にも、逃げ易い」

状況はまだまだ流動的だからなと、千冬は付け足す。

「逃げる、ね」

姉の言葉に、一夏は納得いかないという態度でつぶやく。

逃げる　逃げられるのなら、確かに逃げたい。

戦闘と言う行為は、何時まで経っても一夏にとっては恐ろしいものに違いないから。

だが、女の子達を盾にして自分一人で逃げるという構図は、大嫌いな戦闘行為以上に彼の好みではなかった。

「仕方あるまい。この学園で尤も狙われている可能性が高い物の一つが、お前なのだから」

そんな一夏の想いを切り捨てるように、千冬ははっきりとそう告げた。

だが、一夏も譲らなかった。

「悪いけど、断るよ」

『……一夏』

姉の厳しい声。普段なら、恐れの一つでも覚えるかもしれない。

だが一夏は、今はそれに従う気は、無かった。

黙って、地面に視線を落とす。

重量のある機材を支えることが可能な、頑丈な格納庫の床。

「この下に、あるんだろ？」

最早確信を込めた声で、一夏は尋ねた。

『……お前』

苦いうめき声が漏れ伝わってきて、それきり。

だからこそ、一夏は自身の考えが正解だと、理解できた。

IS関連の施設は、世界各国で同時期、同規模で作られた関係上、その構造は酷く似通っている。

米軍基地を例に示そう。

あの基地のIS関連施設は、地下に何階層にも連なる研究施設、重要機密情報管理施設が存在していた。

ISはISでないと打倒し得ない。

ならば、絶対に奪われる訳には行かない重要な情報や物資を安全に管理するためには、ISが直ぐに防衛に回れる場所に建造するのが、正しい方法といえる。

各国各IS研究機関から、IS関連の膨大な情報が集うこのIS学園に於いても、当然それは変わらないのだ。

重要な物は、貴重な物は地下に。IS関連施設の、地下深くに。

今、この学園で、尤も重要にして貴重、機密性の高い物は。

一つは、織斑一夏。唯一の男性IS操縦者の身柄。

一つは、篠ノ之箒の有する、専用IS。篠ノ之束が作り出した、

世界唯一の第四世代型IS。

そして、もう一つは。

「灯台下暗しってヤツだね。てっきり国外に持ち出されたと思ったり思ってたよ」

一夏はため息混じりに言った。気付かなかった自分の間抜けが、可笑しかったのだ。

『一夏、解っていると思うが……』

「解ってるよ。言い逃れできなくなるんだろ？」

『おい、返事が軽いぞ。本当に解っているのか？ この間の査問会程度の話では済まないんだぞ？』

「大丈夫。ちゃんと覚悟してるって」

『覚悟って何だ、おい!』

「パッケージング完了。じゃ、ごめん姉ちゃん。もう行くから、切るよ」

『おい待て、一夏! おい……!』

問答無用で、通信端末を耳から外す。

「ちゃんと解ってるってば」

微苦笑交じりに、一夏は呟いた。

ちゃんと、解っている。

大切なことは何か。自分がやりたいことは何か。求めている物は、何か。

ちゃんと、解っている。

「よし!」

一声気合を入れて、量子化を完了した打鉄式式のステータスを確認。

全て欠損無く量子化していることを確認し、量子格納エリア内で再組み立てを開始。

作業速度に比例して、次々とシステムが使用可能に変わっていった。

皮膜装甲展開完了。推進器正常作動。火器管制機能全接続確認。

ハイパーセンサー最適化完了。

ホロティカルモニターが展開し、次々と機体ステータスが表示される。

活動限界。行動範囲。センサーレベル。使用可能武装。アーマー

残量。

「打鉄式式、顕現!」

腕を飾る白銀の腕輪を握り締めて、一夏はISを量子から実体に変換した。

瞬時と言つべき速度で、身体を覆う鈍色の鎧。打鉄式式・丁。

実体化したことにより更に先鋭化されたハイパーセンサーが、周辺情報取得していく。

周辺情報を。

周辺情報を。

周辺で起こっている事態の状況確認を。

「……って、ちょっとまってっ！」

叫んで、次の瞬間。

問答無用の勢いで、一夏は格納庫の壁を突き破った。

私も残る。

確かに、驚愕した。

それは内気で気弱だった妹が、『自らがこの場に居ることが、状況を優位にする』と実感出来る程の自信を、実感を手に入れた事を意味していたから。

このような状況でなければ、歓喜していたに違いない。

だが素直に喜んでいられる状況ではなく、そんな心にゆとりも無く
故に、楯無が選んだ答えは。

「射撃の間隔がズレてるわよ！ 確り併せなさい！」

『言われなくっても……っ！』

「周囲の状況を良く見て！ 追い込むべき方向をもっと考えなさい
『！』」

マニピュレーターに握ったビームライフルで援護射撃をしている簪に、楯無は容赦なく文句を叩きつける。

『いちいち、注文が多い……っ！』

当然のごとく、妹は姉の文句に文句を返す。

楯無は鼻を鳴らしてそれを遮った。

「まさか私の動きに併せられないっていうの？ 簪ちゃん、貴女それでよくも、私に勝つなんて豪語出来たわね？」

最早言葉に容赦の欠片もない。遠慮の一片も、妥協の一欠けらも存在しない。

『姉さんこそっ……さつきから、攻撃パターンが、単調……っ！』

「言ってくれるじゃない。 なら、もっと細かく行くわよ！」

ちやんとついてきなさい！」

『当然……っ！』

姉妹は喧嘩のような掛け合いを繰り返しながら、その連携を複雑なものへと変えていった。

それが、楯無の簪への答えだった。

対等に扱う事。容赦なく要求する事。甘えを許さない事。

そういう扱いこそが、成長を遂げた妹に対する誠意になると、信じた。

ただ、自身でも感じるほどに舌鋒が鋭すぎる理由が、嫉妬にあるとは楯無も流石に考えたくなかった。

違う、と内心に言い聞かせながら、荒い言葉を交わしあい、妹と空を駆け巡る。

(それに、しても……！)

援護射撃を挟む隙間が見つからないほどの、変則的な戦闘機動。

しかし、水で出来た矢と蛇腹剣の隙間を縫って、ビーム光線が絶妙なタイミングで六本脚^{スレイブニル}を追い詰めていく。

無数のミサイル弾頭を制御するための訓練を積み重ねた成果だろう、高速機動時の射撃精度が、楯無の知る以前の簪に比べて、格段

に成長し、研ぎ澄まされている。

(本当に、成長してる！　こんなに早く……！)

代表候補に選ばれるような自慢の妹だ。

才能はあるに違いないと、楯無も思っていた。

だが、此処まで一気に、これほどに早くそれを開花させるだなんて、流石に彼女も予想していなかった。

(なにが、これほど……！)

そんなこと、考える必要も無い。

『恋は女を強くする』

そついう話、なのだろう。

簪は一夏に恋をして、そして言葉の通りに、強くなった。

戦闘能力と言つ意味ではなく、心が、以前に比べて、ずつと。

でなければ、楯無を挑発して戦いを挑もうなどと言つ考えには、至れなかっただろう。

強くなった理由は　考えるまでも、無い。

(……でも、それなら、私は)

簪が強くなったその理由を改めて考えて、そして楯無は、気付けばそれを、自身のことに当て嵌めていた。

簪は強くなった。

しかし、楯無自身は？

心は乱れ、言葉は纏まらず、虚勢を張らねば、顔も上げられない。

明らかに。明らかに

(弱く、なった)

弱く。心を御しきれないほどに、妹の気迫に圧倒されてしまうほどに、楯無は自身が弱くなったことを実感した。

今だって、そう。

妹の成長を喜び、それと同時に戦いに集中することで、なんとか自分の弱さから目を背けているだけ。

収まらない心の乱れを、言いようの無い不安を、必死で誤魔化しているだけ。

守護者足らんと、楯無と名乗るに相応しくあらんと、常に自らに課して来た覚悟は、今は何処にも見当たらない。

『恋は女を強くする』

簪は言葉通りに強くなった。

しかし楯無は。更識楯無は、あまりにも弱くなった。

恋という想いが、真に人を強くしてくれる気持ちであるのならならば、弱くなった楯無が抱く、この想いは。

この想いは　　恋では、無い？

(……いやだな、そんなの)

恐怖が、楯無の心を締め付けた。

恐怖が、楯無の心を支配した。

楯無は、恐怖に心を奪われた。

『お姉ちゃん！』

「　　っ!？」

妹の悲鳴。

クリアになる思考。

刹那、見上げる楯無の瞳に映った光景は。

ウィングスラスタを折りたたみ、肩から前面に展開している六^{スレ}本脚。^{イテ}

閉じられた突き出された翼は、まるで巨大な騎乗槍のように思えた。

スレイヴニル 六本脚の肩口で、何か炸裂する音を、楯無は聞いた。

刹那の間の、出来事だったのだろう。

スレイヴニル 無用心に六本脚の正面に身体を晒してしまった楯無に目掛けて、翼を折りたたまれて作られた騎乗槍が、炸薬の爆裂による圧力に押しされ、打ち出される。

刹那の間に、楯無はその全てを認識した。

スレイヴニル 六本脚が隠し武装とも言うべき巨大なランスを自身に打ち出してきた事を。

そしてそれが、最早回避し得ない致命打である事を。

衝撃。ぶれる視線。霞む視界。

轟音。地面に激突間近。姿勢制御は不可能。

痛いだろうなどと、間抜けな思考が脳裏を掠めた。

そして。

「何でドラマチック……っ！」

この想いが恋ではなくて何だと言うのか。

織斑一夏の腕の中で、楯無は、そうはつきりと、理解した。

百二十二話（後書き）

しかしなんつーか、本来メイン格のヒロイン達の扱いと言ったら。

このSSはファンディスクでヒロインに昇格したキャラの追加シナリオみたいなものですから、出番が偏るのはしかたないってことで、ーっ。

百二十三話

女の子のピンチに颯爽と登場し、その危機を救う。

余りにも漫画な展開に、一夏は思わず口走ってしまった。

「何てドラマチック……っ！」

壁を強引に突き破ったり、落下するISの質量を正面から受け止めたりと、ただでさえ無茶な量子変換で不足していたエネルギーが危機的水準にまで落ち込んでいた割には、実に余裕のある言葉である。

無論、半ば以上虚勢そのものだったが。

「一夏、君……？」

「ええ。おはようからおやすみまで、貴女の日常を支える織斑一夏ですよ」

だが、自身の腕の中で驚き目を見張る、瞼の下を赤く腫らせた少女の存在があれば、虚勢の一つや二つ、簡単に腫れてしまうのが、織斑一夏だった。

この際、地面に落下中だったのが簪ではなく楯無のほうだったことに関する驚きは、おくびにも出さない。

「一夏、君」

「ええ、たっちゃんさん。……っと、一度降ります」

戦闘は続行中なのだ。

抱きとめた超美人の柔らかさを堪能してばかりもいられない。

戦闘と、自身が格納庫の壁を突き破ったことで出来た瓦礫の上に着地し、呆然としたままの楯無を降ろす。

降ろそうとして、楯無が胸に顔を埋めたまま離れてくれないことに気付いた。

「あの、たつちゃんさん？」

「……」

呼びかけても、反応はない。

意識が朦朧としているのだろうか　何処か、やばいところでも打ったのか？

正面装甲は全損しており、頼みのアクア・クリスタルまで火花を散らしている。

流麗な水のドレスは最早何処にも見当たらなかった。

身体に傷がついていない理由は、偏に、絶対防御の絶大な身体保護機能によるものだろう。

「あの、ホラ。早く体勢立て直さないと、更識さんが……」

上空を見上げつつ、重ねて言う。

実際、簷は通信を送っている暇がない程の激しい攻撃に晒されていた。速やかな援護が必要だろう。

「早く行かないと……」

「……」

瓦礫の上に立たせようとしても、楯無は反応してくれない。

その代わり、何かを、ハイパーセンサーですら拾い上げられないほどの小声で何かを呟いていることに、一夏は気付いた。

「たつちゃんさん？」

尋ねる。

「……の？」

よく聞こえない。

「あの……？」

もう一度、尋ねる。

顔を寄せ、耳を寄せ。

楯無は傍に寄ってくる一夏に合わせて、少しだけ顔を上げた。
伏せた前髪の向こうに、光の失せた瞳が見える　やはり、思
考は明瞭なものにはとても見えない。

今の楯無は普段の楯無とは、違う。

彼女は攻撃の余波で意識を朦朧とさせており、口走っている言葉
は、言ってみれば寝言程度の物に過ぎない。

聞き流して、寝かして、休ませる。

それで十分な状況。

状況、だったけど。

「簪ちゃんのところへ、行っちゃおうの？」

言葉を聞いてしまった。

答えずに征くと言う選択肢は、失われた。

この非常時に何を聞いているのだ。

自分でも、突っ込みを入れてやりたい気持ちで一杯だった。

だが、止められなかった。気付けば、その言葉が口をついていた。

「簪ちゃんのことへ」

...

声に出さぬ続く言葉こそが尋ねたかった真実。

阿呆なことを、状況を弁える。そうすれば返事は一つに決まってい
るだろう。

思考の冷静な部分は、当然のように訴える。

「そりゃ、いやだって、一人じゃ不味いでしょう」
援護しないと。

戸惑いながらの一夏の答えは、この状況に置いて当然の物だった。当たり前前のことを聞く楯無の方こそが、可笑しい。彼の当惑の程が知れた。

楯無自身も、その判断に賛成だ。簪には早急な援護が必要だろう。

一夏は簪の元へ向かうべきだ。

だというのに。

それを理解しているというのに。

「簪ちゃんの方へ、行くの？」

朦朧とした意識で放たれた言葉が、自らの浅ましい本音をむき出しにしていくな。

何故解ってくれないのかと、解ってくれない一夏にこそ、責任があると言つ体で。

まるで駄々っ子のような言葉を、楯無は重ねていた。

止められなかったのだ。止められなくしたのは、誰だ
責任
を彼に押し付ける。

何て愚かで我侷。

状況を弁えず、そんな事ばかり口にするから

「簪ちゃんを、選ぶの？ ……私じゃ、なくて」

そういう結果が、訪れる。

「……たっちゃん、さん」

一夏は呆然としている。当然だと、楯無自身も思っていた。今の楯無は、自らが勝手に妄想する悲劇に酔いしれているだけに過ぎない。

落ち着いて正しく状況を理解すれば、そんな悲劇は実際はありはしないと直ぐに気づけるといふのに。

敵が居て味方が危機に陥っており、そして自身がそれを助けられる立場、状況に居るならば、助けることは当然なのだから。

敵の不意打ちによるダメージと、文字通りドラマのような一夏の登場のタイミングで、心の箍が緩んでいるだけ。

気を取り直し、立ち上がり、訂正しろ。しなければならぬ。

でない、本当に嫌われてしまう。

「~~~~~っ！」

この期に及んで心を占めるのが、そんなのばかりだった事実、楯無は絶望感すら抱いた。

(ホント、信じられないくらい好かれてたんだな、僕)

熱いを通り越して重さすら感じる程の言葉を突きつけられて、一夏が思ったことはそれだ。

意識を朦朧とさせた少女の妄言を、一夏は既に、全て本音として受け止めることにしていた。

否定してしまうには、余りにも哀れだったから。

彼女が、或いは自分が。

(普段はアレかね。楯無である自分に集中仕切っているから、暖簾に腕押しって感じなのかね)

思い込んだら一直線で、周りのことが目に入らなくなってしまったところは姉妹そっくりだと、他人事のように思う。

(最近はでも、そうでもないのか)

唇をゆがめる。

夏を越して、最近。少なくとも異性だとは認識されているとは、思っていた。

だがどうやら、やはり、ただの異性以上の物だと思われるのかもかもしれないというのは、自信だけの勘違いでは無かったのか。

(そうだとしたら、自分を誇っても良いかもしれない)

とは、言え。

仕事人間の大美人を折角口説き落とせそうなチャンスだと言うのに、泣かれてしまっただけは喜びも半減と言う話である。

意識が朦朧としている状況だからこそ本音が漏れているのだろう。元に戻って落ち着いてしまえば、きっと普段の楯無の性格なら、自己嫌悪に陥ることは請け合いだ。

(それで、下手をすれば自分の想いに疲れて、勝手に打ちひしがれて諦めらる、と……)

冗談ではない。それは、良くない。早急に解決しなくてはならない。簪のフォローの件も合わせて。

無論、一番簡単な手段は決まっている。

『貴女を選ぶ。貴女一人だけを』

一言、楯無の目を見てそう伝えれば良い。

そう告げるだけで、この状況で、楯無はきつと安堵を得られる。

(まあ、たっちゃんさんだけは、なんだけど)

そうして楯無を置いて簪のフォローに回る。

スレイブニル

六本脚の目的がアリーナの地下施設にあるであろうモノ《・・・》なら、その奪取を優先して動くなら、動きは制限されるのは必至。

連携を取って時間をかければ、いずれ、援軍が

(駄目だな)

度し難いと思いつつも、一夏は唯一の答えを放棄する。

無事に終わる、では駄目なのだ。

何事も無きまま、終わらせては 終わらせるのは、一夏の好

みに合わない。

他者に想いを伝える。自らの意思を。

それが、何の反応も無く、ただ状況の対処のためだけに消費されるなど、許せる筈がない。

一夏は楯無が好きだ。

それは事実で、間違いない。

自身の気持ちを否定する要素は何処にもないし、想いを伝えることを忌諱することも、無い。

だが楯無が好きなのと同時に、一夏は、ナターシャもシャルロットも真耶も本音も鈴音もセシリアもラウラも箒も好きだった。

同様に、と一括りにしたくないほど、それぞれの、大勢の少女達のことを、一夏は好きだったのだ。

そして、自身が好きな少女達に、ずっと好かれたままで居たいと本気で思っていた。

常識は、彼の答えを認めない。

(なら)

普遍性のある画一的な答えが、彼の想いを認めないのであれば

『だから一夏、あんたは精一杯努力しなさいよ、全力で、必死に。あたしたちがあんたを好きでいることに疲れちゃわないように、あたしたちがあんたを好きで居られるように』
頑張りなさい』

自らの愛する少女達の想いにこそ、答えを求めるしか、ない。

(頑張るさ……ああ、頑張るとも)

その決意は、少女達のためだけではなく。

深い海の底、マリンスノーに埋め尽くされた幻想的な世界で邂逅した、誰か。

きつと一夏に場所を譲ってくれたに違いない、近くて遠い、何処かの誰か
通りすがりの地球人との、約束でもあったから。

(考えたくないけど、この程度の修羅場なんてこの先幾らでもめぐってくるに違いないんだ。一々戸惑ってたら、体が持つ筈がない。

……乗り越える。笑いながら簡単に騙し透かすような軽い、軽すぎるノリで、乗り越えて見せる！)

敵が居る。

味方が追い詰められている。

自身へと向けてくれた想いの重みで、少女の心が押し潰されそうになっている。

それら全てを、自身の努力で、乗り越える。

努力で。全力で。出し惜しみなく。

(出し惜しみなんて、もう、してられないよな)

後で実姉から大目玉は確実だろう。だが、今はそれが必要だ。

楯無がこれほど追い詰められている理由は、現在が戦闘中だからと言つのも理由になっているのだから。

元来自らの役目に真面目すぎる人だから、状況を弁えぬ、一向に止まる気配を見せない自らの思考に罪悪感を覚えてしまっているのだ。

プライベートの時間であれば、その想いをこれほど否と思うことは無いだろう。

思い悩むことを楽しむ余裕すら、生まれるかもしれない。

むしろ、楽しんで欲しい。

一夏としては、そう思っている。些か趣味が悪いかもしれないけれど、真実に。

ならば、そういう状況を作るために、努力しろ。

保身を捨てて、苦勞を、苦難を背負え。

それが織斑一夏に与えられた、罰であり、権利だ。

「言つたら、さっき」

そつと楯無を瓦礫の上に降ろしながら、告げる。

瞳を震わせている少女に、一夏は自分の想いを告げる。

「キミ等の間でどういう結論を迎えようと、それはそれ。キミたちだけの問題だって。僕は僕で、自分がやりたいようにやらせてもらうからって、そう言つただらう？」

目を見開く楯無。

単純に、言われた事が理解できていないんだらうなどと、一夏は思った。

暴論に過ぎるしなと、一夏自身内心で思っている。酷い誤魔化しだ、とも。

しかし、止めない。

自分が望む状況を作るためならば、どんな手段でも用いると、決めていた。

「どちらか一人を選ぶ。そういうのを望まれても、ゴメン、無理だ。たつちゃんさんがどれだけ一途にそれを望んでくれても、それは僕の望む答えじゃない」

だから。

「僕は、自分の望む答えを、自分の力で手に入れる。そのために…
…そのための」

うちがね
打鉄式を、再度量子化。

装甲から開放されて空になった手を掲げる。高く、高く掲げて、
広げる。

未だ戦い続ける簪と六本脚。スレイブニル その更に先。より高く、遠く。

手を伸ばしても絶対に届く筈はない、掴める筈がないその場所へ。
星の彼方へ、無限の果てのその先へ、手を伸ばす。インフイニット・ストラトス

「そのための力だろう、フォーテユナー 星詠み！
来い！」

百二十三話（後書き）

軟派な子に成長したなあ、こやつも……。

あ、因みに名前が無いのは仕様です、仕様。脱字ではありませんのであしからず。

百二十四話

「うっそ、本当に曲がった!？」

「ふふん、当然です。さあ、シャルロットさん、今ですわ!」

「任せて! 灰色の鱗殻グレイ・スケール、セット!」

「こちらもだ! やれ!」

「出力可変型プラスチックライフル 穿うがち ……いけるのか!? いい

や、迷うな……いけっ!」

大輪の赤い華が、星空に花開く。

学生寮の上空で、次々と敵性ISが撃破されていく。

「残り一機。この調子なら問題無いな」

「はい。システムだけではなくハードの方にまで干渉してきたときは、どうなることかと思いましたが……」

千冬の言葉に、真耶が安堵の息を漏らす。

学生寮に現れた敵の数は残り一体。対して、防衛に回った味方は六機全てが現存。

油断しないで戦えば、勝利は確定的だった。

「だが安心してばかりも居られんか。楯無が落とされたのは痛い。速やかに此処での片を付けて、アリーナの援護に向かわせねば」

「そうですね。……でも、あの更識さんが落とされるなんて」

巨大モニターに映る、ノイズ交じりのアリーナの映像に目を向けながら、真耶は暗い声で言った。

アリーナの上層施設は既にほぼ壊滅的な打撃を受けている。故に、この観測室へと映像を送信するためのカメラ機器も、軒並み機能を損失していた。

だが不鮮明な映像越しでも、更識楯無が敵の攻撃の直撃を受けたのだけは、確認できた。

咄嗟に救援に回った一夏が支えたため、地面への落下は免れたようだが。

「一瞬動きが鈍っていたな。何か余計な物に気を取られたのか……だが更識に限って……いや。とにかく今は、アリーナへの救援を急がせるのが先か」

「はい」

真耶は短い言葉で頷いた。

兎角、現状は手順さえ間違えなければ確実に勝ちを拾える状況へと傾いてきているのだ。

目の前のことを丁寧に、一つ一つ片付けていけば 何も、突飛な事をする必要も、無い。

大人達が、そう考えた、矢先。

立体投影モニターが次々と立ち上がり、その全てが赤く縁取られて危急の事態を伝えてくる。

緊急警報

シンプルかつ明瞭に、その一言が刻まれていた。

「なんだ!？」

「えっ、と……これはっ」

緊張の声を上げる千冬。

速い動作でキーボードを叩き、目的の情報を確認した真耶は、驚きに目を見開いた。

「第一アリーナ地下、最下層機密エリア。せ、聖域内部で……高工

ネルギー反応！ ISが、起動しています！」
「聖域で、だと……っ!？」

聖域。

神聖にして不可侵たる、何人たりとも近づけぬ領域。

そう名付けられた施設が、学園地下には存在した。

その施設の概要を端的に述べるとすれば、内部と外部を、物理的、量子力学的にも完全に遮断した、干渉不可能の絶対防御圏と言つものになる。

ISの絶対防御機能と、そして物質／量子相互変換理論を解析して得られたデータを元に建造された、ISによる干渉すらも完全に遮断することが可能な、最高峰の隔離施設だ。

更にこの施設の優れている面は、内部に格納された物質の物理的な運動を完全に停止することが可能となることにある。

聖域施設の内部を量子的観測下に置くことにより、物質としてのそれがその場所に存在していない状態にしてしまえば、それは何ら活動を行うことが出来なくなるし、逆に、外部から干渉することも、不可能となる。

聖域は、絶対安全の防壁であると同時に、内側の物を外へ逃がさないための、最強の牢獄でもあった。

ただし、建前の上では、とそこに同時に記さねばならないが。

そも、ISとは篠ノ之束と言う常識から百歩も千歩も逸脱してしまつた天才が一人で作り上げてしまつた、現代の常識の一切が通用しないオーパーツとも言ふべきものだ。

で、あるならば現代の科学者達がどれほど研究を重ねようが、その機能の全容を解析できる筈もない。

必至で得られた莫大なデータも、大海を満たす海水のほんの一滴に過ぎない。　　そう言う事なのである。

早い話が、聖域の隔離能力はISに対して完全ではない。　　らしい。

らしい、とついでに理由は、誰も今まで、それを試したことは無かったからである。

建前と言うのは、時により本音よりも重要視される。

『聖域に隔離してあるから、誰も手を出せません』

そんな建前を共有することで解決する事態も、世の中には存在するのである。

逆に言えば、聖域の内部に隔離した以上は、如何なる理由があつたとしても、外部から干渉することは絶対に許されない。　　そういうルール付けのために存在する施設、と言つてもよいだろう。

聖域は、触れてはならぬ物を隔離、封印するための施設として、社会の普遍的なルールの一つとして、既に成立している。

ルールを侵すことは許されない。

普遍的なルール　　常識が失われてしまえば社会は成立し得ないのだから。

「あいつに常識を期待するのが間違っていた……！　　真耶！」

「もうやってます。学園ない全システム、外界から遮断！　　敵機による不正侵入によるものとして欺瞞情報を拡散開始！」

歯軋りをせんばかりの千冬に、真耶は涙目になりながら必至にキーボードを叩くことで応じる。

「誤魔化しきれるか……？　　いや、誤魔化すしかないのだが……ああ、もう！」

苛立たし気に髪を掻き揚げながら、千冬はノイズ交じりの映像を表示するモニターへと視線を移す。

瓦礫の山と化した第一アリーナ、そしてその周辺施設。
そこに、白い光の柱が出現した。

「説教で済むと思うなよ、一夏！」

第二十三編・織斑一夏は織斑一夏

「……ん？」

立ち止まり、空を見上げる。

大型ショッピングモールの、天井。ガラス張りのアーケード。
その向こう、まだまだ強い日差しで彩られた、残暑の青空。

「どうしたの一夏？ 急に立ち止まったりして」

隣を歩む金髪三つ編みの、少年のよう　　に、見える筈も無い。
仏蘭西人形のような美しい少女が、不思議そうに尋ねかけてくる。

「いや、何か、千冬姉に呼ばれたような……じゃなくって、えっと
？」

自分でも、良く解らない。

良く解らなかったけど、空を見上げていた。

空に何か、あるだろうか　　？

「む〜〜?」

「ホントに、どうしたの? 暑くて、疲れちゃった? ど、どこか涼しいところで休む? その、ゆ……ゆっくり休憩、とか」

ゆっくりご休憩。

少女は何故か、妙にその言い方に拘っている。

ぼうつとしていて心配を掛けてしまったようだ。

何でもないと頭を振ろうとして、ふと、青空を飾る雲の一つが目に付いた。

「なあ、あの雲さ。空に上るデカイ鯨みたいに見えないか?」

「クジラ? ……ううん、言われてみれば見えない事もないけど…

…」

指差して話を振ってみても、彼女は三つ編みを揺らして要領を得ない顔をするのみだった。

正直余り似ていないと、言いたげにも見える。

「そうだな。どっちかって言うと、鯨というか、望遠鏡みたいだもんな」

「ぼ、望遠鏡? あの、本当に、平気? ゆっくり一休み、休憩とかした方が、良くない?」

「ごめん、マジで平気だから。行こうぜ」

「わわ、急に背中押すなんてっ……ひゃう」

ごまかし気分で背中を押して、その場を後にする。気にする事なんて、何も無い。

だから、大事な仲間との二人きりの休日を楽しむべきだ。

だというのに、何故か。

もう一度、振り返って空を見上げる。

青空と、太陽。そして不思議なカタチをした、白い雲。
クジラか、或いは望遠鏡。それとも、袖の余った学園の男子制服
みたいにも。

「……頑張れよ」

そんな一言を、口が勝手に紡いでいた。

「一夏？」

どうしたの、と少女は振り返ってくる。

軽く肩を竦めて、首を振った。

「何でもないよ。それよりシャル。まずは、どこからまわる？」

「え？ え、えっと、……あそこ！」

「え？ あ、いや……さすがにそれは……」

綿蓋と慌てふためく彼女が確認もせず指差したその場所のせいで、今度は彼が、慌てふためく事になった。

休日、そうして過ぎていく。

何処かの誰かと、道が交わる筈が無い、彼だけの休日、彼の物語
が。

掲げた手のひらに、湧き上がる白い光。
確信を持って、僕はそれを握り締める。

鎖で繋がれた、二枚の望遠レンズ。瀟洒で古めかしい粹金にはめ
込まれた一品だ。

懐かしいと言うほどに慣れ親しんだものではない。重みを感じる

程の重さは無い。

だが、それは余りにもしっくりと、手に馴染んだ。

しかし、それも一瞬のこと。

手の中に掴んだはずのそれは、次の瞬間には再び光へと姿を変えた。

体が重さを失っていく。

ふわりと地面から、足が離れる。

脚部には、申し訳程度に装甲が造られた。厚みのあるブーツ程度の、軟な装甲。

身に纏う鎧は、それだけ。それは、戦うための鎧ではないから。だから光は頭上で、或いは足元で、巨大な光輪として象られる。人の身の丈ほどの怪を有する、精密なパーツの組み合わせだった二機のリング・ユニット。

二対のそれこそが、僕のISそのものだった。

名を、フォーチューナー星詠み。

存在を危険視され、秘されて来た僕の力。有り様そのもの。今再び、呼び声に答えて、僕の目の前に出現した。

『織斑……』

IS同士のネットワーク越しに、更識さんの声が聞こえた。

見れば、スレイブニル六本脚は戦闘行為を停止して、じつと僕の方へ頭を向けている。

フォーチューナー元々星詠みを目当てに襲撃を仕掛けて来たに違いないのだから、それも当然かもしれない。

『織斑、その』

躊躇いがちな声で、更識さんは再度僕を呼ぶ。

戸惑いも躊躇いもするだろうし、疑問を覚えるのも当然だなと、僕は思った。

余りのんびりしている暇もないのだろうけど、一言くらいは応じておくのが、当然だろう。

「うん、何かな更識さん」

『その、織斑……』

「うん」

何でも言ってくれという気分で、僕は頷く。更識さんが息を吸うのが解った。

『織斑は、お姉ちゃんのほうが、好きなの？』

私より。

ぐらつと体が傾いて、危うく地面に激突しそうになった。

「聞くの、それなの？」

冷や汗混じりに、言うしかなかった。

IS同士で相互通信が成立しているのだから、確かに先ほどの僕とたっちゃんさんの会話は、彼女に聞こえていたかもしれないが、よりによってこのタイミングで聞くのはそれが。それなのか。

フォーテコナー
星詠みの存在とか、どうでも良いのか、オイ。

『だって、それ、封印してたやつも……お姉ちゃんのために呼んだんでしよう？ それに、私が落ち込んでたときは突き放すことばかり言ってたのに、お姉ちゃんには、何か、優しい……』

「いや、キミのことも割りと身体を張って腹から出血しながら助けたと思うんだけどな、僕」

『でも、でも抱きとめてくれなかったし、私の時は……』

「ポジション考えようよ！ あの時僕が上でキミが下だったよね！？」

自称織斑マドカさんに突き落とされた時の話だけだ。

どうもさつき、たっちゃんさんを下から抱きかかえながら登場したのが、更識さんにはお気に召さないらしい。

まあね、自分でも結構漫画な登場だったかなとは、思うけどね。

「まあ、その辺は後でお話しましょうって事で」

『……誤魔化した』

「誤魔化されてくれる女の子の方が、僕の好みのタイプに近いかな」

『……じゃあ、誤魔化される、けど』

「素直で結構」

軽く肩をすくめて、改めて六本脚^{スレイフニル}へと顔を向ける。

この締まらない空気が、まあ、僕らしいんだろうなと思いつながら。

手のひらを六本脚^{スレイフニル}に向けてまっすぐ伸ばす。

頭上に位置していたリング・ユニットが手のひらの前に水平に移動する。

まるで、巨大なレンズが六本脚^{スレイフニル}の姿を納めているような光景が見えた。

「もう、お呼びじゃないんだよ」

余計な役者には、退場してもらおう。

リングが高速で回転を始める。内部機構の見えるスリットから、白い光を滾らせながら。

「くだらない茶番を見せられて、一時はどうなるかと思ったけど…」

…
高級ホテルのロイヤルスイートルーム。明かりの落とされた、薄暗い部屋の中。

片肘をついた優雅な姿勢で手元の空間投影モニターを眺めていた

スコールは、安堵にも似た吐息を漏らした。

眉は八の字の形を描き、口元は微苦笑に滲んでいる。彼女の立場であれば、そうもなるだろう。

組織の開発した最新鋭無人IS スレイプニル。

夏的一幕を経て第二段階移行を果たした唯一の男性専用ISである。白式（ひやくしき）、能力を危惧され封印処置が成されたそれを奪取するために、IS学園へと強襲を駆けた。

二つのISコアを同期させる事により、通常のISでは考えられないパワーを発揮する事を可能とした強力な機体だ。

しかしその強力な機体を送り込んで得られた映像を確認して見れば。

戦闘中に延々痴話喧嘩を繰り返す、二人の少女、一人の少年。

スレイプニルの脅威の戦闘力を目の前にして、随分と余裕があるものだと、流石のスコールを以ってしても、啞然と口を丸くするしかなかった。

頭痛の一つも湧いてこようというものである。

襲った側が思うことではないが、もう少し危機感を持つとすら、言いたくなったほどの有様だ。

因みに、一緒に観戦していたオータムは、米神を押さえながら寝室へと戻った。

痛々しくて見ていられなかったらしい。

スコールとしても、オータムの気持ちに大いに同感だったが、いかんせん、彼女は組織の幹部格としての立場があった。

例え反吐が出るほど甘々とした、正気では見ていられないような腑抜けた光景が繰り返り広げられていても、進行中の作戦の経過観察は必要だ。

だが、そんな茶番も漸く終わりのようだ。

「白式……まさかこちらが聖域を破る前に、自力で出てくるなんてね」

形成された聖域を破壊するのは、スレイプニルにも不可能だ。

それ故に、聖域を形成するためのエネルギーラインを破壊するという手段を取らせようとしていたのだが　　白式は、操縦者の意図に従って自力で外へと出て来てしまった。

「紅椿あかしばきと同じ、篠ノ之束の開発したISだもの。専従操縦者に対して強力な従属特性が施されているとは思っていたけど、絶対不可侵の聖域すら、突破するのね」

能力評価の上方修正が必要だと、スコールは判断した。

今回の襲撃の目的は白式の奪取　　確かにそうだったが、完全な強奪が行えるとは、組織もスコールも思っていなかった。

聖域から外へと運び出した瞬間、真の操縦者たる織斑一夏によって遠隔召喚されてしまうだろうという予想は、当初からあったのだ。織斑一夏　　世界で唯一の男性IS操縦者には、組織はまだまだ利用価値を見出している。

故に、彼を殺すことは不可能。

ならば、白式の完全な奪取も不可能。

計画は予定通りに、白式の能力評価へと移行した。

「やて……」
どうなる？

興味深げにモニターを見守るスコールの前で、白式はその特徴的なリング・ユニットの一機を、突き出す腕の前へ展開した。

ユニットが高速で回転を始める。

コアから流入したエネルギーが回転により加速を得て、増大されてゆく。

白いスパークを撒き散らし、最早計測限界に迫る膨大な物へと、それは膨れ上がった　　次の瞬間。

一際の、巨大な輝き。

「消えた！」

目を見張るスコール。

映像　スレイプニルの視界の中から、リング・ユニットが、消えていた。

いや、違う。リング・ユニットは、ある。それは、いつの間にか。

『　　ロック』

モニターに映る織斑一夏が、突き出した手のひらを握り締めていた。

まるでその拳の内側に、何かを捕らえたかのように　　そして、その通りに。

スレイプニルは、巨大なリングにその身の自由を奪われた。

「量子レポート……！」

巨大な構造体が、一瞬で距離を跳躍する。瞬時、タイムラグすらなく。

スコールはその事実には驚愕した。

「素晴らしいわ……」

震える声で、歓喜と共に。

だが、それすらも、一瞬のこと。

「……っ！」

身体を跳ね起こして、目を見開く。

モニターを凝視する。しかし、そのモニターには最早何も映っていない。

スレイプニルの観測したデータどころか、スレイプニル自体のス

データすらも。

モニターはブラックアウトしている。

「切り離された……奪われた？」

スコールの手にした端末と、スレイプニルを結ぶリンクが完全に途切れた。

端末が、予め周囲に設置してある探査装置が、その全てがスレイプニルの存在をロストしている。

端末を操作し、映像を外部観測機器に切り替える。

モニターに表示される、スレイプニルが居る地点の映像。

スレイプニルは、今も変わらずIS学園第一アリーナ直上に滞空していた。

リングユニットにその身を拘束されて　そこに、居る。見える。しかし。

「データは得られない。映像……視認以外の方法では、スレイプニルを観測出来ない」

そこに居るのに、居ない。

存在が固定されていない。

故に、外部から干渉することが出来ない。

「聖域と同じことを……！」

もはや紛れも無く、その声は戦慄を抱いたものだった。

百二十四話（後書き）

全員出すよ！

大体六巻の七十六ページと七十七ページの行間辺りでしょうか。しかし、改めて原作を読み返してみると、このSSの三つ編みの人は、何故あんな風になってしまったのか小一時間自分を問い詰めたくなつてきますね。

まーもう、仕様だよね、仕様。

あ、あと展開上必要になりましたのでスコールさんもう一度ご出撃。

今度こそお疲れ様でした。

百二十五話

捕獲完了。

派手さも見栄えもまるで無く、ただ巨大なわっかが敵を囲う、それだけのことで。

盛り上がりも達成感も一つも無い、悲しいほどに圧倒的で一方的な結末。

六本脚スレイフニルの自由は完全に僕と星詠みフォーチュナーが奪った。

外界に対して物理的な干渉手段を失った六本脚スレイフニルは、最早脅威には成り得ない。

「終わった、の？」

「まあね」

恐る恐る傍へ寄ってきた更識さんへ、僕は肩を竦めて応じる。後の問題は、これをこの後どうするか、だ。

固定している間に砲撃で地道に破壊するか。

それとも、最早星詠みフォーチュナーの量子的観測下に置かれているのだから、いつそ分子レベルに分解した状態に再観測リ観測してしまっても良い。

幾らでも、やりようがある。

この星詠みにはそれだけの可能性が存在していた。

(……だからこそその封印、なんだろうけど)

こんな危ない物、確かに一個人に持たせておくには、危険すぎると僕自身も感じずには居られない。

掴んだ力の強大さに、僕は改めて嘆息していた。

「それで、どうするの？」

「ん？ ……うん。そうだねえ」

背部の荷電粒子砲を拘束され身動きの取れない六本脚スレイブニルに向けたままで、更識さんは僕に尋ねてくる。

曖昧に頷きつつ、さて、本当にどうするべきかと僕は頭を悩ます。（現状でもやりすぎで、事後処理っつーかそれ以前に姉ちゃんの説教とか考えると、頭が痛い。物理的な手段で破壊するためには観測状態を固定しないといけないし……そうすると、六本脚スレイブニルまで外部干渉が可能になっちゃうのがな……まだまだ余力がありそうだし、危ない橋は渡りたくは無い。無いけど……）

安全牌を選べば、つまりは星詠みの能力だけで片を付けようと思えば、星詠みフォーチュナーの有する恐るべき能力を、これ以上晒してしまうことになる。

（今度は封印だけじゃ、済まないか……？ 目立ちすぎるのは、不味い。最悪の場合、身を隠して世捨て人フォーチュナーみたいにな……うん？）

身を隠して、世捨て人。

「……織斑、何してるの？」

「いやあ、ちよっと」

量子格納されていた制服のズボンのポケットに入っていた個人携帯端末を取り出して操作する僕に、更識さんは不思議そうな顔を浮かべる。

僕は微笑を浮かべながらタッチスクリーンを操作して、目当ての通話先を選び出した。

通話ボタンをクリックして、端末を耳元へやろうとして

「……あ」

その途中、腕に巻かれた白銀の腕輪ガントレットが目に入った。

打鉄うちがね式・丁。

今の僕の専用機　　の筈はずの、IS。

今の今まで、存在自体を忘れていた。

こいつに頼るといふ選択肢を、微塵も思いつかなかつた。

(そついや、臨海公園の時も、決め手になつたのは白鯨モビードフィッシュンオフ・アビの単一仕様リテイ能力リテイだつたし、追加武装に選んだのも、白鯨モビードフィッシュクで使う筈はずだつた武装、だつて)

余りにも打鉄うちがねのことを信用しなさ過ぎていゝなと、自分でも思う。実際、僕はこのISのことをまるで信頼していなかつた。今更ながら、そのことが少し、申し訳なく思えてくる。

「これからゆつくり互いのことを知つて、信頼関係を深めていけば良いさ」

物言わぬ腕輪に向けて、僕は微笑交じりに言葉を紡ぐ。

「……それ、私に、言つてるの？」

更識さんが、その言葉に反応してしまつた。

見ると更識さんは、色々な感情が混ざり合ひない交ぜとなつた顔をしていゝ。

「織斑オリハが、私よりお姉ちゃんばかりに優しくするのは……そのせいでいい？」

「いや、まさか。そうじゃなくて……」

全然関係の無い話。

訂正の言葉を紡紡ぐとして、僕は言葉を止めてしまつた。

更識オリハと云う、少女。

気難しい、内に溜め込みやすい性格。趣味はオタク系。姉に対してコンプレックスを抱いていゝ。

知つていゝのは精々、その程度のこと。

まだまだ知らないことの方が、多いだろつ。

だが、それも当然。

「……そう、だね」

だから僕は、彼女の勘違いに、同意を示す。

「僕らはまだ、知り合ってから精々三週間程度なんだから。前から付き合いのある　　ついでに少しばかり一緒に暮らしていた、たちちゃんと同じようには、扱えないや」

瓦礫に横たわるたちちゃんさんに視線を送りながら、僕は言った。灰汁の強い子ではあるので、短い間に色々と印象的な場面はあったが　　それは、そういう部分ばかりが目立っていただけ。目立たない部分には、まだまだ知らない、知りうるべき部分があるのだろう。

「これからゆっくり互いのことを知って、信頼関係を深めていけば良い……そう、思わない？」

「体よく、誤魔化されている感じ」

「誤魔化されてくれる子の方が、僕の好みだ」

「……だから、お姉ちゃんには優しいんでしょう？」

「良くお解りで」

参りましたと、肩を竦め。

それから顔を見合わせて、どちらともなく僕らは笑った。

「仕方ないから、誤魔化されてあげる」

微笑み混じりの言葉に、謝辞を返した後、僕は改めて端末の通話ボタンをクリックした。

着信音は、ほんのワンコール。

まるで待ち構えていたかのようになり、すぐさま通話可能な状態となった。

「ああ、もしもし。お久しぶりです。……ええ。　　はい。ハハ

八、そうです。　　それで、お願いがありまして……」

リングに囲われた六本脚が、スレイフニル虚空へ消えていく。

何事も無く、まるでISを量子の波へと還元した時のような様相で。

一片の欠片も残さず　　いや。

リングの中心辺りに、二つの球状クリスタルが浮遊しているのが見えた。

(ISCコア……二つ。そつか、アレがああの馬力の秘密……)

二つのコアを一機のISに使用するなど、聞いた事も無い。

ISCコアは公式のデータでは数が限られた貴重な存在だったから、そんな方法を試したのも、居ないだろう。

そもそもそんな事が可能なのだろうか　　と、それを言い出すと、無人のISと言う存在だって、ほんの少し前までは不可能と言われていたじゃないか、と言う話になってしまう。

社会の間、語られぬ真実を紐解いてみれば、常識では考えられない事実が存在している。

これも、その一つの事例と言う事なのだろう。

そんな事を考えている間に、いつの間にか二つのISCコアまで姿を消していた。

何処かへ。何処だろうか。後で確認する必要がある。

消した張本人　　織斑一夏に。

(話しかけなきゃ、いけないのか……)

気が重いなど、楯無は思った。
気が重くなると、それにつられて、途端に身体まで重くなってくる。

考えないようにしていたけれど、正面から敵の攻撃を受けた全身が悲鳴を上げていた。

瓦礫の上に横たわったまま、身を起こすのが辛い。

(……………話しかける。うああ……………)

気が重い。実に気が重かった。

攻撃の衝撃で大分意識を揺さぶられてしまった。

朦朧とした意識の中で、とてもとても碌でもない内容の会話を、

状況も弁えずに口走ってしまったような いや、よそう。

良い感じに本音がダダ漏れでした。

ちゃんと覚えています。

「駄目だあ……………死にたくなってきた……………」

「せつかく危機を回避できたのに、何物騒な事言ってるんですか」

「うわひゃっ!？」

突然傍から声が聞こえて、悲鳴を上げて、身を起こす。激痛が全身を襲った。

「あああああ……………」

ぎっくり腰にかかった老婆のような悲鳴を上げて突っ伏しそうになる。

「傷は無いし命に別状は無くても、命に別状が無い程度には痛いって辺り、束さんも意地が悪いっつーか」

本人的にはその方が面白みがあるって事なんでしょうけどなんて嘯きながら、抱き支えてくれる手があった。

細い。華奢な腕だ。

「う、一夏、君……………」

「はい、おはようからお休みまで、あなたの暮らしを支える、織斑

「一夏ですとも」

抱きとめられたのだから当然、そんな冗談染みた言葉に耳元をくすぐられたりもする。

「あ、あの、一夏君、フォーチュナー星詠みは……？」

楯無と同様に、彼もISを解除していた。特徴的な二つのリングが、何処にも見当たらない。

一夏は楯無を支える手とは逆の掌を開いて見せて、それが空であることを示す。

「元の場所に戻しておきました。フォーチュナーと云うか、初めから星詠みなんて此処には無かった……と云うか、襲撃なんて無かったというか」

いっそ、襲撃の現場に僕は居なかった、でも良いかも知れないですけど。

物凄く適当な調子で、一夏は言った。

「それで誤魔化すの、大変だよ……？」

「権力は使える時に使う。我俣はたまに言うから役に立つ、ですよ」

「誰の権力を頼って、誰に我俣を言ったのかな、キミは……」

想像通りの人物だったら、無茶な話だと楯無は思った。

そして同時に、多分その想像が合っているのだろっなとも思っていたので、同時に、酷い頭痛を覚えた。

体がクラリと傾く。

「おっと」

「ああああ……」

自分から一夏の胸に身を寄せるような体勢になってしまった。

肩を支えられ、抱きかかえられているような。

体のラインがぴちっと現れてしまうISスーツで居る事が、今日の今ほど恥ずかしかった事は無い。

殆ど裸で抱き合っているような、ものじゃないだろうか。

「いや、アンタ昔、人が風呂に入っているとところに突撃してきた事あったでしょうが」

「言わないで思い出させないで！　と言うか何で私が考えている事が解ったの！」

「がばーっと喚くと、一夏はシニカルな笑みを見せた。」

「さあ？　ま、それなりに長い付き合いじゃないですか」

「少しくらいは、表情が読めるとか平然と言ってくれやがる。」

楯無は自分の顔が熱を持ってきていることに気付き、恥ずかしくて、顔を伏せた。

「……まだ、精々五ヶ月程度の付き合いじゃないか」

「誤魔化すように、そんな事を口にしてしまう。」

「時間の長さが問題じゃ、無いでしょ」

「さつき簪ちゃんに言ってた事と正反対の事言ってる？」

「……そこで誤魔化されてくれる女の子の方が、僕の好みのタイプかなあ」

「一夏君、私のことを誤魔化されやすい単純なヤツだって誤解していないかな？」

「と言うか、『こいつは扱いやすい女だ』とか思ってやしないかこの坊や。」

（一度その辺、確り間違いを正した方が……）

『お姉ちゃんはその前に、やる事、あるでしょ……』

「……ほえ？」

「どうかしました？」

「一夏に不思議そうな顔をされてしまった。」

「あ、えつと……」

何か今、耳元で妹の声が聞こえたような……と正直に答えようと
して、そういえば、と辺りを見渡してみる。

居ない。

誰が、と考える必要も無い。

『今、皆のところ、居るから』

何しろ本人から自己申告があつたくらいだ。

この姉の思考を先読みするとは本当に成長したなあ妹、とやや現実逃避気味に思考が走ってしまった。

『皆つて……？』

今度は意識して思念通信を起動しながら、尋ねる。

『皆。事情説明しながら、少し時間を稼ぐ』

言わなくても解るでしょと、いつそ呆れたような声でのたまわれてしまった。

実際、言われなくても誰と誰と誰と誰と誰くらい、考えるまでも無かつたが。

『あえつと……あの、簪ちゃん？ 時間を稼ぐつてのは、どおいう

……？』

『……本気で怒るよ、お姉ちゃん』

ああ、さつき凄じ怖かつたのは、本気じゃなかつたんだと、気付きたくない事実気付かされた。

声だけなのに、恐ろしいほどにプレッシャーを感じる。

ゴメン篝ちゃん、私が間違つてた。

解らないから怖いんじゃないやなくて、解つた方が怖かつたよ。

『お姉ちゃん？』

『う、え、え……』

声無き声は誤魔化しと言い逃れを許さない。

だけど、でも、どうしても……などと言葉を並べ立ててみても、絶対に逃げられないだろう。

『お姉ちゃんは、はつきりさせるべき』

『な、何の……』

『はつきりさせないくせに、織斑を独り占めしてベタベタしてるのはズルい』

『そうねえ、ズルいわよねえ』

『鈴ちゃん、マイク入ってるよ!』

『あ、ヤバ』

『今の声、何!?!』

割って入った聞き覚えのある声に、楯無は悲鳴を上げる。

『はつきりさせないくせに、その癖に織斑を独り占めしてベタベタしてるのはズルい』

『お願い誤魔化さないで! ちょっと、ねえ! 簪ちゃん! 時間を稼ぐってさっき言ったよね! それ時間を稼いでるんじゃないの?』

『……そんな事無い、ちゃんと時間も稼いでる』

『その通りですわ生徒会長。ちゃんと織斑先生をこちらに拘束して

……』

『もって言った! 今、もって言ったよ! あとセシリアちゃん、あんまり無茶なことしないで!』

『山田先生の尊い犠牲は忘れません』

『ああ、もう生贄にされちゃったんだ……』

思わず、だよなーと頷いてしまった。

姉妹の会話が明らかにオープンチャンネルになっちゃってるっぽい事に関しては、最早突っ込む気力も沸かない。素直に恩師の冥福を祈る事にした。

『……って、そうじゃないよ!』

『そう。誤魔化そうとしても、駄目。お姉ちゃんは早急に織斑と……その、織斑と……えと。あの、どうすれば良いかな?』

『フツーに告白すれば良いんじゃない?』

『ん、目を閉じて唇を突き出すとか』

『もう手っ取り早く押し倒してしまっただけは何ですか?』

言葉に詰まる簪の脇から、次々と勝手な声が掛かる。

もうちよつと慎ましさを覚える一年生どもと言いたくて仕方が無くなる状況だった。

『一番年上なのに一番子供みたいな誤魔化し方してるお姉ちゃんに

は言われたく無いよ』

『うっ……!』

凶星を刺され、楯無は呻く。

(……うっ)

そして、一つ事実突き当たり、余計に頭を抱えなくなってしまった。

凶星を　　凶星、なのだ。悲しいかな。

顔を上げる。直ぐ間近。

不思議そうな顔で見つめる視線と、顔を見合わせてしまった。

「？」

「あう……」

首を傾げられただけで、顔を赤くして俯くしか出来ない。

借りてきた猫か何かか私とはと、自分の仕草に本気で眩暈がしてきた。単純に顔が火照ってるからかもしれないけど。

『じゃあ、頑張つて』

『ご健闘をお祈りしますわ』

『今日だけですからねー』

『シャル、アンタねえ……』

図つたようなタイミングで、ネットワークから次々と声が失せていく。

明らかに、よってたかつて後輩たちにからかわれていた状況だった筈なのに、声が聞こえなくなると、途端、心細さを感じてしまった。

心細い。一人で抱えたまま取り残されるのは、心細い。

(……あの簪ちゃんが、友達を作るわけだ)

気持ちを共有できる誰かを見つける事。

そうでもしなければ、この持て余し気味の心には、耐えられない。内側に留めたままにしておくには、余りにも、熱量を持ち過ぎている。

外へ、外へと向けて。

共有できる相手。

外へと向ける。

顔を上げる。

「たっちゃんさん？」

「あう……」

直ぐ傍に、都合よく。その相手は居た。

（伝える。伝える、つたえる……ええと、伝えて、良いんだよ、ね？）

誰にでもなく、自分自身に問いかける。

違うという答えが、この期に及んで欲しいのか。それとも、良いと言っ一言が欲しいのか。

自分でも良く解らなかつた。

しかし、解らないままで居られ続ける訳ではないという事だけは、解っていた。

戦闘は終わったばかりだ。

そして問題行動ばかり起こす少年が、此処に一人。

ならば、怖い怖いお姉さんも、早晚到着するに、違いないのだから。

今すぐこの場に現れないという事実が、実は本気である後輩たちが足止めをしてきているのだという事実を証明していたりもする。

決死の行動だろう。無駄には、出来ない。

無駄にしたら顔向け出来ない。

(……っ)

生睡を、飲み込む。

緊張に身を震わせる。これまでの人生で尤も緊張しているかもしれない。

或いは、楯無の名を継いだその日よりも、尚。

(~~~~~よし!)

気合を、一つ。

でも、声は実に、震えるような、勢いの微塵も無い怯えたウサギのような声で始まった。

「あ、あの、一夏君……」

「どうしました？ あ、更識さん達の話、もう終わりましたか？」

「聞いてたの!？」

そしていきなり、台無しだった。

思いつきり突っ込みを入れてしまった楯無に、一夏は苦笑して首を横に振った。

「流石に女の子同士の秘密のおしゃべりを盗み聞きしたりはしませんって。ただ、僕も一応、コレがありますから」

腕に巻かれた白銀の腕輪ガントレットを示す一夏。それは彼の専用ISの待機状態に違いなかった。

そしてISのネットワークを介して通信を行っていれば、しかもそれが登録された友軍のものであれば、解らない筈も無い。

「後はついでに、たっちゃんさんが百面相してらっしゃったので」

「そっちがメインの理由だよね、どうせっ!」

うがーっと、頭を抱えて喚いてしまった。打ち身の身体が悲鳴を上げたので、直ぐに止めたが。

「うう……頑張ってみようと思った瞬間、こんな辱め……」

「いやまあ、流石に腕の中で身もだえばかりされていると、気になるといっつか突っ込み待ちだったのかと突っ込みたくなると言っか……」

「そんな芸人根性いらないから！」

ああもう、一夏君!」

「つと……つわっ?」

勢い任せ、別の言い方をすれば自棄になって、楯無は一夏の襟首を引っ掴んで顔を引き寄せる。

至近距離。鼻面をつき合わせる、ほぼゼロ距離。

「一夏君」

「……はい」

「黙って、目を、瞑りな、さい」

据わった瞳で、一方的に命令する。

これが年上の威厳なんだとか、後日思い返すと阿呆か己はと思うに違いない事を考えながら。

一夏は、瞬きを幾度か繰り返した後で、ああ、と頷く。

「でもたっちゃんさん。こういう時は女性の方が目を瞑るのがマナーだと思いませんか?」

「はい?」

今度は楯無が瞬きをする番だった。

「そう言う訳なんで、さ、目、瞑ってください」

いつの間にか襟首をつかんでいた手を解かれ、指を絡められていた。

「あ、あれ? 手? あえ……え?」

「さ、ほら、早く」

頬に手を添えられていた。下唇を、親指でそつとなぞられる。

背筋に言い知れぬ快感が走った。

「あ、あれ? えつと……あ、あれ?」
訳が解らない。

解らないけど、なんだろう、この状況。

「あの……これ、これ……その、そう……そういう、もの、なの?」
「ええ、そういうものです」

今までに見た事も無い、慈しみに満ちた目を間近に、視界いっぱい

いに見る事になってしまい、もう胸が高鳴り続けて収まらない。
「さ…… たっちゃんさん。目を」

瞑ってください。

優しく、甘い響きに促されて。

「う、ん……」

まつげを震わせながら、瞼を閉じる。

頬に添えられた手が、顎を軽く持ち上げてくるのにも、もう、成すがまま。

吐息が、唇に掛かる。濡れた感触にブルリと身体を震わせる。

刹那。互いの唇と唇の距離が、ゼロを超す、間際。

「好きです」

甘く、さり気なく、官能的な言葉遣いで、そしてさも当然のような音色の、その言葉を聞いた。

「う、ん。私も……」

好き。

最後まで、言葉にならなかった。

互いの唇をなぞりあうだけの結果に、互いの吐息で互いの口腔を満たすだけの結果に、それは終わった。

(あれ…… ひょっとして、誤魔化された…… よう、な?)

ふと沸いた疑問も、絡めあう舌を通して伝わる官能的に湧き上がる喜びの中に溶けて消えていく。

何も間違っただけで、居ない。

熱に浮かされたような思考の中で、思う。ただ思う。一心に、思う。

私は、この人のことが、好きだ。

百二十五話（後書き）

いやしかし、何だかんだでこのシーンにたどり着くまで時間かかったなあ。

そんなこんなで、ひと段落。
次回は最終回です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0707w/>

その後のその子とその娘たち

2011年9月26日21時24分発行